
モンスターハンター ~集いし者達と白き龍神~

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～集いし者達と白き龍神～

【Nコード】

N3041Y

【作者名】

流星

【あらすじ】

ドンドルマ、シュレイド地方を騒がせた狂化竜事件。伝説に語られた黒龍が降臨し、討伐され、新たな英雄が誕生した。彼らはそれぞれ別の道を歩み、各地へと散って行った。同時に暗い噂が広まり始めたあの日から数年。

舞台は東方へと移され、新たな物語が紡がれる。

一度は幕を閉じた彼女たちのゲームはどのような流れを生み出すのだろうか。

モンスターハンター3の要素が追加されますが、同時に相変わらず

オリジナル要素が強い作品です。

火竜の双子（前書き）

お久しぶりです。

いよいよ続編がこれから始まります。

予告通り東方……モンハン3の舞台となった世界が基本となります。

更新はゆっくり（不定期）になるかもしれませんがなのであらかじめご容赦くださいませ。

では第一話、どうぞ。

火竜の双子

乾いた大地に強い日差しが差し込む砂漠。広々とした砂の大地、点々と存在する隆起した岩やその日差しを遮る岩山。食料となるものはほとんどなく、容易に立ち入ったものはその太陽の光に焼かれて水分と共に体力を奪っていく過酷な環境。

そんな砂漠に二つの人影があつた。

一人は高く聳える岩の陰に身をひそめ、一人は離れた所にある岩の背後に回っている。その岩は中心部分が存在せず、まるで自然の門のような形になっている。一体どういう事があつてこのようなオブリエとなつたのか不明だが、岩の下に入り込めば日差しを避ける事が出来る。

そして二人の服装はこの砂漠を超えるという旅人の格好ではない。それはまさに戦う者の格好だ。

一人は紫色の長髪を赤いリボンで結んでツインテールにしており、気の強そうな碧眼をした少女。黒を基準とした動きやすさを考慮され、それでいて腹が綱によって露出した装備をしている。

背中には同じく黒を基準とした長刀を背負っており、右手は柄を握りしめていつでも抜ける状態にある。

もう一人は岩から少しだけ顔を出している少女だ。先ほどの少女とよく似た顔つきをし、紫色のロングヘアをそのまま流している。同じく長く伸びているもみあげが頭を守る防具から顔を出しており、左側にはお揃いらしい赤いリボンが巻かれていた。

彼女の装備は金属部分以外は褐色に染まったものであり、その出で立ちはまるで騎士を思わせるものだ。左手には白い盾を構え、右手には金属の銃槍に白い毛をあしらった武器を構えている。

その少しやる気のなさを感じさせるような半目の碧眼はじつとあ

る一点を見据えている。

向こうにいる彼女も同じように一点を見据えている事だろう。
それが今回の獲物。

二人が見据える先には少し小高い丘のようになっていた。砂の大地。そこには二匹のモンスターが頭をぶつけ合っていた。ねずみ色の体をし、扇状の襟飾りを持つ四足の竜。お互いに相手に向かって突進し、強固な頭をぶつけ合ってどちらが強いかを示しているのだ。

ぶつかり、離れ、そしてまたぶつかり合う。

リノプロスと呼ばれる草食竜だ。砂漠や砂原という乾燥地帯に主に生息し、硬い甲殻を持つ事で知られている。

お互い頭突きし合っている彼らを見つめているが、二人の狙いはあの二匹ではない。

額に浮かぶ汗をハンカチで軽く拭い、ポーチから水筒を取り出して水分補給をする事数十分。ついに状況が動いた。

「……………来た」

ぼつりと眩きながらすうつと目を細める。

それは小さな変化だった。ぶつかり合っているリノプロス達の奥、砂の丘の下からゆらりと砂煙が小さくのぼっているのだ。それがゆつくりとあの二匹へと近づいていく。

だが二匹はお互いしか見えておらず、しかも音を極力立てていないためにその砂煙の接近にまったく気づいていない。

やがて砂煙は二匹の数メートル付近まで接近し、再び頭をぶつけ合ったその瞬間にそれが現れる。

茶色い甲殻を持つ二頭の蛇が同時に砂の中から現れ、リノプロス達の背後から口を開いて喰らいつき、最後にもう一頭の蛇が真ん中から牙を剥いて現れ、二匹の頭に喰らいついてしまった。

悲鳴を上げる間もなく背後、頭部から蛇に喰らいつかれたリノプロス達は悲鳴を上げる間もなくその蛇に捕食されてしまった。硬い

甲殻などものともせず、その下にある肉まで喰らいつくその蛇はリノプロスの体を引き千切り、それぞれの糧として食事が開始された。甲殻を砕く音、肉が咀嚼される音、血が噴き出す音と響かせながら、一気にリノプロスの姿が蛇の口内へと消えていく。よく見れば蛇の首は一つへと集まり、少しだけ砂の上へと覗かせている体に繋がっていた。

つまりあれは別々の蛇ではなく三つの頭を持つ一つの個体という事になる。

ヒュドラ。

蛇竜種、ヒュドラ族に分類される多頭蛇竜種の代表格の竜種である。

三つの頭はそれぞれ意志を持ち、それぞれ独立して動く事が可能だ。それを生かして三方向を見る事が出来、およそ死角というものを持たない存在だ。また二つの頭が眠っていても、一つの頭が起きて辺りを警戒する事も可能であり、それが奇襲を封じるため容易に不意を突く事が出来ない。

主に砂漠や峡谷という乾燥地帯に生息し、深い山に身を潜める事もある竜であり、砂の中や洞窟などから得物を狙い、三つの首による奇襲や毒霧で獲物をしとめる事で捕食している。

そして今、三つの頭は食事に夢中になっている。一つの体を共有してはいるが、それぞれの意志は食事に対する渴望があるようだ。久しぶりの食事なのだろうか、珍しくリノプロスを食べる事に意識を向けている。

これは好機か。

そう感じた一人が岩からゆっくりと移動を開始する。

音を立てずに静かにヒュドラの背後へと回り込むように低姿勢で歩き、右手は相変わらず背中にある長刀の柄にある。その様子を見守りつつもう一人はポーチから黄色い液体が満たされた瓶を取り出し、蓋を開けて中身を一気に飲み干していく。

「……ふう」

空き瓶をポーチに戻してもう一度ヒュドラへと視線を向ける。その時には既に彼女は奴の背後を取り、着実に距離を縮めて斬りかかるタイミングを窺っていた。

やがて彼女は足に力を籠め、背中から褐色の翼を生やして一気に広げ、砂を蹴りながら低姿勢のまま飛び上がる。数度翼を羽ばたかせて高度を得ると、すぐに翼を畳んでヒュドラへと急接近しつつ長刀を抜いて背後から背中を一文字に斬り伏せる。

「ジャーーツ!？」

食事中に乱入してきた敵に驚き、一つの頭が悲鳴を上げ、一つの頭はすぐに背後を振り返って敵を確認する。残りの一つは敵を確認しつつ辺りを警戒し始めた。

だが少女はヒュドラの側面に降り立ちながら手にする長刀、ヒドウンサーベルを構えつつ畳んだ翼をほぐすように何度か羽ばたかせてにやりと不敵に笑う。

そんな彼女の背後の砂が舞い上がり、茶色の鱗に覆われた尻尾が現れ、彼女を叩き潰そうと振るわれる。だがそれを察知して横に跳び、下段に構えなおしたヒドウンサーベルでヒュドラの胸を斬り上げる。

そんな彼女へと一つの首が噛みつきにかかるもその動きを見切っている彼女に掠りもしない。翼を羽ばたかせて空中を移動し、向かってきた首を斬りながら彼女はもう一人の少女がいる方へと首が向かないようにしていた。

それを察知したもう一人の少女は岩から飛び出し、ヒドウンサーベルを振るう少女と同じ褐色の翼を広げてヒュドラの背後から一気に接近してくる。

彼女の気配に気づいたのだろうか、右の頭がびくりと反応して振

り返る。そんな奴へと彼女は手にした白いガンランスを突き出し、その額を槍が貫く。続けて柄にある引き金を引けば、銃口から爆発が起きて頭を焼かんとする。

「ジュルアツ!？」

「さてさて、行きますか」

少し気の抜けるような声で呟きながらそのガンランス、ヘルステイング改を振るって焼いた部分を斬る。抵抗するように首を振るも、彼女は落ち着いて一度距離を取り、前に進みつつまたヘルステイング改を突き出し、だが中心の頭が彼女へと喰らいつこうとしたため、轉身しながら盾を構えて防御する。

「シャアツ!」

ガチツ、と音を立てて盾と頭がぶつかり合うが、どういうわけかその盾はぶれずに噛みつきから頭突きへと切り替わった頭の攻撃を受け止めている。

利き腕ではない手で縦を構えているにもかかわらずにその力に抗う。少女の華奢な左腕とは思えないその力、背中に生える褐色の翼……人間ではないことは明らかだ。

「はっ!」

少し引いて顎を穿つように盾を振るい、あらかじめ引き絞っていた引き金を離しながらヘルステイング改の切っ先を顔に向けてやれば、溜めこまれたエネルギーが解放されて通常以上の爆発がヒュドラへと襲い掛かる。

しかしヒュドラは三つの頭を持つ竜だ。

一つの頭が怯んだとしても、別の頭が反撃を仕掛けてくる。

最初に仕掛けた右の頭が彼女へと噛みつきに来るが、それに気づいて背後へと跳んで回避し、回り込むように旋回する。

その間にもう一人が左の頭へと何度も斬りかかってダメージを与えていた。何とか喰らいつこうとしているようだが、彼女の空中移動が速いために捉える事が出来ない。

後退、旋回、クイツクターン……翼を巧みに使い、見事な移動を繰り返してヒュドラを翻弄するように飛び、隙あらばヒドウンサーベルで斬りつける……見事なヒット&アウェイの戦法だ。

「シュルルル……シャツ！」

このままでは埒があかないと判断したのだろうか、その左の頭は一度退くように砂へと向かって頭を沈めていく。それに続くように他の頭、それに繋がった体と続き、砂煙を巻き上げながらその姿が完全に地中に消える。

逃げたわけではない。

気配はまだ地中にあり、この場から離れる様子はない。宙に停滞し、ヒュドラの出方を窺う様子だ。

「感じる？」

「おー、もちろんですよ。あれほどの気配、そう易々と逃がしませんよ」

「ま、そうね。……む？」

二人の背後からヒュドラの一つの頭が現れ、二人へと噛みつきにかかるも動きに気づいていた二人は難なく回避。だがもう一頭が逃げた一人の前へと現れ、今度は噛みつくのではなく毒霧を吐き出してきた。

「ちっ」

人間ではないにしろ、毒霧を吸い込めば倒れ、死に至る事もある。急旋回して毒霧を回避し、回り込みながら横に立てたヒドウンサーベルで顔から首にかけて斬っていく。

しかし続けて出てきた尻尾が彼女を叩き落そうと振るわれる。

「遅いつ！」

ぐるんと体を回転させながら横に飛び、反撃するように一太刀振るって尻尾を切断しようとするが、たった一太刀で切断できる程ヒュドラの尻尾は軟ではない。

向こうではヘルスティング改を振るう彼女の妹がいる。最初に奇襲を仕掛けてきた中心の頭へとヘルスティング改を突き出し、引き金を引いて焼き払う。

反撃に毒霧に加えて口から何らかの液体を吐き出してくるようになったが、彼女はいたって冷静だ。盾を構えずこの液体は回避する事を選択する。

これもまた毒性の強い溶解液であり、浴びれば溶かされるか毒に侵されるかの二択となる。つまり盾で防いでもその盾が溶かされて使い物にならなくなってしまいかねない。

回避は正しい選択だ。

「ふっ、はっ！」

それは堅実な攻め。相手の動きを見切って防御し、隙を見て攻撃する。

確実にダメージを与え、確実に身を守る。基本を高め、それを用いて戦う彼女。重量級であるガンランスをまるで自分の手足のように軽々と振るい、空中移動を繰り返しながら攻める彼女は実に安定感がある。

「シャツ、シャシャ……ッ!?」

その鋭い牙で捉えきれず、毒霧も溶解液も当たらない。逆に少女二人の攻撃は着実に自身の体を傷つけていく。その事にヒュドラ達は戸惑いを覚え始めた。

ならばとヒュドラ達は三つの頭が同時に息を吸いこみ、一斉に毒霧を放出する。一つの頭によるものではなく、三つの頭が同時に吐き出す事でその範囲を広げたのだ。

だが二人は一気に背後に下がる事でその毒霧をやり過ぎす。それだけではない。二人もまた息を吸いこみ始めたのだ。

「ふっ!」

そうして勢いよく吐き出されたものは、火炎だった。二人の口からまるで火炎放射機の炎の如く灼熱の炎がヒュドラへと向かって放たれる。それは毒霧に紛れて移動しようとしたヒュドラを焼くよりも早く、その毒霧に反応して爆発を起こす。

爆発の中悲鳴を上げるヒュドラを見ながら、ヒドウンサーベルを構える少女はまた不敵に笑う。

「なんか、案外あっけなくない?」

「おー、あまり調子に乗らない事ですよ。普通はあの三つの頭だけでなく砂に足を取られそうになるのを気をつける、という要素も含まれるからやり辛いですからね。私達は翼があるから空中戦が出来るからこそ、そのリスクがなくなっているわけなんですから」

「わかってるわよ。ちよつと言ってみただけじゃない」

「それならいいですよ。油断はするな、姉さんや母さんがよく言ってる事ですよ。竜じゃなく猪になって忘れぬ事ですよ」

「誰が猪じゃこるあ!?!」

「え？ 誰って……」

意外そうな表情でじつと姉の顔を見つめる妹。そんな彼女にぶるぶると体を震わせつつ「……一度きつちり話しつけようか？ 妹よ」と呟くも、そんな姉に動じることなく「ははは、これが私だっというのは生まれた時から一緒だからわかりきってることでしょうに、姉よ」と返してしまふ。

敵が今もすぐそこにいるというのに二人の様子はいつも通りだ。リラックスしているだけでなく勝機がもうそこまで掴めるという状態だからこそ出来る芸当か。

「さあさ、もう終わるんですから、そうかつかせずに戦いましょう」

「いや、誰のせいだと思ってるのよ……」

「え？」

「あんただ、あんた！ ……ああ、もう！ 召炎！」

左手から炎が吹き出し、握りしめたヒドウンサーベルの柄を伝って刀身に纏われていく。たちまち黒い刀身は炎に包まれ、そして炎はゆっくりとヒドウンサーベルに吸い込まれ、赤い紋様となる。

それを見た妹はヘルステイング改を構え、ぐっと引き金を絞りながら突撃体勢を取る。

「シャアアアアアアッ！！」

それを迎え撃とうと三つの頭が一斉に牙を剥き、再び毒霧という防壁を築き上げる。だがそんなものは意味のない事だった。

口から火炎を吐き出して毒霧を爆発させてヒュドラを怯ませ、その隙をつくように彼女は数度羽ばたいて高度を高め、一気に急降下するようにヒュドラへと向かっていく。

いつの間にか彼女は赤いオーラを体に包み込ませいる。それは彼

女の周りの温度を高めおり、ヘルスティング改から放たれる冷気をも蒸発させて薄い水蒸気を作り上げている。

それを纏いながら中心の頭へと向かった彼女はその額を貫くようにヘルスティング改を突き出し、溜めこまれているエネルギーを解放させる。

「シャアアアアッ!？」

それはガンランスにとつて最大の一撃、竜撃砲。文字通りヒュドラの頭を吹き飛ばしてしまったその一撃を与えた事で残りの頭が動揺を隠せない。

ガシャン、と音を立ててヘルスティング改の一部の蓋が開いて竜撃砲を撃つた後の排熱を始める中、彼女は軽くヘルスティング改を振るつてリロードし、怯んでもなお喰らいつきに来る左の頭に合わせ、盾を構える。

続けざまに接近してきた右の頭へと向けてヘルスティング改を向け、引き金を引いて迎え撃つ。

「はっ!」

怯んだ二つの頭を視認した姉は左の頭めがけて一気に急降下していく。その速さは先ほどの妹以上のものであり、十数メートルの距離を一気に縮めていく。しかも炎の力を宿らせたヒドウンサーベルは彼女の気も纏われ、その殺傷力を更に高められていた。

その一撃は今まで以上。

ヒドウンサーベルの切れ味と彼女の気、そして紅蓮の炎の力を宿すその刃は一瞬の内に左の頭を焼き切ってしまった。今まで付けていた傷、気を纏わせた一撃とその内部の肉を焼く炎の力が合わさった結果だ。

宙に舞うその首を横目に、ヒドウンサーベルを構えなおしながら

右の頭を確認すると、妹が盾を叩きつけつつヘルステイング改で攻めているところだった。

盾はなにも敵の攻撃を防ぐだけではない、それは一種の鈍器と成り得る。噛みつきに来るそれを受け止め、振り下ろし、振り上げをして頭を揺さぶり、とどめとばかりにヘルステイング改を突き、突き、振り下ろして切り裂きつつ引き金を引き絞ってエネルギーを溜め、顎下に潜りこみつつヘルステイング改を頭上に突き上げつつ引き金を離し、銃口から盛大に爆発を引き起こした。

しかしそれではヒュドラも瀕死にはなるが命を奪うまでには至らなかった。奴とて竜種的一种だ。顔に多くの傷を負おうが、爆発によつて焼かれようが、それだけで死ぬほど弱い生命力を持つてはいない。

それを終わらせるのがもう一人、ヒドウンサーベルを下段に構えて再び一気に接近し、首を刎ね上げるように振り上げる。

ヘルステイング改によつて甲殻を貫かれ、焼かれたことによつて柔らかくなってしまったその部位を狙った一撃は、再びその頭を刎ね飛ばしてしまうかと思われたが、残念ながらそれは叶わず、首を斬るだけに留められた。

だがその傷から勢いよく血が噴き出し、茶色い甲殻を赤く染めていく。

「ク……シ、シシ……シャ……ッ！」

「さて……楽にさせてあげましょうかね」

致命傷の一撃だろうがまだ生き長らえている。呻き声を漏らしながらも攻撃しようとしているヒュドラをじっと見つめた彼女は、ヒュドラの頭上を取つて勢いよく額めがけてヘルステイング改を叩き落とし、その衝撃によつてギミックが動く。

リロードされている弾薬が一気に動き、引き金を引けば全ての弾薬が放出されてヒュドラの頭を焼きにかかる。傷口を広げるような

一撃にヒュドラはまた怯んでしまい、その隙にヘルスティング改を横に振って再びギミックを利用して弾薬を装填。

引き金を引き絞りながら爆発で吹き飛ばした部分を狙って槍をねじ込み、中心の頭と同じく頭を吹き飛ばすような溜め砲撃を叩き込む。

「シャ、アア……アア………」

頭を吹き飛ばされ、首からはとめどなく血が流れ、ついに残った頭もまた生命力が尽きてしまう。ゆつくりとその首が砂に向かって倒れていき、鈍い音を立てて体と共に砂へと横たえてしまった。

その死体は体の半身が今もなお砂に沈めたままという形になってしまった。普通の戦いと違い、空中戦を主としたために首が二人を追う事が多かったためだ。半身は後で引き上げる事になるだろう。

何はともあれヒュドラを討伐する事に成功した。

二人は息を吐くとゆつくりと地面に着地する。

だがどういいうわけか姉の表情が少しだけ硬くなっている。対して妹の表情はいつも通り少し気の抜けるようなものだった。

ガシャン、と音を立ててヘルスティング改を背中に担いだ彼女は軽く首と肩をほぐすように動かし、

「とどめは私でしたね。ということで、奢り決定です」

「くっ……あれが決まっていたら……！」

またしても体をふるふる震わせ、手にしているヒドウンサーベルを軽く振って背中にある鞘に収める。

一体何のことかといえば二人は狩りに行く前に賭け事をしているのだ。多くはとどめを刺した方の願いを敗者が叶えるというもので、今回は両者とも勝てば帰った後の食事を全額奢りという形になっている。

姉の言う通りあの最後の一撃によってヒュドラが倒れていれば彼女の勝ちだったろうが、残念ながら持ち前の生命力によって命を繋いでしまった。そこを妹が決める事になったために彼女が勝つ事になってしまった。おいしいものである。

「さてさて、久しぶりにガンガンいきたい気分ですね」

「……少しは抑えなさいよ？」

「ははは、今ロククラックでは肉フェアをやってましたよね。いい機会ですからじっくりがつつり味わいたいと思ってたのですよ」

「だからこそ抑えろって言うてんのよ！」

「え？ 何を言っているのです？ フェアだからこそガンガンいかなくてどうするんです」

「うがー！ーッ！！」

被っている頭の防具を砂に叩きつけてがしがしと髪を掻き回し、敗者は吼えるしか出来ない。そんな彼女をにやにやと笑う妹は本当にいい性格をしている。

「それに瑠璃こそ同じことを考えていたんじゃないんですか？ もしあの一撃が決まって賭けに勝っていれば、私にかなりのものを払わせる腹積もりだったでしょう？」

「ぬ、ぐ……」

「それじゃあ何も文句は言えないでしょう、はっはっは。賭けは賭けですからね、私は瑠璃の金でガンガンいかせてもらいますよ」

「……ちくしょうめ。覚えてなさいよ、茉莉……」

砂に叩きつけた防具を拾い上げ、ぱんぱんと砂を払って被り直し、ポーチから発煙筒を取り出して着火する。クエスト完了を知らせる色の煙が空へと舞い上がり、音を立てて破裂する。

これでギルドのアイルー達に連絡が行くだろう。後はあの死体か

ら出来うる限りの素材を剥ぎ取っていくだけだ。

腰元から剥ぎ取りナイフを取り出した二人は正反対のテンションでヒュドラの死体へと向かっていくのだった。

数分後にやってきたアイルー達が用意したロープをヒュドラの体に巻きつけ、アイルー達の魔法とアイルー達と二人力技でその死体を何とか引き上げ、残った素材を剥ぎ取った後にベースキャンプへと帰還。

用意されている砂上船で二人は一つの街へと戻っていた。

砂塵の大都市ロックラック。

ロックラック地方と呼ばれる大砂漠のオアシスに存在する街であり、多くの人々が集まる場所だ。モンスターを狩る者、ハンターと呼ばれる職種につく者達にとっての拠点として利用される程の大規模な街であり、ここから名を挙げていく者達も少なくない。

一般人も砂漠を渡るために砂上船や飛行船を利用し、東西南北へと移動するための拠点や休憩するための場所として利用している。

昼夜を問わず街は賑わい、活気に満ちている。

そんな街に日も暮れて夕食時になった頃、砂上船に乗った少女二人がロックラックへとやってくる。

多頭蛇竜ヒュドラ討伐クエストを完了させた二人の凱旋だ。

砂上船の港はこんな時間になってもそれなりに賑わいをみせている。二人と同じようにクエストから帰還してきたハンターもいれば、これからクエストを行うためにこの港から旅立っていくハンターもいる。

ここに一般人がないのは、この港はクエストのために利用される港だからだ。旅の目的に利用される砂上船の港は別の場所に存在している。

ハンターと一般人、これらが混在しないように港は分けられているのだ。

「さ、覚悟は決まりましたか？」

「……はいはい、もうたらふく食えや、妹よ」

「そうさせていただきましょう、姉よ」

クエストを成功させて帰還してきているというのに、二人のテンションは平常とローというものだ。それに気づいたハンターの何人かは二人の様子に気づき、「失敗してきたのか？」と感じるものと、「ああいつもの事か」と思うものに分かれていた。

特に後者の人達は二人の様子に慣れたようで、姉の様子を見て苦笑するものも混じっている。

そう、二人はこの街では一種の有名人になっていた。

あの頃の未熟なハンターだった少女達はもういない。

ここにいるのは成長して腕を上げ、その名を人々の記憶に刻ませる程になっている。

西のハンター達の拠点であるドンドルマを中心とした大事件の際は未熟者であるが故に母親と姉、その他のハンター達と共に戦う事が出来なかった二人。

父は鍛冶屋を営む竜人族。

母は火竜の因子を持つ有翼種の魔族。

そんな二人の間に生まれし双子の娘。

暁・瑠璃・フレアウイング。

暁・茉莉・フレアウイング。

身も心も成長した竜魔族にして有翼種という稀有な種族である二人の少女ハンターの物語はこれより始まる。

肉だらけの夕食

ロツクラツクへと戻ってきた瑠璃と茉莉は酒場へと向かい、クエスト成功の旨を伝える。依頼書に受付嬢が完了の判を押し、報酬金と報酬の品を受け取る事でクエストが完了する。

受け取った二つの袋をそれぞれ確認する事にする。瑠璃は袋に収められた金を、茉莉はヒュドラの素材などが入っている袋を。問題ない事を確認した二人は一礼し、酒場を後にした。

この後は食事になる……のではなくその前に向かう場所があった。商店街の一角にあるその露店へと訪れた二人は店の前に掛けられている看板を確認。

ここは交換所と呼ばれる店であり、アイテムやモンスターの素材と店にある別の素材と交換する事が出来る。

その看板には様々な素材が書かれており、多くは竜種の素材を渡す事で素材を得る事が出来るようだった。どうやらここはそれが主なレートになっているらしい。

交換所はここだけではなく、他の商店街にも点々と存在しており、店ごとにレートが違っている。

「いらっしやいませ。トレードいたしますか？」

「ええ。これでトレードを」

茉莉が袋から多頭蛇竜の甲殻をいくつか取り出していく。瑠璃もポーチから剥ぎ取ってきた甲殻を取り出し、店のカウンターへと置いていった。

その数全部で八個。

それを確認した店主は小さく頷き、

「ふむふむ、多頭蛇竜の甲殻八個とマンドラゴラ十六個とトレードですね？」

「はい、お願いします」

店主は「かしこまりました」と一礼した後、後ろに置いてある小箱からマンドラゴラを取り出して二人へと差し出した。その数を確かめ、置かれた甲殻は店主へと引き取られる。

今回ヒュドラのクエストに行ったのはこれがあつたからだ。なかなかマンドラゴラが見つからないため、しょうがないのでこの交換所のリストにあるもので入手しようと試みたのである。

二人で八個ずつ分けてポーチに入れ、交換所を後にする。これで用事は済んだので後は食事の時間だ。

数分かけて飲食店が並ぶ通りへと向かっていき、件のフェアがやっているという店へと入る。ウエイトレスに席へと案内され、御品書きを開けばフェアの影響で安くなっていたりいつもはないメニューがあつたりする。

「さてさて、どれにしますかねー」

「……………」

「これもよさそうですし、これもいいですね…………うん、迷いますねー」

「…………さつさと選びなさいよね」

「え？ こういうのは選ぶのが醍醐味でしょうに。いつも以上にルンルン気分で選べるのがまたいいのですよ」

「…………あたしの金で食えるからだろうに、ちくしょう」

「はっはっは。現実は無情なり、ですよ」

気の抜けるような笑い声をあげて御品書きを見つめていた茉莉は、「うん、これにしましょかね」と呟く。どうやら注文が決まつたようだ。瑠璃も自分が食べる物を選び、店員を呼ぶために手を軽く

挙げる。

それに気づいた店員が来ると、「アプトノスのハンバーグセット。スープはポタージュで」と告げ、茉莉へとさあ、注文しろと言う風に見配せする。

店員も茉莉へと視線を移し、彼女はこほんと咳払いを一つ。そして

「アプトノスの霜降りステーキセット、アプケロスのサイコロステーキ、ポポノタン焼きとモスの味噌汁、ガーグアのから揚げ。セットのスープはコンソメで、ライスは特盛でお願いいたします」

「ちったあ遠慮しろちくしょおおおおおッ！？」

「だから言ったでしょう、現実は無情なり。賭けの敗者から搾り取れるだけ搾り取りますよ、ははは」

「……………悪魔や……………悪魔がここにおる」

燃え尽きたように机に突っ伏する瑠璃の頭をぼんぼんと叩きながら「その悔し涙は明日の勝負の活動力となるでしょう」と囁きかけながら慰めるも、「慰めにもならないわよ……………」とさめざめと泣き崩れ、「どうしてこういう時の賭けって毎回負けるかなあ……………金が、金がああ……………」とぶつぶつと呟きだした。

瑠璃と茉莉の賭けは二人の実力が安定したところから行われており、それはもう色々なものを賭けてきたものだ。今回のような夕食の奢りだったり、あるいは日用品の奢りだったり、パシリだったり……………実に多岐にわたるが大抵はパシリで済ませている。

瑠璃が勝つ場合は多くはパシリ権を得る時で、奢りが賭けられたときはあまり勝てたためしがない。そして茉莉はと言うと、今回のように奢りを要求する時によく勝ってしまう。

その度に瑠璃の金がどんどん消えていき、このようにさめざめと泣き出してしまふ。

それを茉莉が微笑ましく、暖かな視線で見守るといふ構図が出来

上がってしまった。

（いやー、我が姉ながら本当に愛で甲斐がありますね。眼福眼福）

南無南無、と心の中で手を合わせるも、こうしてしまったのは茉莉である。今日もまた姉を弄れて満足だ、と感じながら軽く視線を店内に巡らせながら料理が運ばれてくるのを待つ事にする。

フェアが開催されているだけあって客の入りはなかなかのものだ。夕食時というのも関係しているだろう。二人と同じハンターだけでなく一般人の家族連れも多く見かけられる。

（おやおや、カップルもいらっしやいますか）

家族連れだけでなくぽつぽつと若い男女が料理を食べている姿も確認できた。向こうの席では東方人らしい黒髪をした男女が静々とステーキとハンバーグを食べ進めている。しかしよく見るとその耳は人間のものではなく、獣のような形状をした耳をしている。

少々斜め上に伸び、先端が尖り……比較するならば猫に近い物だ。それだけであるの二人が人間ではなく魔族である事がわかる。

こんな所で魔族を見かけるとは、珍しい事もあるものだと思うが、だからといって何かするわけでもない。基本的に魔族はあまり表に出てこないものだが、彼らの中にもハンターとして活動するものもいる。例えば二人の母親のように。

過去の大戦以降めつきり姿を見せなくなった一族もいるが、長い時を経て少しずつ世に出てきた一族もいる。それに自分達には他の魔族の知り合いがいるのだ。

今もなお実家があるポツケ村に住んでいる魔族の兄弟夫婦。

黒龍が舞い降り、ヴェルドにテオ・テスカトルが襲撃してくるという大事件が起こったあの日から少しずつ広まり始めた噂により、変装しなければ軽々と大きな街へと訪れる事が出来なくなった彼ら。

同時に彼らと親しくしていたあの三人もまた東方に向かった後ばったりと姿を消してしまっていた。

いや、一度だけ会った事があったか。あの二人の子供が生まれ、それを絵に残す際に隠れ家へと訪れたあの機会のみ出会った。それ以降また隠れ家を移したらしく、時たま連絡の手紙が来るだけどこにいいのかすらわからなくなってしまっている。

六年前のあの日以来、英雄と呼ばれた彼らは人々の前から文字通り身を隠してしまった。

それも仕方ない事だろう。あの噂はもうこの東方にまで届き、しかも昨今の不穏な噂と事件によって一部では重い空気が包み込んでいるのだ。

こんな状況であの血統に連なる者が人前に出てくれば何が起こるか分かったものじゃない。確実に良くない事が起こってしまうだろう。

(……やめましょう。今はそんな暗い事を考える時ではないです)

小さく首を振ると、カートを押してこちらに近づいてくるウェイトレスが見えた。そこにはいくつもの料理が並び、美味しそうな匂いを漂わせている。

「お待たせしました」

瑠璃の前にはハンバーグセット。鉄板の上に肉の焼けた音を立てながら芳しい匂いを漂わせて食欲を刺激してくる。突っ伏していた瑠璃も料理が運ばれてくると、ゆっくりと顔を上げてその料理を見つめていた。

だがすぐに視線を横へとずらす。

続けてテーブルの上に乗せられていくのは茉莉が遠慮なく注文していた料理達。

たちまちテーブルの上には多くの料理が並び、その空いた部分を埋めていく。これを一人で食べるのか、と普通の人々は思うだろうが、狩りに出かけたのだからその使ったエネルギーを補給するとう意味合いでがつつり食べられるものだ。

それに茉莉はこう見えて結構な量を平らげるだけの胃袋を持つ。恐らく涼しい顔で黙々と胃袋へと送っていく事だろう。

「それでは、いただきます」
「……いただきます」

ウエイトレスが一礼して去っていくのを見送り、茉莉が手を合わせて言うと、続くように瑠璃も手を合わせる。そうして夕食をとり始める事になった。

瑠璃がハンバーグへとナイフを入れれば切れ目からは肉汁が溢れだし、鉄板の上でまた焼ける音を響かせてくれる。少し焦げた部分も合わせてナイフで切り取り、セットの隅にあるソースのカップに少し浸して口へと運ぶ。

咀嚼すればソースと絡んだ肉が柔らかく解け、舌に肉の旨味と肉汁を伝えてくれた。肉の味を引き立ててくれるソースとマッチし、実にいい仕事をした一品である。

その美味しさに少しだけ顔をほころばせるが、対面に座っている妹を見てその表情が硬くなってしまう。

まず茉莉はアプトノスのステーキから食すことにしたらしい。それはただの肉ではない、「霜降り」肉である。つまり高級品だ。それにナイフを通し、同じようにソースを絡めて口へと運ぶ茉莉。

ステーキの肉が焼ける匂いが対面にいる瑠璃にまで届いてくる。それだけではない、隣にあるアプケロスのサイコロステーキもまたいい匂いをしているし、モス肉と山菜をたっぷりを使用した味噌汁も美味しそうだ。

小皿にはポポノタンの焼肉が乗せられ、備え付けのレモンがある。

それを手にしてポポノタンへと絞って酸味を与え、ぱくりと一枚取って口へと運ぶ。続けて山盛りに盛られたライスを食べ、お茶を一口。

「……ふう、美味しいですねえ。いい肉です」

「……あ、そう」

「まったく、辛気臭い表情ですね」

「誰のせいだと思ってるのよ、まったく……」

そりや自分の金ではなく瑠璃の金で遠慮なく注文し、料理を堪能されているのを見せられてはこんな表情にもなるわ、と心の中でぼやきながら瑠璃はハンバーグを食べ進める事にする。

付け合わせのポテトや人参も頂き、ライスやポタージュも味わっていく。

一方茉莉はサイコロステーキやから揚げにも手を伸ばし、それぞれの味を堪能していた。少し硬めの肉であるアプケロスのサイコロステーキは噛めば噛むほど肉の味が染み出てくるし、ガーグアのもも肉を使用したから揚げは柔らかく、すっきりとした味わいがある。あまり表情が変わらない茉莉の表情を少しほころばせるだけの美味しさがあるらしい。それを見、続いて料理へと視線を移せばまだ美味しそうな匂いが漂ってくるではないか。

「じくり……」

それを見せられては唾も呑み込みたくなるものだ。いくら自分も肉を食っているとはいえ、別の肉があれば興味も出てくる。まさに今の瑠璃は餌を前にした飼い犬のよう。それに気づかない茉莉ではない。

にやりと笑みを浮かべると、霜降りステーキをフォークで突き刺し、瑠璃へとちらつかせてみる。ほれほれ、とフォークを揺らして

いる茉莉の表情はちょっとしたいじめっ子のそれに近いだろう。

「食べたいのですか？ 瑠璃」

「ぬ、ぐ……嫌らしいわね、あんた……」

「はっはっは、こういうのもアリでしょう」

「ねーよ。あつてたまるか」

ジト目で睨むも一向にフォークをひっこめない。まったく嫌らしい妹だと思っていると、鉄板の上にその肉を置いていく。それだけではない、サイコロステーキも二つ乗せていき、ポポノタンとから揚げの皿も瑠璃が取れるように近くに寄せてくれた。

「私だけ食べるというのもあれですし、瑠璃にも少しばかり恵んであげましょう」

「茉莉……」

「現実は無情ですが、私は少しの慈悲があります。ふふふ、私も甘いですね」

どこか感慨深く呷く茉莉ではあるが、驚きからまたジト目に戻った瑠璃は冷静だった。

「いや、ここの支払いあたしだから。あんたの金じゃねーよ」

「細かい事は気にしないでいきましょう」

「細かいからっ！」

吼えながらもちゃっかりから揚げを手に取り、豪快にかぶりつく。からつと揚げられた衣の下にある柔らかなも肉の旨味、とろーりとした肉汁がじゅわつと溢れ出し、またしても舌が歓喜に震える。

「ちくしょう……美味しいじゃないのよ……っ！」

「それは何よりです。さ、一緒に肉を堪能していきましょう。……
ということ、ハンバーグ一切れ、頂いても？」

「それが狙いか」

「はて、何の事やら？」

しれつと答える茉莉だがあながち間違つてはいないだろう。双子であるためか何となくお互いの考えはわかるものだ。しかしこうして霜降りステーキやから揚げ、ポポノタンまで貰っては何もしないわけにもいかないか。

「やれやれ、とため息をついてナイフを入れて一切れを茉莉のステーク鉄板へと移してやる。」

「ほら」

「ども」

なんだかんだ言っても二人は仲の良い双子の姉妹だ。姉と妹という立場が逆に見えるが、それでも二人は基本的に仲がいい。そうでなければポツケ村を出て二人だけでこのロックラックまでやってきてはいない。

そして長くコンビを組んで狩猟に出はしないだろう。コンビを組むという事はお互いの命を相棒に預けるという意味合いもある。深い信頼がなければやっていけない世界だ。

五年前にポツケ村を出た二人はこのロックラック地方までやってくると、ここを中心として各地を巡って着実に力を付けてきた。手を焼いていた自分の中の才能、火竜の力を完全に制御していき、様々な飛竜をはじめとするモンスターを討伐していき、経験を積んでいく。

レベルとしては上位ハンターのものになっているが、今は下位装備で通している。それは各地を巡っている為に上位ハンターの装備を整えていないという事もあるが、意図して二人は上位ハンターの

名に連ならせないようにしているのだ。

それは自分達が竜魔族という特殊なケースで生まれ、しかも有翼種という稀有な存在でもある。また世間はあの血統に対してよくないイメージを抱いており、自分達はその知り合いがいる。

そのため二人は暁という名前を伏せ、フレアウイングの名字で活動している。表向きには有翼種の魔族として活動しているのだ。その上で各地を巡り、姿を隠しているあの一家を探している。

相手が相手のため情報屋を利用する訳にもいかず、小さな噂やその足取りを探るといふ雲を掴むような探し方であるため、必要以上に目立たないようにしている。

とはいえ二人のやり取りのせいで一部のハンター達で名が知られるようになってしまっているのだが、そこはご愛嬌か。

何にせよ上位ハンターになれば儲けが増えるが、その分危険も増す。同時にそこで活躍すれば名が売れる。それすなわち自分達の事がよりハンター達の間で知れ渡る事になるため、それを回避したいというのが二人の考えだった。

だが上位ハンターのくせに下位装備で下位クエストを受け続けるというのもそれはそれで名が知れるだろうが、ぼちぼち上位クエストの一部をこなすことでそれを回避している。

つまり上位ハンターになりたてのほやほやであり、上位と言う壁に当たっているハンターである事を演出しているのだ。今はそれで何とかなっているが、時間が経てばその回避方法も通用しなくなってくるだろう。

自分達は普通の人間ではなく竜魔族。人間以上の力量を保有する事が出来る存在だ。いつまで経っても成長しない弱者ではない。これも持つてあと半年か一年少して通用しなくなるか、と考え始めている。

何せもう自分達も二十歳になる。緊急事態で実力をつけていき、たった一年程度で新米ハンターから上位ハンターへと上り詰めたあの夫婦は十六歳でそれを成し遂げている。

あれから六年経った今でもその実力は衰えず、まだ成長しているのだ。その気になればG級になれるだろうに、境遇のせいでそれが出来ないでいる。

旦那は魔族ではあるが、妻は人間だ。しかも突出した才能を持たない人間。そんな彼女でも成し遂げられた功績。彼女と違い高い才能を保有している瑠璃と茉莉に出来ないはずがない。

当時よりも四歳も年上なのだから、今ではもう上位ハンターの間から後半にさしかかってもいい頃合いなのだ。

全てはこの変化した世の中によるもの。

ドンドルマ方面からこの東方にかけて変質していく人の想いが作り上げる雰囲気。これが彼女達の行動を縛り上げる。

本当に、やり辛い世の中になったものだ。

だが今ここにいる二人はそんなながらも関係なく、いつも通りのやり取りをしながら夕食を食べ進めている。これが彼女達の日常であり、こうする事でそのしがらみを忘れて時間を過ごせるのだ。

昔から変わらない関係を保ち、茉莉がボケて瑠璃がツッコむ。そうやって馬鹿やっているのが心地いい。いろいろ大変なことが起きているが、せめてこうしている時間だけは平穏であってほしい。

霜降りステーキ、サイコロステーキと消費していき、ポポノタンとから揚げを二人で分けて食べ、最後にライスと一緒に味噌汁をすすり、茉莉は「ご馳走様でした」と手を合わせた。

瑠璃と少し分けあったとはいえ、あれだけあった料理の大半が彼女の胃袋へと消えていったのだ。

周りの客達が啞然としているが、茉莉は気にした様子もなくナプキンで口元を拭ってお茶をすすする。

「満足そうね」

「ええ、満足ですよ。素晴らしい夕食でした」

「そ。じゃあ行きましょうか」

そう言っただけで会計するために立ち上がり、置かれているそれを手に取った瑠璃は値段を確認してみる。すると「……くっ」と苦い表情を浮かべながら息を詰まらせた。やはりというべきか、そこに記されている値段は二人で食べる夕食のものじゃない。

普通の一般人も訪れるレストランで食べられるものだというのに、どうして値段が五ヶタ近くになっているのだろう。霜降り肉か？ やっぱり霜降り肉の影響が強いのか！？

そんな彼女へと向き直った茉莉は一度姿勢を正し、両手を胸の前で交差させてから振り下ろしつつ一礼した。

「ゴチになります！」

「……………ちくしょう」

もう何度目になるかわからない言葉を呟きながら哀愁を漂わせる背中が遠ざかっていく。

そんな彼女を温かい眼差しで見送りつつ、茉莉も席を後にした。

そんな一件があつた次の日、私服姿にローブを纏った二人はロツクラックの港へとやってきていた。赤いシャツに炎の柄が描かれ、黒に近いズボンという動きやすそうなものが二人の私服だ。しかもお揃いというのが双子らしい。

そしてローブはやはり火竜という事もあり、背中はりオレウスを模した絵が描かれている。

瑠璃はいつものツインテールだが、茉莉は狩猟の際に揉み上げに巻いていたリボンを頭の後ろに結んでいた。

二人はこれからロックラックを後にし、また各地を巡る旅を始めようとしている。一定周期で各地を巡ってロックラックへと戻ってくるという方法でこの五年を過ごすのが二人のやり方だ。

マンドラゴラを入手するためにヒュドラ討伐に向かったのが今回のロックラックでの最後のクエストとなる。これは調査で秘薬を作り出すための材料となり、昨日の内に作っておいた。これで秘薬の補充は完了する事になる。

さて、砂上船に乗り込んだ二人は部屋へと向かって場所を確認し、ロープを壁掛けに掛けてベッドに腰掛ける。

それから地図を広げてこれから向かう場所を確認する。

ロックラック地方は主に砂漠が広がる地理であり、西に進めばテロス密林、北西に進めばポツケ村があるフラヒヤ山脈がある。

北から北東方面に向かえば元々の実家がある国、華国に入る事になるがあつちには行かない事になっている。あそこは魔族に対してよくない印象を持つ者がそれなりに存在し、自分達が華国を出る事になった原因となった魔族狩りを行った過去がある。

わざわざそんな国に戻る理由もない。なので華国に行く路線は自然に消える。

南に進めば海岸線があり、その先には小さな島々が集まる諸島が存在している。主に漁業を営む村が点在しており、それで生計を立てているのが多い。

最後に東へと向かえば砂漠が終わり、緑豊かな草原や山々が存在する領域へと入る事になる。そこから更に東へと向かえば海となり、その先に島国であるシキ国が存在している。

それまでは無国籍であり、大小の街や村が存在する場所になる。

あの一家の故郷はその無国籍の山の一つに存在していた。その後別の山の一角に隠れ家を作り、暮らしていたのだ。

そして今乗っている砂上船の進路は東。砂漠が終わる所にある港町まで進み、そこから更に東の山へと向かう予定である。

山によって様々な特色があり、ある山は山の幸を生かした特産品

で生計を立てる村があったり、山間に作った畑から摂れる作物で生計を立てる村があったり、湧き上がる温泉で旅人を呼ぶ村があったりする。

「情報を求めるならやっぱりユクモがいいかしらね」

「でしようね。この一年でまた活気づいたらいいですから、もしかするとこっそり温泉に入りに来た事があるかもしれません。確か東方人は温泉が好きらしいですから」

「温泉というか風呂が好きだって聞いた事があるわね」

そんな会話をしながら地図を見る二人の視線はある一点に向けられている。山岳地帯の一角にあるその村はユクモ村。先ほどの例に挙げた湧き上がる温泉で山を越えていく旅人の安らぎの場を与えてくれる村だ。

数年前までは落ち着いた村でお抱えのハンターもいない場所だったのだが、村に危険な竜種が現れた事でギルド支部を設立してハンターを呼び、これを討伐した過去がある村だ。それからはギルド支部を置き、旅人だけでなくハンターもそれなりに訪れる場所になっているという。

二人も三年ほど前に訪れたのだが、一般人とハンターの割合は八：二ほどぐらいだったか。温泉街も旅人が多く、彼らによって賑わっているという印象だった。

そのためギルドとしての規模は小さく、クエストもそれなりでしか回されておらず、ハンターの活動の場としてはあまり向いていない。ここに訪れるハンターの大半は温泉に浸かって疲れを癒すという目的が有力だ。

そんなユクモ村が今回の目的地とする。

予定の確認が終わったところで小さく船が振動し、ゆっくりと進み始める。それを感じた二人は一度部屋を出て甲板に上がった。

畳まれていた帆が挙げられ、今まで停泊していた港、そしてロッ

クラックの外壁が遠ざかっていく。見れば他にも客達が甲板に上がっており、遠ざかっていくロッククラックを見つめていた。

中型の砂上船のためそれなりに乗客がいるようだ。やっぱり大半は人間が多いが、その中に竜人族と魔族が一組ずついる。気のせいかな魔族の方はあのレストランにいたあのカップルのようだが……まあいいだろう。

ロッククラックの外観が小さくなっていき、あとはどこまでも広がる大砂漠。変わりのない景色を眺め、吹き抜ける乾いた風を感じながら二人は新たな旅を始める。

あまり動けない彼らに変わり、行方知らずとなったあの一家の影を求めて。

肉だらけの夕食（後書き）

初登場時は二人は十三歳。

あの戦いが終わった時には新年を迎えられ、その年は十四歳。

それから六年が経っているため、二人はもうすぐ二十歳になる、という計算になっております。

……ということは今はいない彼らもいい歳になっているという事になってますね。

アプトル疾走

港に到着した砂上船はゆっくりと停泊し、帆を畳んでいく。昼にロックラックを発つてから数時間の移動、太陽は既に地平線に消えようとしており、藍色の空が少しずつ表れ始めていた。

砂上船を下りていく瑠璃と茉莉は港を後にすると、真っ直ぐに夕食を取るために宿屋へと向かう事にした。この港町はそれなりに宿屋が点在しており、この町にやって来た旅人や、これからロックラックへと向かう旅人を迎え入れるための施設がそれなりにある。

大抵の場合昼の便でやってきた旅人はここで一泊し、それから旅立つことが多い。

二人も例に漏れず、ここで一泊してから移動しようと考えていた。夜の旅は危険が多い。視界が悪くなり、モンスターからの奇襲もよくある話だし、山道で足を滑らせて落下なんて目も当てられない。夜目が効いていたとしても、神経を張り巡らせながらの旅はあまりよくない。

無理せず宿を利用した方が身のためだ。

一緒に降りてきた他の客達に紛れて港を出ると、それぞれ宿屋を利用するらしく同じような道を歩いていく。といってもざっと十数人程度の客であり、街道は時間が時間のため人は落ち着いたものだった。

数分歩いて宿に到着し、先に到着していた客に続いて中に入っていくと、茉莉は何かに気づいたように背後を振り返る。

「……………」

誰かの視線を感じた気がするが、数秒程度のものだった上にそれほど強い意志を感じなかった。入口からそっと横にずれて他の客達の邪魔にならないようにし、軽く外を見回してみる。

だが視線の主らしきものは見当たらない。見えるのはこの町に住まう人達、この宿や他の宿へと向かう砂上船の客達ぐらいなもの。

「気のせい、ですか」

「茉莉？ どうかした？」

「……いえ、なんでもありませんよ」

立ち止まってしまった茉莉を訝しんで瑠璃が声を掛けてきたが、小さく首を振って彼女の後に続く。

だが茉莉の気のせいではなかった。

確かに視線の主は存在していた。しかしそれは一人ではなく二人。視線の主は他の乗客たちに紛れて街道を歩きつつ彼女を見つめていたのだ。彼女らが宿の奥へと向かっていくのを見送ると、黒い私服と闇色の外套を軽くなびかせながら街道の奥　すなわち街の出入り口へと向かっていく。

そのまま暗くなっていく夜に溶けるように二つの人影は見えなくなっていた。

一泊し終えた二人は朝食を取り終わるとすぐに港町を発って移動を開始する。それまでは砂漠だったが、町を出ると荒地が続く。その先に少しずつ緑が表れ始め、そこから草原や山々が広がる地形となる。

アプトルを利用できる竜小屋を訪ねてアプトルを二匹レンタルし、荒地を一気に突破していく事にする。予定は昼前ぐらいに荒地地を抜け、山岳地帯に突入する事だ。一、二週間内にユクモ村に到着するとなれば、それぐらいの早さを目指したいところだった。

荒地地に街道というものはほとんど存在せず、うっすらと多くの

旅人が利用したことで固められた道が見える程度。しかも生息しているモンスターが物陰から飛び出してくる事もあるため、用心するに越したことはない。

だがアプトルの疾走速度は馬鹿にならず、その脚力を以ってして振り切る事は可能だ。追いついてくるとするならば、この乾燥地帯に生息している獣竜種の一角、土砂竜ボルボロスあたりだろうか。

奴の高い疾走力はアプトルの疾走速度に追いついてきかねない程であり、発見されて戦意を剥きだしにされれば少々まずい事になるかもしれない。

とはいえ地図によれば二人が利用しようとしているルートにはボルボロスの縄張りが入っておらず、最近雨が降った記録もないようなのでボルボロスが利用するであろう泥が溜まるポイントや沼地はないだろう。

あと挙げられる危険性といえば空を舞う飛竜種、雌火竜リオレイアあたりだろうか。奴はリオレイウスと違いこの荒れ地、砂原、砂漠にも出没するようで、時折空から獲物へと襲い掛かっていく光景が見かけられる。

こちらに関しては本当に運だ。食料を求めているのかそうでないかが関わってくるので、遭遇しない事を願うとしよう。

そんな風に荒れ地を移動する事数時間。時折懐から水筒を取り出して水分補給をしながら移動した二人は、もう少しでこの荒れ地から抜け出せるというところまで来ていた。

しかしここでまさかの壁が現れる事となる。

進路上に赤い球体がゴロゴロと転がって来たかと思うと、飛び回っているブナハブラに向かって長い舌を伸ばしたではないか。蛇行しながら長く伸ばされた舌は的確にブナハブラを捉え、一気に口内へと納められる。

アルマジロのようなその外観、赤い甲殻に長い舌を持つそのモンスター。

赤甲獣ラングロトラ。

「どうしてここでラングロトラが出てくるかな？」

「ま、出てきたものはしょうがないでしょう。静かにやり過ごしていきましようか」

幸いラングロトラは獲物であるブナハブラ達に夢中になっている。どうやらあの辺りにブナハブラの巣があるようで、突如現れたラングロトラに興奮しているようだ。それから数十メートル離れた所にいる二人と二匹には気づいていないらしい。

手綱を操って静かに横に逸れ、岩陰を利用して視界に入らないようにする。

さらにラングロトラの背後から回り込むようにして移動する事にした。

クエストを受注していない状態で討伐しては色々と問題が発生する。野良での狩猟が横行すると生態系が崩壊し、予期せぬ事態を将来的に招きかねないためだ。よほどの事がない限り、野良の狩猟は認められていない。

だが自衛のために戦う事は可能であり、それで撃退すればまだ許される。何もしないままに負傷するのはハンターとしては本意だろう。だが極力戦闘に持っていけないようにするための努力は必要だ。

それがモンスターを刺激せずにその場を去るという行動だ。

アプトルも無用な戦いを好まない性格のため、二人の意志を汲んで足音を立てずに静かに移動してくれる。

そうして背後を取り、そのまま静かにその場を離れていく事に成功。一定距離を取ると一気に加速し、ラングロトラが追ってこれないスピードで離脱していく。

背後を振り返ると、その足音に気づいたらしいラングロトラがブナハブラを咀嚼しながらこちらを見つめていたが、その距離と速さから追うのも無駄だと悟ったらしい。そのまま食事続けるようで、

ブナハブラの巢へと視線を戻していた。

「どうやら無用な戦いは避けられたようだ。」

それに安堵して手綱を握りしめてアプトルを走らせる事数分。ようやくこの乾燥地帯を抜け出す事となった。

ラングロトラとの遭遇以外に目立ったトラブルもなく、二人は荒地と草原地帯の休憩地点とされる町に入る事になる。レンタルしたアプトルをこの町の竜小屋に届け、昼食をとるために酒場へと向かっていく。

「いらつしゃいませー」

中に入るとすぐにウエイトレスが出迎え、席へと案内してくれる。お冷とお品書きを出されると、すぐに内容に目を通し、早速注文する事にする。

「あたしはラーメンセットで」

「では私はアプトノスのカツ定食でいきましょうか」

「かしこまりました」

一礼して去っていくウエイトレスを見送り、二人は揃ってお冷を口にして軽く辺りを見回してみる。ハンターらしき顔ぶれは少なく、普通の旅人がよく見かけられるようだ。各々同席している者達と世間話に花を咲かせながら昼食をとっている。

その世間話に少し耳を傾けてみると、こんな話が聞こえてきた。

水没林を通るルートにロアルドロスが率いる群れが現れ、街道が一時的に封鎖されているという話。

華国の政治家の一人が突然の事故死をした話。

また一人、天刃流の使い手が何者かに殺されたという話。

どれもよくない話ばかりだった。その中で気になったこの三つの話。

瑠璃と茉莉は顔を合わせて声を少し潜めて話し始めた。

「また殺されたらしいわね……」

「最近はずち着いたと思っただのですが、またですね。これで天刃流は三人目ですよ」

「他は桜花流に獣牙流だったかしらね。ほんと、一体誰がこんな通り魔みたいなのをしているのやら」

数年前から一つの事件が発生していた。

あまりにも突然の事であり、それは時間を置いて連続して発生する事となる。

東方の武術の流派はいくつかあり、格闘術、剣術、槍術などの専門的なものや総合的なものも含めて様々な形が存在している。

そんな流派に所属している使い手が何者かに殺され続けるという事件だ。

しかも殺されたのは有力な武人であり、最近では達人の領域にまで達した者まで殺されている。

だがそんな彼らの殺され方は暗殺という形ではなく、誰かと戦って敗れた形で殺されていた。つまり、真つ向勝負に負けたのだ。それがまた他の武人たちを驚かせる。

達人と称された者まで真つ向勝負に負けたのか、と。

一体殺した相手はこの流派に所属しているのだろうか。

あるいは流派に所属していない野良の存在なのか。

様々な議論が持ち上がっているが、今もなおその正体は掴めず、

ゆっくりと犠牲者を増やし続ける事になっている。

中にはあの血統の者がこの事件を起こしているのだ、という声も上がっており、それに同意する者も少なくない。何せ実際に多くの人を殺してきた罪人が今もなお刑に服しているのだ。

そんな前例がある今、この武人を狙った通り魔事件もそんな人物が起こしているんじゃないかと思ってしまうのも無理はない。

そう、あの血統に連なる者はすなわち殺しに特化した力を持ち、それによって戦闘能力は修練すればそう易々と敗れる事がない戦士と化す。だから考えられない話ではないのだ。

この事件があるからこそ、今もなお大抵の一般人はかの血統に対してまだ不信感を抱き続けている。

「瑠璃はどう見ます、この事件」

「あたしの考えは変わらないわよ。これはあの人達の事を貶めるための通り魔だってね。だってそうでしょ？ 理由もなく人を殺すような人ばかりじゃないはず。しかも今の時勢じゃそういう事件を起こせば自分達が疑われるのよ。わざわざ自分の首を絞めるようなこととはしないはずよ」

「……そうですね」

「何？ 茉莉はそうじゃないって言うの？」

ジト目で睨んでくる瑠璃に、茉莉は「いえ」と小さく首を振りながら前置きし、お冷を口にして軽く唇を塗らして話し出す。

「私も瑠璃の考えには同意しています。……ただ、それだけではな何かがある気がするのですよ」

「と言うつと？」

「犯人はどうして有力な武人や戦士ばかりを狙うんでしょうね？」

「そりゃ、その方が事件として広く知れ渡るからでしょうよ」

「そうですね。しかしそれだけでなく、その有力な人を倒す事で戦

力を削ぐことも可能でしょう」

「……戦力低下って、また戦争でも始めようっての？ まさか、んなわけないでしょ。だってそれ、戦闘面での要人を暗殺ってことじゃない」

モンスターや竜種と戦うハンターと違い、彼らは人と人との戦闘を行う者だ。国に所属する軍人ではないが、軍人を目指す者や自衛のために戦う技術を習得する者が集まる道場の者ら。

習得した技術を用いて軍人になる者、その技術をまた別の誰かに伝える者、あるいは更なる強さを求めて世界を回る者と様々な目的を持っている。

あるいは緊急時には国の招集に応え、その力を以ってして功績を上げるために戦場へと赴く者もいる。今はそんな事態にはなっていないのでそれはないが、過去にはそんな武人達が名を上げるために国の招集に応えて戦争に参加した事もある。

そうして名を上げれば、自分が習得している流派の名も上がる。するとそんな流派の技術を求めて更なる門下生が集まる。それが目的だ。

そんな武人を殺していく。それはすなわち茉莉の言う通り有事の際の戦力を削ぐことになる。それも実力ある武人ならばより大きな戦力の低下を招く。

「でも考えられない事もないでしょう？ ……ま、全ては私の憶測なんですけどね。戦力を削いだから一体何が起きるのか、そこまではわからないのですから。戦争が起きるかもしれないし、起きないかもしれない。……起きない事を願いますけどね。もしかするとつと単純に、ただ強い相手と戦い、殺していくという目的も考えられないのですからね」

「そっちの方が有力じゃないの？」

「かもしれませんね。……つと、どうやら食事が運ばれてきたよう

ですよ」

視線を横にずらせば、お盆を手にもうエイトレスが戻ってきていた。そこで一旦話を中断させる。

「お待たせしました」

注文した昼食が目の前に置かれ、一礼してウエイトレスが去っていく。

瑠璃が注文したラーメンセットはラーメン、焼飯、から揚げとサラダのセットというシンプルなものだ。

一方茉莉が注文したアプトノスのカツ定食はアプトノスの肉に衣をつけて揚げられたカツ、白米と味噌汁にサラダというメニューとなっている。

「「いただきます」」

手を合わせて一礼し、食事を始める事にする。

そうしている間も二人は次の話題に移っていく。先ほどの話はいったん終わらせ、別の気になる事に関して話す事にしたようだ。

「水没林にロアルが出たって話があったわね」

「ありましたねー。とはいえそんなに珍しい事ではないでしょう。」

「そういうのはちよくちよくある話ですよ」

「そうだけど、確かあたし達が取るうとしてしているルートって、水没林も含まれてなかった？ ほら、確か……ボルシオ水没林。そこを越えていく予定だったじゃない」

「ああ、そのルートでしたね。……そこが今封鎖されているという話でしたか」

「そうよ。だからどうするって事になるわけで」

こういう場合は居座っているモンスターが離れていくのを待つことになるか、あるいはハンターに依頼を出して討伐するという形になるかの二択になる。

これからその水没林に向かう事になるが、それまでの間にどうなるかが解決してくればいいのだが、解決していない場合は足止めを受けてしまう事になりそうだ。別のルートを取るという選択肢もあるが、そうなるとうるりと山を大きく迂回する事になる。

もしくは自分達が依頼が出ていけばそれを受理し、その水没林に赴いて討伐に向かうという手もある。

そうすると戦いの経験を積めるし素材も手に入る。更に水没林で採取するという事も可能だ。

何もしないまま迂回するか、クエストを受理していくか。

その二択を選ぶとなれば、瑠璃からすれば答えは一つしかなかった。

「あたしは依頼があったらやっていきたいと考えているけど、茉莉はどう?」

「私は別にかまいませんよ。異論はありません」

「そ。じゃあこのままルート変更なしで行くって事でいいわね」

レンゲで焼飯を掬ってパクパクと食べていき、ラーメンをすすっていく瑠璃は少しだけ楽しげな表情を覗かせる。基本的に彼女は好戦的な方だ。というより母親や姉を目標としている瑠璃は早く強くなりたいという願望がある。

優秀なハンターである母親、一時期は優秀なハンターだったが過去の出来事によりハンター業を引退した姉。かの事件の際は一時的な復活をしたが、結局は父親の鍛冶業を継いで活動している。

ならば姉が足を乗せなかった領域まで上っていききたいという思いが強いようで、少しでも経験を積みたいというのが彼女の想いだ。

茉莉はそんな瑠璃の想いを知っているため、そんな彼女を支えるためについて行く。彼女の想いはわからなくもないが、どこかで彼女はストップをかけなければどこまでも突っ走りそうで怖い。だからこそ茉莉は瑠璃の事を時折猪と呼ぶ。

そして茉莉が付いていなければいけないのは昔から変わらない。ストッパーとなる彼女が手綱を引いていなければどこでも無茶をするかわかったものじゃない。

とはいえ瑠璃自身もどこかで茉莉がいてくれるから安心して、という節があるのでギリギリまでは突っ走っているようだが、それは彼女に対する信頼があるからだろう。

茉莉もそれを何となく感じ取っているようで、しょうがないなあと思いながら今まで彼女を支えている所がある。同時に彼女を弄ったりして憂さ晴らしや退屈凌ぎをしているのだが、そこはご愛嬌か。

「で、最後は華国の一件ですが……」

「事故死って話でしょ？ どうでもいいでしょ、そんなの。あの国の要人がどうなるうが、知った事じゃないわよ」

「……ま、そういう感想になりますか」

味噌汁をすすりながら茉莉はやれやれと首を振るしかない。といつても彼女もまた同じような心境だ。

自分達があゝの国から出る結果となった魔族狩り。まだまだ幼い頃に起こった出来事だが、実家を捨ててポケット村へと身を寄せる事になった出来事だ。そのせいであゝの後の数年はあまり自由に過ごす事が出来ず退屈だったことを覚えている。

少しして魔族狩りはなくなったらしいが、再び起こったその一件によって華国からはほとんど魔族はいなくなり、魔族の心境は更に悪くなったという話だ。

二人もその例に漏れず、あまり華国とは関わり合いになりたくないと思っている。だからかの国の要人が死んだと聞かされても、「

あ、そう」としか言えない。もう自分達は華国人じゃないのだから。というより昔から華国人と言う自覚すらない。物心ついたころから無国籍状態だったため、どこかの国の人族だという感覚がほとんどないのだ。

それからしばらく無言で食べ進め、そう時間もかからず昼食を食べ終える。先に食べ終えた瑠璃が軽く視線を巡らせれば、まだ談笑している客達は暗い話題だけでなく明るい話題についても話しているようだが、それらは小さなものばかりかプライベートの事だけだった。

情報としては今回はこれくらいしかないか。

となればここに用はない。早いところ移動するでしょう。

会計を済ませて店を出ると、またアプトルをレンタルできる竜小屋へと足を向かわせる。再びアプトルを二匹レンタルすると、すぐに騎乗して移動を開始する。

竜小屋は各地の町に存在し、数匹のアプトルがここで世話されている。その疾走力が売りであるアプトル、あるいは周囲の地形に合わせて進化した亜種らをレンタルし、騎乗して移動する事が可能だ。レンタルした彼らは他の竜小屋に預け、次の機会に他の客が利用する事でやり取りされている。そのため利用後のアプトルの事に関しては心配はいらない。

昼食後ではあるが、そんな事は関係なしに二人は一気に移動していく。

少しずつ茶色や黄土色が主体となっている世界に緑が混ざりだし、やがってどこまでも広がる緑という原っぱに入り込む。そうすると地平線の奥にうっすらと山の影が見え始める。

それだけでなく、草食竜のアプトノスの群れがちらほらと見かけられるようになった。

とはいえその群れの近くを一瞬の内に駆け抜けてしまうアプトルの疾走力。あつという間に数十頭の群れを背後へと置き去りにしていく。

それから数十分もすれば遠くに見えていた山がかなり近くなってくる。それだけでなく山の近くにある森も近くなり、二人は手綱を操って進路をその森へと変更させる。

森へと突入すればそれはまともな道などほとんどない状態になるが、アプトルはそれを苦も無く疾走し続ける。木を避け、道なき道を走り続けて森の奥へ。そうして数分もすれば少しはまともな道に出てきた。

それからはその道を利用し、一気になだらかな坂道を駆け抜けていく。するとこの森に生息している生き物の気配をうっすらと感じ始める。

だがほとんどは危険性のない草食系のモンスターばかりで、先ほどの群れとはまた別のアプトノスや、キノコを主食とするモスが多い事がわかった。

ランポスやシャギイの気配は今のところはない。ならば安全に移動できそうだ。

なだらかな坂道はやがて山道へと形を変え、多少はましな道なりになる。だがそこで油断してはいけない。少しスピードを落として周りに気を配りつつ進むことで、足を踏み外して落下しないようにする事も忘れない。

そんな山道を駆け抜け、坂が終われば今度はまた森を突っ切る道となる。今度は木々を避けるのではなく、旅人が利用するまともな道を駆け抜ける事になるためスピードはそう落とさなくても済みそう。

モンスターの気配も相変わらず落ち着いたもので、肉食系のものの反応は感じられない。

今回はトラブルもなく目的地の村に到着できそうだと感じ始めた。

そんな事を考えて数十分。

何事もなく目的地である村に到着する事になった。竜小屋へとアプトルを連れていき、この村にある酒場へと足を運ぶ。山間の一角

に作られたこの村の先に件のロアルドロス率いる群れが確認された
ボルシオ水没林が広がっている。

水源が豊富な上に雨雲が溜まりやすい環境になっているらしく、
かなりの頻度で大雨が降り注ぐ場所になっているようだ。その影響
でほとんどの森が水に沈んでいる状態になっているというその水没
林は一種の植物や水生のモンスターにとっては天国のような場所
になっているという。

ただの森と違い水が多いためその違いに慣れていないハンターに
とっては厄介な場所であり、またある技術を持っていなければこの
水没林で暮らすモンスターを相手にするのは難しい。

そのため件のロアルドロス討伐クエストが出ていたとしても、引
き受けるハンターはそうそういないんじゃないかというのが二人の
推測だ。

ギルド支部を兼任している酒場に入り、様子を窺ってみるとハン
ターの数は数人程度しかいないようだ。他は一般人であり、ここに
足止めされている旅人がほとんどだと思われる。

そしてクエストボードを見てみると、やはりそれはあった。

だが内容を見てみると、それは少しばかり予想とは違っていたの
だ。

「……………は？」

思わず瑠璃が呆けたような声を漏らしてしまつた。

そこにはこうあった。

ロアルドロスとチャナガブルの狩猟。

場所、ボルシオ水没林。

確かに推測通りロアルドロスの討伐依頼だった。しかし、それに
加えてチャナガブルまでその名が拳がっている。これは予想外だっ

た。

瑠璃はすぐにカウンターへと向かい、受付嬢にあの事について訊いてみる事にした。

「ちよつといいかしら？」

「はい、何でしょう？」

「あそこの依頼、チャナガブルの名前まであるけどどういう事？」
「実はロアルドروسの群れが確認された後、とあるハンターチームがクエストを受注し、現場に向かったのですが……その後チャナガブル乱入というトラブルが発生したそうです。彼ら曰く、ロアルドロスとの戦闘にチャナガブルまで乱入してきたせいで現場は混乱状態、そのまま戦闘続行不能まで追い込まれたとの事です」

なるほど、そりゃ話に聞いていないモンスターが乱入されては混乱もするだろう。群れのリーダークラスのロアルドロス相手にするだけでなく、ロアルドロスと同じ海竜種のチャナガブルまで現れれば、何の心構えもしていない状態ならば戦線はガタガタに崩れる。

そこを突かれれば戦いを続ける事なんて出来やしない。

それに恐らくチャナガブルが現れたという事は、その事態が起きたのはまず間違いなく陸上ではなかったのだろう。それが戦線崩壊に拍車をかけたに違いない。

当事者のハンター達には運が悪かったと合掌するしかない。

さて、これは困ったことになった。

チャナガブルまで確認されたとなれば、二頭討伐クエストになったという事になる。もちろん油断しなければ何とかなるかもしれないが、場所が場所だ。しかもチャナガブルの主な戦場は普通じゃない。

心構えは出来ても、だからといって確実に成功できるかと訊かれれば少し難しいと答えてしまうだろう。

ちらりと茉莉が瑠璃の様子を窺い見れば、腕を組みながら少し唸

っている様子が確認できた。ロアルドロスロスの群れだけと想っていた所にチャナガブル。彼女とて慢心しているわけではないので、がむしやらにやればいいというものではないという事はわかっているよ
うだ。

それさえわかってくれるなら問題ないが、さあ行こうかとなれば少し考え込んでしまうのが現実。

せめて二人だけでなくあと二人……いや、一人でもいいから同行者が欲しいところか。

だがずっと二人でやって来た上に、自分達の種族があれなのでそう易々と同行者を募るのも難しい。これは少し困ったものだと思っ
ていると、誰かが近づいてくる気配がした。

「その様子、あんた達もあのクエストに行く気があるようだね」

「……ん？ 誰？」

そこに立っていたのは東方人らしい黒い髪を肩まで伸ばし、気の強そうな碧眼をした女性だった。浅葱色あさぎの着物に身を包み、左右の腰元には小太刀を帯刀している。

一見すると普通の剣士のようなのだが、あのクエストについて話し
けてきたという事はハンターでもあるのだろうか。

多少警戒するような視線で彼女を見つめていると、にやりと楽しげな笑みを浮かべて「ああ、別に怪しいものじゃないさ。こんなものをぶら下げちゃいるけどあたしもハンターでね」と前置きしながら懐からギルドカードを取り出してぶらぶらと揺らしてみせる。

確かにそれはギルドカードであり、彼女が正式なハンターである事を示すものだった。

「あたいは桐音きりね。草薙桐音。よろしく」

ボルシオ水没林（前書き）

草薙桐音との出会い。

そしてボルシオ水没林入り。

トライ仕様の水没林をどれだけ書けるかが問題になるでしょう。
まずはその始まりから。

ボルシオ水没林の名前は、マレーシアのボルネオ熱帯雨林を参考にしています。

実際のものとは何ら関係ありません。

ボルシオ水没林

草薙桐音、そう名乗った彼女は視線をクエストボードへと向け、ギルドカードを懐に戻すと親指を立ててクエストボードを示して見せる。

恐らくあの依頼を示しているのだというのはわかる。そして彼女がハンターだと名乗った事。それらを合わせて考えてみると、彼女が二人に声を掛けた理由は何となく推察する事が出来る。

「それで、さっきの話聞こえていたけど、あれについて話していたって事でいい？」

「……そうね。チャナガブルがいるって聞いてないって事を訊いていたわけだけど」

「で、二頭討伐になった事で考え込んでいるってわけだろ？ 二人で行けるかどうか、とかそんなところか」

「そうですね。……まあ、ずばりいきましよう。あなたもあのクエストを受注しようと考えているということですよ。あなたもあのクエ」

「ああ、そうさ。……だがあたかもたった一人で行こう、なんて馬鹿な事は考えちゃいねえ。他にも参加する奴がいねえもんかと待っていたら、どういうわけかだあれも参加しない。まったく、ここにいる野郎どもはタマナシか、おい？ どいつもこいつもチキンばかりじゃねえか、と嘆いていたところさ」

やれやれと首を振りながらもその眼差しと言葉はここにいるハンター達を非難していた。ハンター達は全て男性であり、女性はこの三人のみ。つまりあのクエストに参加しようとしているのは女性のみであり、他のメンツ……すなわち男性全てあれを避けているという事になる。

桐音がチキンと言うのも無理はないだろう。

だがチーム戦とはいえ、二頭討伐クエストは通常のクエストよりも難易度が上がるのも事実。同じ種類であろうがなかるうが、二頭のモンスターが同時に狩猟場に確認されているクエストは難しいというのがハンター達の間で知られている。

それはやはり同じエリアに二頭の大型モンスターが現れた場合、どちらにも意識を向けていないといけないという点があるからだろう。そうしなければ一頭に集中している時に横から、あるいは背後から攻撃を受けて致命傷を受けたとなれば死の危険性がある。

故に二頭討伐クエストを避けるというハンターは決して臆病者、と蔑まれるいわれはない。命を大事に、それは何も間違っていないのだから。

だが一般人も街道を利用できないという状況、このクエストに参加表明を出しているのが女性のみというこの状況。参加表明を出していない男達が非難されるというのは、ちょっと彼らがかわいそうかもしれない。

「ここに居るのはチキンばかりでこれじゃクエストどころじゃねえってところに、ようやくあんたらがやって来たってわけさ。見たところ、結構腕が立つだろう？ どうだい？ あたいと組まないか？」

にっつと笑みを浮かべながらそつと手を差し伸べる。

その手、続いて桐音の表情と視線を上げて観察してみる。怪しいところはないように見える。彼女は本当にあのクエストを行うための仲間を募っているようだ。

そして二人を見て出来るハンターだと感じられるだけの目と感性もある。

二人もまた同じように桐音を観察する事でその実力を読み取ってみる事にした。帯刀している小太刀から感じられる力からして、それはハンターが使う武器らしい事がわかる。

その佇まいに隙らしいものは見当たらず、なるほど戦闘面ではまったく問題はないだろう。耳などを見てみると彼女は人間である事がわかるが、その発せられる気はただものではない事もわかる。たぶん……タイムマンで戦えばほぼ互角かもしれない。そう思わせる程の強さを感じる。

「……いいでしょう。よろしくお願いします」

「茉莉、いいの？」

「私は構いませんよ。それに人手が欲しいというのは事実ですからね。瑠璃もそれはわかっているでしょう？」

「そりゃそうだけど……」

渋りながら横目で桐音の顔を窺い見る。彼女とて頭ではもう一人は仲間が必要だという事はわかっている。しかし、この桐音という女性をそう易々と受け入れる程彼女は大人しくはない。

まだ警戒心を剥きだしにしているのは、桐音のその笑みや雰囲気と思うところがあるからだろう。瑠璃の心情は桐音も何となく感じ取ったらしく、苦笑しながら軽く頭を搔いてみせる。

「ああ、あたいがこんななのは昔からの性分だね。そこは勘弁してくれ」

「……そう」

「で、どうだい？ あたいとしては仲良くやっていこうかと考えてるんだけどね」

「……」

相変わらず差し出されている手。それをじっと見つめ、

(……ま、今回だけの付き合いよね)

緊急事態であるが故に一時的に組む相手、と考える事で今回だけの付き合いとする。どこか気に入らない相手ではあるが、我慢してやろうと自分に言い聞かせ、瑠璃はその手を取った。

「よろしく頼むわ」

「ああ。よろしく頼むぜ。……そういえば、まだ名前を聞いていなかったな。なんていうんだ？」

「あたしは瑠璃・フレアウイング。で、こっちが妹の
「茉莉・フレアウイングです。以後、よろしくです」

こうして三人は一時的なチームとなった。

受付嬢に依頼書を持っていき、それぞれサインをして判が押されると依頼の受注が完了される。それからはそれぞれ一旦宿に向かう事になった。桐音はハンター装備に着替えなければならぬし、瑠璃と茉莉も宿を取って一時的な拠点を得なければならぬ。

二人で利用するための部屋を取り、ローブからそれぞれ装備を取り出して着替え始める。

さて、ここで改めて二人の装備を見てみる事にしよう。

瑠璃が装備するのはナルガシリーズ。迅竜ナルガクルガの素材を使用した動きやすさを重視した装備である。その機動力を用いて戦う事を主体とする瑠璃にとって、ナルガシリーズは実に彼女にあっているといえよう。

そして主要武器は相変わらず太刀であり、同じくナルガクルガの素材を使って作られたヒドウンサーベルを使用している。

一方茉莉が装備するのはレウスシリーズだ。雄火竜リオレウスの素材を使用し、火に対して高い守りを保有するだけでなく、スキル

として火属性の力が高まる効果も発現している。

そして主要武器はランスとガンランスという重量級のものであるが、彼女自身の高い筋力のおかげで難なく振るう事を可能としている。

瑠璃が攻め、茉莉が守りつつ援護する。

それが二人の戦い方だ。

また二人が身につけている装備は西のドンドルマをはじめとする地域で作られるものではなく、この東方で作られる形のものだ。そのためその外観、発現するスキルに少々変化が見られる。

数分して着替え終えた二人はローブを纏って部屋を出、先ほどの酒場へと向かっていく。そこには既に準備を終えたらしい桐音が待機していた。

「おー、待たせてしまいましたかね？」

「いや、そんな事はないさ。ほんの数分だけだよ」

そう言う桐音の装備は何とも言えない装備だった。胸元や肩、へそが露出した軽装ながら、その色合いは少し紫がかった暗い黒に染まり、胸の上で血色に染まる爪のようなものが交差した装飾がしてある。

頭を守るものはなく、紅色のサークレットがそこにあるだけだ。

だがそのサークレットが力を持ち、頭部を守るための障壁を張ってくれている。一見装飾具のように見えるが、それも立派な防具なのだ。

ネブラシリーズ。

毒怪竜ギギネブラの素材を使用して作られた防具である。色合いからして怪しさ満点の代物だが、高い衝撃吸収能力を持ち、それがスキルに表れている。火にかなり弱い、それと引き換えに雷と氷属性に強いのも特徴の一つだ。

それに原種は怪しさ満点だが、瑠璃と茉莉の姉の主要防具はその

ギギネブラの亜種、電怪竜の素材を使用したネブラUシリーズだ。あれなんて血色を主体とした色合いをしているため、あれこれ言う事は出来ないか。

「竜車の手配はしてあるぜ。必要な物は用意させてあるからそれぞれチェックしな」

「おー、どもども。すみませんね、こんな事まで」

「なに、いいって事よ。時間があつたからちやっちやとやったただけの話さ」

そう言いながらどうぞ、と言う風に竜車の中を示した。それは馬車のもので似通っているが、それを引くのはアプトノスカ、ガークアか、あるいはアプトルかポポかという違いがある。

地域によつてそれは異なり、飼い慣らされたモンスター達によつて荷車が引かれるという仕組みになっている。

ここではアプトルが使われているようで、二頭のアプトルが手綱に繋がれている。

瑠璃、茉莉と続いてそれに飛び乗り、中にある荷物を確認する。支給品ボックスに納品ボックス、そして水没林で狩猟するならば必要不可欠な装備もちゃんと揃っている。

特に問題はなさそうだ。

「オーケーですね」

「そうかい。じゃあ出発してもいいかい？」

「いいわよ」

「よし、そんじゃ行くか。はっ！」

手綱を操つてアプトルを走らせ、勢いよく竜車が道を走っていく。がたがたと音を立てながら車輪が回り、三人のハンターを乗せた竜車はアプトルの力によつて一気に村を飛び出し、森の中へと消えて

いった。

一時間近くアプトルが走り続け、一行はボルシオ水没林のベースキャンプへとやって来た。アプトルを休ませ、テントを設営するとモンスターが寄ってこないための薬を撒く。

続いて竜車から支給品ボックスをおろし、中から携帯食料、応急薬、地図を取り出してそれぞれのポーチへと納める。

続いて必要な物はこれだ。

水没林は文字通り多くの木々が水に沈んでいる。それはすなわち陸地となる場所はほとんどないのだ。増水された川がエリアの大半を占め、それ故にここは水生のモンスターにとって暮らしやすい環境となっている。

そんな彼らと戦おうと思えば、水中から陸上へと引き上げるぐらいしかハンターには戦う手段はなかった。他にあるとすればガンナーが遠距離から攻撃する方法があるが、それではちまちまとしかダメージを与えられず、時間がかかってしまう事が多い。

また、水中でも行動できるように進化した魔族が挙げられるが、これは限定的な話であり、そんな彼らが表に出てくる事が稀なため期待できない。

普通のハンター達でも水生のモンスターに対抗するためには、やはり奴らの領土に危険を冒しても飛びこむしかなかった。そのため装備が近年遂に開発されたのだ。

「酸素瓶に水中メガネ、そして水竜の守り……つと」

支給品ボックスからひよいひよいとそれらを取り出していき、装着していく三人。その中で水中メガネは瑠璃と茉莉は頭の防具に装

着し、桐音はサークレットののためにそのまま頭に装着する。

水中メガネはそのままの意味だ。水中でも問題なく視界を確保するための物で、ハンターの装備に合わせてパーツを変える事が出来るようになってる。

基本的にはバイザーのような形状をしており、頭の防具に装着する事で上げ下げする事を可能としている。

酸素瓶は中にサン草と呼ばれる植物を収めた瓶であり、そこからチューブが伸びて口と鼻を抑えるマスクに繋がっている。サン草は少しの光でも光合成を可能とし、更に生み出される酸素が普通の植物よりも多いため、このように利用されることになった。

また深い海に潜水する際はこの酸素瓶とマスク、水中メガネを同一化させた用具が存在しており、こちらを利用しなければ危険という説明がなされている。

最後に水竜の守り。これは一見宝石のように見えるが、水竜ガノトトスの素材をはじめとする水生のモンスター達の素材を使用し、その秘められた力を引き出して結晶化させた代物だ。

これを身につける事で装備者の周囲に力が包み込み、水中でも陸上に近い動きを可能とさせた。装備している防具の重さもある程度軽減し、ある程度の水流にも耐えられ、泳ぐ事が出来るならば防具をつけ、武器を手にしても問題なく移動できるだけの力を与えてくれる。

これらの装備品があつてこそハンター達は水中でも戦う事を可能とする事出来るようになったのだ。逆に言えば、これらがなければ水中で戦う事は自殺行為となる。

防具の重さによって水中で移動する事も叶わず、酸素を取り込むことが不可能になって溺死するのがオチだ。

それらを身につけ終わると、それぞれローブを脱いで中から今回使用する武器を取り出していく。

瑠璃が取り出したのは一振りの剣だった。一見するとシンプルなロングソードに見えるが、これはダブルセイバーに属する武器の一

種。良質の骨と火竜の素材を使い、高い火属性を内包させたその剣は、火竜剣【火燐^{かりん}】。

リオレウスとリオレイアの素材を使用し、両刃剣を二つ組み合わせたダブルセイバーとして瑠璃の姉、撫子が作り上げたのだ。上位に上がったお祝いの饒別として彼女が打ち、見事に仕上げた一品であり、その強度や切れ味は上位のものに引けを取らない。

柄の中心にあるギミックを使う事で畳めば両刃剣、広げれば柄を中心として左右に両刃剣が存在するダブルセイバーとなる。

今回は太刀ではなくこれを使うようだ。

一方茉莉は桐音が纏っているネブラシリーズに近い禍々しさを感じさせる槍を取り出す。中心はククリに近い刃で、その根元から小さく二つに分かれた刃が存在し、それらを纏める棍は細長い作りになっているランスだ。色合いは暗い黒と血色を使用し、大型のランスではなく対人戦で使うような槍に近いそれはシャドウジャベリン改。

ギネブラの素材を使用し、奴の毒を内包したランスである。

左手に盾を嵌め込み、取り出したそのシャドウジャベリン改を軽く手に馴染ませるように両手で回転させ、チャキツと音を立てて右手で構える。うん、と満足そうに頷くとそれを背負って固定した。

最後に桐音が藍色のローブから取り出したのは重量を感じさせる武器だった。それを広げると斧になる。先端は球体になっており、そこから大小の刃が付き出している形になっている。

球体は変形させると内蔵されている棘が射出され、それが剣の先端となる。それはまさに剣と言うよりはモーニングスターと呼ぶべきだろうが、それはツツコンではいけないお約束というものだ。

斧と剣という二つのスタイルを切り替えて戦うというギミック武器の始祖であるスラッシュアックス。その一種であるこの武器の銘はヘビィディバイド。

尾槌竜ドボルベルクと呼ばれる獣竜種のモンスターの素材を使用しており、高い威力を持つ武器の一つだ。

しかし普段着には小太刀を帯びていたというのに、ハンターとしての武器がスラッシュアックスとは驚きだ。てっきり双剣使いかと思っていた二人は少し意外そうな視線を桐音に向けてしまう。

それに気づいた桐音は「ん？」と二人に振り返り、その視線がヘビィディバィドに向けられている事に気づくと「ああ、これ？」と軽く持ち上げてみせる。

「あたいは気ままに武器を作っては使ってきているってスタイルだからね。メインは冊子の通りの双剣だけど、色々手を出してきているんだよ。片手剣、双剣、太刀、大剣、スラッシュアックスにダブルセイバー……って具合にね。要は剣だったら何でもいいのさ」

「おー……器用なんですねー」

「まあ、昔から色々やってきたからっていうのもあるけどな。あたいと刃物は切っても切れないものだったって事よ」

どこか愁いを帯びたような瞳をしながらそう呟き、ローブをテントの壁掛けに掛けて戻ってくる。そんな彼女にかける言葉が思いつかず、二人は彼女に続くように壁掛けにローブを掛けた。

ローブの中から必要な物は既にポーチに移してある。また今回のクエストで使用する武器はもう選択した。それからがクエスト開始だ。

その後ローブを着用する事は許されない。それはルール違反なのだから。

許されるのは緊急事態のみ。例を挙げるならば古龍を確認した時か。

そうでなければハンターはローブから他の武器を取り出して戦う事が出来る。古龍相手ならまだしも、普通の飛竜らを相手にする際にそれをやられてはハンターとして成長する事など出来ない。

故にギルドはそのように制限をかけたのだ。

各自、全ての準備を整えた。

これから向かうのは一つの戦場。かのモンスター達にとっては楽園のような場所でも、足を踏み入れる者らにとっては厳しい戦場だ。しかし彼女達は臆することなくその戦場へと向かっていく。

今、戦場へと乙女たちが舞い降りた。

エリア1に入ると木々の向こうから何かの鳴き声が聞こえてきた。それは三人を威嚇するような声であり、敵意が真っ直ぐにぶつけられてきている。

水生獣ルドロス。

水生モンスターの一角であり、ロアルドロスをリーダーとして群れで生活する存在だ。少しくすんだ緑色の体色をしており、その骨格や外見から見るとトカゲに近しいか。

数は三頭。となれば一人一殺で十分だろう。

「ここで軽くお互いの実力を把握するためにあれ、一人ずつで殺らない？」

「奇遇だね、あたかも同じことを考えていたところさ。そんなじゃ、軽く流していこうじゃないか！」

そうして二人は同時に飛び出し、ぬかるんだ地面を駆け抜けていく。ばしゃばしゃと音を立てるはずの足音は極力抑えられており、微かな音しかたてていないがそれでも二人の疾走速度はなかなかのものだ。

その後にくよくよにやれやれと嘆息しながら茉莉も続き、背負っているシャドウジャベリン改に手を伸ばして構える。

その頃にはもう既にあの二人はルドロスとの距離を縮め、己の武器の間合いに入り込んでいた。

腰に帯刀している火竜剣【火燐】を抜き、向こうから噛みついてきたルドロスに向かって一振り。

たったの一振りで十分だ。

噛みつくために前のめりになったルドロスの首を火竜剣【火燐】で焼き切る事で撥ね飛ばす。

一方桐音はと言うと、背中に担ぐヘビィディバイドの柄に手をやり、飛びかかってきたルドロスに合わせて抜き放ち、ギミックを始動させて剣モードに切り替えつつ体を捻ってルドロスをやり過ごしつつその頭へとスパイク球体を叩き落す。

ピンポイントに頭へと振り下ろされたそれはルドロスの頭蓋骨を打ち砕き、その一撃のもとに絶命させる。

その鮮やかな攻撃に残った一匹は恐怖を感じ、少しずつ後ずさりしはじめる。だがそれを逃さず、瑠璃と桐音の背後から跳躍していた茉莉がシャドウジャベリン改を構えつつ振りかぶり、勢いをつけて投擲する。

それは狙い狂わずルドロスの額を貫き、更に先端から染み出る毒もルドロスの頭から侵していき、その一撃だけでルドロスは絶命してしまう。

結果、全員一撃必殺で終わらせてしまった。

軽く武器を振って血を払い、鞘や背中に戻した三人は倒れ伏すルドロスの死体に剥ぎ取りナイフを入れて素材を剥ぎ取っていき、残った死体はそのままに隣のエリア2へと移動していく。

森の中に南北に広がる広場となっており、ここもまた雨によってほとんどぬかるんでいる状態だ。ルドロス達の気配はなく、いるのは大型昆虫の一種であるオルタロスやブナハブラぐらいなものだった。

彼らを刺激させないように静かにその隣のエリアであるエリア4へと移動していく事にする。強い気配はそのエリア4から感じられ

るのだ。

まず間違いなく標的はエリア4にいるとみていいだろう。現実性を高める要素として、あの気配の周りには小さな気配が多く存在している。恐らくルドロスを囲んでいると思われる。

「前線はあんたもやってるんだろう、瑠璃？」

「そうね。あたしが前に出て斬りこみ、茉莉が援護していく形を取ってるわよ」

「だろうな。あたしも前に出ていく主体だから被ってるってことになるか。……となると、どっちかが前衛、どっちかが遊撃という事になるわけだが、どうするよ？」

「……武器的にあんたのスラアクが前衛向きでしょうね。あたしが遊撃で斬りこむことにするわ」

あの一瞬の出来事でお互いの実力は何となく把握した。ルドロスの飛びかかりを回避しつつの一撃。やはり出来る人物だということがわかった数秒間。

実力や戦い方が似通っているならば、武器の特徴を生かした位置取りを取るしかない。

広げればリーチが伸び、また気刃を放つ事で一気に周囲を薙ぎ払う事を可能とするダブルセイバー。これで周囲のルドロス達を一気に始末していく事にする。

そして桐音のヘビィデバイドを主体としてロアルドロスへとダメージを与えていく。時に瑠璃も、時に茉莉も加わって攻め立てていく、それが大まかな作戦となる。

またここに来る途中にお互いが持っている道具についての確認もしており、それもあるからこそ桐音は二人の役割を何となく察知する事が出来たのだ。

といっても二人の性格から考えても何となく推察できたという点もあるのだが。

ゆつくりと足音を極力立てずにエリア4へと入り込み、木々の陰に身を隠してそつと奥の方に広がる大河の方を覗き見る。

そこには一種の王国が存在していた。

群れを成す姫君たちの数は十頭近く。各々リラックスした様子であり、眠っているもの、水に口をつけているもの、そして王に寄り添っているものと様々だ。

その王国の中心には王がいる。

スポンジ状の黄色いたてがみを纏い、堂々とその場に佇むそれはまるで愛でるようにその姫君たちを見守っている。

あれこそが今回のターゲットの一つ。

水獣ロアルドロスだ。

彼らはまだ瑠璃達に気づいておらず、平穏な日常を過ごしている。だが彼らがこのボルシオ水没林の街道近くに存在している限り、ここを通り抜ける旅人に危険が及ぶ。

ここから立ち去ってくれるならばいいのだが、この群れは数日ここに居座っている。だからこそこれ以上ここを封鎖させないためにもこのロアルドロスには退場してもらわねばならない。

「目標発見。さて、斬りこむタイミングを窺うとしようかね」

「そうね。瑠璃、大丈夫ね？」

「大丈夫です、問題ありません」

ポーチから赤い笛を取り出し、腰に下げると続けてポーチから一つの玉を取り出して懐に入れる。その間に瑠璃は鞘に収めている火竜剣【火燐】に指を掛け、桐音も手を柄に掛けながらいつでも飛び出せる体勢に入っている。

ロアルドロスの視線は少し瑠璃達の方へと向けられているが、まだ奴は彼女達に気づいていない。奴はただルドロスの様子を見守っているだけに過ぎない。

飛び出す機会はただ一つ。

奴の視線が向こう、大河側へと向けられた時だ。

「……………」

静かな時間が過ぎていき、聞こえるのは風に揺れる木々のざわめきと大河の水の音。

ロアルド罗斯は静かに見守り、ルドロス達はこの穏やかな時間を楽しむような声を漏らす。

彼らにとつての平穩　それを壊すのは忍びないが、残念ながらその王国の平和を打ち砕いてくれよう。

ロアルド罗斯の視線が動き、大河の方へと向けられた瞬間、弾丸が射出されたかのように桐音が勢いよく飛び出していく。

それに続くように瑠璃もまた疾走を開始し、それぞれロアルドロスとそれを取り巻くルドロスへと距離を詰めていった。

「　っ!?!?」

当然、突如現れた敵にロアルド罗斯が気づかないはずもなかった。すぐさま身構え、唸り声を上げるがそうする間に既に二人は己の武器の間合いまで詰めてしまっていた。

「はあっ!」

振り抜かれたヘビィダイバイドの刃がロアルド罗斯のたてがみを薙ぐように振り抜かれ、黄色いスポンジに赤が混じる。だがそれとどまらず、滑りやすいぬかるみの地ではなく周りと比べてまだ固い部分に足を乗せて体を固定させ、振り抜いたヘビィダイバイドを引き戻し、薙いだ部分と交差させるように振り下ろす。

「ギユオオオオオオオオオオオッ！！」

噴き出す血を感じながら敵の侵入にロアルドロスが吼える。そのまま桐音へと爪を振り上げて叩き落とすが、バックステップを刻んでそれをやり過ぎ、横から飛びかかってくるルドロスへと柄を突き上げて弾き返し、体を捻って首を刎ねる。

向こうでは既に瑠璃が二頭は仕留めており、広げられた火竜剣【火燐】を勢いよく回転させて刃から炎を軽く噴き出させていた。

背後からは茉莉が赤い笛、鬼人笛を吹き鳴らして特殊な粒子を生させ、それは茉莉達へと浸透して活力を与えてくれる。

十分に力がみなぎった事を感じると鬼人笛をポーチに戻し、茉莉もまた己の武器であるシャドウジャベリン改を構えた。

各々位置についた瞬間、ヘビィデイバイドの先端をロアルドロスに向けた桐音が不敵に笑みを浮かべてみせる。それはまさに獲物を前にした狩人であり、戦いに愉悦を見出す戦士の顔でもあった。

「さあ、狩りの時間だ。楽しませてもらおうかね！」

「ギユオオオオオオオオオオオン！！」

正面からメンチを切る桐音に、再びロアルドロスが吼える。

今、水没林に戦いの火ぶたが切って落とされた。

水獣の群れ（前書き）

ロアルドロスとの戦闘開始。

3rdではそんなに脅威と感じなかったでしょうが、3では水中戦での先生役でした。

水中での敵の動きの基本はこいつから教わったといってもいいでしょう。

水獣の群れ

現れた敵を取り囲むように最初の攻撃に巻き込まれなかったルドロス達がゆつくりと取り囲むように移動していく。だが数が減り、最初の襲撃で三人の戦意にあてられたものが多い。

だがそれを振り払うようにロアルドロスが吼える事で正気を取り戻させた。更に一頭に軽く視線を向け、何かを伝えるように小さく鳴くとすぐに正面で構えている桐音へと戻した。

小さく息を吸いこむと、口から水の塊を撃ち出す。弾丸のように撃ち出されたそれは桐音を捉えられず、しかし標的を外したその弾丸はぬかるんだ地面を弾けさせるだけの力を見せつけた。

横に軽く跳び、滑るようにまたロアルドロスへと距離を詰めつつヘビィディバイドを突き出してやる。球体がロアルドロスの頬を捉え、返す刃で打ち付けられた部分を斬る。

鈍器の衝撃から続く痛みにもロアルドロスの表情が一瞬曇ったが、それで怯むほど軟ではない。

体を捻りながら桐音へと噛みつきにかかるも、数歩下がってやり過ぎされてしまう。

「っと、突き抜けますよ」

その隙にいつの間にか接近していた茉莉が桐音の近くを駆け抜け、両手で構えるシャドウジャベリン改を操ってルドロス達を薙ぎ払っていく。ロアルドロスを守ろうと桐音へと攻撃を仕掛けようとしていたところの言葉通りの横槍。

薙ぎ、突き刺し、吹き飛ばして道を強引を作り上げてロアルドロスの背後を取った茉莉は勢いよくシャドウジャベリン改を回転させて遠心力をつけ、鋭い切っ先でロアルドロスの腰から尻尾を薙ぎ払った。

刃によるダメージだけでなく滲み出る毒もロアルドロスを侵すその一撃は、ロアルドロスの意識を一瞬茉莉へと向けさせてしまう。それを見越した桐音が再びヘビィディバイドを突き出し、そこからギミックを始動させて剣モードに切り替えてロアルドロスの頭を叩き斬るように振り下ろす。

それから横に切り払いつつ顔から離れるように移動し、反撃として薙ぎ払われる爪を剣で受け流しながら逸らして見せる。

「クック、見えるぜ。そら、くらいなっ！」

逸らされた爪を狙って少し腕を引いて力を溜めた後、一気に突き出すようにしてヘビィディバイドを叩き込む。だがそれだけではただの突きだ。しかし剣モードの突きには特殊な力が存在している。

柄にある引き金を引き絞った瞬間、柄から強いエネルギーが発生して切っ先へと収束され始めたのだ。

スラッシュアックスにはピンが内蔵されており、それには自然の粒子を取り込んで一つの力を発現させる効果を秘めている。それは斧モードの時には発現しないが、剣モードになる事でその力を発揮してくれる。

斬るたびに力が刀身へと纏われ、敵にダメージを与えると同時にピンの力が付与されているのだ。これは弓に使われるピンとは違い、スラッシュアックスごとにあらかじめ内蔵されているため、切り替える事は出来ない。

このヘビィディバイドに内蔵されているのは滅気ピン。相手のスタミナを奪っていく効果があり、更に頭に命中すれば相手の意識を揺さぶる効果も存在している。いうなればハンマーなどの鈍器と同じ効果だ。

そして突き状態から引き金を引いた時、その力が先端へと収束する事で更なる力を発揮するのだ。収束しているそれにもダメージが存在し、その力が最高に高まると爆発を起こしてしまうのだ。

だがその爆発が最高の攻撃となるのがスラッシュアックスだ。

しかし桐音はその最大攻撃を出さないままに引き金から指を離し、エネルギーの反動で軽くヘビィディバイドが暴れるもののそれを強引に抑えこんだまま引き戻す。

「ふんっ！」

解放は確かに威力が高い攻撃ではあるが、その分武器に対しても少なくないダメージを与えてしまう。それ故に何度もぶっ放せるような代物ではない。無理をすれば武器にガタが来てしまい、鍛冶屋に修理を出さなければならなくなる。

強力故について回る障害というわけだ。

「はっ、ふっ！」

戦場にはもう一人いる事を忘れてはならない。桐音へとルドロスが近寄らないように引き付け、まとめて狩っている瑠璃がいるのだ。柄を中心に両側に存在している刃には赤く燃える炎が発現し、振り回すたびに宙に踊る。

そしてダブルセイバーを中心に柄を両手で操り、主に回転させる事で連続して相手に攻撃する武器だ。

寄ってきたルドロス達を巻き込むような位置へと入り込み、まるで踊るように体を動かしながら両手で火竜剣【火燐】を操る。その度に刃はルドロス達を薙ぎ払い、同時に発生した炎が傷口を焼く。

離れた所にいるものは横回転していた火竜剣【火燐】を縦に回転させ、流し込んでいた気を圧縮させて振り抜かれた刃に乗せて放つ。これが気刃だ。

己の気を刃と化して放つ遠距離攻撃の手段。近距離をメインとする剣士タイプの遠距離攻撃の手段である。これを習得するには気の扱い方を覚えなければならないが、覚えるだけの価値はある。

音にもわかつていようだ。

それに背後からはボディプレスによってあがった尻尾が叩き下ろされるのを見送った茉莉が攻め立てる。基本の突きを連続して放っていくその様はハンター達が行う基本の重量感のある突きとはまったく違う。

細身のランスという事と、茉莉の高い筋力によって操られるシャドウジャベリン改はロアルドロスの腰に次々と突き刺さっていく。その硬い皮を突き破り、中にある肉へと刃が傷つける。

無表情に近い茉莉だったが、少し昂り始めている桐音の様子に僅かに苦笑を見せ始めた。音を立てながら回転するシャドウジャベリン改の刃に己の気を纏わせていきつつロアルドロスと桐音の様子を窺っていく。

「昂っているようですがまだ冷静ですね。っと、危ない」

背後を責めてくる敵には尻尾を振り回して追い払う。空を切って迫ってくる尻尾を何度かやり過ぎし、腰から背中にかけて貫く気槍を撃ち出してやる。斬撃が気刃ならば、貫くのは気槍。貫通力に優れるように調節された気は突きだされたシャドウジャベリン改によって放たれ、敵を貫く槍と化す。

毒を含んだその気に貫かれ、側面からは刃に切り裂かれるだけでなく焼かれ、このまま陸上で戦い続けるのは不利だと悟ったロアルドロスは体を捻って周囲を尻尾で薙ぎ払いつつ大河に向き直る。

そのまま三人を置き去りに勢いをつけて飛び込み、大河の奥へと消えていくではないか。

普通ならばこのまま手出しできないが、今の彼女達ならば後を追う事が出来る。

一旦それぞれ手にしている武器をしまつと、持ってきた水中用装備を装着していく。

「じゃ、気をつけなさいよ」

マスク越しの少し曇った声で瑠璃が念を押すように言う。これから行われるのは勝手の違う戦場だ。瑠璃と茉莉はその種族上空中戦もこなすが、それは昔から翼を使って高速移動の練習をした事があるから出来る事。

更に言えばそれを得意とし、売りにしている現役ハンターに元ハンターが存在し、彼女達からも技術を仕込まれた甲斐があつてこそその空中戦。

しかし陸、空を駆ける二人も海……すなわち水中戦はそんなに経験を重ねていない。

でも戦えないというわけでもない。これもまた一つの経験積みの機会。

バイザーを下して水中メガネをかけ、マスクから問題なく酸素を補給できることを確認し、水竜の守りの力を発動させて三人は各々大河へと飛び込んでいく。

ザパンツ、と大きく水を跳ねさせ、ドルフィン泳ぎで一度水中へと潜りながら前進していく。水は少し濁っているようだが水中メガネのおかげで問題なく視界は確保できている。

冷たい水が肌を刺激するが水竜の守りのおかげで肌寒くは感じない。それに防具と武器の重量がかかっているというのに、それを感じさせないだけの速さで水中を泳いでいける。

これが水竜の守りの加護のおかげだ。やはりこれは革新的な発明だと改めて思わざるを得ない。

また水竜の守りはもう一つの効果もある。

水中でしかもマスクをしている彼女らは声を出してもそれが相手に届かないだろう。声はマスクによって遮られ、ただ独り言を呟くだけに終わってしまう。

そこで水竜の守りの力が働くのだ。

これが近くにある水竜の守りと共鳴する事で結びつけ、装着者の

声を粒子を伝わらせて届けてくれるのだ。粒子が力の道を作っているおかげだと推察されており、これが有力な説とされている。

そんな技術の結晶の加護の下、広がった戦場の範囲。

大河を潜りながらこの中に飛び込んでいったロアルドロスを探す。しかし姿は見えず、気配もこのエリアから消えてしまった。

「エリア5へと移動したと思われませぬ」

「この先、か。……なるほど、確かに待ち構えているかのように動いているじゃないの」

「そうね。しかも小さな気配が近づいてくる。恐らくルドロスじゃないかしら」

「先ほど一頭だけここに飛びこませていましたね。たぶんそれが他のエリアにいる仲間に連絡したのでしょうか」

泳ぎながらも三人は気配を探る事をやめる事はしない。何せ水中にきたという事は、水中での行動を主とする魚竜種、チャナガブルがいる可能性が高いのだ。

川底の、しかも土や砂の下に潜りこんで川底に同化して姿を消し、髭だけを出してあたかも川底に生える草のように見せかけて水の流れに乗せてみせる事で獲物を誘う特性がある。

それにつられて寄ってきた魚、あるいはチャナガブルに気づかない獲物をその大きな口で一気に取り込み、丸呑みにしてしまう。それが奴の捕食行動だ。

それはハンターに対しても同じであり、チャナガブルがどこにいるのか気づかないハンターを丸呑みにしたという報告もよくある話だ。

故に川底にも気を配らなくてはならない。ロアルドロス達にはかり目や気を向けて、気づかないところからチャナガブルに奇襲されてしまえば、自分達より前にこのクエストをやったハンター達の二の舞だ。

いや、チャナガブルがいると知っているという点で自分達が有利な分、奇襲を受けてしまえば自分達の方が笑いだ。

少し濁った底を見回しながら茉莉は気配を探ってみるが、チャナガブルらしき気配は感じられない。ただ隠れるだけでなく気配まで消してしまっているからこそ、警戒心が強い小魚なども油断してしまふ。

だからこそいつも以上にセンサーを張ってみるが、やはり奴の気配はないように思える。

どうやらチャナガブルもまたここにはいないようだ。

そのままエリア4からエリア5へと移動すると、視界の左側に少しずつ崖が現れていく。道は右寄りになっていき、そして右側は水没してしまった森となっていく。

地図を見てみるとここは逆L字がたになっており、左側にある崖がエリアを狭め、更に右手にある森が挟み込むようになっており、道がこのようになっていいるのだ。

その地形のまま水が溜まり、ここは少し特殊なエリアになってしまっている。

同時にハンターにとってはやり辛い地形になっていると言ってもいいだろう。何せ崖のせいでエリアの奥が見えないのだ。これに隠れるようにして忍び寄られては道を曲がる時に襲い掛かれた場合、反応出来なければ大きな負傷になるのは目に見えている。

気づいていれば問題ないが、気づかなければまさしくそれは奇襲となる。しかも陸上と違い、ここは水中。水竜の守りがあるとはいえ、体が上手く動かなければ守るだけでも難しいのだ。

なので気配を探りながらゆっくりと移動する事にする。

「いるわね」

「ああ、待ち構えてやがるな。そして援軍も近づいてきているときたもんだ。まったく、寄せ集めのルドロス連れてきてもしかーないっていうのに」

「いえいえ、混戦に持ち込むという手が考えられますよ。油断は禁物です、桐音さん」

「水中の混戦、か。チャナまで混ざったら確かに面倒なことになりそうだな。こういうのはあたいは好かんのだけどね」

「もしかしてサシでの勝負が好きな系？」

「いいや、好きじゃない」

ちゅちゅち、と指と首を軽く振り、

「大好きさ」

とバイザーとマスクで隠れたその表情を笑みに変える。それは実に楽しそうなものだったが、二人からすればちよつとした程度の違いでどうしてそんな大それた行動を見せるのかとツツコミたい。

「一対多数なんてまどろっこしいことは嫌いだ。戦いつてのはやはりお互いの全力をぶつけ合ってこそだろう。……戦いこそ、至高。身を削り、お互いの命を懸けてこそ戦い！……昔から色々やってきたもんだからねえ、ちよいとあたいは戦いつてもものに目がないのさ」

「さつきはその逆の事をロアル相手にやってるけどね」

「ま、それはそれさね。チャナさえいなければあたいは一人でやるつもりだったけど、……現実はそのうまくはいかないもんだね」

背中にあるヘビィディバイドに手を伸ばし、崖に隠れて見えなくなっているロアルドロスを感じながらゆっくりと前に進んでいく。そうしてロアルドロスまで十数メートルまで接近し、そこで力を溜めて飛び出す体勢に入る。

しかしそこで乱入者。

森の奥から次々とルドロス達が現れ、大河の中へと飛び込んでく

る。水音が響き、体をくねらせながら真っ直ぐに桐音達へと迫っていく。

「思った以上に早いですね。しかも水生獣ですからここはあちらに有利です」

「まったく……群れるんじゃないよ!」

吼えながらヘビィディバイドを振り回すも、素早く回避した一匹には当たらない。が、桐音へと噛みつきにかかった三匹が纏めて切り払われる。

「ギユオツ!」

回り込んできたルドロスが桐音へと噛みつきにかかり、尻尾を振るってくる。振り抜いたせいで硬直していたところへの反撃だ。

「ちっ、鬱陶しい!」

「本当に多数相手は嫌いなものね、ふっ!」

群がってくるルドロス達を火竜剣【火燐】で切り払っていき、茉莉がシャドウジャベリン改を回転させて強い水流を生み出しながら薙ぎ払う。

ルドロス達は二人の攻撃によって傷つき、離れていくが、そこを狙った存在がいた。

「ギユオオオオオオオオオオ!」

崖の向こうから勢いよく呐喊してくるロアルドロス。ルドロスが散り、三人が揃っているのを見計らったの行動だった。茉莉が盾を持っているとはいえ水中で、しかも盾よりも大きな体での突進が防

ぎぎれるわけでもない。

スピードを売りにしている瑠璃でも、水中ではそれを発揮する事は不可能。あのスピードは翼を使つての高速移動であり、翼を広げて羽ばたけない水中では無意味なのだから。

「くっ……」

「……っ」

「ちい……!!」

高速で泳ぐことで水流を生み出し、スピードに乗つたロアルドロスの突進により三人はバラバラに吹き飛ばされてしまう。避ける事が出来ず、防御するしかないと判断した三人は防御体勢を取り、気で身を守つたがそれでも殺しきれない衝撃が襲い掛かる。

それだけでなく、水中で吹き飛ばされれば耐性が強制的に崩される。それを狙つてルドロス達が追撃を仕掛けてくるのだ。

完全に流れがロアルドロス達に傾いてきている。

「こ、の……！ 調子に乗らないでよね！」

寄つてくるルドロス達を火竜剣【火燐】を回転させて反撃するが、それを切り抜けて瑠璃の足へと噛みつきに来たルドロスがいる。回避性能に優れるナルガシリーズではあるが、防御面は中盤クラスと叫ぶところか。

ルドロス程度の噛みつきには耐えられる。が、纏わりつかれては動きづらくなる。

それにもう一つ、瑠璃と茉莉がここで戦いづらい理由が存在する。彼女達は火竜の力を行使する事が出来るが、それは水中では無意味という事だ。水は炎を消してしまう。彼女らのもう一つの武器である火炎操作が使えないのだ。

ロアルドロスは火属性が弱点だが、この水中でその攻撃は出来な

いというのは大きな違いが生まれる。

だが火竜剣【火燐】の炎は斬った瞬間に発生し、内包されている炎の火力は撫子の技術によって高められている。加えてアイルーが持っている技術の一部を習得し、独自に改良を加えた事で濡れていても炎が発生するようになっていた。

これは雨の日でも爆弾が使えるという彼らの技術が元になっている。つくづく彼女の才能が恐ろしい。

「ギユオオオンッ！」

動けなくなっている瑠璃を見逃さずにロアルドロスが襲い掛かっていくが、その前方に茉莉が入り込み、盾で何とかロアルドロスの進撃を止める。しかしやはりというべきか水中という事もあって完全に衝撃を殺しきれていない。

「くっ、やはりやりづらいですね……。だからといって、ここであきらめるようなものはしません！」

足元から気を放出させてこれ以上下がる事を阻止し、逆に押し返すように盾と腕力でロアルドロスに反撃の意志を見せつける。じりじりとロアルドロスを押し返し、右手に持つシャドウジャベリン改でロアルドロスの顔、喉へと突き刺していく。

その刃と内包されている毒により、ロアルドロスの進軍が止まる。それを見計らって盾でロアルドロスの顔を殴りつけ、その一撃に怯んだ隙について桐音が一気に距離を詰めて斬りかかる。

たてがみを切り裂き、返す刃で胴体を薙ぐ。

当然ロアルドロスを守るためにルドロス達が寄ってくるが、ヘビイディバイドのリーチは広く、回転させる事で寄ってきたルドロス達も薙ぎ払われる。その事にロアルドロスが怒りの声を上げるが、黙らせるように茉莉がまた盾で殴りつけ、シャドウジャベリン改で

突いていく。

「いい加減離れなさい！」

足にまとわりつくルドロスに火竜剣【火燐】を突き刺し、もう一つの刃で体当たりしてくるルドロス達を薙ぐ。いつもならば問題なく処理できるのに、水中というだけでやはり辛い。

まだ完全に慣れていない状態で数で押されるだけでここまで違う。侮ったというわけではないが、ルドロスの数がここまでいるというのが驚きだ。今ここにいるだけでも十頭を超えている。何頭かは処理したが、それでも数匹は存在して瑠璃達とロアルドロスの動きを見守っている。

「……………」

寄ってくる気配がないならば、一度ロアルドロスへと接近するのみ。瑠璃は水を蹴ってロアルドロスへと距離を詰めていく。当然それを阻止するようにルドロス達が接近してくるが、「まどろっこしい！」と火竜剣【火燐】を回転させて左右から寄ってくるルドロス達を牽制、近づきすぎたものは斬られてしまう。

「ギユオオオオン！！」

またしても目の前でルドロスが斬られたことに怒り、ロアルドロスが突っ込んでくる。しかしそれを防ぐようにヘビィディバイドを振るいながら剣モードへと切り替える。

「鬱陶しい戦いはこれまでにさせてもらおうじゃねえか。茉莉、あたいが頭をやる！ あんたは周り、そして補佐を頼むよ」
「お願いします」

軽く後ろに下がったところをすかさず桐音が入り込み、剣モードになっているヘビィディバイドで頭に斬りかかる。しかしやはりとすべきかそれは斬るといふよりも殴ると言つた方が正しいだろう。加えて剣モードになっているおかげで滅気ビンの効果が発揮し、先端の球体に力が宿つて更なる鈍器としての力を見せつけてくれる。リーダーの危機を見過ごせずルドロス達が桐音へと向かつていくが、それを防ぐように茉莉がシャドウジャベリン改を振るつて止めていく。リーダーを救出に向かえないルドロス達は苦々しい声を漏らす、こちらとしても死活問題だ。

手を抜いている暇などない。

「ギョオンッ！」

目の前にいる桐音へと噛みつき、頭突きをしていくが桐音はそれをヘビィディバイドで受け流し、反撃として一撃一撃を当てていく。当然頭を狙つて一撃当てていつているため、少しずつロアルドロスの動きがぎこちなくなっていく。

どうやら眩暈状態に近づいてきているようだ。

それを見逃さない桐音、そして瑠璃ではない。

「炎剣・旋熱刃！」
せんねつじん

火竜剣【火燐】を回転させたままロアルドロスへと叩きつけるようにし、両の刃が連続してロアルドロスの体を傷つけていく。頭を揺さぶられるだけでなく何度も何度も斬りつけられたことでロアルドロスが苦悶の声を上げ、体をくねらせ始めた。

一度距離を取るよう後ろへと下がり、そのまま立ち泳ぎをしながら瑠璃と桐音の出方を窺っている。周りの生き残っている数等のルドロスもまた同様だ。斬られていったルドロス達の死体がそこら

に浮かんでいるか、沈んでいる。

流れは再び瑠璃達へと傾いている。

茉莉はシャドウジャベリン改を少し弄りながらルドロス達の位置を確認し、もう一度ロアルドロスへと視線を向ける。

上下左右に気を配らねばならない水中は相手の位置を確認しなければ不意を突かれる可能性がある。瑠璃の補佐役を務めている茉莉は癖として相手の位置関係を確認する事が多い。

というよりプライベートの時からよく観察している事が多いため、もはやこれは日常的だった。

(……？ 妙ですね。一匹足りない)

浮いている死体、生き残っている個体を数えてみたが、どういうわけか一匹足りなかった。死体の数が減っているのだ。

死体が姿を消す何てことはあり得ないが、実際に姿が消えている。

(これは一体 っ!?)

ふと、川底の方へと視線を落としたとき、何かが僅かに動いたような気がした。

見間違いなにかじゃない。砂がゆらりと動いたのだ。

それに従って生えているはずの水草が動いたようにも見えた。

そんな馬鹿な話があるはずがない、普通ならば。しかし現在入っている情報を知っているならば、あれが見間違いで片付けられるようなものではないという事はすぐに思い至る。

「みなさん、下に注意を！ 奴がいます！」

茉莉が叫び、その言葉の意味に気づいた二人は下にも気を配りそして突然強い水流が発生する。

いや、これは自然な水流ではない。川底に向かって強い流れが発生した逸れが自然なものであるはずがない。それに抗うように足から気を放出させてその水流から逃れるが、水流はゆっくりと横にずれていき、ルドロスの死体や小さな流木、魚達を巻き込んで吸い込んでいく。

ロアルドロスも突然の水流に反応し、唸り声を上げながら吸い込まれないように後ろへと立ち泳ぎで逃げていく。

そしてあれに逃げられず、巻き込まれてしまったものはいくと、水流の先にいるものへと向かっていく。

そこにいたのは大きな口を持つ魚のようなもの。開かれた口には鋭い牙が生え揃い、濃い茶色い肌をした体、額の先には提灯のようなものがぶら下がっている。

あれが奴の異名の元となったもの。

灯魚竜チャナガブル。奴こそがこの水没林で行われたクエストに乱入してきた存在だ。

水流は奴が大きく息を吸いこんでいった事で発生したもの。ただの息吸い込みであれほどの水流を発生させてしまう。そしてそれに巻き込まれた者の末路は

「グオンツ！」

砂の下から勢いよくチャナガブルが飛び出し、吸い込んできた物を纏めて口の中へと呑み込んでいく。

そう、文字通り一口で呑み込んだ。丸呑みである。

ルドロスの死体といっても結構な大きさをしている。それすらも丸呑みだ。軽く咀嚼をしてごくと呑み込むと、その小さな瞳がゆっくりと瑠璃達を見回していく。

「ギュルルル……」

「グルルルル……」

チャナガブルが何かを考えるかのような声を漏らすと、ロアルドロスがそんなチャナガブルを睨みながら唸る。奴からすれば死んでしまった仲間を喰われてしまったという事になる。思うところはあ
るようだ。

そして瑠璃達からすればここで来たか、としか思えない。ついでにいうとタイミング……というより地形的に悪い。

ここは狭い。

崖と森に挟まれた地形をしているため、横幅が狭い。

いや、これでも人が泳ぐだけならば広さはある。だがそこにロアルドロスとチャナガブルまで存在していると狭く感じるのだ。

「どうする？」

「決まっているでしょう。ここは一時撤退するしかありませんよ」

「ちい、仕方ないね……選択肢はそれしかないか……！」

こんな狭い水中で二頭同時相手など危険すぎる。ならば体勢を立て直すという意味でも撤退しか道はない。幸いチャナガブルの吸い込みから逃れるため、エリア4側へと逃げていた事もあり、すぐに撤退する事は可能だ。

後はそれをあの二頭が見逃してくれるかどうかだ。

「グバアアアツ！」

チャナガブルが威嚇するように大きく口を開けながら体を震わせる。
る。

「ギユオオオオツ！」

舐められないようにとロアルドロスもまた威嚇するように吼えた。

お互いの意識はそれぞれの敵へと向けられた今が好機。三人は静かに後ろへと立ち泳ぎをしていき、機を見て一気にドルフィンでエリア4へと移動していく。

残された二頭は威嚇を繰り返した後、ロアルドロスがチャナガブルへと一気に突進していき、チャナガブルがまた大きく口を開けて迎え撃った。

轟つ、と強い水流と衝撃が発生したが、すでにエリアにいない三人は強い気と気がぶつかり合っているとしたか判別できないのだった。

灯魚竜と水獣（前書き）

乱入してきたチャナガブルにより一時撤退した三人。休息を挟み、そして獲物がやってくる。

水没林クエスト決着編。

灯魚竜と水獣

エリア4へと撤退していった三人はすぐに陸上へと上がり、バイザーとマスクを取って軽く頭を振って水気を取る。加えて炎を発生させて下がった体温を一時的にでも戻していく事にする。
さて、どうするか。

エリア5からは時折あの二頭の気配がぶつかり合っているような気がするが、詳しい事まではわからない。だがあの二頭がお互い潰し合ってくれるならばそれはそれでいい。
それによって負傷してくれるならば僥倖だ。

「やれやれ、どうすんのよ？」

火竜剣【火燐】に砥石を使いながら瑠璃が言う。同じように茉莉と桐音も己の武器に砥石を使って切れ味を戻していきながら、先ほどの戦いについて思い返していった。

水中での戦いはやはり陸上と違って勝手が違う。ルドロスといえども水中で数で攻められてはやり辛いことこの上ない。

陸上では楽に倒せる相手でも、水中ではそうではなくなる。

「どちらも水中で戦う事を主としているけど、それは一頭を相手にする場合。二頭揃えばめんどろです。エリアの地形云々の話だけではないです、文字通りめんどろです。……やはりどっちかを待って打って出るしかないでしょう」

「さっさと殺るならロアルから相手にした方がいいと思うけど、チヤナもチヤナでめんどろな相手だ。……そこで提案したいんだけど
な」

「聞きましょう」

「ロアルとチャナ、どっちかと戦うんじゃない、戦力を分散させるってのはどうだい？」

「……二人と一人でそれぞれに当たるって事？」

「そうさ」

要は瑠璃と茉莉、そして桐音にわかれてあの二頭と戦っていくという事になる。陸上ならまだしも水中で一人で戦うというのは危険ではないだろうか。水中装備があるとはいえ、勝手が違う世界での一人の戦いは厳しいのではないかと言うのが二人の見解だ。

味方がいた方がまだ戦えるはずだ。効率で言えばもしかすると分散させた方がいいのかもしれないが、安全に行くならば一緒にいた方がいいだろう。

「あたしは反対。纏まって動いた方がもしもの時に備えられるわ」

「普通ならばそれでもいいでしょうが、今回は水中です。分散しない方がよろしいかと思えます」

「……やっぱりそうなるか。残念だねえ」

軽く頭を掻きながらさつきまで泳いでいた大河を見やる。さつきまでと違って大河は静かなものであり、隣のエリアで戦っていたのが嘘みたいだ。

そこにあるのは穏やかな自然。しかし戦士が入り込めば、ひとたび戦場へと姿を変える。

人族にとっては苦行な場となる戦場は、今はただ静寂な空間となっている。

切れ味が戻ったヘビィディバイドを確認し、それを背負うとエリアの方へと気を向ける。相変わらずあちらの方は盛り上がったいるようだ。あの戦場に入れないのが少し残念でならない。

「……戦闘狂って、本当にめんどろね」

「どうして戦いが好きな人って多いんでしょうね」

「この世が狩猟世界だからじゃないの？ 狩るか狩られるか、弱肉強食の戦いの世界。……そりゃその道にのめり込んだら戦いが好きになるだろうし、ひどくなれば戦闘狂になってしまっわよ」

「……本当に困ったものですね」

とはいえ二人の母親もまた若干戦いを好んでいる節があるように思える。それが今も彼女を現役たらしめる原動力になっているのかもしれない。それにあの兄も戦いは好きな方だし、あの特別れた金髪青年もまた己の性の通り戦いを好んでいる。

戦いそのものを好むのか、強敵と戦えることを喜びとするのか、と少しの差異はあるが、それでも彼らが戦闘狂という事には変わりはないだろう。

だからといって責めるつもりもない。何が好きなかは人それぞれなのだから。

武器の切れ味も戻したところでこれからどうするかという相談を始めるとしてよう。

「さて、今はあの二頭が分散してくれるまで体を休めましょう。こんがり肉でも食べますか？」

「そうね。一つ腹ごしらえが必要だね。じゃ、あたしは山菜でも用意してくるから、そっちはよろしく」

「ん。桐音さんはどうします？」

「じゃ、あたいは魚でも捕ってくるか」

またバイザーとマスクをつけて軽く体をほぐすように動かすと躊躇いなく大河の中へと飛び込んでいく。その手に武器はないが、薄く気を練り上げていたところを見るとそれで武器を顕現させるつもりだろう。

それを見送ると瑠璃も山菜を求めて森の中へと入っていく。茉莉も肉焼きセットを用意し、生肉を取り出してセット。塩コショウに香辛料を用意すると軽く指先から火を出して準備完了。

いい感じに焼けてきたのを感じながらも、茉莉は気をエリア5へと向け続けている。現在は休息中ではあるが、それでも隣のエリアに存在している二頭が動いたのか動いていないのかを感じ取らなければならぬ。

そうしなければ奇襲を受ける。それを受ければまた戦線が崩壊。再び体勢を立て直す為に撤退しなければならぬ。それは避けなければ。

「……まずは一つ、と」

タイミングよく肉を上げるとそこにはジューシーに焼けたこんがり肉が存在している。肉汁が滴り落ち、アクセントとして振りかけた塩コショウに香辛料が程よく存在している。

それを用意していた皿に乗せ、もう一つ生肉をセットして焼いていく。

そうして食事の準備を進めていくのだった。

目の前にいるチャナガブルへと突撃していくロアルドロス。チャナガブルの上を取り、その背中へと押し掛かるかのように頭突きを

していく。ロアルドروسの重量がそのまま力となって襲い掛かり、チャナガブルが小さくうめき声を漏らす。するりと滑るように川底を泳ぎ、尻尾を振るってロアルドロスに反撃。

尻尾には麻痺毒が含まれており、背後から襲ってきた敵にも対応している。ロアルドروسはそれを避け、振り返ろうとしているチャナガブルへと何かを吐き出した。

それは白い粘液みたいな塊。振り向いてきたチャナガブルの顔面を捉え、粘液はその顔へと張り付いてしまう。

「グバアアツ!？」

付着したそのねばねばしたものにチャナガブルがかぶりを振って振り払おうとするも、それはしつかりと顔に張り付いて離れる事がない。それに戸惑うチャナガブルへと叩き落とすように尻尾を振るうが、それを察知したチャナガブルが飛び退くように背後へと下がり、ロアルドロスから距離を取る。

その際に額から伸びる提灯が微かに明滅すると、強い光が辺りを多い尽くしてしまう。

「……ッ!？」

発生した光に息を呑む間もなく、目を焼くそれに瞳を閉じてしまう。ハンターが投げる閃光玉と同じ力を持つその光こそ灯魚竜と呼ばれる所以。水草のようなひげを砂の下から出して揺らし、獲物を誘うだけでなく、この提灯を出して獲物を待つ場合もある。

獲物が近づいてきた時、この提灯から強い光を発生させて獲物を混乱させ、一気に丸呑みしてしまう。また捕食だけでなく身を守るためにも使われ、敵の視界を潰してその隙に逃げるか反撃に転じるのだ。

そう、今のよう。

「ギユルオ……!?!」

何とか薄目を開けてチャナガブルの姿を探したロアルドロスの視界には、既に奴の姿はない。逃げたのか、とロアルドロスが唸りながら辺りを見回してみるが、チャナガブルは逃げを選択したのではない。

僅かにロアルドロスの近くの砂が動き、辺りを警戒しているロアルドロスの側面から喰らいつく。何とか反応したらしいロアルドロスだが、左肩を噛まれてしまい、少しバランスを崩してしまう。

しかしそれでも喰らいついてくるチャナガブルへとあの粘液を吐きだし、その顔へとまた付着させていった。目に張り付くその粘液に視界を潰され、チャナガブルはまたかぶりを振ってしまい、それによって肩に喰らいついていた口を離してしまった。

それを見計らって体を捻り、しなりを利かせた尻尾でチャナガブルの側面から叩きつけ、更に返すようにして顎をかちあげるように叩きつける。その連続攻撃にたまらずチャナガブルが悲鳴を漏らし、そこを逃さないようにロアルドロスが追撃を仕掛けていく。

だがチャナガブルとてただやられてばかりではなかった。

「グッ!」

身を守るかのように体を丸め始めたのだ。いや、ただ体を丸めるのではない、そのまま前転するかのような勢いだ。そしてロアルドロスの方へと背中が向いた瞬間、その背中から鋭い針が飛び出してきたのだ。

それは追撃を仕掛けようとしたロアルドロスの体へと突き刺さっていき、その針の多さと鋭さによって逆にロアルドロスが悲鳴を上げてチャナガブルから離れてしまった。

加えて前転した事で背中が続くように尻尾がロアルドロスの頭を

捉え、叩き落とされる。

その衝撃はロアルドロスよりも劣っているが、針によるダメージがあったロアルドロスは防御もなく攻撃を受けてしまった。

しかしチャナガブルも顔に粘液が付着したままのため前がよく見えていない。そのため追撃をしかけることなく、すぐに砂の中へと潜り込んでしまう。

ロアルドロスが顔を上げた時には既にチャナガブルの姿はなく、それだけでなく奴の気配もなくなっていた。

「グルルルル……」

小さく唸りながら辺りを一度見まわしてみるも、どうあってもチャナガブルの気配は捉えられなかった。離れた所で様子を窺っていたルドロス達が合流し、周りに浮き、沈んでいる死体達を見回すと、ロアルドロスは生き残ったルドロス達を率いて川の奥へと消えていく。

後には静けさが戻りつつある大河が残るが、そこには死体と血が浮かぶ光景へと変貌していた。

茉莉が焼いた肉、瑠璃が採ってきたキノコや果物、野草をはじめとする山菜、桐音が捕まえてきた川魚と簡単な食事の用意が出来る
と、手を合わせて早速いただいでいく。

小腹がすいた今、これらだけでも十分なエネルギー源となつてくれる。

捕ってきた川魚は塩焼きにされ、ほくほくとした身に塩が効いているため普通に食べられるのがいい。山菜に關しても瑠璃がきつちり食べられる物を見分けて採ってきたため安全だ。

それを食べ終え、ドリンクを飲み終えて一息ついた時、桐音のセンサーが一つの気配を捉える。しかしそれはかなり小さな物。気を配っていたとしても捉えきれないものは捉えきれない、という程にまで抑えられた気配。

それは川底を静かに移動しており、三人がいるという事は気づいているのかいないのかはわからない。だがそれはゆつたりと川底を進んでいき、やがて停止した。

「……どうやら来たようだぜ？　これほどまで抑えられた気配、来たのはチャナのようだな」

「チャナガブル、か。ちよつとめんどうだけど、来たからにはやらないといけないか」

食事を片付けるとナルガヘルムに付けているバイザーをおろし、懐からマスクを取り出して装着する。鞘に収めている火竜劍【火燐】を確認し、桐音と共に水中へと静かに身を沈ませる。

それに続くように茉莉が大河に入り、三人はゆつくりと川底へと向かっていく。

先ほどと変わらず、大河は穏やかな雰囲気を保っている。だがここにはチャナガブルが潜んでいる。一見すればこのどこかにチャナガブルが潜んでいるなんてわからないだろう。

實際視覚的にはどこに潜んでいるのか全く分からない。恐らくひげを砂の中から出しているのだろうが、どれがそのひげなのかかわらない。

ならば気配を探るしかない。

視線を巡らせ、気配を探ってみたところ数十メートル離れた所にいる事が判明した。こちらは位置を確認したが、あちらからはまだ気づいていないらしい。

「どつする？」

「……気づいていないなら、一つ提案があります」

「何？　なんか思いついた？」

「ええ。一度陸に上がりましょう」

「ん？　なんだい、上がるのかい？」

背中にあるヘビィディバイドに手をかけていた桐音が少し残念そうな声を漏らす。出鼻をくじかれたことに不満があるようだが、一応茉莉の提案を聞く気はあるようで、大人しく上へと上がっていった。

陸に上がった瑠璃と桐音は先にかかるうと声を掛けた茉莉に振り返る。先が上がっていったはずの彼女は何故か浅い場所を泳ぎ、何かを探しているかのようなだった。やがて彼女は何かを見つけたようで、手を伸ばしてそれを捕まえる。

そのまま陸へと上がると、バイザーとマスクを取ってポーチから長い棒を取り出していく。その先には糸と針があり、先ほど捕まえたものをその針に繋ぐ。

そう、その棒は釣竿だ。餌にするものを針に取り付けるだけで魚や魚竜種を釣り上げる事を可能としている。

その様子を見守っていた瑠璃はなるほど小さく頷いた。

「釣りカエル、か。確か凶鑑によればチャナはカエルが好物だったわね」

「ああ、なるほど。それで釣り上げてやるうってことかい。そしてそのまま陸上で仕留めていこうって魂胆ってわけだ」

「正解です。ただ水中で戦うよりはマシかと思ひましてね。あちら

もまだ私達に気づいていなかったようなので、この機を生かそうかと」

薄く微笑しながらカエルを大河に放り込み、その場へと座り込んだ。そんな茉莉を見ていた瑠璃は同じくカエルを探し始める。それに桐音も続き、それぞれ一匹ずつカエルを捕まえると、同じように釣竿を用意して針にカエルを取り付けると大河の中へと放り込む。後はこのカエルにチャナガブルが喰らいつくのを待つのみだ。その時までにはこうして文字通り座して待つのみ。

「……………」

誰も口を開く事はない。吹き抜ける風に身を任せているその様子は、まるで自然と一体になったかのようだ。

それが釣り。

獲物がかかるまでただ自然と一体になって待ち続ける。心を揺らさず、明鏡止水の心で静かにその時を待ち続ける。

「……………んー」

不意に桐音があぐらを少し解き、とんとんと膝を右手の指で叩き始めてしまう。どうやら集中力が途切れ始めたようだ。何となく察してはいたが、やはりというべきかじつと待つという事は性に合わないらしい。

ポーチの中からドリンクを用意すると、軽く口を含んで一息つく。少しだけ大河から離れ、ぬかるんでいない場所まで下がるところと横になってしまった。その様子をちらりと肩越しに確認した二人はすぐに視線を大河へと戻し、小さく揺れる水面を眺めるだけだ。桐音と同じく傍らにドリンクを用意し、それから数十分の間はこうして過ごす事になった。

「……む？」

そうして待ち続けた甲斐があり、不意に瑠璃の釣竿が揺れ始めた。それに気づいた茉莉が声を上げ、瑠璃もまた揺れる釣竿を見て反応して立ち上がる。

「ふっ、んんっ！」

リールを巻き、時折引つ張りながら少しずつ獲物を引き寄せていくと、水面に大きな影が浮かび始めた。それが見え始めたからと言って焦る事はない。焦って功を逃してしまえば奴は水中に留まったままになってしまふ。

だから瑠璃は焦ることなく着実に奴を釣り上げていった。

やがて勝負を決するタイミングを見つけた瑠璃はぐいつと釣竿を引き上げ、その力に従ってついに奴の姿が水上へと上げられてしまった。

「グボアアアアアアアアッ!?」

悲鳴を上げながら釣り針にひっかけられた口を広げたままチャナガブルは陸へと強制的にダイブしてしまう事になる。離れた所で寝転がっていた桐音もいつの間にか起き上って戦闘態勢に入っており、じたばたともがき続けているチャナガブルへと接近していた。

「はっ！」

抜き放ったヘビィディバイドを振り下ろし、横薙ぎに払いつつ剣モードへと切り替えて頭を殴り飛ばしてやる。そうして攻撃していく桐音に合流するように、瑠璃と茉莉も各々武器を抜いてチャナガ

ブルへと向かっていく。

「ふんっ！」

側面を通り抜けながら抜いた火竜剣【火燐】で腹を薙ぎ払っていき、切り裂かれた部分に追い打ちをかけるようにシャドウジャベリン改を突き出していく。傷ついた部分に毒を含んだ刃が突き入れられた痛みは相当の物だろう。

チャナガブルの声に悲痛な響きを感じられる。

だが攻撃の手はやめない。見ればその体は今傷ついた部分だけでなく、打撲と思われる傷があるし、顔にも何かが付着していた跡が見られる。

恐らくそれはロアルドロスとの戦闘痕だろう。これによって体力が減っているならば僥倖。その好機を逃さない訳にもいかない。

「グバアアアアアッ！」

しかしチャナガブルとただ大人しくやられ続けるわけでもない。ようやく体勢を立て直したチャナガブルはまず背中にある針を一斉に逆立てると側面にいる茉莉達を押し潰すかのように横に転がり始めた。

動きを察知した茉莉は盾を構えながら後ろへと下がるも、若干針が盾を掠めていくのを感じた。察知するのが遅れていれば針に貫かれながら押し潰されていただろう。その未来はひやりとするが、予備動作さえ見えていればなんてことはない。

「しっ、はあっ！」

転がり終えたところにすかさず両手で構えて高速の突きをお見舞いしていき、次々と毒を注入。背後から向こう側へと回り込んだ瑠

璃も火竜剣【火燐】を振るってダメージを与え、チャナガブルの正面を位置取った桐音はやはり剣モードにしたヘビィディバイドでその頭に刺激を与えていく。

完全に嵌った。

ガノトトスと違い、チャナガブルはほぼ魚に近い状態のために陸上ではこうして攻撃しやすい相手になる。一応四足のような小さなひれは持っているが、あくまでこれはおまけのようなもの。

陸上で歩く事は出来るが、奴の本領はやはり水中。陸上はほとんどの場合つられた魚のようにいいようにされ続けるだけだ。

「グボツ、グボツ！」

顔を振りながら抵抗し、目の前にいる桐音へとその大きな口を開けて噛みついていくが、冷静に見切つて躲し、カウンターを当てるように振り回したヘビィディバイドを叩き込む。

それは一方的な攻撃。

奴の領域から引きはがし、自分達の領域へと強制的に落とすだけで後は彼女達の実力の分だけの戦いとなる。いや、それはもはや戦いと呼べるものではないだろう。一方通行の戦いはもはや戦いと呼べない。

だから桐音はほとんど無表情に近いものでヘビィディバイドを機械的に振るっていた。

それでも小さな変化を見逃さないだけの意識はあった。目の前で揺れている提灯が微かに点滅し始めたのに気付くと、一旦距離を取りながら目を閉じる。

「閃光するぞ！」

同時に一言叫び、二人に注意を促してやる。

二人もまた目を閉じた瞬間、辺りを包み込む強い閃光が発生する。

ハンターが使用する閃光玉と同じ効果を持つ強い光は当然ハンターにも飛竜達にも通用する。これを使うチャナガブルにとっては意味のないものであるため、閃光玉は通用しない。
奴の足を止める方法はスタンか罠のみだ。

「グル、グツグ……」

三人が目を閉じたので攻撃の手がとまったのを感じてチャナガブルは転進し、大河に向かって走り出す。このまま陸上に留まれば身の危険が及び続ける事は奴にもわかつている。

そのため自分の領土である大河へと戻ろうという選択は間違っていない。
しかし相手が悪かった。

「……っ、そこですね！」

目を閉じながらも気配を辿ればどこにいるかぐらいはわかる程に成長した二人だ。茉莉が左手を伸ばして気を込めると、逃げるチャナガブルの前方を塞ぐように炎の壁が発生した。

「グボツ……!?!」

突如発生した炎に思わずチャナガブルは足を止めてしまう。それを狙って瑠璃は火竜剣【火燐】を薙ぐように振るい、刃から赤い気刃がチャナガブルへと向かっていく。

目を閉じているはずなのに狙いは正確だ。気刃は足を止めてしまっているチャナガブルの提灯へと向かっていき、額と提灯を繋ぐものを切断してしまう。

灯魚竜という代名詞である提灯を失いながらも、チャナガブルは何とか炎の壁を抜けて大河へと飛び込んでいく。

高い水音を立てて大河の中へと消えていくのを感じながら、閃光の影響で目を閉じていても少し闇の中でちかちかするのが収まっていき、ゆっくりと瞳を開けて大河を見つめる。

もう一度バイザーを下ろし、マスクをつけて準備完了すると逃げていったチャナガブルを追うように大河の中へと飛び込む。

ここで逃がすわけにはいかない。

陸上でのダメージは通用しているし、ヘビィデイバイドで十分に頭を揺らしてきたのだ。もう少しダメージを与えればスタン状態へと落とす事が出来るだろう。

このまま見逃し、泳がせ続けるのは愚策。奴の領域である水中だろうとも恐れず飛び込んでいく。

「グボボ……」

自分の後を追って飛び込んできた瑠璃達の水音に気づき、チャナガブルが振り返る。三人を順次に確認した奴は小さく唸り、体を震わせながらぱくぱくと口を開閉させる。

「グビィィィイツ！」

最後に大きく口を開けて威嚇すると同時に体を大きく膨らませ始めた。それに従って背中 of 針が逆立ち、それが引っ込まなくなってしまう。

これがチャナガブルが怒り状態へと移行した姿だ。少し平べったい体は背中が膨らんだことで楕円形に近くなり、針が常時出ている為、背中から攻めづらくなってくる。

それだけではなく、背中が膨らむことで強度が増している事も忘れてはならない。こういう場合、陸上ならば出来ない事が水中では可能になる。

それは下から攻める事だ。

水中は川底へと行かなければ上下左右と動き回る事が出来る。相手が川底へと行かなければ相手の下を取る事が可能なのだ。陸上ならば相手を斬る際に背中当たって弾かれそうになる可能性があるが、水中は上から、背後から攻めなければそれがなくなる。

さあ、いつ斬りこもうかと三人が様子を窺っていた時、チャナガブルは一気に川底へと沈んでいった。そのまま停滞する事なく、体を震わせて砂を掻き分けながらその中へと入っていき、砂と一体化してしまった。

そのまま逃げてしまうのかと思ったが気配は消えない。ゆっくりと川底を移動し始めたではないか。このまま固まっているといい標的になってしまっただろう。自然と三人は分散し、川底を見やりながら警戒する。

「グバアアアアアアアッ！！」

標的は桐音だった。突如川底から勢いよく飛び出し、その大きな口で桐音を丸呑みにしようとしてきた。それは普段なら十分奇襲になっていただろう。そうやって魚の群れを一気に丸呑みする攻撃なんだろうが、残念ながら位置や動きが気配で読める桐音達には通用しなかった。

「ふっ！」

ほんっ、と空気が弾ける音を響かせながら後方へと回転してその飛び出しから回避しつつ、更に回転した足から更に気の刃を放ちながらチャナガブルへと攻撃する事も忘れない。

気刃は上へと上がっていくチャナガブルの体と尻尾に命中し、それによって傷つきながらもチャナガブルは水上へと一旦上がり、激しい水音を立てながら水中へと帰ってくる。

背中から帰ってきたチャナガブルはすぐに体を回転させて体勢を

建て直し、我先にと向かってきた瑠璃を見やって噛みつきにかかった。

「ちっ……」

陸上ではこの状況でも慌てずに翼と身体能力を使ってクイックターンが出来るのだが、水中ではそれも出来なかった。広げている火竜剣【火燐】を一度ロングソードの形態へと閉じ、刃を口内へと突き入れるようにしながら一気に突き出す。

その際に気を送り込み、内包されている炎の力を膨らませる事で完全に口を閉じて火竜剣【火燐】を噛み千切る事がないようにした。実際突き出された火竜剣【火燐】を噛み千切ろうとしたチャナガブルはその熱さに思わず口を閉じずに開いてしまう。

「はっ！」

その隙を逃さずに火竜剣【火燐】を振り上げて顔を斬り、更に踏み込みながらも側面を位置取りつつ薙ぐ。そうやって気を引いている間に茉莉がチャナガブルの下へと潜り込み、がら空きになっている腹へと力強く抉り込むようにシャドウジャベリン改を突き出す。

何度かそれを繰り返すと、チャナガブルの腹の一部が変色し始める。既に送り込んでいた毒の影響もあり、ついにチャナガブルを毒状態へと貶める事が出来た。

「グボアツ!？」

体を巡る毒の痛みにはチャナガブルが溜まらず呻き声を漏らしてしまった。そうして生まれた隙について桐音が一気に距離を詰めながら剣モードにしているヘビィディバイドを構え、溜めこんだ力を解放するように一気に球体を叩き込む。

ずんつ、と強くチャナガブルの顔が沈み、口元はだらしく開かれたままでその体がぴくぴくと痙攣し始めた。どうやらついにスタン状態へと落としてしまったようだ。

「一気に決めさせてもらう！」

強く振り下ろした事で勢いを殺さずに前転してしまった桐音はそのままチャナガブルの顎下まで沈んでいき、強く水を蹴って距離を詰めながらヘビィディバイドを突き出す。指は引き金へと当てられており、それを引き絞ればビンから粒子が一気に放出されて先端へと収束していく。

その度にヘビィディバイドは揺れ、しかし桐音の力によってしっかりと抑えられることで暴走する事はない。接触している顎に粒子の力がぶつけられる事で連続してダメージが与えられ、同時に凄まじい力が高められていく。

「破ッ！！」

臨界点を突破した瞬間、凄まじい爆発音を響かせてそれは弾け跳ぶ。黄緑色の粒子が爆発し、それはチャナガブルの顎に衝撃を与えて肉を抉り飛ばしてしまった。少し濁った水に細かな肉と赤い血が混ざりあい、スタン状態に陥っていたチャナガブルもたまらず激しい悲鳴を漏らしながらもがき始めた。

一方桐音は強い反動のせいで少しノックバックしながらもヘビィディバイドが持っていけないように両手で支えながら体勢を立て直す。スラッシュアックスの最大攻撃であるあのギミックを使用すると、強い反動と共に強制的に剣モードから斧モードへと切り替わる。

その反動はかなり強く、水中では抑えこまなければそのまま手から離れて吹き飛んでしまいかねない程だ。そしてその反動があるか

からこそ武器が痛み、連発する事は出来ない。

もちろん出来る事は出来るが、それは武器に無理させている事に同義だ。スラッシュアックスをメインとしているならば、長く使っていくためにも休ませてやらなければならない。

しかし桐音にとってヘビィディバイドはサブウエポンでしかない。好機ならばそれを逃さずに畳みかけていく。

「ふんっ、はあっ！」

抑えこんだヘビィディバイドをぎゅっ握りしめ、また水を蹴つてもがいているチャナガブルへと距離を詰めながら今も出血を続けている顎を薙ぎ払い、更に突き出して追い打ちをかけていく。

そうして攻撃を仕掛けながらガシャン、と剣モードへと切り替え、そう時間も経たない内からまた引き金を引いて粒子を先端へと集めていった。

「……ちっ、足りないな」

が、途中で何かに気づき、引き金から指を離して粒子の収束を止める。視線の先にはピンが内蔵されている部分の近くがある。そこにはちよつとしたギミックがあり、柄から若干突き出ている部分が存在している。それは時間の経過と共に動く仕組みになっており、それは剣モードの限界時間を示している。

剣モードはスラッシュアックスを巡っている粒子の残量によって決まり、一定の量を下回れば変形不可能になっているのだ。

そして今、ヘビィディバイドの剣モードの限界時間はもうギリギリの状態だ。このまま解放まで持っていきたいところだが、今まで経験の思い返して時間を逆算すると、解放する前に強制的に切り替わりそうだという事がわかった。

なので途中で引き金を離し、斧モードへと切り替えながら顎を穿

つよに斬り上げつつ背後に下がる。すると離れていく桐音を追うかのように数度噛みつきにかかり、続けて前転して押し潰しながら針で貫こうとする。

しかしやはりそれを見切り、強く水を蹴りながら気の後押しもあってその範囲外へと逃げていく。そうやって桐音へと意識を向けていた事もあり、背後から追いかけていく瑠璃と茉莉には気づいていなかった。

「炎剣」

「魔槍」

十分に力を溜め、それぞれの武器へと己の気を纏わせた二人は足から気を放出させて一気に水中を弾丸のように突き抜けていく。硬くなっている背中をもともしないかのように二人は一気に得物の力を解放させた。

「翼雑撃！」
よくていげき

「気衝貫！」
きしゅうかん

背中を一気に雑く強い剣の衝撃。剣による鋭い一撃、その中から噴き出す強い灼熱の炎。硬くなっている背中を針もろとも切り裂いていき、その肉を内外問わずに焼き尽くす。そうして刻まれた傷を更に貫く茉莉の一撃。

シャドウジャベリン改の刃だけでなく刃の先に顕現させた気の刃をも含めて一気にチャナガブルの体内へと抉り込んでやる。水中であるうとも、気の放出によって推進力を得た事で茉莉の進撃は陸上で、いや、翼を使つての滑空速度に近い程までの速さとなった。

その上での貫く事だけに集中されたその一撃は一気に背中から腹近くまで抉り込まれ、内臓をも貫通してしまう程の威力を發揮した。

「グガ、ガガガ……ッ!？」

惜しむべきはそれが心臓ではなかった事だろうか。心臓を貫く一撃ならばこれで終わらせていただろうが、それが非常に残念だ。しかしそれでもこの二撃がチャナガブルにとって厳しい攻撃だったことは間違いない。

「グボツ、グゴゴ……ゴオオツ！」

体だけでなく尻尾も震わせながら追撃を仕掛けてくる茉莉と瑠璃を振り払い、何とか陸上へと逃げていった。まさかの逃げた先が陸上という事に驚きはしたが、ここで逃がすわけにもいかない。

すぐに陸へと上がったが、チャナガブルはよたよたとした動きながらも素早く走り去り、エリア3へと逃げていったのだ。あの短いひれのような足でよくあそこまで速く動けるものだ、と思わないでもないが、まんまと逃がしてしまった事に瑠璃と桐音がマスクの下で軽く舌打ちする。

「エリア3に逃げたという事は……恐らくそこから北へと進んでエリア8に向かっているのではないでしょうかね」

「エリア8……なるほど、ここは奴らにとっての休息地。体力回復を狙っているわけね」

「じゃあ先回りした方がいいんじゃないか？ 確かエリア1からそのエリア8へと行けるんだろう？ ここからエリア7に上がり、すぐに1へ、それから8って進むって具合にさ」

「ですね。森を走り抜ける事になりますが、問題ないでしょうか？」
「当然」

バイザーを上げ、マスクを一旦取りながら三人は一気に走り出す。その際に茉莉が瑠璃が斬り落としたチャナガブルの提灯を取り、

ポーチの中へと入れるという抜け目なさが光る。

エリア7へと繋がる坂を駆けあげれば、その先にはちよつとした林の広場が存在している。ブルファンゴが数匹鼻を鳴らして歩き回っていたようだが、彼らが三人に気づいて地面を擦り始める頃には既に左折してエリア1へと駆け下りている所だった。

それほどまでに疾く駆け抜けるのは、チャナガブルが眠り始める前にエリア8に到達しようという意志の表れである。

大型のモンスターは休息、それも眠ることによって傷を癒す力を高める存在だ。当然体力も少しずつ回復させていき、数分もすればまた十分に暴れられるだけの体力を取り戻す事もざらではない。

それが人族とモンスターとの大きな差だ。

とはいえそんな彼らの高い生命力を引き継いでいるのが一部の魔族なのだが、これは今は置いておくとしよう。

坂を下りてエリア1へと戻ってくると、右手にあるちよつとした段差の方へと進んでいく。こちらもまた一つの森となっているが、その中に小道になっている部分があるのだ。その先に洞窟の入り口があり、それがエリア8となっている。

小道を見つけると段差に手を付けて一気に跳躍して飛び乗り、体勢を崩すことなくまた駆け抜けていく。するとすぐに小さな洞窟の入り口が見えてきた。

その中へと飛び込むと、右手が大きな崖になっている洞窟内部へとやってくることになる。

天井や壁からは鍾乳洞が生え、眼下には青く透き通った地底湖が広がっている。崖の下がすぐに地底湖になっているわけではなく、小さな凹凸がある硬い地面の陸部分が洞窟のおよそ三分の一ぐらいの比率になっているようだ。

残りが全て地底湖であり、ここから対角線状の向こうにはエリア6へと繋がっている。そしてチャナガブルがやってくるであろう道はここから右手の深部の水の道だろう。ここはチャナガブルらが利用する道であり、人の身では例えば水中装備をつけていたとしてもな

かなか抜けられない道となっている。

何はともあれチャナガブルはまだ来ていないようだ。

しかし、ここには先客がいたのだ。

「……ロアル、か」

地底湖前の陸地の片隅にロアルドロスが丸くなって眠っている。周りには数匹のルドロスが寄り添っており、同じように眠っているのだ。あの後一体どこにいつてしまったのかと思ったら、こんな所で眠っていたとは。

「もう少ししたらチャナが合流するだろうな。その前に仕留める……若干厳しいか」

「頭か心臓を狙ってやれば可能でしょうが……はてさて」

「可能性があるならやるしかないんじゃない？ 今なら奇襲を仕掛けられるんだし」

そう呟きながら瑠璃が畳まれている背中の翼を静かに広げていく。自分達ならば他のハンター達と違い完全に頭上を取っての奇襲が可能だ。くいつと道の先を示し、そこから飛び降りつつの頭上からの一撃をお見舞いする事が出来れば一撃必殺が成立するだろう。

瑠璃の視線はそう語っている。

ならば早いところ済ませた方がいいと、瑠璃と茉莉は揃って道を小走りに進んでいく。この道は洞窟の上に存在し、抜けた先にはエリア9の深い森の小道に出てくる事になる。

その出口付近まで来ると、茉莉がシャドウジャベリン改を抜きつつ刃の先に気を収束させていき、そつと崖の下を覗き見る。そこには相変わらず眠っているロアルドロス達がいる。まだ自分達に気づいた様子はない。

桐音の方を見れば、彼女は崖の上で静かに二人の様子を見守るだ

けだ。彼女が飛び降りれば小さなもの音を立てる事になるため、あそこで待機する事になっている。

「っー」

茉莉が翼を広げて飛び出し、一気に引いたシャドウジャベリン改をロアルドロスの脳天めがけて投擲。空を切って狙い狂わずロアルドロスの頭へと向かっていく矛先が奴の頭を貫くと誰もが疑わなかったその一撃。

だがロアルドロスは何かに気づいたように顔を動かし、刃はそのままたてがみと右目を貫くだけに留まった。

「ツツツ　　!?」

九死に一生を得たロアルドロスではあるが、その痛みにたまらず声にならない悲鳴を上げ、それは洞窟の中に響き渡っていく。

「なっ……気づいた!？」

「……いえ、私の攻撃に気づいたというより、あれが来る気配に気づいたというべきでしょう。戻れ」
カムバック

投擲したシャドウジャベリン改を戻すコードを呟きつつ、視線は地底湖の先を見据えている。その先にいるものに桐音も気づいたらしく、立ち上がって壁と聳え立つ岩を交互に飛び移りながら下りていき、バイザーを下ろしていた。

ロアルドロスはこのエリアにやって来たチャナガブルに気づいて目を覚ましたのだ。気配は隠されていても、奴が負傷したことで漏らしている血の匂いにも気づいたのだろうか。それが奴の命を繋ぐ要素になってしまった。

しかしそれも持って数分の命。

瑠璃も火竜剣【火燐】を鞘から抜きながら飛び出し、翼を畳んで一気に滑空しながら火竜剣【火燐】を構える。母親の花梨、姉の撫子直伝の高速滑空からの奇襲。

「ギョルルツ!？」

気づいた時にはもう遅い。間合いまで入ってきた瑠璃が振りかぶった火竜剣【火燐】の一撃はロアルドロスのたてがみもろとも首を切り裂き、頬、顎と袈裟斬りにしていった。

頸動脈を斬られたことで一気に血が噴き出し、黄色いたてがみを赤く染め上げていく。それだけでなく地面も赤い液体をぶちまけ、悲鳴を上げながらたたたらを踏んでしまったところで茉莉からの追い打ちが仕掛けられる。潰された右目からも血を流し、残った左目で見上げた先には、無表情に自分を見下ろしながらも一気に距離を詰めてくる少女の姿。

その刃が視界いっぱいを覆い尽くしたのが、ロアルドロスが最後に見た光景だった。

「ギョル、ギョルルツ!？」

額からシャドウジャベリン改を生やし、力なく倒れ伏すロアルドロスを見て残ったロドロス達が慌てふためくように叫び声を上げる。そんなロドロス達を離れた所で着地した瑠璃が火竜剣【火燐】を軽く振って「散りなさい」と一言告げながら威嚇するように殺気を放つ。

それにあてられ、茉莉もシャドウジャベリン改をロアルドロスから抜き、回転させて血を払いながら軽く視線を巡らせる。それだけでロドロス達は数歩下がり、次々に地底湖へと飛び込んで逃げた。

最初の奇襲は失敗したが、こうして一匹は討伐できた。

残されたのはチャナガブルだがあちらはどうだろうか。そう思いながら地底湖の方へと視線を向けると、轟ッ！ と強い衝撃と共に爆発音と水音を炸裂させた瞬間だった。

どうやらヘビィディバイドの粒子爆発を使ったところだったらしい。少して青い地底湖に赤が浮かび上がっていく。

この地底湖は外の大河と違って水が透き通っている為に、ある程度は水中でもバイザーを使わなくても見える状態だ。陸上からでもある程度水中の様子が見える程であり、あそこで一体何が行われているかがわかる。

そして水中から凄まじい殺気と気の高まりを感じた瞬間、瑠璃と茉莉は信じられない光景を見る事になる。

ヘビィディバイドに強い反動がかかって強制的に斧モードへと変形される中、桐音はちらりと陸の方へと視線を向けた。一つの気配が消えていくのを感じたのだ。

(ロアルは死んだか。だったらあたかも終わらせてやるか)

粒子爆発によって額が抉れ、大量に血を噴き出している中でもチャナガブルはまだ死んでいない。だがもう瀕死状態だ。何とかここまで逃げてきたようだが、最早チャナガブルの命運は尽きていると言ってもいい。

変形が終わり、桐音は水を蹴ってチャナガブルの右側へと回り込みながら陸上を視界に収める。まずは一撃、ヘビィディバイドを突き出し、続けて薙ぎ払うように振りかぶりながら剣モードへと変形。それから一気に腕を引きながら力を溜めていく。

そうする中、マスクの下で小さくその言葉を紡いでいった。

「剛体。轟気、収束。一点突破」

ヘビィディバイドの先端に彼女の気が収束し、球体から突き出されてきた針が引っ込んでただの球体と化す。彼女の気の色なのだろうか、オレンジ色の光がヘビィディバイドを包み込んでいき、凄まじい力と輝きを放っていくではないか。

バイザーの下の碧眼は鋭く細められ、彼女の闘気が高まるにつれてその眼差しに冷たい殺気を宿らせていった。それに気づいたチャナガブルはびくりと体を震わせ、しかし負傷によって動けないでいる。

それはまさに、死刑執行を待つ罪人の如く。

執行人の刃は今、ここに放たれる。

「 剣術が一、王牙！」

そして、それはまさに普通ではありえない光景だった。

水中で放たれたその一撃はチャナガブルの腹を穿ち、それだけでなく先端に収束されていた彼女の気の解放の後押しもあり、チャナガブルの腹に風穴を開けながらその体を陸上へと吹き飛ばしてしまっただ。

「 ガ、バ…… ツツ！？」

攻撃を受けたチャナガブルも何が起こったのか把握できていない。そうしたままチャナガブルは地面に叩きつけられながらその命の灯火を消してしまっただ。

その様子を見ていた瑠璃と茉莉は固まるしか出来ない。

魚竜種の一角であるチャナガブルを吹き飛ばすだけの攻撃をただの人間が出来るというのだろうか？

いや、それを可能にしまった人物を知らない訳ではない。あの人は血統の僅かな後押しと積み重ねた鍛錬によってそれを可能に

してしまい、規格外な人をも驚かせるだけの力を見せつけてくれたわけだが、彼女はただの人間より少しだけ違っていたという背景があった。

それに今桐音がやったのは突き詰めればただの突き。

突きというシンプルな攻撃に己の気を纏わせ、更に自身を強化させて放った一撃だ。

でも、それだけであれを可能にする事が出来るのだろうか。

もしかするとあの草薙桐音という人物もまた、あの人のようにただの人間ではないのかもしれない。

「……仕留めたか」

転がっている死体を確認しながら水中から姿を現した桐音は軽く頭を振ってバイザー上げて二人の下へと歩み寄ってくる。そんな彼女をじっと見つめ、上から下まで値踏みするような視線を向けてしまうのも無理はないだろう。

それに気づいた彼女はやれやれと苦笑を浮かべてしまった。彼女自身もわかっている事らしい。

「なあに、ちょっとばかり本気を出したただだけだぜ？ 言っただろう？

あたいは色々剣を扱っている。……だから剣術を使ったっておかしくないじゃないか。あれはその剣術の一つさ」

「剣術、ねえ。一体どこの流派よ？」

「それは秘密さ。結構マイナーなものでね、言っても知らないだろうからね」

そう言いながら剥ぎ取りナイフを取り出してチャナガブルの死体へと向かっていく。少し気にはなったが、どうせ今回限りの付き合いだろうからとそれからは深く気にしない事にする。

彼女に続いて二人も剥ぎ取りナイフを取り出し、討伐した二頭の

素材を剥ぎ取っていく事にした。

こうしてボルシオ水没林による二頭討伐クエストは成功に終わる。使える素材を十分に剥ぎ取り終わると、真つ直ぐにベースキャンブへと向かってギルドアイルーへと成功の照明弾を放ち、死体回収を頼むと一時間の休憩を経て村へと戻っていったのだった。

灯魚竜と水獣（後書き）

こうして終わりを迎えました。が水中戦というのはやはり難しいですね。

いつもと勝手が違うため、どう書き進めればと悩ませてしまいました。

終わってみれば最終的にはあっけないもの。

三人の特徴を考えてみるとこうなってしまうが、どうやってもこの結末が浮かびます。翼をもっているのにわざわざ崖を降りて向かっていくというのもどうかと思いますし。

これがゲームと違うという事なのですが……今後の課題ですね。

そして最後に桐音が見せた一撃。

二人が浮かんだあの人と重なりますが、さて彼女はいったい何者なんでしょう。

また本当に今回限りの仲間になってしまうのか。

それは次回以降のお楽しみ。

街道開通（前書き）

水没林のクエストが終わった翌日。

封鎖されていた街道が開通され、瑠璃と茉莉は再びユクモ村へと旅立とうとしていた。

今回はその前の一幕。

桐音とはどうなるのか、それは今回で。

街道開通

闇の中に一人の人影があった。その出で立ちには和服を着た剣士という風であり、得物である刀を構えながら闇の中を睨むように視線を一点に向けていた。

その表情は緊張しながらも戦意を失っていない。だが冷や汗を流しており、刀を握りしめている手が若干震えている。彼は恐れているのだ。

目の前にいる人物が何者であるかは知らない。しかしその人物がどういった存在なのかは予測がつく。

「貴様だな？ 巷を騒がせている辻斬りというのは」

その問いかけに答える事はなかった。ただ闇の中でじつと彼を睨み続けているだけらしい。一向に動く気配のないその存在を睨み続けているだけでは何も変わらない。

このままこう着状態になっても状況は変わる事はないだろう。

「ここで死ぬわけにはいかぬ！ 貴様を討ち、この連鎖を終わらせてくれよう！」

「……………」

一瞬で距離を詰め、手にした刀で相手を一太刀で斬り伏せようとしたようだが、刀は空を切る。黒装束を身に包んだ何者かは紙一重でそれを回避し、その手に持つ刀で斬り返してきた。

その素早い斬り返しは彼の胸を薄く斬り、その速さに少し顔をしかめてしまう。だが決定打にはならない。まだ戦いは始まったばかりだと突き、薙ぎ、袈裟斬りと連続して攻め立てていくが、どういうわけか相手はそれを読み切って回避を続けていた。

この暗い闇をものともしない視力。明らかに只者ではない。いや、只者ではないからこそ辻斬りを繰り返してきているのだろう。

ぎりつ、と歯噛みし、しかしすぐに冷静さを取り戻して静かな呼吸を繰り返しながら刀を構えた。地面と水平になるように刀を盾ながら体もそれに倣うようにして右向きへと変えていく。

その構えを見た相手は少しばかり様子を变化させた。どうやらこの構えが何であるかは知っているらしい。

「秘剣　　燕返し！」

それは三つの剣閃を同時に放つ殺人剣術。しかし始祖と違い、完全に同時に放つのではなくほぼ同時に放つ事で確実に相手を仕留める技だ。完全に構え、狙いを定めて放たれたこの技で敵を仕留めただろうと信じて疑わなかった彼ではあるが、その表情が驚きに彩られるのはそう時間がかからなかった。

「な、んだ……と!？」

間合いの中にいるためにそれらが命中しただろうに、しかし全ての剣閃は相手が振るった刃によって弾かれていた。神速に振るわれた刀から放たれた剣閃が三つの剣閃と相殺し、消し去ってしまったのだ。

長い時間をかけて磨き上げ、習得した秘剣すら通用しない。

その事実には彼は放心してしまう。

その隙をつき、敵は素早く攻撃の構えを取った。

まるで鏡合わせのように自分と同じ構えを取っていく敵に驚く間もなく、

「　　秘剣・燕返し」

淡々と放たれた言葉と共に三つの剣閃が彼を捉え、その一瞬の間に彼の命は消え去ってしまった。物言わぬ肉塊と成り果てた一人の剣士を見下ろし、軽く刀を振って鞘へと納めたその人物は小さく溜息をもらす。

そこに在るのは無感情。

高揚感もなければ戦いに勝った喜びもない。

「……つまらない」

本心でそう呟いているのだ。こうして辻斬りを繰り返してはいるが、どの戦いでもこの人物は満たされることはなかった。最初の頃はまだ楽しかった覚えがあるのに、一体いつからだろう。どんな敵でも機械的に得物を振るうようになってしまった。

「でも、ま。いずれ終わる、か。さて、次はどこに行こうかな」

ぼそぼそと呟きながら現れた時と同じように静かに闇の中へと消えていった。

それは、瑠璃達がボルシオ水没林から帰ってきたその日の夜に起こった出来事である。

ボルシオ水没林から帰ってきた翌日、瑠璃と茉莉は宿屋を出て酒場へと向かっていく。扉を開けて中に入ると、すぐに受付嬢が「おはようございます」と声を掛けてきた。

「そんな彼女に近づき、「水没林の街道はどうなってる？」と瑠璃が問うと、

「はい、今朝方問題なしと判断され、街道は解放されていますよ。早くも旅人の皆さんが利用されていますよ」

酒場の客の大半はハンターのみであり、昨日までいた一般客は立ちの準備をしているのかここにはいなくなっていた。そしてハンター達の視線は瑠璃と茉莉に向けられている。

「といつても不躰に見つめる眼差しではなく、ちらちらと様子を窺うかのような視線だ。」

まさか本当にクエストを成功させてしまうとは思わなかったらしい。大層な自信を持ってクエストに望んだはいいが、失敗して戻ってくるんじゃないかと思っていたのがほとんどだったのだろう。

彼女達に出来るなら自分達でも出来たかもしれない、と思うものも中に入るんじゃないだろうか。

しかしそれを表だつて口にする者はいなかった。だからこうしてこそこそと視線を向けるしか出来ない。そんなところだろう。

何はともあれ無事に街道が使えるようになったならば何よりだ。

二人は一つの席に着いてお品書きを手に取り、朝食を注文する事にする。これを食べたならまた次の場所へと移動する予定である。

目的地であるユクモ村はまだまだ先にある。もしあの人達が温泉を利用してゐるならば、あるいは情報がそこにあるならば、と考えるだけでも早いところ向かいたい心境だった。

しばらくして料理が運ばれてき、手を合わせて「いただきます」と口にして食べ始めると、酒場の扉を開けて一人の客が中に入って

くる。ちらりと視線を向けると、そこには一人の女性がいた。

燃えるような炎のような紅いセミロングヘアに、同じく燃えるような真紅の瞳をしている。整った顔付きにすらりとした長身、そのプロポーションの良さは見る者を惹きつける美しさがあつた。

美人、そう呼んでも差し支えない程の女性がこんな酒場へとやってくるとはどういう事だろう。

周りのハンター達も驚き、そして彼女の美しさに呆けたような表情で眺めていた。

そんな彼女の服装はやはり東方人らしく和服を着こなしていた。紺色の下地に夜空を描いた和服であり、その上に闇色の外套をなびかせていた。どうやら旅人らしい。恐らくこの先の水没林を抜ける前にここに立ち寄った、といったところだろうか。

彼女は一つの席に座るとお品書きを手にして何気なく視線を巡らせる。

「いらつしゃいませ」

ウエイトレスが彼女の下へと向かうと、お品書きを気だるげに指差して一言。

「ここから、ここまでを全部お願い」

「……………はい？」

一体彼女は何を言ったのだろうか？

ウエイトレスの少女だけでなく周りのハンター達も呆然とするしかない。

だが彼女はとんとん、とお品書きを叩き、

「だから、ここからここまでを全部。……………ああ、つまみもどつとこれくらいかな」

今、彼女が開いているページは飲み物が書かれている部分だ。そしてここは酒場。飲み物の大半は酒である。彼女は指を滑らせてその酒を一気に示しながら注文したらしい。

しかも追加としてつまみのページを開いてこれまた一気に注文。あれほどの美人がこんな朝っぱらから大酒食らいをするというのか？

そんな驚きがあったのだが、ウェイトレスは注文に応えなければならぬ。「か、かしこまりました」と一礼し、カウンターの向こうへと駆けこんでいく。

しばらくし、次々と注文したものが運ばれてくると、彼女は一本の瓶を開けてグラスへと注ぎ、一気に呑み干す。更につまみを口にし、どこか満足そうに頷いた。

多くのハンターが見守る中、ハイペースで呑み進め、つまみを口にしながら瓶を空にしていく様はほとんどの見物人の度肝を抜いただろう。

「……うわばみ、ですね」

「ありえないわ……」

一体あの体のどこにあれだけの量の酒が消えていったのだろう。

しかもあれだけ呑みながら酔っている気配がないというのはどういうわけだ？ アルコール度数が低いものから高いものを問わず呑み続けているのに、彼女の表情は入ってきたときからあまり変わっていないように思える。

いや、うつすらと赤くなっているようだがそれまでだ。言動におかしな様子もないし、意識もはっきりしている。

どれだけ酒に強いのだ、と問い詰めたいほどに呑み進める彼女は周りの視線など気にした様子もない。

とりあえずあの女性についてはもう気にしないでおくことにしよう。

う。今は朝食を食べないと。女性から視線を逸らし、黙々と朝食を進めていくと、また扉が開いて客が中に入ってくる。

「……ん？ おや、あんたたちかい」

「おー？ 桐音さんですか。おはようございます」

入ってきた客、桐音は二人に気づくと軽く手を挙げながら近づき、纏っていたローブを椅子に掛けると空いている席に座ってきた。ウエイトレスに注文をすると、彼女もまた離れた席で一気に酒を消耗していく女性に気づく。

「……なんだい、ありゃ」

「知らないわよ。あたし達に訊くな」

少し様子を窺うように見つめていた桐音だが、やがて深く気にしないようにしたらしく視線を二人へと向けた。

「ところで街道が開通したわけだけど、あんたたちはどこに向かうつもりだったんだ？」

「ユクモ村ですねー」

「ユクモだって？ これはまた奇遇だな。あたしもユクモに向かっていたところなのさ」

「……ふーん。一人であんな遠くまで向かうなんて、なかなかのものね」

ユクモ村まではまだまだ距離がある。普通はそれまでの距離を一人で行くこうなことは思わない。誰か知り合と一緒に、あるいは商隊に混ざって旅するのが通例だ。

それはやはり普通の人にとっては脅威となる飛竜らの存在があるからだろう。もちろん盗賊、野盗などという存在もいるのだが、や

はりモンスターという強大な敵がいるからこそ戦える者と一緒に旅をしないと危険なのだ。

そして例え力を持つ者といえども、一人で旅をするのは危険だ。長距離を旅するとなると体力の問題もあるだろう。だから二人は桐音が一人で長距離を旅するという事は驚きだった。

「そんな所まで一人で行くなんて、なんか訳ありなわけ？」

「そうだな、ちよいと人探しをされていてね」

「……………理由まで一緒ですか」

「ん？ なんだい、あんたたちも人探しか？ これはほんとに奇遇だな」

そこで注文したものが運ばれてきたため、一旦話を切ってそれを受け取り、「いただきます」と口にして少し食べ進める。その後お茶を飲み、

「あたいはクソ弟を探していてね、なんでもユクモ方面にそれらしき奴がいたって噂を聞いたもんだから向かっているのさ」

「クソ弟？ ……とりあえず、あんたの弟を探している、って事でいいの？」

「ああ、そうさ。で、あんたたちは誰を探してるんだ？」

「私達は知り合いですね。温泉で有名なユクモ村なら訪れた事があるんじゃないかという事と、情報源として有効ではないかという事で向かっています」

「なるほどね。温泉関係で狙っているという事は……………知り合いは東方人ってことか？」

温泉好きという点は東方人に多く見られる事だ。桐音も東方人というだけあって容易に推察する事が出来たらしい。

「しかし……人探してユクモ、か。どれだけ数奇な巡り合わせなんだろうね？ ……ん、どうだい？ ここはひとつ、一緒にユクモにでも行くかい？」

「……どうしてそうなるのよ」

「なに、東方にはこんな言葉があるのさ。旅は道連れ世は情けつてね。今まで一人でやって来たけど、ここで出会ったのも何かの縁。一回クエストを共にしたし、どうせなら一緒にどうかと思ってね」

一人より二人、二人より三人……仲間が多い方がいいというのも一理ある。それに東方人は縁を大事にする人が多いとも聞く。桐音の性格からして少し意外だったのだが、彼女もそういう事は大事にするようだ。

……本当に意外だ。瑠璃がそういう表情を見せてしまうのも無理はない。茉莉はその表情の変化の乏しさで誤魔化したようだ。

「……んー、でもさ、いきなり一緒に旅をするってのも……」

「なんだい？ 小さな旅はもうしただろ？」

「あれはクエストじゃないの」

「似たようなもんじゃないか。竜車で移動し、飯を食い、命を懸けて戦った。十分縁は出来ている。……それに、あたいはあんなたちに少し興味があるしね」

そこでにやり、と不敵な笑みを浮かべてみせる。鋭さを感じさせる碧眼がゆっくりと瑠璃、茉莉と交互に見やり、どこか観察するかのような眼差しをしていた。

そういえば桐音は戦闘狂の節があった。もしかすると彼女の興味とやらは二人の実力なのだろうか。味噌汁を飲み干してふう、と息をついて茉莉はお茶を手にながら小さく首を振った。

「興味を示してくれるのはよろしいですが、私達はそういう傾向は

ないもので、すみません」

「ん？ ああ、別にあんたたちと戦おうとかそう言う事はないさ。ただ……そう、色んな奴の戦いを見ていきたいってだけの話さ。瑠璃は長剣使い、茉莉は槍使い……しかも特殊な種族ときたもんだ。これはいい経験になるってものさ。興味が出るのも仕方ない事だろう？」

確かに有翼種は珍しい存在だ。そんな彼らの戦士ともなればその珍しさは跳ね上がる。

瞳の中に小さな炎が揺らめいている気がした。口では見ているだけといいながらも、本心では一回刃を交えたい、と思っっているのではないだろうか。

やれやれ、困った人に気に入られたか、と茉莉が考えた時、「なに、それは本当か！？」という大きな声が聞こえてきた。何事かと周りの客達がその方へと視線を向けると、それはハンターと一般人が混じった男達が座る席だった。

「今度は斑鳩飛翼流か……これで一体どれだけ殺られたんだ？」

「さあな……しかも殺されたのはある商隊の護衛に頼んだ人だつてよ。見回りに行った奴がその死体を見つけて判明したんだと」

「はあ、どうなってんだらうな……」

斑鳩飛翼流……確かあの人が使っていた流派であり、自己鍛錬で習得してしまった剣術だったか、と茉莉が思い出す。名前に鳥の名を冠する技が特徴で、速さと鋭さを売りとした技が多く、しかし同時にシンプルなものから高等技術まで多岐にわたるとか。

まさかの秘剣も取り入れ、それを習得できたものはごくわずか。その使い手の一人が死んだのだ。驚きに包まれるのも無理はない。

「んく、んく……」

驚きだけでなくまたかという雰囲気をした客もいれば、あの女性のように特に気にした様子もない客もいる。……彼女の場合はただ飲み食いしている事に夢中になっていてただけなのかもしれない。少しばかり気にはしたようだが、やはり今の彼女の興味は酒に向けられていた。

そして瑠璃達。

特に桐音はあの話聞いてまた瞳の中に炎を揺らめかせる。どうやら件の辻斬りにも興味が湧いたらしい。

「……本当に戦いが好きなのね、あんた」

「ああ。気づけばこうなってたね。……ま、しゃーないさね。昔っから色々やってきたもんだから、こうなるのは自然の摂理ってやつさ」

最後の白米を食べ終わると「ごちそうさま」と口にし、またしてもにやりと笑いながら軽く右手の指を鳴らしてみせる。その際腰の帯に差している小太刀がちらりと姿を見せた。

初めて出会った時と同じ、私服という事もあってその二振りの小太刀が彼女の主要の武器という事らしい。

「強い奴らとの戦い、それはあたいにとって血沸き肉踊り、心が満たされる事さ。緊迫した戦いこそ至高。そうでなくちゃつまらないってな」

「うわぁ……どっかで聞いたような話じゃない」

頭の中にならからと笑う深緑の髪をした青年や金髪の青年の姿が思い出された。あとは……白髪の少女だろうか。いや、彼女の場合は……別のベクトルに向いているんだった。今ではそういう気配はなくなっているだろうが。

とりあえず桐音は戦いそのものに昂る派のようだ。特に実力者と戦いならばなおさらといった感じか。

「ま、そんなあたかも一人でやっていくのもどこか退屈になってきたのさ。そんな中でのあなたたちとの出会い、縁が生まれた。なんていうかね、あなたたちと一緒になら退屈しなくて済みそうかも考えているのさ。……どうだい？」

そうしてまた話が戻る。

じつと落ち着いた瞳が二人を見つめ、ただ静かに答えを待っていた。

「……………」

瑠璃がどうする？ と目で語っていた。彼女は先ほども言ったように反対方向なのだろう。なにせ自分達は特殊な種族であり、行方不明になっているあの人達を探しているのだが、その彼らは世間からすればお尋ね者に近い存在だ。

その事を知られてはめんどろなことになるのもまた事実。だからこそ二人は誰とも深く関わらずに過ごしてきたのだ。だから桐音の願いには応えられない。

結局どう考えても茉莉も同じように反対だった。

「残念ながら私もお断り……ですね」

「……そうかい、残念だねえ。ま、そこまで無理だって言うならこれ以上は言わないさ」

残ったお茶を飲み干すと立ち上がり、ローブを羽織ると自分の分の伝票を手にした。

「じゃ、またどっかで会える日を楽しみにしてるよ。……ま、同じ目的地だ。ユクモで会えるかもしれないけど」

「そうね。またどこかで会えたら、その時はよろしくしてもいいわよ?」

「はは、どこのアレだよ。じゃあな、お二人さん。また会ったらクエストするか、刃を交えようぜ?」

「前者はいいですが、後者は遠慮したいですねー」

「つれねーなー」とぼやきながらもまたにやりとした笑みを浮かべつつカウンターへと向かっていった。素早く会計を済ませ、軽く手を振って酒場を後にしていく。

それを見送ると自分達も既に食事を終えていたため、そう時間もかけずに二人もまた会計を済ませると酒場を後にするのだった。

宿屋に戻ってチェックアウトを済ませると竜小屋へと向かってまたアプトルをレンタルしていく。少し店主に訊いてみると、桐音はやはり一足早く旅立っていったようだ。

では自分達も彼女に追いつかない程度に進んでいくとしようか。そう思いながらアプトルを引いて外に出、またがろうとしたところで一人の女性がやってくる。見ると彼女は先ほど酒場でうわばみの如く酒を消費していた人だった。

彼女は二人に軽く視線を向け、薄く微笑を浮かべながら会釈してきた。そのまますれ違い、店主へと向かってアプトルレンタルについて話し始めた。そんな彼女を肩越しに振り返ってみると、闇色の外套の陰に隠れて見えづらかったが、腰元の帯に武器らしきものを差していた。

外套によつてその全てが見えないが、それが武器ではないかという事だけはわかる。どうやら彼女もまた戦う者だったらしい。

それはあの身のこなしで何となくわかるし、歩き方もどこか隙が

ない。

でも……どうでもいい。あの大酒食らいは驚いたが、所詮は他人だ。桐音と同じように深く気にするような相手じゃない。アプトルに騎乗すると手綱を握りしめ、ボルシオ水没林に向けて走らせ始めた。

さあ、次の町へと向かおう。

まだまだ旅はこれからだ。

つまらない。

今日もまた一人の使い手を斬り捨てる。確か今回は……天刃流だったか。それなりの実力だったけれど、それまでだった。この渴きを満たしてはくれない。

「つまらない、つまらない……」

ぶつぶつと呟きながら両手に顕現させていた武器を消し去り、月明かりもない森の中を歩いていく。光源のない深夜の森は視界が悪く、夜目が効いていたとしても遠くだけでなく近くも見えるかどうかも怪しい。

しかしその人物は木々にぶつからず、草に足を取られず、すいすいと歩き進めていく。

「ああ、残念。実に残念……いつになったら現れるんだろう」

どれだけ斬り捨てたか覚えていないくらい斬ってきた。というより数えるのも億劫だった。

それほどまで何者かは飢えていた。

己の心を昂らせる程の戦いに出会えていない。これは久しぶりに彼、あるいは彼女の下に行って死合いででしょうか？

そんな事を考えていると、森の奥から何かの気配が近づいてくるのを感じた。

「ヴルルルル……！」

闇の中に浮かぶ赤い光が二つ。

それはじつと木の上から何者かを見下ろしていた。その気配と視線に当然何者化も気づいており、その視線を受け止めた上で何も感じさせない瞳で見つめ返す。

「……ナルガ、か。ああ……うん、あの人と戦うつてのもいいか。

あの人なら十分満たしてくれる」

「ヴルルルルッ！」

威嚇するように唸り声を上げたその存在、迅竜ナルガクルガは何者かに向かつて一息に飛び降りながら右翼を振り上げ、鋭いその刃で切り裂こうとしてきた。

しかに何者かは冷静にそれを見切り、身を包むその布をなびかせながら風切音を感じながら両手を軽く広げる。すると何者かの気が両手に集まっガントレットていき、一つの武器を形成した。

それは一見すると籠手のようだった。だがその指の上部分に獣のような爪が三つ伸びている。金属で出来た籠手に刃が一体化したそれは、名づけるならば鉄甲爪だろうか。

躲されたところで今度は左翼で斬りかかってくるが、それを躲しつつ左手で受け流し、右手で突き出すようにナルガクルガへとカウンターを決める。

三つの爪がナルガクルガの頬へと突き刺さり、引き戻しながら薙ぎ、左手で追い打ちをかけたついで距離を取る。

「……しっ」

追いかけて来ようとしたナルガクルガへと右手を振りかぶれば、爪から気刃らしきものが放たれてナルガクルガに襲い掛かっていった。爪と同じく鋭さに特化したその気刃はナルガクルガの左翼を切り裂き、血を迸らせる。

「……旋風」

続けざまに左手を振りかぶれば、今度はつむじ風のようなものがナルガクルガへと襲い掛かった。自然現象のつむじ風と違い、それは相手を斬り裂くことに念を置いたもの。小さくともそれは敵を倒す技。ナルガクルガを通過する度にその鱗、皮を傷つけていった。

「グルアウ、グルオアアツ!？」

普通のハンターにはない攻撃にナルガクルガが戸惑った様子を見せたが、しかしそれで戦意がなくなっただけではないようだ。本来の戦い方をするように、闇の中へと一度姿を消す。

この暗闇の中に溶け込み、木々の間を素早く飛び移って得物をおく乱させ、死角から襲い掛かる。それがナルガクルガの狩猟だ。

何者かは一度構えを解き、自然体のままでその場に佇む。

ナルガクルガもまた気配を消し、自分の位置を悟らせずにいた。僅かに木の葉が揺れるような音を響かせているが、それも集中しな

いと聴こえない程に小さい。
それから数分間、何も起こらずに時が過ぎていく。

「ッ！」

刹那、背後の木から飛び出したナルガクルガが何者かの首から背中へと斬りかかっていった。完全に気配と音を消しての奇襲。見事なまでの狩りだ。

あの翼が振りかぶられた瞬間、何者かの首は体と別れを告げる事になるだろう。

だが、標的はその場からゆらりと消え去った。

「かげろう
陽炎」

ナルガクルガは何が起こったのかわからなかった。自分の翼は何も捉えていなかったのだ。わかったのはただ翼が何者かを切り裂いた感触がなく、ゆらりと煙のようなものが静かに消えていく光景のみ。

そして気づけば、自分の首から勢いよく血が噴き出していたという事だけ。

「ガ、ガガ……」

声にならない呻き声を漏らし、ナルガクルガは静かに地に伏せる。いつの間にか首元から翼の方へとゆっくりと歩いていく姿がある。その両手にある鉄甲爪の刃は赤く滴る血液があり、軽く手を振って血を払って粒子へと還元させていく。

その一瞬の決着に何者かの実力が表れていた。だがフードに隠れている何者かの表情はやはり曇り模様。どうやら今の戦いでも満たされることはなかったようだ。

「……やっぱりあの人に付き合ってもらおう」

うん、そうしようという風に何度か頷くと、そのまま布を翻して闇の中へと消えていく。後にはじわじわと血を零し続けているナルガクルガの死体が残されるのだった。

怪奇事件の森（前書き）

次の舞台はとある山の森。

そこには何か潜んでいた。

そんな話を聞いた瑠璃は……。

怪奇事件の森

森の中を二人の男女が歩いていく。辺りを警戒するように歩く様子を包む防具に背中や腰に差している武器。一見して二人がハンターである事は明らかだった。

標的となる相手はこの先にいる気配がする。地図によれば確かあそこには川があつたはずだ。僅かに水音がするので間違いない。どうやら川の小魚を狙っているのだろう。奴にとっては食事の時間か。だが二人にとってはそれは好機。足音を立てず、気配を隠し、木々の間をすり抜けながら着実に敵へと距離を詰めていく。

油断さえしなければ恐れるに足らない存在だ。亜種とはいえ、かの存在はこの東方のハンターにとっての登竜門的な存在。

大丈夫だ、問題ない。

「……………」

しかし不穏な噂があるのもまた事実。

夕暮れも過ぎ去り、夜の帳が下りた時刻。月もまだ出ず、夜の森はひどく静かなものだ。視界は良好とはいえず、周りに気を配らなければいつ奇襲を受けてもおかしくない状況。

そんな中で敵となるのはモンスターだけではなかった。

巷を騒がせている辻斬りの存在が二人の心の片隅にあつたのだ。しかし辻斬りの標的はハンターではなく武人。ハンターが狙われる事はないだろう、と考えている者もいるが、この暗い森の中で行動するとどこか不安になってしまう。

それにハンターであろうとも剣術の流派を会得している者も少なくない。この二人もまた同様。剣術を習得しているため標的になる

可能性がある。それ故に辺りを警戒する際はモンスターだけでなく人の気配も探り続けている。

しかしそれでも この闇の中に紛れて動く存在を感知できていなかった。

「……………」

それは草むらを這うように動き、続けて木の幹を音も立てずに上り、枝の上に乗ると一息で他の木へと飛び移り、着実に距離を詰めていた。口から舌を出して軽く振るわせながら漆黒の瞳でじつと獲物を見据えているのだ。

奴もまた、この暗い森の中の狩人。^{ハンター}この森に溶け込む色合いをした体を持ち、気配と音を消す事に長け、この視界の悪さをもものも olmayan 目と感知能力を持つ。

それを駆使し、得物に気づかれずに忍び寄り、一気にその命を狩る。

今回もまたそれを行使するのみ。

やがて川のせせらぎが耳を澄まさずとも聞こえるようになった頃、ハンター二人は川のほとりにいる標的を視認した。さあ、いよいよ攻撃を仕掛けようか、と飛び出すタイミングを見計らっていた二人に一気に距離を詰め、

「ッ、グ…………ツ!？」

「えっ…………!？」

その体を貫くように両手を突き出して爪を抉り込ませた。鋭く伸びた爪は胸を貫通させ、しかも心臓を容赦なく抉っているため、最早二人に助かる未来はない。一体何が起こったのだ、と戸惑いを含んだ目をしながら、一体誰が自分達を殺したのかと男が肩越しに振り返る。

口から血を吐きだしつつ彼が見たものは、

「……シユルルル」

喜色を含んだ眼差しでじつと自分達を見下ろしながら舌を震わせる存在だった。

「な、なな……なぜ、ここに……」

この存在がいるなんて聞いていない、と言葉を続けようとしたが、それは体に爪を食い込ませたまま一気に口を開き、男の頭から喰らいついた。頭を守る防具もろとも噛み砕き、苦痛と悲痛に歪ませた男の命を完全に喰らいつくし、それが顔を離れた瞬間そこには何もなくなった。

あるのはただ、鮮血の噴水と言うオブジェ。それを間近で見てもまったもう一人のハンターの女性は口から血を漏らしながらその整った顔を歪ませていく。

「い、いやあああああああ!?!」

森に悲痛な悲鳴が響き渡る。その声に気づいた二人の獲物だった存在は背後を振り返り、そこで起こっている出来事を認識する。自分達を狩るはずだった存在が狩られている光景、そしてその狩った存在を見ると、一鳴きして翼を羽ばたかさせてその場から退散していく。

それを追うようなことはせず、それは視線を女性へと向けた。

「ひっ……!」

女性も自分がもう助からないという事はわかっているだろう。し

かしそれでも体は緊張し、がちがちと歯を打ち鳴らして震えてしま
う。

そんな彼女にも容赦の欠片もなく頭から喰らいつき、先ほどの男
と同じように首を食い千切ってしまった。首があつた場所からやは
り勢いよく鮮血が噴き上がり、それすらも美味しそうに飲み干して
いく。

「シュルル」

その血は甘露のように美味であり、噴き出しつづけるその体に喰
らいつき、一気に血をすすりあげると今度はその柔らかい肉を頂く
ために口を大きく開けて丸呑みし始めた。身を包む装備すらやはり
ものともせず、そのまま足まで全て食べてしまう。

最後は男の体を食へ終え、血が滴る口元を軽く拭いつつ舐めとり、
川へと向かつてその水を飲み始める。奴にとつての夕食が終わり、
どこか満足そうにその場を立ち去ると、現場には血だまりが少し残
るだけ。……そう、二人の体は全てあの胃袋の中へと消えていった
ため、彼らの死体が残る事などなかった。

あれから一週間が過ぎた。ユクモ村まではあと半分ほどの距離を
進むことになる。山を越え、丘を越え、谷を越え……アプトルを乗
り換えて豊かな自然の中を駆け抜けてきた。

現在は一つの町で休息を取っており、昼食を頂きながら周りの客の話に耳を傾けて情報を得ようとしているところだ。
すると気になる話が耳に入ってくる。

「またやられたらしいな」

「いったいどうなっているんだろうな、あの森……」

「ハンターがやられ続ける事三件、『帰ってこないから調べてくる』と言った奴も帰ってこず、辻斬りでも現れたのかと噂になり、『そんな奴がどうしてハンターを狙ってくるんだ？ いるはずがない』と言った奴も帰ってこない……。どうかしてやがるぜ」

話を聞いていくとこんな事が最近起こっているらしい。

この先にある森には以前から奇妙な事が起こっているそうだ。あの森には元々様々なモンスターが生息し、最近はりオレイアやクルペッコ、クルペッコ亜種、ロアルドロスなどといったモンスターのクエストが張られ、消費されていった。

だがどういいうわけかこれらのクエストに向かっていったハンターが帰ってこないという事件が起こり始めたという。当然帰ってこないならばなにかが起こったのだろうと調査隊が派遣されるが、ハンターは見つからず、またどういいうわけか調査隊の一部も行方不明になってしまった。

同じように独自に調べに行った者もいなくなり、これはいよいよ何かがあそこにいるのではないかという結論になったのだが、次々と手練れの者がいなくなるというだけあってあの森に向かおうという気は起こらなくなっている。

しかしあそこにいる飛竜らの存在の事もあり、クエストは今もなおはられ続け、運がいいものは何も起こらずに普通にクエストを完遂させて戻ってくる。そんな運のいい者らの話によれば、あそこになにかがあるかどうかはわからなかったそうだ。

つまり、一体何が起こっているのかは不明。

そのため解決の兆しは見えてこない。

誰か実力ある者に頼むしかないのだが、こんな田舎にそのような人物が来るのかどうか怪しい。

道筋はただ一つ。

ギルド支部からギルドナイトに調査依頼を出す事のみだった。だが来るとしても時間がかかるのもまたネック。ロックラックにあるギルド支部、または東方のシキ国、ヤマト国にあるギルド支部に所属するギルドナイトを呼ぶ事になるだろうが、かかる時間は早くで一週間以上。

アプトルを使ってこれなのだから、ここがどれだけ田舎かわかるというもの。

また最近は辻斬りが発生し、地方でも新たに確認されたモンスターの一件もあつてギルドナイトがそちらに駆り出されている。つまり人がそちらに回され、田舎の事件に回す人材が限られている。

なのでギルドナイトに依頼しても、来てくれるかはわからない。来てくれたとしても時間がかかる。更に言えば来てくれたギルドナイトが本当にこの事件を解決してくれるかの保証もない。確率は高いたろうが、確実とは言えないのだ。

「謎の死、か。普通に考えれば観測されていない何かがある森にいるって事でいいのよね」

「でしょうね。死体が見つからないのもその何かが食べてしまった、と考えればいいでしょう。……ですが、その何かかわからないというのが問題ですね。飛竜なのか、牙獣なのか、あるいはまた別の何かか……」

森の中なので挙げられるのはこの二種だろう。鳥竜種は攻撃的な存在が少ないし、いたとしても東方にそれが生息している地域は少ない。黒狼鳥イャンガルガが有力だが、奴の場合殺しはしてもその死体を全部食べ尽くすというのは考えづらい。

なので考えられるのは飛竜種か牙獣種となる。

他にも獣竜種が考えられるのだが……その中で一番考えられるア
レが出現したとなれば大騒ぎだ。その報告がないのでアレは現れて
いないだろう。

「それで？ クエストがあれば参戦するつもりで？」

「あれば、の話だけれどね。ユクモ村に行く途中だけれど、こんな
気になる話があったら、食いついちゃうでしょ？」

「それは瑠璃だけですわね。私はどちらでもいいので」

「あ、そう……。でも、この事件を解決していく事であたし達は強
くなれる、ここの人達も喜ぶ。一石二鳥よ」

「ま、そうですね。じゃあ少し見てみましょうかね」

立ち上がって壁際にあるクエストボードに向かってみる。そこに
張られているのは三つの依頼書。

青熊獣アオアシラ討伐。

紅彩鳥クルペッコ亜種討伐。

謎の存在の討伐。

なるほど、確認されている中で討伐対象になっているのはアオア
シラとクルペッコ亜種という事らしい。アオアシラは今の二人なら
ば問題なく討伐できるだろうが、クルペッコ亜種は少々厄介だろう
か。

彩鳥クルペッコは東方のハンターにとっての飛竜の登竜門として
知られている。西方のイャンクックと同じく鳥竜種であり、飛竜の
動きの基礎をこのモンスターで覚えるハンターが多いのだ。

独特の鳴き声を駆使して自分の力を上昇させたり、鳴き真似で他
のモンスターを呼び寄せたりとイャンクックとは違ってその辺りが
やり辛いのが特徴ではあるが。

そしてそのクルペッコの亜種が紅彩鳥。翼にある火打石が電気石に変化し、その体色もまた紅を基準としたものになっている。

また呼び寄せるモンスターも原種と違って強力なものが多いという報告をよく耳にしているとのこと。

つまりただの亜種だと思って油断しているとやられかねない相手なのだ。

しかし問題ない。

茉莉が張られている物を瑠璃へと報告すると、なるほど小さく頷いて「じゃ、ペッコ亜種にでも行こうか」と提案した。

すると、近くにいた客の青年が二人の話を聞いていたのか声を掛けてくる。

「君達、まさか件の森に行こうっていうのかい？」

「ん？ そうだけど？」

「何を言っているんだい、やめなよ。死ぬつもりかい？」

「そうだな。クエストを受けるってことはハンターのようだが、この件はやめておけ。命は投げ捨てるものじゃない」

「あたし達だってこんな所で目的も果たさずに死ぬつもりはないわよ。でも、ここで困っている人がいるってんなら、見過ごせないだけ」

「……………」

そう言う瑠璃の瞳に怯えの色はない。姉のその姿と言葉に茉莉は彼らの姿を思い出した。

いつだって困っている人のためならば手を差し伸べていくあの兄弟の姿。一、二年だったが一緒に暮らした村に暮らし、そういう彼らの背中与武勇伝を聞いてきたのだ。

母親を目標としているが、その心境にあの兄弟のまっすぐな姿の影響を受けない、なんてことがあるわけもない。あの村にひっそりと暮らしていても、兄弟は今もなお歪まずに彼らの両親の背中を追

い続けている。

そんな姿が眩しくて、だからこそ恐れ、尊敬できる先輩だと思える。

(経験を積むため、とは言っているようですが……本当はそういう事でしょうね。ふふ、先日の事も恐らくはその志があったからこそ引き受けたのかもしれない)

クエストをやってみたいと言いだしたのは瑠璃だ。茉莉はそれに頷いただけ。昔から何かと口は悪いし、はねつかえりだった少女だったが、その根本では誰かを想う気持ちがある。あの兄弟の影響と心身の成長で誰に対しても口が悪いというのは改善されてきているのは喜ばしい事だ。

「しかしもう何人も帰ってこない人達がいるんだ。考えたくもないが彼らは……君達もその後が続くというのかい？」

「話によればギルドナイトに連絡がいったそうだ。君達が行く必要なんてない」

「年頃の女の子が無茶をするものじゃないよ。ここは他のハンター達、特にギルドナイトに任せた方がいい」

「……生憎だけど、それは断るわ。それにアタシたちだってハンター、それも上位よ。経験も積んでいるし、あたし達二人なら大抵の事は乗り越えてきた。そうでしょ、茉莉？」

「そうですね。私達のコンビならば何とかかりますよ。瑠璃の斬りこみはなかなかのものですからねーそれはもう、猪のように猪突猛进にバカみたいにまっすぐで……」

「だれが猪だツ！？　っていうか、それじゃあたしが脳筋みたいじゃないのよ！」

「え？」

「おい、なんだその顔は」

うがーっと吼える瑠璃に何をわかりきった事を……といった風な表情を見せる茉莉だが、こういうのはいつもの事。吼えた後に急にテンションを上げてツッコミを入れるいつもの漫才に男達は呆ける。この二人に恐怖というものはないのか？

漫才をするだけの余裕を見せる二人は本当に自然体だ。謎の存在に恐れている様子なんて見られない。それが男達には信じられなかった。

「君達……怖くないのか？」

「怖い？ ……そうね、多少は怖いわよ？ 当然じゃない、生き物なんだから。わけのわからない奴を相手にするし、命を懸ける戦いに赴くんだから怖くないわけじゃないじゃない」

「じゃあ……どうして」

「ハンターはいつだって命を懸けている。今更の事よ。それにさっきも言ったでしょ？」

そこで瑠璃はふつと不敵な笑みを浮かべながら目を閉じ、そして不敵な笑みは綺麗な笑顔へと変化していった。

「困っている人がいて、あたし達が戦う事で救われるって言うんなら、やってやるうじゃない」

それはとても眩しい。

止めなければならぬ、とわかっただけでも男達は何も言えなくなってしまう。

そんな瑠璃に茉莉はやれやれと小さく首を振りながらもその口元は小さく緩んでいる。なんだかんだ言っただけでも瑠璃の事は好きなのだ。そんな彼女を自分は支え続けるのみ。

「じゃ、クエスト受注に行ってくるわ」

軽く手を振ってカウンターへと向かっていく瑠璃を見送り、茉莉は同じように瑠璃を見送っていった男達に振り返る。

観察すれば彼らもまたハンターか普通の戦士かわからないが、戦う者だという事がわかる。忠告したのはやはり同じ戦う者としてのものだろう。二人の実力を完全に読み取っているわけではないようだが、それでも戦場へと向かおうとする二人を止めるのは無意味に命を散らす事はないとわかっているからだ。

勝てる戦いならば何も言わないだろうが、勝てるかどうか怪しいものに挑むのは愚かだ。ましてやそれが年頃の女ならばなおさら。止めたくなるのもわかる。

だが二人の……瑠璃の意志は固い。あれはやると決めたらことんやる。まさに猪突猛進……いや、一回弄ったからやめておこつ。

「なに、気にする事はないですよー」

「……しかしだね」

硬い表情を見せる男達に気楽に声を掛ける茉莉であったが、それでも男達の表情は晴れない。何度大丈夫だ、といっても無駄だろう。二人が若い女という事もあるし、もう何人も行方不明になっているという事実もある。

彼らが安心できるとすれば、それはその謎の存在を討伐できたという結果のみ。

要は勝てればいいのだ。

しかしそれが難しい。情報も何もあつたものではないのだから対策のしようがない。二人に出来るのは己の実力と武器を信じる事だけだ。

「あなた達はここで吉報を待つといいですよ。では、これにて」

ペこりと一礼し、受付嬢と話をしている瑠璃の下へと向かっていった。既にクエスト受注云々について話しており、今出ているもの全てを汲み込んだ話に発展してしまっている。

「クルペッコ亜種、アオアシラ、そして謎の存在……纏めてくれな
いかしら？」

「纏める、ですか」

「そう。謎の存在の討伐はもちろんだけど、その他にも討伐するべき存在がいるようじゃない。あたし達はそいつが本命だけど、見つかるとは限らない。だから他の奴らもやるうって考えてるの。メイ
ンに謎の存在、サブとして他の二頭。これはクルペッコ亜種がアオ
アシラを呼び寄せる可能性があるから、って事でどう？」

見つからないまま帰ってくる、なんて事がないように現在出ているクエストの対象になっている物をサブに据え、三つのクエストを同時処理しようという話らしい。

瑠璃の言う通りクルペッコ亜種の鳴き真似でアオアシラが出てくる可能性も捨てきれないため、クルペッコ亜種を優先的に探すという方向でも問題ない。

クルペッコ亜種らとの遭遇、謎の存在との遭遇、どちらの状況になったとしても問題がないようにこの提案をしているというわけだ。しかし受付嬢もやってきた二人を交互に見つめて不安そうな表情をしている。彼女もまた二人にこのクエストをこなす事が出来るのかと疑問に感じているのだ。

「ほら」

そんな彼女に瑠璃は懐から取り出したギルドカードを見せてやる。それに続くように茉莉もギルドカードを取り出した。それを受付嬢

に手渡し、彼女はそれらを確認する。

そこにあるのは上位の証であるマークと二人の名前。上位と下位のクエストを行き来しているが、二人は間違いなく上位ハンターなのだ。

下位と上位にはただ上下で分けられる程の差ではない。モンスターの個体、その内包する力と実力に応じてランクづけられ、同時に危険度も跳ね上がる。

それは下位ハンターが上位になって初めて上位クエストでクエストに挑み、失敗するのがほぼ半分という統計結果が示している。

それだけ上位と下位とではハンター達が思う以上の差がある。

それを上位の前半ものとはいえ、多くクリアしている二人の記録を見た受付嬢は無言になり、少し上目づかいにもう一度二人を交互に見た。

「……本当に、行くのですか？」

「ええ」

「……………わかりました」

ギルドカードを返し、引き出しから書類を取り出してペンを走らせていった。その様子を静かに見守り、数分後にはそこには依頼書が完成する。

謎の存在の討伐依頼。

メインターゲット：謎の存在。

サブターゲット：クルペッコ亜種、アオアシラ。

ロープの使用許可。

制限時間：五十時間。

ロープの使用許可が出た。謎の存在がどのようなモンスターなの

かわからないため、装備を限定するのもなんだろう。緊急時に切り替える事が出来るというなら喜ばしい事だ。

制限時間があるが内容に問題はない。

この五十時間というのもクエストの基本時間だ。今回もそれを採用したらしい。もちろんこれを超えればクエスト失敗、そのまま一度帰還する事になる。

しかし問題ない。

二日もあればなんとかなるだろう、たぶん。

内容を確認した二人はそれにサインし、受付嬢がそれを確認して判を押す。これでクエスト受注が完了した。

後は準備を整えて戦場へと向かうのみ。

竜車に乗って件の森の中に入り、ベースキャンプのエリアまでやって来たときにはもう二時間が経過していた。テントを張り、支給品ボックスを用意するとローブからそれぞれ武器を取り出し、コンパクトに纏めて肩にかける。

今回二人がメインで使用するのはこの二つ。

瑠璃はヒドウンサーベル。彼女がメインで使用する無属性の武器であり、ナルガクルガの素材を使用して高い切れ味を誇っている。

茉莉はインペリアルガーダー。ヒドウンサーベルと同じく無属性の武器であり、良質の鉱石を主に使用して切れ味を高めていったガンランスだ。

ローブを持っていく事を許可されてはいるが、どんな相手でも手に出来る凡庸性を持つ無属性の武器ならばクルペッコ亜種を相手にしている際にメインの標的が現れたとしても対応可能だ。

「さて、確認しましょうか。今出ている情報ですと、クルペッコ亜

種は森の奥にある川、または上の方にある丘付近で確認され、アオシラは森の中心に確認されているとの事です。どちらもランクとしては上位個体。なかなかのもですねー」

「上位個体、か。ふーん、相手にとつて不足はないわね」

「そしてこの森で犠牲になったのはもう十人以上。男も女も関係なしですね。ハンター、いなくなった人を探しに行った人、果てはこの森を通過しようとしたと思われる旅人も犠牲者ですね」

「旅人はどうしてわかったのよ？」

「あの町からこの森を通過し、この先にある町へと向かおうとした人達がいたそうですね。調査の結果、その町にその人達がやって来たという事実はなし。ここでいなくなってしまったのではないかという結論になったようです」

その手に持っている書類はあの町で集めた情報だ。それを竜車の中で纏め、改めて確認する。こういう作業は茉莉の役割の一つ。後ろで支えていく事を主としている茉莉ならではの事だった。

しかしサブの二種がどちらも上位とは驚きだ。

アオアシラは新米ハンターが相手にする事が多い牙獣種の一つであり、見た目は大きな熊と相違ない。種族名にも青熊獣とあり、見たままの通りだ。

森の中で暮らすモンスターであり、ハチミツを好物としているためハチミツを求めて森を歩いたりハチミツを持つ人を襲っていくという報告がある。

強靱な甲殻が覆われている前足に生える爪で獲物や敵を斬り裂き、その重い体で押し潰したりすることで攻撃を仕掛けていく。

だがその動きは読みやすく、新米ハンターが狩りの仕方を覚える相手としてよく知られている。アオアシラで動きと狩りというものを知り、クルペッコで飛竜との相手の仕方を覚える、といった具合で東方のハンターは成長していくのだ。

下位だったならばすぐに討伐する事が出来たろうが、上位ならば

そうでもなくなりそうだ。

「それで、どちらから処理していくのです？」

「どっちでもいいんだけど……まずはやっかいなペッコ亜種から行きましょうか」

「わかりました。では」

取り出した武器を背負い、二人は森の中へと入っていく。

これまで立ち入った者達の大半を行方不明　恐らく命を奪っていった魔の森。

森には時折魔物が潜むと言われているが、この森もそうなのだろう。

二人はこれからその魔物へと挑む。立ち入った者ら全てを喰らってきた魔物へと。

果たしてその魔物の正体は何なのか。そしてその魔物とどこまで戦えるのか。

今、ここに戦場が成立する。

怪奇事件の森（後書き）

次なる標的は新種……つまりはオリジナルです。

そしてもうすぐ3Gが出ますね。

恐らく私は初日には買えないかもしれませんが。というより、それ以前に3DSがないという。

あれに出てくる新たな亜種や初号機をここに登場させるにはやってみるしかないのですが……いつになるかわかりませんね。

魔の森に彩られる紅の鳥（前書き）

クエスト開始。

森を調査し始める二人は僅かな手がかりをも見逃さないようにしていた。

少しずつその断片が集まり、謎の存在がいったい何なのかを推測できるところになった頃、ついに獲物の一種が現れる。

魔の森に彩られる紅の鳥

森の中を歩いていく二人は辺りを警戒しながら奥の方へと進んでいく。木々が静かにざわめき、自分達の抑えた足音だけが響く森。生き物の気配はほとんどなく、鳥たちの鳴き声も聞こえてこない。

ここまで静かだとまるで古龍種がこの森にいるんじゃないかと思わせてしまう。

しかし古龍種はいない。

奴らが持つ圧倒的な気配と威圧感はこの森にはない。あるのはただいつもと変わらないであろう森の雰囲気のみだ。

でもここには確かにいる。

この森に立ち入った者達を喰らった存在が。

だがそれらしき気配は感じられない。恐らく隠れる事には自信がある存在なのだろう。だからこそ誰にも気づかれずに獲物に接近し、奇襲を仕掛けて狩ってきたといったところか。

ならばこそ静かで周りに気配がなくともある程度警戒しなければならぬ。気づかない内に接近されて襲われでもすれば、その時点でもう死合終了だ。戦う前から負けてしまっているようでは話にならない。何のためにここまでできたのかわかったものではない。

地図を確認しながら森を進み、クルペッコ亜種がいると思われる川へと向かっていく事にした。

クルペッコは原種も亜種も魚を好物とし、浅瀬を泳ぐ魚を捕食する姿がよく目撃されている。まずは捕食場として利用しているであろう川へと向かい、そこから上流か下流のどちらかへと進んでいきながらクルペッコ亜種の気配を探ればいいと判断した。

「ここまで静かな森ってのも珍しいわね」

「そうですねー。虫の羽音、鳥の声、モスやブルファンゴもないとなれば何かありますね、これは本当に」

自主的に森から離れたのか、あるいは何かに捕食されたのか。いなくなっている原因はこの二つが考えられるだろう。前者ならば先ほども考えたように古龍種がいるんじゃないかという事。

古龍種は飛竜や獣らと違って種としての存在が並はずれており、他社を圧倒する程の威圧感を放つ。それは本能に危機を訴えかけるには十分なものであり、また保有する力は軽く自然に影響を及ぼすものが多い。

そのため古龍種の接近を感じ取ったモンスター達は自ずと住処から逃げ出してしまう。

後者、すなわち捕食されたならばそれらしき跡が残ってもいいものだ。食べ残しの血肉、争った形跡がどこかにあると思われたのだが、それも見当たらない。

また足跡も見当たらない。草むらの陰などに時折視線を向けているのだが小型モンスターの足跡がないのだ。これは本当にいなくなってしまうとみるとみているのだろうか。

そんな事を考えながら木々の間を抜けていき、ちよつとした広場に出る。

木々の囲まれたその広場にも木が点々と生えており、倒木も一、二本存在している。ここにきてようやく虫の羽音が微かに聞こえてきた。

「ブナハブラね。あそこらへんに巣があるのかしらね」

離れた所の木を中心として三匹のブナハブラが飛び回っている。視線を上へと向ければ枝の間に大きな巣が存在していた。恐らくあれがブナハブラの巣の一つだろうか。

ブナハブラはテリトリーを侵さなければ襲ってくるような事はなという習性を持つが、二人は火竜の力を持っているおかげで時折テリトリー外でもブナハブラに絡まれる事がある。

恐らく二人の火の力に引き寄せられているだろう。ブナハブラは熱や火に引かれる傾向があるのだ。

数メートルは離れているというのに気付かれたらしく羽音を立てて接近してきた。

「ほんとにこいつらは飛んで火にいる夏の虫ってやつね」

やれやれとため息をつきながら瑠璃は右手を掲げて火を灯す。それは一瞬で激しく燃え上がり、やってきたブナハブラ達を一瞬の内に焼き払ってしまう。

二人としては寄ってこられればこうして火炎を以ってして焼き尽くすのみだ。

数で攻められようと火を操れる二人としては大した脅威ではない。とはいえそれは周りに何もなければの話だ。大型のモンスターを相手にしている際に絡まれれば多少はめんどろなことになる。

ブナハブラが集まっていた木には近づかず、周りの木々を調べるように見回ってみる事にした。するとそう時間をかけず茉莉があるものを見つけ出す。

「瑠璃、こちらへ」

「ん？　なんか見つけた？」

瑠璃が茉莉の下へと向かうと、茉莉はある一点を指さしてみせる。そこには足跡があったのだ。傍には倒木があり、蜂が数匹飛び回っている。そして何か抉り取られたかのような痕が残っている。

推測するにここには蜂の巣があったのではないだろうか。それをこの足跡の主がこの木から取っていった。こんなところだろう。

このような行為をする存在と足跡から考えれば、これの主はすぐわかる。

「アオアシラがここにいたって事ね」

「でしようね。……ん、そんなに時間が経っていないかと思えます。だいたい……一、二時間程度でしょうか。食事をした事を考えれば周囲のエリアにいるかと思えますね」

足跡に軽く触れ、木の周りに落ちていたハチミツの粘度を確かめた茉莉がそう推測した。二人に寄って来ようとした蜂に軽い炎で牽制しながら茉莉を守っていた瑠璃も倒木の近くにあった地面を確認する。

そこには何か腰かけたかのような凹んだ部分があり、ハチミツはその周囲にぼたぼたと落ちていて。ここでアオアシラがそのハチミツを堪能したのだろう。

そして食事を終えたアオアシラはここから去っていった。その足跡をたどれば恐らくアオアシラの下へと向かえる。

クルペッコ亜種を探しに来たが、先にアオアシラの手がかりを見つけてしまった。これは標的を変えるべきか。

「とりあえずこの後を辿ってみようじゃない」

「そうですね。見つけてしまったからにはやらねばなりませんし」

時間が経てばたつほどこの痕跡は遅れた情報になる。これを辿った先にまた何かが見つつかれば、それだけアオアシラの居場所へと近づける。情報は鮮度が命、本来の予定とは違うがアオアシラもまた討伐対象なのだ。

二人は足跡が向かった先をめざし、草むらを掻き分けながら進んでいく。どうやらけもの道になっているらしく、足元を纏わりついてくるような草や肌を刺すような鋭い草木があるため気をつけても音を立ててしまっている。

身を守る防具が肌を傷つける事はないが、瑠璃の場合へそ周りが網になっているために僅かに肌を切ってしまうそうだ。

そんな獣道を抜けると丁字に分かれる道に出た。すぐに茉莉が足元を見回して足跡がないかを確認してみる。瑠璃は辺りを警戒し、何か小型モンスターがいなかったかを確認した。

「……ここにもいないわね」

モスやブルファンゴもいなければ、こういう森に群れているであろうジャギイすらない。いや、群れじゃなくとも独り立ちして生きている個体もいるんじゃないかと思ったのだがそれすらもない。これは一体どういう事なのだろう、と考える瑠璃の傍で足跡を探っていた茉莉はアオアシラらしきそれを見つけた。地図を広げるとどうやら足跡が向かった先には川があるらしい。ハチミツを堪能した後は水を求めていったといったところか。

「……？」

そんな風に考えていた茉莉だったが、不意に離れた所にある地面に奇妙なものを見つけた。それに近づき屈みこんでじっとそれを見つめる。

それは足跡と言うより何かが這っていったかのような跡だった。自分達が歩いてきた側の草むらから向こうの草むらへとまっすぐに進んでいったらしい跡である。

「これは……蛇？」

軽くその後に触れてみながらその模様を確認してみる。獣でも竜でも人でもなく、ましてや足跡ではないそれは間違いなく生物がここを通過した跡だ。足を持たず地面を這うように移動する生物といえば蛇が頭に浮かぶ。

だがこの跡から考えられる蛇はただの蛇ではない。この大きさか

らして大蛇あたりがここを通過していったと思われる。

（大蛇……ふむ、謎の存在は大蛇？ いや、それはないでしょう。ただの大蛇ならばハンターが遅れをとるとは考えづらいですね）

蛇、大蛇程度ならば普通に処理は可能だ。それよりも牙獣種や飛竜種の方が危険度が上なのだから。とはいえ毒蛇ならば油断してしまえばいつの間にか接近され、噛まれてもすれば大変なことになるのだが、それは置いておこう。

大蛇ならば森の中に生息してもおかしくないし、こんなところでうろついていても驚きはしない。

だがもしこれがただの大蛇の通過した跡でないとしたらどうする？

（森の中に生息する蛇竜種……いましたっけ？）

飛竜種から蛇竜種に分類されたガブラスは足と翼があるため省かれるし、こんな所では見かけられない。多頭蛇竜種の代表格のヒュドラは砂漠などの乾燥地帯にいるし、響蛇竜ラテルヒュドラも同様だ。

しばらく跡を見つめながら頭の中の凶鑑を思い返していくと、一つ森に生息する蛇竜種がいた事を思いだした。

毒矛蛇グレイハブ。

両頬と頭部に一つずつ剣のように鋭く尖った出っ張った鱗があり、尻尾の先も同じように刃状に伸びているのが特徴な大蛇だ。焦げ茶色が主体の斑模様を持ち、大きさは中型の鳥竜種ほどのものだ。

剣のような鱗を持つ点でグレイブ、そしてもう一つの特徴である強い毒性を持つ蛇ということでハブを掛け合わせたのがこの蛇の名称の由来だ。

性格はハブと同じく凶暴で奴のセンサーに感知した物にはすぐさま襲い掛かっていくのが特徴だ。

図鑑で見た奴の胴回りの大きさは六〇センチほど。この跡に一致する。

奴の性格を考えれば背後から襲い掛かって人を丸呑みする事など容易いだろう。そうでなくとも強い毒を吹きかけるだけでも人は死ぬ。だがこれはあり得ない。

その強い毒性だけに大地や草木も壊死させてしまっただけの力を持つ。ここまで来る途中でそれらしき痕跡は見られなかったので毒は使わなかったのか、あるいはこのグレイハブ自体いないのか。

何にせよこのグレイハブが有力候補に挙げられるという点で一つの収穫があった。

それを瑠璃に伝えると、彼女もなるほど頷きながら唇に指を当てる。

「グレイハブ……か、有り得るわね。実際この跡もそれっぽいし……でもアオアシラが向かった先には進んでいないわね」

「しかしこの感じからしますとアオアシラがここを通った以前に通過したと思われますね。推測するに深夜ここを通過したかと」

「夜行性だったし、そう考えられるわね」

日中はあまり活動せず、夜になると動き出すのがグレイハブの習性の一つだ。といってもあまり食事をしなくとも数日はもつだけの生命力を持ち、活動範囲はテリトリーを見回るか新たなテリトリーを求めて森を動き回るかぐらいなもの。

恐らく先日ここを新たなテリトリーとし、動き回っているのではないかと二人は推測した。そのテリトリーを犯したハンター達は全て丸呑み、モンスター達もどうように丸呑みしていき、その脅威にここから離れていった……といったところか。

だがそれでもこの森に滞在し続けるのがアオアシラとクルペッコ亜種。

クルペッコ亜種は飛んで逃げる事が出来るだろうが、アオアシラ

はなぜここに居続けるのだろうか。もし本当にグレイハブがここに
いるのならば、アオアシラとて危険なはずだ。

となると……ここにいるのはグレイハブではないという事か？

(考えてもわかりませんね。この跡に関しては頭の中に置いておき、
今は調査を続けましょう)

立ち上がって膝を軽くはたくと、瑠璃と共にアオアシラが向かっ
たと思われる川へと向かって歩き出す。そう時間もかからずに川の
せせらぎが聞こえてくる。

大きな気配は感じられない。どうやら川には誰もいないようだ。
足跡も砂利道に入ればなくなってしまう、足跡をたどる事はもう
出来なくなってしまった。この川を渡っていったのか、あるいは上
流下流のどちらに向かったのかはわからない。

手掛かりはここに途絶えてしまう。

だがここで諦めるわけにはいかない。

茉莉はまた手掛かりを求めて辺りを歩き始める。

すると一つ奇妙なものを見つけたのだ。

「これは……」

草むらの陰になって見えづらかったがそれは鉱石……いや、研磨
された鉱物だった。

「なんか見つけたの？」

「ええ、これを」

それを拾い上げてまじまじと観察してみる。近くにはボロボロに
なっている何かが転がっており、それも手にして見比べてみると一
つの物が頭に浮かび上がる。

「これは武器ですね。恐らく……片手剣の一種でしょう」
「武器？ ということはハンターがここにいたって事？」
「恐らくは。……これは、そう……噛み砕かれ、しかし胃の中へと納める事が出来ず吐き戻したものの一部ではないですかね？ それが残骸となつてここにあると思われます」
「ってことはこの近くに……ん、あつた」

武器だったものを観察しながら茉莉が言つと、瑠璃は辺りを見回し、そしてそれを見つける。

乾ききっているがそれは間違いなく血痕だった。草むらにべつとりとついているそれは間違いなく血。その液体によつて変色してしまつており、地面にもしつかりと残っているそれがここがハンターがやられた場所だという事を示している。

最近雨が降っていないために洗い流されることはなく、こうして痕跡を残してくれたのは幸いか。

「これほどの血痕……間違いなく致死量ね。っていつか、周りに結構飛び散つたんじゃない？」

中心となる部分は被害者が立っていた場所だろうが、その周囲にも結構な量を噴き出したような痕が見られる。一体どうしたらこれほどの量を噴き出せるのだろうと疑問に思つてしまふ程だ。

「中心点が二つ……恐らく犠牲者は二人。こうして草むらの陰にあるという事はここに潜んでいたところを襲われたといったところでしょうか」

「足跡とかそついうものはないわね。消えてしまったのかしら」

襲つた主の痕跡は見当たらない。だがどちらから襲つてきたかは

おおよその推測は出来る。

「川にいる何かを待っていたか、攻撃を仕掛けるタイミングを窺っていたところをぱっくり、だとすると、こちら側からやって来たんでしょうね」

川を正面に森を背面に。

そういう位置取りをしながら茉莉が推測を述べる。位置としては先ほど自分達を通ってきた方角だが、ここはさっき見つけた蛇が通った跡があつた先。

すなわち蛇が進んだ先からこちら側へと向かってくる事が出来る。道なき道を音を立てずに進んでハンター達の背後を取り、襲い掛かったと推測できる。

「となるとやはり謎の存在は蛇か蛇竜か。これは増々グレイハブが濃厚かしら」

「でしょうか」

（しかし……奇妙ですね。ぱっくりと丸呑みした割にはなぜこんなに血痕が散らばってるんでしょうね？）

丸呑みしたならば血はそんなに出るはずがない。口内で噛み砕いたというならばその口から血が出るだろうが、血の飛び散りようからこれは立っているところにざっくりとやられた、と考えられるものだった。

となると丸呑みする前にその尻尾で攻撃を仕掛けた？ いや、戦いになっていないのにそれはないだろう。奇襲を仕掛けるならばそのまま捕食すればいいだけのはず。

（もしかして思い違いをしている？ やはりグレイハブではない何かがいるんでしょうか）

そんな風に考え込んでいると、

「……む？ この気配は……」

ふと何か近づいてくるような気配を感じ、茉莉が空を見上げる。すると川の向こう側の空からこちら側へと向かって飛来してくる紅の影が見えてきたではないか。それは悠々と空を舞い、川を越えて二人がいる森の方へと飛び、森の中へとゆったりと降下していく。

「どうやらお出ましまたいね」

森の中にいたおかげだろうか。奴は二人の姿に気づかなかつたらしい。

二人はお互い頷き合うと音を立てず、しかし迅速に森の中を駆け抜けて奴が降り立った場所へと向かっていく。気配は消されていない。奴は悠々と森の広場で羽休めをしている事だろう。

そこはさっきの広場と違い点々と木が生えているような感じではなく、森の中にぽっかりと空いたかのような広場だった。その中心に一際大きな巨木が生え、その空いた空間の空を覆うように枝葉を伸ばしているような感じだ。

つまり戦う場所はその巨木の周囲の空間という事になる。だがそれでも十分な広さを持つため、戦う分には問題なさそうだ。

原種もなかなか鮮やかな色合いをしていたが亜種になれば紅を中心とした森の中では目立つ色合いをしている。クア……と欠伸をかましながら体を震わせ、時折草むらに嘴を突っ込んで何かをついばんでいる。

紅彩鳥クルペッコ亜種。

それが今、二人に背を向けてリラックスしていた。

仕掛けるならば今が好機。草むらから飛び出す体勢に移りつつそ

れぞれ武器を抜くように手を添える。クルペッコ亜種の顔が向こう側を向いた瞬間、先に飛び出したのはやはり瑠璃だ。

音も立てずに疾走し、ヒドウンサーベルの間合いに入った瞬間に跳躍してその背中を両断する勢いでそれを振り抜く。それは狙い通りクルペッコ亜種の背中を斬り、着地しながら両足を薙ぐように振り抜き、腹を裂くように斬り上げて離れる。

「クエエエエエツ!?!」

突然の攻撃にたまらず悲鳴を上げ、羽をばたつかせながら瑠璃へと向くクルペッコ亜種の背後から静かに接近していた茉莉がその尻尾から背中へと貫くようにインペリアルガーダーを突き出し、更に引き金を引かれていたために銃口から溜められたエネルギーが充填されていき、指を離れた瞬間それが解放された。

斬られた部分が溜め砲撃によって焼かれ、追撃するように再度溜め砲撃が放たれる。

着地しつつインペリアルガーダーを素早く横に振ってギミックを発動させて弾薬を装填し、振り向きざまに薙ぎ払われるクルペッコ亜種の翼を感じ取って盾を構えつつそれを受け流していく。

「クエツ、クエツ!」

茉莉に向かつて嘴を何度も打ち下ろして攻撃を仕掛けていくが、全て見切って盾を構えて防ぎきり、反撃としてその胸めがけてインペリアルガーダーを突き上げていく。

「ふっ!」

胸、翼と何度も突き上げ、頃合いを見て後ろに下がって距離を取る。そのタイミングはぴったりだった。クルペッコ亜種が翼を打ち

合わせたのだ。

クルペッコ亜種の翼の先には電気石があり、これを打ち合わせる事で電気を発生させる事が出来る。更に何度も打ち合わせる事で強い閃光を放ち、相手の目をくらませることも可能だ。

茉莉に気を取られた隙を狙って瑠璃が接近し、翼にある電気石を狙って斬り上げるもそれはクルペッコ亜種が僅かに身を逸らす事で回避した。それだけでなく後ろに飛び退き低空飛行をし始める。

ばたばたと羽ばたいて風圧を巻き上げながら離れた所で滞空するクルペッコ亜種は一度息を吸いこんだかと思うと、粘度のある液体を三つ連続して吐き出してきた。

それは酸に近い効果を含み、属性に対する耐性が弱体化する代物だ。あれを受ければ電気石が発する力のダメージも増加してしまう。こちらにとって不利な状態になってしまう。

「っ！」

その軌道を見切り、瑠璃は避けるのではなく前に出ていく。身を屈めて頭上を通り越していく液体をやり過ごし、再び跳躍しながらヒドウンサーベルを振り上げて斬りかかり、クルペッコ亜種の頭上を取った。

だが、

「ケエエエエエエエツッ！！」

その喉袋を膨らませる程の大きな息を吸ったクルペッコ亜種が咆哮する。クルペッコと違い喉袋が強化され、発声器官が発達しているおかげでバインドボイスを習得しているのだ。

「っ、く……！？」

続けて攻撃しようとした瑠璃だったが、その咆哮の響きと本能に訴えかけてくる気に圧されて手を止めてしまう。クルペッコの亜種とはいえ、モンスターの発するバインドボイスは人族にとっては脅威だ。

理屈ではない。それは本能からくる恐怖で動きを止めてしまう。それに抗うには耳栓スキルでバインドボイスを防ぐか、強靱な意志で抗うしかない。

「ん、ぐぐ……………オオオオオオオオツツツ！！」

翼を広げて何とか羽ばたかせる事で体勢を立て直しながら瑠璃はその恐れを吹き飛ばすかのように吼える。そうでもしなければ硬直したまま落下するしか出来なかった。そうなればクルペッコ亜種に追撃を受けていた事だろう。

実際クルペッコ亜種は硬直している瑠璃へと攻撃を仕掛けようとしていた。

「舐めるなあッ！」

彼女を蹴落とすかのように頭上を取りながらその足を振るう。硬直していたらそれによって蹴落とされていただろうが、何とかそれをやり過ぎす事が出来た。

だが完全に頭上を取られ、体勢を立て直していく瑠璃をそのまま押し潰すように飛びかかってくる。

それを後ろに飛び退いてやり過ぎし、地面に着地していくクルペッコ亜種へと茉莉が攻撃を仕掛けていく。下がった頭をピンポイントに突き上げるようにインペリアルガーダーを振るい、連続して引き金を引いて砲撃を加える。

「クエエツ！？ クエツ、クエツ！」

一瞬悲鳴を上げたクルペッコ亜種だがすぐに攻撃態勢へと切り替え、翼を打ち合わせて電気石に刺激を与えだす。そのまま茉莉を挟み込むように翼を打ち合わせながら前へとステップした。

盾を構えつつ後ろに下がってやり過ぎすが、弾ける電気が盾にぶつかってくる。しかもクルペッコ亜種の攻撃は終わらず、またステップしながら茉莉へと追撃を仕掛けてくる。

重量のあるガンランスを構えながらの移動は鈍くなるのが常だが、茉莉の怪力のおかげである程度は鈍さを感じさせずに動ける。

だがそれでも躲せるだけ凄。二度目の攻撃もやり過ぎし、しかし三度目は追いつかれてしまい盾を構えてそれを受け止めた。そんな茉莉から自分へと意識を向けさせるために瑠璃が攻撃を仕掛けるも、クルペッコ亜種は尻尾を振ってそれを牽制しつつあらぬ方へと向き直り、羽をばたつかせながら走り出す。

逃げるつもりかと二人が後を追おうとしたが十分に距離を取ったクルペッコ亜種は振り返りながら電気石を打ち合わせ始める。そうして高められたエネルギーが弾け、周囲を多い尽くす程の強い閃光が発生した。

「ッ!?」

咄嗟に目を閉じながら腕で庇う二人だが、暗くなった視界をも白く染める程の閃光は動きを止めるには十分なもの。耳に聞こえてくるのは軽快なリズムで歌うクルペッコ亜種の声。

何とか目を開けて奴を見れば、喉袋を膨らませて声を上げるクルペッコ亜種の姿があった。周囲には茶色い粒子が躍り、歌に合わせて増幅していきクルペッコ亜種の中へと浸透していく。

「防御上昇の歌、ですね。少し厄介なことになりましたよ」

「でも関係ないわ。硬くなったって言うんなら、それをも斬る一撃

をお見舞いするだけよ」

「……ふ、流石ですね瑠璃。その脳筋さが今はありがたいですよ」

「……褒められてる気がしないわね」

「褒めてますよー間違いないわはつきりしつかりばつちり褒めてますよー」

「おい、こら」

ツッコミ入れようとしてくる瑠璃から逃げるように今度は茉莉が飛び出してクルペッコ亜種へと向かっていく。指は引き金に当てられ、銃口からは少しずつ高められていくエネルギーが発生している。当然正面から迫ってくる茉莉に気づかないクルペッコ亜種ではない。カツカツ、とまた電気石を打ち合わせ、あの閃光を再び発生させようとしたが、茉莉が軽く息を吸いこんで、

「ふっ！」

勢いよく火炎を口から放出する。いや、別にリオレウスらと同じように体内の火炎袋から生成した火炎を放出したわけではない。口元に集めた火の粒子を着火させて放っただけだ。

だがその軌道、火炎の生成を効率よく行うためのイメージの助長として息を吸いこんで思いっきり放出しているだけにすぎない。何もない所から作り上げるのは難しい。それを助けるための鍵が必要なのだ。

それが飛竜らのブレスの前触れと同じ「息を吸いこんで吐き出す」というモーション。

これを行う事ではつきりとした軌道を描いて火炎放射を行使する事が出来る。

クルペッコ亜種もまさかハンターが火炎放射を行使するとは思ってしなかつたようで、思わず動きを止めてその火炎をまともに浴びてしまった。

その隙を文字通り突き、溜められたエネルギーを解放させる。頭を狙って撃ち抜かれた溜め砲撃はクルペッコ亜種をノックバックさせるには十分なものだった。

また砲撃などの爆撃は相手が硬質化しようともどれだけ硬かろうともその爆風でダメージを与える事を可能とする。つまりクルペッコ亜種が先ほど自身を硬質化させたとしても、この砲撃を駆使すればダメージは与え続けられる。

すかさずクイツクリロードをして一発装填し、今度は胸へと連続して通常砲撃をしかけ、またクイツクリロード。最後に連続砲撃でよたついたところを溜め砲撃で締める。

そこでリロードをして弾薬を装填している間に溜璃が合流し、ヒドウンサーベルに纏わせた気を解放するように翼から胸へと薙ぐような気刃を放つ。

「はあっ！」

その気刃を牽制として懐に飛び込むと腹を斬り、両足を薙ぎ、ばたつかせる右翼の付け根と連続して斬りこんで錬気を溜めると、続けてそれを解放させるような連続斬りをお見舞いして錬気を解放させた。

黒い刀身に薄く纏われる白いオーラ。これが一段階目の解放を示すものだ。

連続して斬ったはいいが、やはり鱗や翼の硬度が上がっているのが刃を通して感じられた。ナルガクルガの素材を使用したこのヒドウンサーベルの切れ味の高さはいいが、かといって全てを斬れる程鋭いわけでもない。

それに太刀はその性質上硬い敵を斬るには向いていない。錬気を高めるために斬ってみたが、やはり気刃で斬った程の傷を負わせる事は出来なかった。

「閃剣」

しっかりと大地を踏みしめながらヒドウンサーベルを握りしめつつ一気に己の気を高めていく。褐色の彼女の気はヒドウンサーベルの刀身に纏われていき、高められた錬気と呼応して更に鋭い刃となる。

それを下段で構えながら身を低くし、振り向きざまにそれを一息に振り抜く！

「
角月翔！」
かくげつしやう

ヒドウンサーベルの刃は腰を斬り、その刃から放たれた気刃が弧を描いてクルペッコ亜種の背中を切り裂く。その一撃は硬くなつたクルペッコ亜種の毛を散らし、その下にある肉を裂いて血を噴き出させる。

「クエエエエツ！？」

その痛みにたまらず悲鳴を上げるクルペッコ亜種に二人は容赦をするはずもない。茉莉は側面に回り込み翼、それも電気石を狙って溜め砲撃を打ち込んでいく。とにかくこれを翼から離すか破壊しないと閃光を発生させられてしまう。

これを潰すだけでもこれからの立ち回りが良くなるのだ。チャンスがあるならば優先的に破壊しておきたい。

茉莉が左翼を、瑠璃が右翼を狙って攻撃を仕掛けていくが、クルペッコ亜種が体を震わせた後に息を吸いこみ、またバインドボイスの咆哮を上げる。それによってまたしても二人の体が硬直してしまい、咆哮に続けてまた喉袋を膨らませる程に息を吸いこむと、

「ヴオオオオオオオオオン！！」

獣のような声を辺りに響かせ始めた。それは森中に響き渡り、叫びに呼応して何かの音が遠くから聞こえてきた。この森にいる獣といえはアオアシラぐらいなもの。

つまりクルペッコ亜種はアオアシラを呼び寄せたのか。

ターゲットが一堂に会するというのは喜ばしいものではあるが、しかし少々めんどろな事になってしまった。

アオアシラがここにやってくると、二対二という構図になってしまい、それぞれ一人ずつ相手にする事になる。幸いなのが片方が飛竜ではないという事か。アオアシラならば一人でもなんとかなるかもしれないが、クルペッコ亜種を一人で相手にするというのはめんどろだ。

ここはアオアシラが来るまでの間に一気に体力を奪っておきたい。

「オオオオオオオオオオオオツツツ!!!」

何とか体の硬直を強引に解いた瑠璃がまた吼えながらヒドウンサーベルを振りかぶるが、クルペッコ亜種はそれを回避するように後ろへと下がりながら再び翼を飛ばたかせる。それに加えて二人が接近してこないようにまたあの液体を吐き出してきた。

しかし近づかずとも攻撃する手段を瑠璃は持っている。

すうっと息を吸って呼吸を整えつつ気を落ち着かせ、上段に構えたヒドウンサーベルを素早く振り下ろして気刃を放つ。続けざまに斬り上げ、薙ぎ、また振り下ろしと繋げていき、連続して気刃を放つ事で攻撃の手をやめない。

低空飛行をしている敵には閃光玉を投げて視界を奪いながら墜落させるのが一つの手段として挙げられるが、クルペッコ亜種の場合は奴自身が閃光を放つために耐性がついている。

そのため墜落させようと思えば飛ぶ気力を奪うだけのダメージを与えるしか出来ない。

飛来してくる気刃を避けようとするが体や翼を切り裂いてくるその刃に苦悶の声を漏らしていく。硬質化してもその気刃によって傷が増え、紅の毛に乗せするように赤が塗られていく。

「クエエツ、クエツ！」

このままでは墜落してしまうと察したクルペッコ亜種は地面に着地するが、それを狙っていた茉莉がいつの間にかクルペッコ亜種の背後に回り込んでいた。ギミックを開始させて砲撃を切り替え、高められたエネルギーを一気に開放させる。

溜め砲撃よりも高い威力、ガンランスの最大攻撃である竜撃砲。

それが一番負傷している背中から腹へと突き抜けるようにクルペッコ亜種へと襲い掛かり、その体を一気に焼き、破壊していく。毛は焼かれ、肉は弾けとび、次々と血が噴き出すさまは痛々しい。

「グエエエエエツツ！」

驚きと苦痛に悲鳴を上げるクルペッコ亜種だが、それでも奴は瀕死にはなっていない。竜撃砲は通用しているのだが、クルペッコ亜種の体力はまだ健在なのだ。嘴から吐息を漏らし、怒りの咆哮を上げるクルペッコ亜種の動きは少しずつ早くなり、背後にいる茉莉に向かつて尻尾や翼を振りかぶって振り払おうとしていた。

インペリアルガーダーが竜撃砲を放った後の排熱モードに入り、砲撃の強い反動とクルペッコ亜種の咆哮で硬直していた茉莉であったが、自分に向かってくるその攻撃を察知して盾を構えて防ぎにかかると。

「オオオオ」

「……この声は」

盾を構えながら耳に入ってきた微かな声に気づいて茉莉が視線を動かし、声の出所を探る。気のせいではなければ間違いなくここにはいない何かの声がしたはずだ。

その声は少しずつここに近づいてきており、同時に気配も大きく感じられ始めた。

一度クルペッコ亜種から距離を取り、インペリアルガーダーを構えなおしながらある一点を見ると、木々の間を抜けながら一つの影が接近してくるのが見えた。

四肢を使つてなかなかの速さでこの広場までやってきたそれは瑠璃と茉莉、そして自分を呼び寄せたクルペッコ亜種を見回すと、のっそりと起き上つて二足で立ち、低く唸り声を上げる。

その外見は熊ではあるが、青と白い毛皮と甲殻に覆われ、特に前足は突起が付いた一際硬い甲殻が鎧のように覆っているのが特徴だ。ハチミツを好物とし、東方の森の中でよく見かけられる牙獣種が――。

青熊獣アオアシラがついに姿を現したのだ。

「ヴオオオオオオン！！」

両前足を振り上げて威嚇するように吼えるアオアシラ。それを見て瑠璃が軽く舌打ちする。竜撃砲でクルペッコ亜種に大きなダメージを与える事は出来たが、まだ完全に追い込めるだけのダメージにはなっていないだろう。

どうする？ と視線を茉莉へと向けると、茉莉は小さく頷いて視線をクルペッコ亜種へと向ける。続けて瑠璃に視線を戻し、軽く小首をアオアシラへと振ってみせた。

それで瑠璃は茉莉が言わんとしている事を理解し、了解したと頷き返す。

ヒドウンサーベルを構えなおしてやってきたアオアシラへと接近しようとした瑠璃だったが、突如クルペッコ亜種が一鳴きすると強

く羽ばたいて上昇し始める。

「なっ、逃げる気!?!」

「っ……」

瑠璃が驚き、茉莉が冷静にインペリアルガーダーを離してポーチの中へと右手を突っ込み、ペイントボールを取り出してゆっくりと空へと上がっていくクルペッコ亜種へと投擲した。

それは腰元に着弾して桃色の液体を付着させ、強い匂いを発し始める。どうやら無事にその効果を発揮してくれたようだ。

それにしてもアオアシラが乱入した途端に逃げるとは、どうやらクルペッコ亜種は最初からその予定だったのかと茉莉は無表情ながらもクルペッコ亜種の行動に感心する。怒り状態になってもなお自分の身を守るためにアオアシラをけしかけて早々に退場とはいいい度胸している。

だがそれも自分が生き延びるための手段だ。十分に作戦としてはアリだろう。

それに茉莉達からすればアオアシラも討伐対象なのだ。ここで無視してクルペッコ亜種を追うなんてことは出来ない。

奴にはペイントボールをつけることに成功した。数時間はあの匂いと液体はクルペッコ亜種に付着したままだ。ここでアオアシラと交戦したとしても後を追う事は可能である。

「……仕方ないわね。さっさとこいつを殺つてしまおうじゃない」

「そうですね。少し切れ味を戻しておくんで、引きつけよるです」
「わかったわ」

インペリアルガーダーを拾い上げて広場の中心にある巨木へと後ずさりながら茉莉が言い、瑠璃はそれを承諾してアオアシラへと一気に接近していく。それを迎え撃つようにもう一度威嚇するように

吼え、振り上げた前足を横から殴りつけるように瑠璃へと振り下ろしていく。

それを見切り、頭上を通り過ぎていく前足を感じながらその胸を斬り上げ、脇から横っ腹へと斬り下ろしつつ側面に回り込んでいく。新米ハンターが相手にするようなモンスターとはいえアオアシラは熊であり、しかも上位個体だ。その前足の一撃はまともに受ければ人にとって致命傷になりかねない。その鋭い爪もそうだが、重い一撃は十分に人の頭蓋を砕きかねないパワーを秘めているのだ。

油断する事なく着実に攻めていかねばこちらがやられる。瑠璃はその持ち前の速さでアオアシラを翻弄しつつ斬りかかる事にした。そんな瑠璃の戦いを見守りつつ茉莉は巨木の下でインペリアルガダーに砥石を当てて切れ味を戻していく。先ほどの戦いでかなり砲撃をしたせいで切れ味が落ちてしまっている。

ガンランスはただ突くだけでなく砲撃をするだけでも切れ味を落としてしまう。ましてや竜撃砲をぶっ放せば一気にそれは下がる。そのため砥石は心もち大目に持ち込まねばならない武器なのだ。

水筒から水をかけて素早く刃を通して刀身を磨き、しかし視線は時折あの戦いへと向けてこちらに危害が来ないかを確認する。

そうしていた茉莉だったが、彼女のセンサーに奇妙な感覚が捉えられた。

何かが自分達をじっと見つめていたようなそんな感覚だ。

それはかなり抑えられた視線で、しかも気配もほとんど感じられない程に薄いものだった。だがそれはすぐに消え去り、何事もなく霧のように存在感がなくなってしまった。

(……………気のせい、でしたか?)

アオアシラがこちらに視線を向けたのか、あるいはクルペッコ亜種が離れた所からこちらを再確認したのか。それまではわからなかったが、たったの数秒の事だったために判別がつかなかった。

(今はこちらを優先させましょうかね)

気になるところではあるが今はあのアオアシラを処理しなければならぬ。これが終わればクルペッコ亜種の追撃だ。やる事は決まっている。

切れ味を戻したインペリアルガーダーを構えて立ち上がり、瑠璃を援護するために茉莉は走り出す。

「……………シュルル」

それは木の陰に身を潜んでその戦いを見つめていた。その姿は木の葉によって覆い隠され、その体の鱗や甲殻も緑を主体とした森の緑に溶け込む色合いをしている為に気づかれない。

口から舌をちらつかせ、顔を上げて空を見上げる。遠ざかっていく一つの気配と、鼻をくすぐるあの匂い。それを体の気と舌で感じ取りながらどの方角へと消えていくのかを分析したそれは、木の幹に巻きつけていた尻尾の力を緩め、その手を幹に掛けて体の向きを素早く反転させた。

続けて太い枝に両手をかけて一気に反動をつけると、そのまま振り子の運動を利用してその体を宙へと舞い上がらせ、数メートルの空中移動を経てその尻尾を別の木の枝に巻きつけて続けて弧を描いてまた宙へと舞う。

そうして移動を繰り返しながらクルペッコ亜種の後を追うその狙いはただ一つ。

「シュルルル」

体を回転させ、両手と尻尾で体を支えつつ地面に着地し、今度は草を掻き分けるように素早くその尻尾を動かして獣道を突き進むそれは、獲物を見つけた狩人そのものだった。

そんな存在が今まで近くにいた事をあの二人はまだ知らない。

戦いを好む蛇の魔物（前書き）

クルペッコ亜種が呼び出したアオアシラ。

当のクルペッコ亜種が離れてしまい、残されたサブターゲットを相手にする二人。

そして逃げ出したクルペッコ亜種を狙った存在は

その正体が判明する回。

戦いを好む蛇の魔物

「ヴオオオオオオン！」

鼓舞するように吼えながらただひたすらに前足で瑠璃に殴りかかっ
ていくアオアシラではあるが、そんな単調な動きでは速さを売りに
する彼女を捉えられなかった。

確かにパワーはある。あれを受ければただでは済まないだろう。

しかし瑠璃の目はしっかりとその動きを読み取り、どう躲せば当
たらないかを見切っている。そして躲しつつヒドウンサーベルを振
るえば自然と振るわれたその前足を自分で斬られにいくかの如く刃
が毛皮を切り裂いていく。

「グルルルル……！」

側面に回り込んだ彼女を押し潰すかのようにダイブするアオアシ
ラだが、それもまた素早く背後に飛び退いて回避し、顔を両断する
かのようにヒドウンサーベルを振り下ろしてやる。

「ゴアアツ！？　グオツ、ヴオオオオオ！？」

額から鼻先にかけてはぱっくりと開いた傷から血が噴き出し、鼻を
つく鉄の匂いと視界に薄く入り込む赤い液体にアオアシラが興奮し
たように吼えながら顔を掻き始めた。

そんな隙だらけなところを見逃さず、奴が苦手としている属性、
火を作り上げてヒドウンサーベルへと纏わせていく。刃にあらかじ
め己の気を纏わせる事で膜を作り上げ、その上に乗せるようにして
火炎を操作していく。

「すう」

ヒドウンサーベルを構えながら静かにそれを高めていく瑠璃を援護するべく、自分へと意識を向けさせるために茉莉が側面からその横っ腹へと勢いよくインペリアルガーダーを突き出す。

刃は抵抗なくその毛皮を突き破り、その中の肉へと入り込んでいき、引き金を引けばその中で弾薬が弾けて追撃を与える。その痛みと苦悶の声を漏らすアオアシラだが、先ほどから昂っている感情をそのままぶつけるかのようにがむしゃらに前足を振るって茉莉へと攻撃を仕掛けていく。

瑠璃と比べると遅いが、茉莉もまた冷静にその動きを見切っていた。先ほどよりも早く振るわれる前足を紙一重で回避し、受け流せるものは盾で流しつつカウンターのを決めるようにその胸へとインペリアルガーダーを突き上げる。

「っと、危ない危ない」

振り下ろしからのバックナックルを放たれ、側面から吹き飛ばされそうになるのを盾を構えながら地面を滑ってしまいが、それを堪えて体勢を立て直す。盾を持つ腕が痺れそうになる程の強い力。流石は獣……熊というべきか。

遙か昔から山の主と言われ、人に恐れられてきた獣。今でこそ実力あるハンターならば容易に狩れる相手ではあるが、一般人からすれば未だに恐れられる獣だ。そのパワーと見かけに反した速さで仕留めてくる上に、一般人はそれに対抗する手段を何一つ持たない。逃げたとしてもほぼ間違いない追いつかれ、捕食されてしまうのだから。

「グルルルル！」

舌を口から出し、涎を垂らしながら吼え続けるアオアシラの意識は完全に茉莉に向けられている。そのまま前足を地面につけ、四足の状態になると一気に地を蹴って茉莉へと突進を仕掛けてきた。

その巨体とは裏腹にかなりの速度で迫ってくるアオアシラをじつと見据え、奴の右側へとステップしてやり過ぎしながらまたその横っ腹へとインペリアルガーダーを突き刺す。

が、アオアシラもそれで終わらなかつた。ブレーキをかけて止まつたかと思うとそのまま後ろへと飛び退ってきたのだ。重量感のあるその体が迫り、特にアオアシラの尻が茉莉の体を吹き飛ばそうと襲い掛かってくる。

「っ！ ふっ……っ！」

一瞬の判断で茉莉は己の体を強化させるべく気を巡らせ、特に盾を強化させて身構えた。その瞬間、盾に凄まじい力がかかってその体がじりじりと背後へと押しやられていく。通常ならばその左腕が痺れるどころではなく盾を構える事も出来ない程の重さがかかっているのだ。

例え怪力だとしても、アオアシラのその体重がかかった一撃を支えられる程ではない。気で強化していなければ嫌な音を立てて骨が軋んでいたかもしれない。

だがこの危機は逆にチャンスでもある。

アオアシラは今尻もちをついている状態だ。茉莉が引き付け、この状況を作り上げてくれた。それを逃すわけにはいかなかった。

「炎剣」

体を低くして強く地を蹴れば、その姿は一瞬にして消え去り、彼女が通った後には燃え盛る炎の跡が尾を引いていく。それは一筋の軌跡を描き、気づけば瑠璃はアオアシラの側面で跳躍していた。

振り上げたヒドウンサーベルをアオアシラの肩に狙いを定め、ただ斬る事だけを念頭に振り下ろした。

「爪刃斬！」
そしはけん

左肩から腹へとかけて袈裟斬りにされたアオアシラはその口から勢いよく血を噴き出し、ぐらりと体を傾かせる。左前足はだらんと垂れ下がり、動かす事もままならない。斬られた傷は炎によって焼かれ、強引な止血はされているものの致命傷だった。

「ヴ、ヴォ、ヴォオオオオオオ……！」

それでもアオアシラは残った右前足で自分を斬った瑠璃に一矢報いようとした。残った力をその一撃に籠めるかのように右前足を振り上げ、瑠璃に向かって叩き落とす。

普通ならば躲けただろうが、アオアシラを致命傷へと至らしめた一撃の硬直があつたためにそれを躲す事は出来なかつた。反応し、それに対して何とかヒドウンサーベルを立てて気を巡らせる事で防御する事のみ。

しかしそれでもアオアシラのその一撃は瑠璃を吹き飛ばすには十分なものだった。まるでボールのように吹き飛ばされた瑠璃を見た茉莉はその無表情に僅かに涙みを浮かばせ、インペリアルガードーを握りしめて立ち上がった。

「終わらせませす！」

致命傷になっているアオアシラの左胸を狙うために回り込み、引き金を引き絞りながら刃を突き出した。それは傷口を更に広げるかのように肉へと沈み込み、その先にある生命にとって大事な内臓付近まで届く。

それを吹き飛ばすべく指を離せば、溜められたエネルギーが解放され、それが決め手となった。

心臓を吹き飛ばされたアオアシラは呻き声を漏らしながら横倒しに倒れ、それでも何とかもがこうとしたがやがて力尽きる。ずぶり、と音を立ててインペリアルガードを引き抜いた茉莉は一息つくくと、吹き飛ばされた瑠璃の方へと振り返った。

（流石は上位個体、といったところですか）

まだ僅かに痺れるような気がする左腕を気にしながらインペリアルガードを背負って走り出す。

瑠璃の姿はすぐに見つかった。何とか受け身を取る事は出来たらしく、立ち上がって軽く体をはたいている。そしてヒドウンサーベルを地面に置くと軽く体をほぐすように伸ばしたり屈伸したりし始めた。

それでどこかが特に痛むのかを把握し、ポーチから回復薬を取り出して手当の準備を始める。

「左腕、大丈夫なの？」

「ええ、何とか。とはいえ念は入れておきますが」

茉莉も同じように手当の準備を進め、レウスアームを取って回復薬を使っていく。濡らした布で一度痛むところを当てていき、続けてテーピングをして戦いに支障がないようにしておく。

茉莉も同じように痛む場所を回復薬を当て、残りは飲み干して体の中から治癒力を高めていく。

そう時間もかけずに手当てを済ませると、ある程度は痛みも和らいで気にならなくなってきた。元から他の人達と比べて自己治癒力が高く、痛み慣れているために最低限の応急処置で済むのが二人だ。

だがそれで手当てを放置しては戦いに支障が出る。だからこそ応急手当はハンター達と同じく行う。それぞれ体を動かしてみても問題なしと判断すると、倒れ伏しているアオアシラに向かつていき、剥ぎ取りナイフを取り出して素材を剥ぎ取っていく事にした。

それも数分かけて行い、使えるものはあらかた剥ぎ取ると一度黙禱を捧げてその場を離れる。

「さて、匂いを辿る前に……ヒドウンサーベルを研がなくていいんですか？」

「……そうね。結構斬ったしやっておくか」

「それがいいですよ」

クルペッコ亜種にアオアシラ、炎剣とかなり使いまわしてきたために切れ味が結構落ちているのは間違いない。座り込んで砥石と水筒を取り出した瑠璃の傍で茉莉はポーチから携帯食料を取り出し、別の水筒を取り出してドリンクを用意すると簡単な食事にする。

一定のリズムで刃を研いでいく瑠璃もいつの間にか携帯食料を口に含み、それを食べながら切れ味を戻していった。

そう時間もかけずに切れ味を戻し、刃を森に差し込む太陽の光を当てながら確認して鞘に収める。これで戦う準備は整った。後は逃げていったクルペッコ亜種を探し出し、完全に討伐するのみ。

それが終われば中断していた謎の存在についての調査とその討伐だ。

ペイントボールの効果はまだまだ余裕がある。集中して匂いを探れば、すぐにあの独特の匂いが感じられる。それを辿っていくだけの簡単な追跡だ。

何も問題はない。

その時は、そう思っていた二人だった。

離れた所で着陸し、負傷した体を癒す為に気分を落ち着かせて休息体勢に入るクルペッコ亜種を観察するそれは静かに草むらに身を潜めていた。あの二人が付けたペイントボールの効果はそれに対しても位置を知らしめることになってしまっていた。

それが持つ感知センサーの高さはその種族の特徴であり、狙った獲物は逃がさないという執着心もまたその種族の特徴に現れている。弱っている獲物ではあるが、それでも獲物は獲物だ。

その命を狩り、糧とする事が出来るならば何も問題はない。

静かに前進し、クルペッコ亜種の背後に回り込みながら手ごろな木を捜し、その幹に手を添えて素早くその身を枝の上へと躍らせる。漆黒の瞳はじつと獲物の動作を観察するだけでなく隙を見逃さない。だがその目は遠距離の様子を完全に捉えきれ程発達しているわけでもなく、絶え間なく舌を動かしてそれが捉える情報で状況を分析していた。

好機となればすぐにでも襲い掛かれるだけの前準備は怠らない。

既にその尻尾は収縮しており、バネの要領でその身を弾丸のように飛びださせるだけの力を溜めこまれていた。

「クア……」

「ッ！」

今、クルペッコ亜種が欠伸をした瞬間を見逃さず、縮んだ尻尾が

一気に伸び、その緑の体が音もなく空を奔る。ぐつと引かれた右腕の先には鋭い爪が伸ばされ、あの命を貫かんと狙いを定められている。

十メートル近くはあつたろう距離は一気にゼロへと縮められ、その凶刃はクルペッコ亜種の翼を貫くだけでなく胸にまで届いた。

「クエエエエエエエエエツ!?」

「シユルル……!」

本来ならばその細い首を刎ねるつもりだった。狙いが狂った事にそれは小さく呻くが何も問題はない。着地しながら体を捻って尻尾をその首に巻きつけ、ぎりぎり強く締め上げてやる。

首を絞められたことでクルペッコ亜種の嘴から苦しげな声が漏れるが、それでもクルペッコ亜種はもがく。何とか翼を動かすと何度も電気石を打ち合わせて強い閃光を引き起こした。

「……ッ!?」

それを見てしまった事で声にならぬ悲鳴を上げてしまい、尻尾の力が弱まってしまった。これを好機とばかりに尻尾めがけて翼を打ち合わせ、強い電気を発生させる事で尻尾にダメージを与えて振りほどこうとするクルペッコ亜種。

「シャアアツ!」

だがそれは尻尾を離す事はなく、逆に強く締め上げていく。それだけでなくその尻尾の力と腹筋を利用してその体を起こし、その勢いを利用して手を突き出してクルペッコ亜種の顔へと殴りかかった。視界は一時的に潰されているが、それは舌を動かしながらクルペッコ亜種の顔の位置を割り出して殴ったのだ。それで位置を完璧に

把握したそれは、続けてその顔へと噛みつきにかかる。

「クエエエツ!? クエツ、クエエエエエ!?」

今もなおギリギリと締め上げてくる尻尾に加え、顔の側面から一気にその顔を丸ごと呑み込まんとするその口の動きに更に命の危機を感じ取る。だがもがいても離れない尻尾に、顔に張り付かれては自分の攻撃手段など完全になくなったも同然。

呼吸が上手くできないために咆哮も出来ない。

手詰まりだった。

しかも食い込んでくる牙には毒があるらしく、顔半分感覚がなくなってきた。しかも呼吸が止まっていき、もがく力もなくなってしまう。

やがてそう時間もかからず、クルペッコ亜種の目に光はなくなり、がくと首を垂れるしかなかった。体を支える足の力もなくなってしまう、ゆっくりと地面に倒れ伏すクルペッコ亜種から離れたそれは軽く顔を振って閃光によって潰された視界をゆっくりと取り戻していく。

完全に死んだ事を確認し、呼吸を止めるだけでなく首の骨をへし折ってしまった尻尾をゆっくりと首から離すと爪を振り上げてその首を切断してしまう。

体から離れてしまったその頭をゆっくりと口内へと納めていき、軽く咀嚼しながらクルペッコ亜種の血肉を堪能する。

「……………」

ふとここに近づいてくる気配を感じ取った。それが二つだったため恐らくあのハンター達だと感じ取ったそれは残った体の部分を一瞥し、しかしすぐに判断を下してその身を再び草むらへと隠していく。

モンスターの血肉も糧とはなるが、それよりも人族の……それも若い女の血肉は他のものよりも一層美味である事をそれは知っていた。ならば、ここは一度退き、襲撃のタイミングを窺った方が得策だと判断したのだ。

現場にやって来た二人は啞然とするしか出来なかった。それも当然だろう。何せさつきまで生きていたはずのクルペッコ亜種がどういいうわけか死んでいるのだから。

頭を失い、何か鋭いものによって切断されたと思われる首からはまだ血を垂れ流している。また右翼から胸にかけて何か鋭いものによって貫かれたと思われる傷がある事にも気づき、これは件の謎の存在に襲われたとみて間違いないだろう。

だがこの貫かれた傷、というのが茉莉をまた思考の渦へと貶める。あそこにあつた蛇の通った跡が謎の存在のものだとするならば、この貫いた傷は何によってつけられたのだろうか。傷口から見てこれは明らかに爪痕だ。鋭く伸びた爪で翼、果ては胸まで刺し貫いたのだろうか。

また近くには明らかに蛇の尾によってつけられた跡が地面に残されている。しかも突然ここに舞い降りたかのような跡であり、これは恐らく離れた所にある木から一気に飛び出してきたものと考えられた。

(蛇の尾を持ちながら爪痕を刻む事が出来る存在？ そんなものか
いた……！)

近年になって確認された蛇竜種の中でも特異とされる存在。蛇と
いう特徴を残しながら、突然変異としか思えない進化を遂げた種族。
主に森の中や荒野に確認されるものの、その闘争本能から数多く
の調査隊を葬り、その存在をギルドに情報として届ける事が長年出
来なかったと思われたその蛇。

そしてそれが恐らく今近くにいる事だろう。クルペッコ亜種を完
全に食えることなくこの場を離れたとするならば、自分達がやって
来た気配を感じ取ったに違いない。

「瑠璃、気をつけて！ 恐らくこの近くに」

そう叫んだ茉莉の視界の奥に、ざらりと鈍く光る一對の瞳が草む
らの奥にある事に気づいた。奴はじつと自分達、特に周りをクルペ
ッコ亜種の死体の周囲を調べていた瑠璃を睨んでいる。

「え　　っ!？」

茉莉の叫びに顔を上げてその視線が茉莉へと向けられた瞬間を狙
ったのか、あれは勢いよく草むらから飛び出して瑠璃へと向かって
いった。その際に奴の気が漏れたのか、あるいは命の危機を第六感
が感じ取ったのか。

瑠璃は反射的にその場を飛びのいた。体術も何もあったものでは
なく、ただ後ろに向かって勢いよくダイブするだけだったが、その
おかげで奇襲を仕掛けてきたそれから逃げる事が出来た。

素早く転がりながら起き上り、背後を振り返って自分を襲ってき
た存在を見た瑠璃はただ驚きに言葉を詰まらせる。その目にあるの
は、「どうしてあれがここに居るのか」という事だ。

それは確かに蛇の特徴がある。だがそれは下半身のみ。腰から下は緑と土色の鱗がびっしりと覆われ、長さは目算で二〜三メートル程はあろうか。

では上半身はどうなっているのか。

その顔は蛇の特徴を残しており、側頭部には数センチの竜の角のような鋭い突起が生えている。そのまま視線を下に下げれば後頭部からずらりと生える背びれがある少し長い首があり、肩と胸がそこにあった。それはまさしく蛇にはないものであり、逆に大抵の陸上生物ならば持ちうる身体の一部。

生物としての上半身がそこにある。

「シユルルル……」

口から舌を出し入れしながら奴は軽く体をほぐすように首を左右に振り、両手に伸びる爪を軽く音を立てながら打ち合わせていた。上下に打ち合わせたり、あるいは爪同士を合わせたまま横にスライドさせて磨いたりとしながら視線を瑠璃、茉莉と交互に見やっっている。

もう隠れる必要がないと判断したのか、まるで観察するかのよう
に余裕を見せて二人の出方を窺っている。

闘蛇たうだナーガ。

それが奴に付けられた名だ。

それはただ捕食するというだけでなく、奴のその闘争心にこそつけられた名。その特異な進化によって得た両手、その尻尾を駆使して敵を追い込んでいく程のパワーと闘争心により、調査隊やギルドナイト達をことごとく葬ってきた過去にある。

戦いを好み、敵を観察して状況を把握する思考力、敵が強力ならば昂る性格とまさに戦う者としての在り方を見せたその姿。

それこそがナーガの一番の特徴だった。

「闘蛇ナーガ……よもやこんなところにいるとは思いませんでしたよ」

「やばいの？」

「個体差によりますが……やばいんじゃないですかね？ いったいいつからこの世界に存在しているのか知りませんが、近年ようやく情報が集まってきた種族で多くのハンターやギルドナイトを返り討ちにしてきた存在ですよ」

「へえ……それはやばいわね」

冷や汗を流しながらも瑠璃は小さく唇の端を歪めている。その手はしっかりとヒドウンサーベルの柄へと当てられており、いつでも抜ける状態にあった。どうやら退くという選択肢はないらしい。

まあ、それしかないだろう。

ついにメインターゲットが現れたのだ。戦わずして退くという選択肢は二人にはない。

謎の存在がナーガであると判明した以上、その特性からしてこのまま放置するという事は二人の心が許さない。こいつをのさばらせておけばこの先も多くの犠牲者を生み出してしまふ。それは避けなければならぬ。

それにギルドナイトが向かってきていると聞いているが、ナーガという種族はそのギルドナイトを返り討ちに出来るだけのポテンシャルを秘めている。

このナーガの実力がどれほどのものかは完全に把握できないが、刃を交えればある程度は把握できるだろう。ここは一度やり合ってみなければならぬ。

例え討伐に失敗して撤退したとしても、ナーガである事とその実力を伝える事が出来ればいい。

とりあえずやるだけやってみるしかないか、と茉莉はインペリア

ルガーダーに手を伸ばし、身構える。そんな様子を観察していたナーガは僅かに目を細めて伸ばしていた爪を一旦短くし、軽く音を鳴らすようにして手を開閉させる。

その様子がまるで嘲笑しながら挑発しているかのように見えた瑠璃はぎりっ、と歯噛みしてヒドウンサーベルを抜き放ち、一瞬にして気を纏わせてナーガに向けて気刃を放った。

これまでたったの数秒。

挑発に乗った事とはいえ、まだ飛び出して斬りかかっていった、ということをしなかっただけでも瑠璃は抑えた方だろう。だがその攻撃は見事な速さだ。突然の攻撃にナーガも一撃は貰っただろうと思われたのだが、

「……………」

ナーガを袈裟斬りにするはずの気刃は、尻尾を動かして上半身の体勢を崩さずに斜め後ろに蛇行するだけで躲された。その行動に驚きを隠せないまま、ナーガはまたにやりと笑ったかのように口を歪ませながら着実に二人へと距離を詰めてくる。

「シャアッ！」

尻尾を巧みに使って軌道を読ませないようにしながら接近してきたナーガの素早い右突き。それを瑠璃は一度距離を取るように後ろへと飛んだが、ナーガはそれを把握したように次の攻撃を放っていた。

何とその場で尻尾をぐるんと回転させて着地しようとする瑠璃の足元を刈るように薙ぎ払ったのだ。

「くっ……………!？」

何とか翼を広げて羽ばたく事で着地する事なく滞空する事でその足払いを受ける事はなかったが、更にナーガは攻撃を繋げていく。前のめりに倒れながら両手を地面に付けて体を支えると、そのまま下半身を上げて回転する。

そうすれば長い尻尾は遠心力をつけて滞空している瑠璃へとまるでしなる鞭のように襲い掛かっていった。

「が……っ!？」

避けきれずにその一撃を受けてしまい、瑠璃の体が吹き飛ばされてしまう。「瑠璃!？」と叫ぶ茉莉だったが、ナーガの視線がその叫びに反応して距離を詰めてきていた茉莉に向けられた。

一度牽制するように茉莉にも尻尾を振るうと、両手で一気に地面を押しやる事で一度宙に舞い、砂煙を小さく巻き上げながら着地する。

「牽制ならばこちらも……!」

自分の周りに火球をいくつか展開させて一気に放出する。小さなボールほどの大きさの火球がナーガを取り囲むようにして向かっていき、突然の炎に小さな驚きを見せるナーガはそれによって動きを止めてしまった。

大きさが大きさのため大したダメージにはなっていないだろうが、ナーガが動きを止めてくれればそれでいい。これを機に茉莉は一気にナーガへと距離を詰め、インペリアルガーダーを突き上げてその胸を貫かんとした。

しかし刃は薄くしか胸を貫かない。その鍛えられた胸筋が磨かれた刃を防ぐほどに硬いのだ。ならばと引き金を引いて砲撃するが、ナーガはそれに怯むことなく右腕を振って茉莉を弾き飛ばそうとした。

それは構えられた盾によって衝撃を殺されるが、それでも彼女の体は数メートル地面を滑ってしまう。しっかりと大地を踏みしめて防御体勢を取ったというのに、ここまで滑ってしまうとはどれだけのパワーを秘めているというのか。

アオアシラ以上の力にまたしても左腕が痺れてしまい茉莉は無意識に唇を噛みしめる。だが奴の攻撃は終わっていない。盾の陰からナーガを見ると、インペリアルガーダーを握りしめている右腕を狙って左手を引き、突き出そうとしているところだった。

咄嗟に盾でそれを防いだ茉莉だったが、素早く左腕を引いて右腕を素早く突き出して茉莉の側面から腹を狙った一撃を放ってきたのだ。

(フェイント!?)

躲す事など出来るタイミングじゃなかった。このままでは爪によって貫かれる、と感じた茉莉がこの短い時間の中で出来た事は、縦に持っているそれを横向きにして何とか防ぐことだった。

だがナーガの爪は盾を僅かに貫通し、茉莉の左腕のレウスアームを削り取っていく。

「シュルル……!」

仕留めそこなったか、と唸るナーガだが素早く右手を引いて目障りな盾を茉莉の手から離すべく引いた左腕を勢いよく振り上げた。横向きにされた盾を空へと舞い上げるべく放たれたアッパーはナーガの狙い通り茉莉の手から離れてしまった。

がら空きとなってしまうた茉莉に引導を渡すべくとどめの一撃を放たんとするナーガ。しかし茉莉はまだ諦めていない。ここで死ぬわけにはいかないと右手に持つインペリアルガーダーの銃口をナーガへと向けた。

そこにはエネルギーが溜めこまれており、引き金に当てていた指を引けば溜め砲撃がナーガの顔面で爆発する。

「シャアアツ!?!」

突然の反撃にたまらず悲鳴を上げ、その隙に茉莉は横に飛んでナーガから距離を取った。盾は彼女から左側数メートル先に転がっており、すぐにそれを回収して構えなおす。

「シャルアア　っ!?!」

茉莉を追おうとしたナーガではあるが、接近してくる瑠璃を感じ取って振り返る。そこにはヒドウンサーベルを振り上げる瑠璃の姿があった。防御体勢を取るのかと思いきや、また尻尾を巧みに使ってひらりと躲し、だがそれでも瑠璃は攻撃の手を止めない。

振り下ろしたヒドウンサーベルをそのまま突き出してナーガの腹を貫こうとするも、インペリアルガードと同じく浅くしか貫けない。

しかしそれでもいい。

牽制するようにヒドウンサーベルを振るいながら距離を取るようになり、しかしそれを逃さないようにナーガが尻尾を伸ばす事でそれに従って上半身が瑠璃へと迫り、大きく開かれた口が瑠璃を噛み付こうとしている。

「ちいっ……!」

咄嗟に足元を爆発させ、その爆風を利用して体を浮上させた上に翼を飛ばたかせてナーガの頭上へと逃げる。ガチン、と歯が打ち合わされたような音を響かせたナーガがじろりと頭上を見上げながら体を戻していき、滞空している瑠璃を観察しながら舌を震わせる。

（なんて奴……これがモンスターだったの？　まるで武術を高めた人みたいじゃない！？）

隙を窺い、足払いや得物を狙って相手の守りを崩し、がら空きになったところを狙う攻撃。かと思えばその力に物を言わせて強引に突破したり、あるいはその尻尾を使った奇襲を行使したりと技も多彩。

攻撃だけでなく守りも見事なもの。刃を通さない筋肉にこれまた尻尾を使った回避術。

まるで武術の達人を相手にしているかのようだ。

二人の顔に苦い表情が浮かび、改めてナーガという存在に恐怖して冷や汗を流す。そんな感情の揺らぎを感じ取ったのか、ナーガはまた嘲笑するように口元を歪めながら両手の爪を伸ばしてまた打ち合わせる。

「シユルルル……シャルア！」

首を揺らしながらまるで舌なめずりするように打ち合わせた右手の爪を口元に近づけながら滑らせていった。それもまた嘲笑であり、加えて挑発だった。

お前たちなどに自分が殺せるものか。

じっくり鬪るようにして仕留めてやるのか？

そんな風にあの見下したような目が語っているかのようだった。

当然瑠璃の顔に朱が入り、ぎりぎりど歯噛みしながらヒドウンサーベルを握りしめている両手が震えている。今にも飛び出しそうな彼女に茉莉が気づかないはずがない。

「瑠璃！ 堪えてください！ そんなことしてもあれには通用しませんよ!?」

「ッ、わかってるわよッ!」

声を荒げながら返す瑠璃ではあったが、あのまま声を懸けなかつたら本当に滑空して斬りかかっていきそうな雰囲気だった。瑠璃が来なかったことにナーガは「ケッ」と舌打ちするかのように鳴き、軽く息を吸いこみ始めた。

「カアアアア!」

紫色の異臭のするガスが放出された。その色合いと匂いから明らかに毒ガスである事が容易に察知できる。鼻と口を押えながら二人はナーガから距離を取るのだが、当然ナーガはそのガスを突き抜けて二人へと迫ってくる。

狙いを定めたのは茉莉だった。素早く蛇行しながらどちらから攻撃を仕掛けていくのかを悟らせず、タイミングを見計らって尻尾の筋肉だけで低く跳び上がり、また軽く息を吸って茉莉へと毒ガスを放出していく。

どうやら茉莉が武器のせいで瑠璃よりもスピードがないという事を理解したらしい。その読みは当たっているが、それでも茉莉もまた家族のハンターと同じくスピードがあるという事はナーガは読めなかったようだ。

狙いを定められたと察知した茉莉は防戦に回るために素早くインペリアルガーダーを背中に戻していたのだ。インペリアルガーダーを構えない事で体にかかる負荷はある程度軽くなる。

その上で回避に専念すれば、瑠璃に迫るだけの速さを発揮できる。

「……………」

毒ガスを吸わないように守りながら茉莉はナーガに背を向けて疾走する。助走をつけて飛翔し、距離を取ってからナーガに振り返れば、着地と同時に両手を地面に付けて逆立ちし、そのまま勢いを殺さずに両腕の力で飛び上がってきた。

「なっ!?!」

そのまま体を縮めて前転したまま茉莉へと迫ってくるのではないかと狙いも正確でその体全体での体当たりにより茉莉は反応が遅れてしまい、左手に持つ盾を構えて気を込めるしか出来なかった。

そんな彼女へとナーガは体全体でぶつかり、茉莉の防御に亀裂を入れる。勢いの乗ったナーガの回転アタックは防御力を高めた茉莉の体勢を崩すには十分な威力を持っていた。それに茉莉の左腕はナーガのパワーによって少しずつダメージを蓄積させているのだ。ここで全身の体重とパワーを乗せた一撃を完全に防ぎきれぬものではなかった。

盾に当たって弾かれたナーガはもう一度勢いをつけて前転し、強くしなった尻尾が茉莉を地面に叩き落としてしまう。

「かつ、は……!?!」

受け身も取れずに地面に落下してしまった茉莉は空気の抜けたような声を漏らしてしまった。ただ落下しただけでなく背負っているインペリアルガードの事もあり、体にかかったダメージは前後から来てしまっている。

レウスシリーズの守りがあるとはいえ、これは厳しいダメージになっってしまった。

「茉莉ッ!?! くっ、このおおおおおおお!?!」

「シユルルル」

茉莉を叩き落されたことでついに堪忍袋の緒が切れてしまったのか、ヒドウンサーベルを振り上げる茉莉の顔は烈火の如く染まり、怒りに塗られている。そんな彼女の怒りに呼応しているのか、ヒドウンサーベルには轟々と燃える炎が纏われていた。

今まで以上の速さでナーガに迫る瑠璃を見てもなお、ただナーガは冷静さを保ちながら構える。

すれ違いざまに辻斬りするかのようになり抜かれたヒドウンサーベルは、またしても蛇行するだけで回避されてしまった。いや、今度は完全に回避しきれていなかったらしい。その腹が薄く斬られ、その周囲が焼かれている。

続けて振り返りながら薙ぎ払ってみせると、両腕を交差させてヒドウンサーベルを受け止めてみせた。すかさずその刃を掴み、ぐんぐんと引き寄せながら地面に落として瑠璃の体勢を崩させる。

当然掴んでいる手は紅蓮の炎に焼かれているだろうが、その熱さなど気にした風もなくナーガはただ瑠璃を攻め立てるのみ。

「く、のおおおッ！」

体勢を崩した瑠璃だがすぐに踏ん張って地面に倒れるようなことはせず、ヒドウンサーベルを引き戻そうとするのだが、当然ながらナーガのその力に敵うはずもない。ならばとヒドウンサーベルを纏わせている炎を強くさせ、それだけでなくそれを操作させて腕、胸、顔へと炎を伸ばしていった。

「シユルアッ!？」

まるで意志を持っているかのようにナーガへと迫っていく炎にナーガは驚きの声を漏らしたが、それでもヒドウンサーベルを離すようなことはしなかった。

「シャルアアアア！」

ヒドウンサーベルを抑えつけたまま空いた左手で瑠璃を串刺しにせんと攻撃を仕掛ける。炎に焼かれようともしも攻撃する意思を消さないナーガのその執着心は敵ながらあっぱれもの。

目の前に獲物がいるならばその命を狩り尽くす。

ナーガはまさしく狩人ハンターそのものだ。

だからといって大人しく狩られてやるほど瑠璃は落ちぶれてはいなかった。どうあつてもヒドウンサーベルを離さないというならばそれでもかまわない！

「ッ！」

瑠璃は握りしめていたヒドウンサーベルを離し、両手に気を込めながら自分に伸びてくる左手を体を捻って回避しながらナーガの側面に回り込みつつ距離を詰めた。

「っ！？」

「あの人直伝の技をその身に受けてみなさい！」

圧縮した気を右手に収束させ、それをナーガの体に殴りつけながら解放させる！

「獅吼破！」

轟ッ！ と音を立てながらナーガにぶつけられた気。それも闘気はナーガの鱗を突き抜けて内部にまでダメージを伝えていく。思わぬ攻撃とその闘気の勢いにナーガの体は数メートル吹き飛ばされてしまった。

すぐに体勢を立て直したようだが、それでも突き抜けた衝撃はナーガにとっては思わぬダメージだったようで、左手でその部分に触れてダメージを確かめている。

その隙に落としたヒドウンサーベルを回収した瑠璃だったが、その刀身を見て軽く舌打ちしてしまう。

どうやら思った以上に火炎の威力を上げてしまったようで、若干刀身が焼けてしまっていた。怒りに任せて炎を操った影響は免れず、ヒドウンサーベルを自分で余計に傷つけてしまったらしい。

ちらりと肩越しに茉莉に振り返ってみると、彼女は何か起き上っていたようだが体にかかったダメージは確実に彼女からスピードを奪っていた。ここは一時撤退して体勢を立て直したいところではあるが、果たしてあのナーガが大人しく見逃してくれるのか？

答えは否。

二人に休みなど与える事などありえない。

確実に追いかけてきて追撃を加えてくる事だろう。完全にナーガは二人を次なる獲物として認識しているはずだ。

(なにか突破口があれば……！ それさえあれば撤退できるはず！
でも、どうやってそれを作り上げたらいいの？)

ヒドウンサーベルを構えながらナーガの様子を窺いつつ茉莉を庇うようにすり足で位置を取っていく。ナーガもダメージの確認を終えたらしく、舌を動かしながらじりじりと距離を詰めてきていた。

(きっかけ……そう、小さなことでもいい。きっかけさえあればきつと道が拓けるはず！ 小さくて細い糸のような道だっていい、それが出来ればあたし達は生き残れるはずだ……！ その道を見逃さずに駆け抜けてみせる！)

まさにそれは神に祈るかのよう。

その体が小さく震えているのは命の危機が迫る恐怖によるものか、あるいは不甲斐ない自分に腹を立てているのか、はたまたナーガに対する怒りがまだ残っているのか。

それは瑠璃自身にもわからなかった。

それだけ彼女の心はかき乱されていた。

しかし、それでも確固たる意志があった。

生き延びる事。

こんな所で死ねないという揺らがない意志が彼女には確かにあったのだ。それは茉莉も同じであり、ふらつきながらも何とか立ち上がり、荒い息をつきながら機を探っている。

状況はどう見ても二人の劣勢。

いつナーガによってその命が刈り取られてもおかしくないものだった。

それでも二人は諦めない。何としても生き延びてやる、と強い眼差しでナーガを睨み付けていた。

その確固たる意志に運命の女神が微笑んでくれたのだろうか。

ナーガの視線が何かに気づいたように森の中へと向けられた。

二人もまたその何かに気づいて、釣られたように視線だけ動かして森へと向けてみる。

「あー……僕は今どこにいるんだろう？」

この緊迫した状況に似合わない腑抜けた声でぼやきながら、一人の青年が森の中から出てきたではないか。ぼりぼりと頭を掻きなが

らいかにも旅人と言った風な出で立ちをしたその青年は、暗い青の瞳をこの戦場へと向けた。

ぼさぼさな茶髪に添えていた右手だけでなくその体も硬直し、当然ながらナーガや二人もまたまさかの展開に硬直してしまった。

「あれ？ 修羅場？」

呆けたような声を漏らした瞬間、

「シャアアアアアアアアアッ！！」

いち早く硬直から解けたナーガがその乱入者に向かって吼えたのを見た瑠璃がその身を反転させて一気に茉莉に向かって疾走する。

茉莉も瑠璃の行動を見てすぐにポーチに手を伸ばし、一つの玉を取り出した。

「シャルアッ！？」

瑠璃が離れていくのに気づいたナーガが二人に視線を戻し、逃がさないとばかりに一気に距離を詰めていく。だがそんなナーガへと茉莉が玉についているピンを抜いて投擲し、両手を伸ばして茉莉の体を抱き寄せた瑠璃に体を預ける。

その彼女の背後で玉は弾けて強い閃光を発した。

強い閃光が辺りを包み込み、それを見つめていたナーガの視界はまたしても白く塗り潰されてしまう。

「おい、そのの！ とつとつと逃げるわよ！」

悲鳴を上げて目を覆ってもがくナーガをよそに、肩に担いだ茉莉を支えながら疾走する瑠璃は同じように目を抑えて、「目がっ、目が

あああああ！？」ともがいている青年に向かって怒鳴る。

「っておい！？　なんであんたまで閃光にやられちゃってんのよ！？」

「ああ、すみません……閃光玉だったこと言わなかったせいですわー」

「あゝあゝ あああ、もう！　おらっ、暴れんじやないわよ！」

このまま放置しておくわけにもいかず、瑠璃は舌打ちしながら疾走しながら左手で青年の体を抱え上げ、同じように肩に担いで疾走し続ける。

「おお、姉さんかつこいいですよー」

「な、なんだなんだあ！？　いつたいどうなつてええ！？」

「うっさい、黙れ！　っか年頃の乙女に二人の人を抱えさせる状況ってどうなのよ！？　生き延びる事が出来るチャンスを願ったけど、こんなの望んでないつての、ちくしょおおおおっ！」

運命の女神は微笑んでくれたようだが、少しばかりいたずら心が過ぎるんじゃないだろうか、と瑠璃は愚痴らずにはいられなかった。森の中を疾走しながらばやし続ける瑠璃に、彼女に抱えられながら背後をじつと観察し続ける茉莉はぼそりと呟いてみせる。

「年頃の乙女はそれをやってのけるだけの怪力は持ってませんよー」

「同じくらいの怪力を持つてる奴がどの面提げて言ってるんだ、ごる

あ！？」

「え？」

「あんだだあ・ん・た！　置いていくわよ！？」

「はっはっはー、それは困りますねー。どうぞ、頑張って走り続けてください」

「まったく……こんな時までいつも通りよね、あなたは」

「それが私ですよ」

「おおおお、揺れる揺れる!? 一体何が起きているんだい!?
っていうか、ここは本当にどこだーい!?!」

「あなたはもう黙ってる。あとで事情聴取してやるから」

そんな愉快的な荷物を抱えながら、何とか瑠璃は戦場から撤退する事が出来たのだった。

本当に戦場というものは何が起こるのかわからない。それでも生き延びることが出来ただけでもこの運命に感謝せずにはいられなかった。

戦いを好む蛇の魔物（後書き）

正体はナーガでした。

一部のゲームにも敵として出てきたり、某ゲームじゃ育てて戦わせたりする事が出来るこのモンスター！。

戦いを好む、という設定はこの育成ゲームの設定を引用しています。

最近のオリジナルって蛇が多くない？ と感じているかもしれませ
ん。

確かにそうです。

何といたしますか蛇って敵として出るといのが何となく好きなんです
ね。蛇もちよつと好きだったり。

モンハンの世界の大型モンスターって獣とか少くない？ という
思いがあり、でも飛竜を狩るってのがメインだからしょうがないな
！。

じゃあ竜に近い存在、蛇はどうよ？ と派生した結果です。

といってもナーガって蛇というより蛇の魔物ですね……。 （深いこ
とは気にしないようにしておきます）

さて撤退してしまった双子ともう一人。

ナーガとの戦いはどうなってしまうのか。

それは次回。

奇妙な情報通の青年（前書き）

ナーガとの戦闘は一時撤退。

その際に救出してきた青年は果たして何者なのだろうか。

執筆していたら長くなってしまったためキリのいいところで二つに分割いたしました。

奇妙な情報通の青年

数分かけて森を駆け抜けた瑠璃はやがて開けた森にある湖までやってきていた。なかなかの大きさをした湖であり、端に視線を向ければ先ほど調査した川に繋がると思われる水の流れを確認できる。恐らくここはあの川の上流と思われる。

抱えていた青年を軽く放り、茉莉を地面に下ろしてやると、

「はあああ……」

と大きく息を吐いて少しふらついた足取りで湖に近づいていった。その水質を確認して軽く手を沈めて水を掬うと、それに口をつけて飲んでいく。

茉莉もポーチから回復葉グレートを取り出して中身を一気に飲み干していった。背負っているインペリアルガーダーを横に置き、一度楽な姿勢を取ってふう、と息を吐いて体を休めている。

そんな二人をよそに、放り出された青年は目を擦って視界が戻ってきていることを確認すると、辺りを見回してまたそのぼさぼさな茶髪を掻き始める。

「えーつと、本当にここはどこだい？」

「……はあ、え？ 知らないわよ。適当に走り続けたんだから。っというか、あんたホント誰？」

一通り水を飲んで喉を潤した瑠璃が口元を拭いながら振り返り、青年の問いに答えつつ逆に問いを投げかけた。

「いやー、誰とも知らぬ人をここまで拉致してくるとは……」

「しょうがないでしょ!? あのまま放っておいて殺られた、なんて事にでもなったら祟られそうじゃないじゃないの!」

「はっはっは、言ってみただけですよ。……んで、どちら様です?」

「いやあ、なかなか愉快な娘たちだね。……こほん、僕は巽^{たつみ}。ちょっとした情報屋、みたいなものさ」

そう言いながら懐を漁り、しかし何かを探すように探す手は何も見つけられなかったようで、「あれ? どこいったかな?」と両側の懐を探し続ける。しばらく探る手を動かし続けたようだが、「うーん、見つからないなあ。ごめんね」とぺこぺこ頭を下げてくる。

「情報屋、ねえ……じゃあなんであんな所に現れたわけ?」

「なんで、といわれても……ははは、困ったなあ。ただ道に迷っただけだよ。なんでもこの辺りに謎の存在が猛威を振るっているって話じゃないか。これは調べる価値があるな!とやって来たはいいけど……ははは、困ったものだねえ」

道に迷ってあんな所に現れた、と。これはこれは運の悪い人だ。しかもそれでナーガとばったり出会ってしまうなんて不運以外の何物でもないだろう。恐らく自分達がいなければこの巽という青年もまた犠牲者の一人に加えられていたに違いない、と瑠璃は思う。

見たところ巽は大して強くないように思える。体つきはいいようだが戦う者としての気迫がない。一般人よりも少し上くらいだろうか、と瑠璃は分析した。

「ふむ……情報屋という事は今までいろんなことを調べてきたんですよね? 例えば……辻斬りに関する事とか」

「もちろんさあ」

にっと笑って彼は背負っていた鞆から手帳をいくつか取り出して

中身を確認していった。恐らくそこには今まで集めてきた情報が記されているだろうと二人は思ったのだが、「あっ」と巽の手元が狂ったのかいくつかの手帳が地面に落ちてしまう。

ばらばらとページがめくれながら落ちていくその手帳を慌てて拾い上げていく巽。茉莉もそれを見過ごせず、巽と一緒に手帳を拾い上げていくのだが、その手帳が開いている為にその中身が見えてしまふのはしょうがない。

(……？ 戦いくアイルーの集落、歴史の裏で暗躍した忍の一族。各地でひっそり確認され始める蛇竜種に砂漠で人や魔物が食い荒らされる謎の事件。……ふむ？)

「っと、あー！？ ちょ、ちょっと、困るよー」

茉莉がないように目を通しているのに気付いた巽が慌てて手帳を回収していく。しかし色々気になる点が書かれていたように思える。特に確認され始める蛇竜種という点が。

「もしや、蛇竜種……ナーガに目をつけていたの？」

「……うーん、そうだね。本当にナーガがいるのかどうかはわからなかったけれど、まさか本当にナーガがいるとは思わなかったねえ」

「一歩間違えれば死にかけていたのに、なかなかの肝っ玉ですね」

「いやあーあっはっはっは、今までもこういうことはあつたけれど何とかこうして生き延びてきたからねえ」

「悪運が強いってことなのかしら」

ジト目になりながらいつの間にか瑠璃もまた一つの手帳を手にした。どうやら彼女の方にも転がっていったらしい。彼女の視線はちらっと手帳に向けられており、ざっと内容を確認している様子だ。

（最後の星の伝説、地方で悪政を行っていた領主たちが次々と死んでいく事件、盲目の剣士に剣豪アイルーに破壊の焰？）

「あーっと、それも僕のだよー。っと、ん？ よく見たら確かそれだよそれ」

瑠璃から手帳を返してもらい、ページをめくっていった目的の情報を見つけ出したらしい。他の手帳を鞆にしまつと手帳の情報を確認しつつ話し出した。

「辻斬りにやられた被害者たちの傷の様子だとね、傷は刀傷によるものだということ。しかも先日殺された斑鳩飛翼流の人は致命傷の傷を三つ負わされていたんだね。わかる人ならばそれが秘剣・燕返しによるものだって事がわかるねえ」

「燕返し、ですって？ んなバカな。それってそう簡単に習得出来るもんじゃないでしょ？ っていうか、聞いた話じゃそれって殺された人が習得しているって話じゃなかった？」

「そうだねえ。でも、傷を見る限りじゃそれは間違いなく燕返しによるものさ。それがある以上、辻斬りはかなりの剣の腕を持っているという事になるねえ」

どこまで調査しているのかはわからないが、負傷した傷についてまで調べられたのだ。情報を集めるといふ点においてはもしかすると巽は優秀なのかもしれない。

しかしそれでも気になる点はある。

「他の犠牲者の傷は？」

「一太刀。それで致命傷が多いらしいよ。首切断、上半身分断、心臓を一突き。これらが目立つかな。でも中には流派の技によるものと思われる傷が確認できたところねえ。……でも、これ以上詳しい事は言えないなあ、ごめんね」

あつはつは、と苦笑しながら頭を掻くその姿は人のいい青年にか見えない。一体どれだけの情報を集めて記録しているのかはわからないが、彼の言葉に嘘は感じられなかった。

しばらくそんな異をじつと見つめていた茉莉は口元に指を当てて考え込み、一つ質問をしてみる事にした。辻斬りの情報はこれ以上出せないというならば、別の情報について訊いてみよう。

「では、戦アイルーとはいったいなんです？」

「戦アイルー？ こっちは剣豪アイルーって見えたけど」

「あちゃー、それも見えちゃったのかい？ いやあ、参ったなあ…

…」

本当に困ったように頭を掻く異ではあるが二人の視線がそれを語れ、と言わんばかりの強い眼差しだったために、やれやれと首を振って別の手帳を開いて話し始めた。

「戦アイルーっていうのは戦いの技術を高めたアイルー達の事だよ。オトモアイルーのようなハンターと一緒に戦うアイルーもいるけど、大抵はギルドや国の軍隊の一員として飛竜らと戦っている存在だね」
「つまり…あたしたちハンターみたいなアイルーって事？」

「簡単に言えばそういう事だね。彼らは他のアイルー達と違って戦う事に特化しているから鍛え方も結構違う。だからなのかな、オトモアイルーと違って手にする武器も君達ハンターのものでも問題なく振るってしまうアイルーもいるんだよ。中には人に変化して戦うアイルーもいるくらいだしね」

その説明を聞いた二人の頭に一匹のアイルーが浮かび上がる。六年前に撫子、あの兄弟らと共に戦ったというアイルーの事が。

彼女はアイルーなのにハンターの武器を振るい、また人に変化す

る事も可能としていた。彼女の戦力はまさに一人のハンターとして申し分ないものだった。あれほどのアイルーがいるのかと話に聞いていた二人は驚いたものだが、実際にあのアイルーの実力は本物だったとか。

「そして剣豪アイルーというのはその戦アイルーの中で剣術の力を高めたアイルーの事だね。その中で名が売れているのは確か……神風だったかな？」

「神風？ 速いんです？」

「それもあるけど特攻を好むその戦闘スタイルかなあ。捨て身の斬りこみで一気に道を切り開いていくその勇姿が人々のイメージに強く焼き付いているんだらうね」

うんうん、と頷きながら思い返すように軽く空を見上げる。もしかるすと彼はその神風と呼ばれているアイルーに会った事があるのかもかもしれない。

いったいどんなアイルーなのだろうか。撫子達と共に戦ったアイルー共々気になるところではあるが、今はそれは横に置いておくでしょう。

「……ま、そのアイルー達についてとか他の情報とか気になる点はあるけどさ、今はあのナーガよ。奴は絶対後を追ってくるはずよ。切り抜けるための方法を考えないといけないわ」

「巽さん、あなたはナーガがここにいとふんでいたんですよね？」

「あくまでも可能性、の話だけだねえ」

「ではあなたが優秀な情報屋と見て訊きますが、ナーガについての情報は持っているのです？」

「持っている事は持っているけれど、今判明している特徴とかギルドが得た情報とか、そういうのだけだよ？ あくまで僕は一個人の情報屋みたいなものだからねえ」

「構いません。今は少しでもナーガというものについて知りたいのです。戦うにしろ逃げるにしろ、ね」

近年ようやく存在を把握し、情報を少しずつ集め始めたがそれでもナーガについては少ししか図鑑に載っていない。蛇竜種を纏めている図鑑はある事はあるが内容はまだ充実しているとはいいい難いものだった。

外見的な特徴、どういった攻撃をするのか、どこに生息しているのかぐらいしか把握しておらず何が弱点なのか、どういったものが苦手なのかまでは茉莉は把握していなかった。

あれはまず間違いなく上位個体、それも中から上のランクに位置するであろう実力だ。

今の自分達の実力で勝てるかどうかはあやふや。あの数分間の攻防で自分達が劣勢だったのは明白。これから反撃に転じたとして本当にあれを討伐できるかなんてわからない。

絶対に出来るのか、と訊かれてもはっきりと答える事なんて出来はしないだろう。

では撤退するべきか？

今ならばそれも可能かもしれない。一時撤退して体勢を立て直し、もう一度ナーガに挑むという選択肢もあるだろう。だがはたしてナーガが今後もここに留まるかという疑問もあるし、リベンジを仕掛けたとして勝てる保証もない。

それに撤退そのものが成功するかどうかも分からない。何せ今、ここには部外者……一般人の異がいるのだ。彼を抱えて逃げ切れるかどうかも分からない。本人曰く悪運が強いとの事だが、そんな不確かなものに頼れるかという話だ。

「えっと、鬨蛇ナーガ。蛇竜種の中で突然変異を起こし、人族のよくな上半身を手にした蛇。発達した筋力によって繰り出される腕の攻撃、鋭い牙による噛みつきや牙から漏れる毒による近接攻撃、体

内でつくりだされた毒を含んだ毒ガスや毒液といったものを吐き出す遠距離攻撃を持つ。また、蛇としての尻尾の使い方も巧みであり、相手を締め上げるだけで窒息や骨折を促すだけの力を誇り、素早い蛇行による回避術、尻尾と腕の力で行われる場所を選ばない移動力といった点も見逃せない」

「……基本情報ですね。ではそんなナーガを攻略するに使える情報は？」

「そうだねー……あ、こんな情報があるよ」

ナーガについて書かれているページを流し読みし、次のページをめくって内容を見た巽はそれに指を添えてじつとその綴られた情報を確認していく。

「自分で毒を作り出しているおかげで毒に対する耐性はあるみたいだね。でも麻痺毒、眠り毒に関しては並みくらいの耐性しかないようだよ。畏肉に対しては意識を向けた事はあるけれど食べる事はなかったようだね」

「属性に対する耐性は？」

「それについては完全には判明していないようだね。ただ蛇という点があるから……他の蛇竜種のように氷に対しては弱いんじゃないかな」

「やはり氷ですか。……コード・ノーマル」

肩に纏めているローブを広げ、中から白い毛皮を使用したガンランス、ヘルステイニング改を取り出した。ドドブランゴの素材を使用したこのガンランスは氷属性を内包しているため、もしかするとナーガに高いダメージを与える事が出来るかもしれない。

インペリアルガーダーをローブへと戻し、ヘルステイニング改に弾薬をリロードさせるとそれを背負ってポーチから地図を取り出した。とはいえこれは狩猟エリアのみが記されたものであり、ここにはこ

の湖らしきものは書かれていない。

どうやら狩猟エリア外にやってきてしまったようだ。こうなってしまうと自分達がどこにいるのか把握しづらい。なにせ旅人である自分達はこの辺りの正確な地図なんて持っているはずもない。

あるのはこの狩猟エリアを記した地図と、そこに至るまでの道がある地図のみ。

あとはこの東方の広いエリアを記した大まかな世界地図ぐらいなもの。広いエリアを纏めて書いているため大まかな道のりがわかるが、しかし細かい所までは把握できないのが特徴のため、当然ここがどのあたりかなんてわかるはずもない。

だが茉莉はじつとこの狩猟エリアの地図を見つめ、自分達がどういったルートを走ってきたのかを頭の中に思い描いていた。

「たぶん私達はこの辺りにいると思いますね。ナーガに会わずに一旦ベースキャンプに戻るにはあちらを進んでいけばいいと思います」「ナーガとは戦わないって方針？」

「戦いたいのです？ 正直なところ、勝機はほとんどないですよ？」「それでもあれを放置しておくわけにはいかないでしょ。……もちろん撤退した方がいいってのはあたしだってわかってる。……でも、まだ背を向けて尻尾を巻いて逃げるってのがどうしてもあたしには無理。まだあれに対して出来る事があるわ。あたし達はそれを持っている」

「……………これですかね？」

そうやって茉莉はポーチから取り出したのは指の間に挟んだ三つの投げナイフ。その先端には透明なキャップが付けられており、刃には何かの液体が塗られ、日の光を受けて鈍く光を反射していた。それに瑠璃は頷き、ぽんぽんと肩に纏めているローブを叩いてみせた。

「まだここに使えるものは残っているわ。ただ攻めても崩せない敵だったら、搦め手を使ってでも打ち倒すしかない。出来る事があるならそれをやっておきたいのよ」

「……………ふう、やれやれ。本当に負けず嫌いですね、瑠璃は」

投げナイフを懐に入れながら茉莉は嘆息しつつ小さく苦笑した。彼女としては撤退した方がいいんじゃないかと冷静に考えていたのだが、どうも瑠璃は小さな可能性を逃したくはないらしい。

確かに自分達はまだ切っていない手札がある。あくまで先ほどの戦いは武器と自分達の実力のみで戦っただけであり、ハンターが使う道具をあまり使っていないかった。そうするだけの余裕がなかったとでも言うべきか。

あの時はただナーガがここにいたという事と、その想像以上の実力に驚いていたという事もあってそれを失念していたのだ。

しかし今ならば、冷静にナーガと相對する事が出来るはずだ。そうすれば小さな勝機を掴めるチャンスが生まれてくる。自分達はまだ完全に負けていない、こうして戦う意志があり、戦えるならば完全な敗北を喫したわけじゃないのだ。

瑠璃の目はまだ死んでいない。

「……………でも」

だが瑠璃は目を閉じ、じっと茉莉を見つめて少しだけ氣遣うような声で続けた。

「茉莉が戦えないって言うなら、ここは素直に撤退するわ」

「……………」

茉莉は先ほど大きな負傷をしたのだ。それを瑠璃は忘れたわけではない。

むしろあそこで退いたのは茉莉が地面に叩きつけられたせいだ。あれほどの攻撃を受けたために一時撤退を選択し、そのチャンスを窺っていたら巽が現れたためにそれを見逃さずに利用した。

こうして休息を取ったとはいえ、完全に体調が戻っているとは限らない。自己治癒力が高く、回復薬グレートを飲んだといっても茉莉のそのポーカーフエイスの下で苦しみが残っているならば、瑠璃は素直に退く事を選ぶ。

彼女は負けず嫌いではあるが、同時に妹思いでもあるのだ。

そんな姉を見てまた茉莉はやれやれと息をついた。しかしそれは呆れたようなものではなく、優しさが含んだものであり彼女の口元もうつすらと笑みを形作っている。

「大丈夫ですよ。まだ私も戦えますから。そう心配するようなことはありません」

「本当に？」

「ええ、本当ですよ。それに私だってもしもの時に備えて戦うためにこれを出したのですから、戦う気力はありますよ。ただ自分から打つて出る、というのが少々問題だったわけですからね。……ですが、瑠璃がそうやる気になっているというならば、それを支えるのが私の役目ですよ」

ふっ、とポーカーフエイスを崩しながら微笑を浮かべて瑠璃に頷いた茉莉は、すぐにその笑みを消して巽へと振り返る。二人が再びナーガと戦う意志を固めたならば、問題となるのはこの巽となる。

一般人である彼をこの先どうするかというのが問題だ。

再びナーガと鉢合わせた場合、足を引っ張ってしまうのは間違いない。というよりナーガに狙われた場合、まず間違いなくさつさと丸呑みにされてしまうのが目に見えている。

「巽さん、あなたはどうするんです？」

「僕かい？ いやあ……僕は早いところこの森を抜けて近くにあるという町で事件について話を聞いていきたいところだねえ……。でも、本当にナーガがいるとわかった以上、ナーガについての情報を集めたい気持ちもあるんだよ。それに、一人で抜かれる自信もないなあ……」

あつはつは……と乾いた笑いを浮かべながら困ったように頭を掻く異。確かに彼が一人でこの森を抜けられるかどうか怪しいだろう。たった一人で行かせた場合、ナーガがその気配を辿って二人ではなく彼の方に向かう可能性だってある。

そうなれば間違いなく彼の命はなくなったも同然か。

成り行きとはいえ本当に厄介な荷物を抱えてしまったと瑠璃は苦い表情を浮かべる。

「しょうがないわね……じゃああたし達についてきなさい。一人で行動するよりはマシでしょ」

「い、いいのかい？」

「そうですね。もちろん、戦いが始まれば離れていて巻き込まれないように、あるいは自分を標的にされないように気をつけてくれればそれでいいですよ」

「わかったよ。ありがとう、助かるよ」

まだ乾いたような笑顔を浮かべながら頭を掻く異ではあるが、安心したような息を漏らすところを見ると彼とて一人で行動するのが心細かったとみえる。彼とて好んで死にたいわけではない。小さな生きる道があるならばそれにすがりつきたいのだろう。それが例え年下の少女二人だったとしても。

これからの方針が決まったならば、早速行動に移したいところだ。茉莉が広げていた地図にもう一度視線を落とし、周囲の気配を探ってナーガが動いているのか否かを判別してみる。しかしやはりと

いづべきか奴の気配はほとんど感じられない。

あの時遭遇した時も、草むらの陰に瞳らしきものを見つけるまでナーガがあそこにいた事に気づかなかつたのだ。まず間違いなく気配を消す事に長けていることは明らか。となれば自分達を追っている今この時もまた気配を消しているのは間違いない。

「私が前を歩きます。その後ろに巽さん、殿に瑠璃で移動しましょう。今はベースキャンプに戻るルートを歩きましょう。その途中でナーガに出くわせばそのまま戦闘、出会わなければベースキャンプで休み、巽さんはそのまま森を出る。その後私達は再び森に入つてナーガを探してみる、という事でどうです？」

「……ん、異論はないわ。あんたもそれでいいでしょ？ あたしたちのベースキャンプに戻りさえすれば、あんたはそのまま安全に森を抜け出せるはずよ」

「そうだね。僕もそれに異存はないよ。本当にすまないね……」
「いえ、お気になさらず。では行きましょう」

地図を広げたまま茉莉は歩きだし、湖から伸びる川へと進んでいく。この川を下っていけば先ほど調査した辺りまで戻れるはずだと茉莉は推測していた。狩猟エリアの端にあるこの川の上流がこの湖であり、先ほど調査した場所がだいたい真ん中程のエリアであるとアタリをつけている。

ならばここまで戻る事が出来たならばあとは順調にベースキャンプへと戻れるはず。

何事もなければ、の話ではあるが。

それから数十分かけて川を下り、茉莉は地図と周囲を交互に見て現在地を確認した。辺りを見る限り見覚えのある風景がそろそろ見えてくるはずだった。時折森の方へと視線を向けてナーガが奇襲を

仕掛けてこないかも警戒しながら進み、目印となってくれるであろうものを探してみる。

そしてようやくそれを見つけた。

「……あつた」

茉莉がそれに向かって近づいていくと、同じように瑠璃と巽もそれに近づく。

それは地面に残された犠牲者の存在を示すもの。乾ききった血痕だった。

「これは……血痕かい？」

「ええ、そうです。数日前にナーガによってやられたものと思われるハンターの血痕です。先ほど私達はここに来てこれを見つけたのですよ」

「ということは、ここまで戻って来たって事ね」

「あとはこの道を進んでいき、アオアシラの足跡があった方角の道を進んでいけば広場に出るでしょう。そこまで戻ればベースキャンプまでもう少しですよ。さ、行きましょう」

血痕をじつと見つめている巽を促して川から離れて道を歩く。この先には丁字の分かれ道となり、地図によればそこを左折する事によつて獣道を歩かずともあの広場に出る事がわかった。

ならば獣道を進まずに安全な道を選んだ方がいい。気持ち足早に歩きながら件の丁字の分かれ道に差し掛かり、一度周囲を警戒して左折すると順調に道を進んであの広場まで戻ってくる事が出来た。

ここはアオアシラが食事したと思われる広場であり、ブナハブラの巣らしきものが確認できた広場。ようやくここまで戻ってこれたと小さく安堵の息を漏らす。

だが、それを許さないのが奴だった。

はっと息を呑んだ瑠璃がロープを翻しつつその中へと手を入れ、素早くそれを抜きながら刀身に気を纏わせて目の前に立ててやる。すると木々の間から飛び出してきたそれが抜かれた得物に尻尾を叩きつけてきた。

「う、うわあっ!?!」

「くっ、うう……追いついてきたみたいね……!」

抜き放った新たな武器、火竜剣【火燐】で奴 ナーガの尻尾を受け止めた瑠璃が苦々しい声で呟いた。現在の形状は二つの刃を纏めた長剣スタイル。二つの刃が合わさった事で強度を増し、それに加えて気を纏わせる事で更に増したそれで折られることなくナーガの尻尾を受け止められた。

「巽さん、下がって!」

「う、うん……!」

茉莉が巽を庇うように前に出ながら懐に手を伸ばす。取り出したのは当然先ほどそこに収めた投げナイフだ。刃先にあるキャップを取り、一度そこに塗られているものを確認して指の間に三本挟んで構える。

巽は慌てて逃げ出し、草むらの中に飛び込んで邪魔にならないようにしつつも、隠れながらもその戦場を振り返って様子を窺う。完全に逃げ出してもいいものだが、たった一人でどこまで逃げ切れるのかも怪しい。

なので一旦離れるだけに留まったらしい。

「茉莉! そっち頼むわよ!」

「任せてください！」

火竜剣【火燐】を構えてナーガと相對する瑠璃。

投げナイフを構えながら攻撃する隙を少し離れた所で窺う茉莉。

今、ナーガとの戦いが再び始まる。

決着 闘蛇ナーガ（前書き）

ベースキャンプまであと少し、というところで追いついてきたナーガ。

巽を連れて撤退することはできない、と判断した二人はここで戦う事を選ぶ。

今、ナーガとの戦いは終わりを迎える。

その結末は……？

決着 鬩蛇ナーガ

「シャルア！」

叩きつけた尻尾を引き戻し、しかしすぐにしなる鞭のように操って瑠璃を側面から弾き飛ばすように振るってきた。当然それを回避するように跳躍した瑠璃ではあるが、ナーガはそれを読み切って軽く息を吸い、口から毒液を弾丸のように吐き出した。

「くっ、これがこいつのブレスってわけね！」

それは毒液なのだろうが、その描く軌道と速さからしてリオレウス如火球……すなわち飛竜の行使するブレスのように思える。だが何とかそれを回避し、牽制するように火竜剣【火燐】を振るって火炎を引き起こし、それをそのまま刃と化してナーガへと振るってやる。

燃え盛る火の刃はまるで意志を持つようにナーガへと襲い掛かる。振り下ろされた後はそのままナーガへと喰らいつく蛇のように動き、側面、下からと何度もナーガへと向かっていく。

その動きにナーガは唸りながら腕を振るって炎を振り払っていくが、瑠璃が火竜剣【火燐】を振るうたびに刀身から炎が噴き出して新たに作り上げるためいたちごっことなる。

その隙をつくようにタイミングを窺っていた茉莉が構えた投げナイフに気を流し込み、一気に振り抜いて三つの気刃を放った。刃に塗られている成分を含んだ気刃はナーガへと届くが、ナーガはそれを気にした様子もなく火炎を操る瑠璃に意識を向けたままだ。

「ふっ、はっ！」

右手を振るえば三つの気刃が放たれ、何度も振るってそれをナーガへと傷つけていくのだが、それは瑠璃が放つ気刃と比べると薄いもので、ナーガに対してダメージになっているとはいいいない。

だがそれでいい。

元よりこれはダメージを期待した攻撃ではなく、投げナイフに塗られた成分を気刃を通じてナーガに与える事なのだから。

瑠璃が気を引きつけている間に茉莉がそれを仕込んでいく。その効果はようやく表れ、突如ナーガが痙攣を起こしながら動きを止めてしまう。

「グ、ガ、グゴゴゴ……！？」

気刃によって打ち込まれた麻痺毒の効果だ。何とか動くこともがいているようだが、体を巡る麻痺毒によってそれは微々たるものではない。この好機を逃すことなく二人は一気に攻勢に出る。

「炎剣」

瑠璃は放出していた火炎を一度退かせて刀身に纏わせ、己の気と混ぜ合わせて一気に高めながら火竜剣【火燐】を一度構える。そしてナーガへと一気に急降下して奴の首を狙って渾身の一撃を放つ！

「翼雑撃！」

薙ぐようにして振り抜かれた一撃はナーガの首を刎ねかねない程の勢いで、それに加えて刃の軌跡に従って火炎が尾を引きながらナーガの体を焼き尽くしていく。

だが瑠璃の狙い通りにナーガの首は刎ね飛ばされなかった。何と

か首を守るように短く動かされた腕によって守られ、しかし腕に鋭い傷を刻むというダメージを与えるだけに留まった。

麻痺毒に侵されながらもなお己の命を守るといふ一点で動いたその腕。これによって命は繋いだようだが、続いて懐に入ってきた茉莉の攻撃が行われる。

麻痺投げナイフはポーチに戻され、構えられたヘルステイング改の刃がその胸を狙って突き出される。だがやはりというべきか刃は強靱な胸を深く貫くには至らない。しかし銃口からは既に溜められたエネルギーが存在しており、引き絞られた引き金に当てられた指を離せばその胸を焼く溜め砲撃が放たれる。

続けて動けないナーガに更なる一撃を加えるべく、ヘルステイング改のギミックを動かして引き金を引き絞れば、銃口に先ほど以上のエネルギーが収束していく。その高められていくエネルギーを感じ取ったナーガは何とかがして防御体勢を取ろうとするが、体を侵す麻痺毒がそれを許さない。

「竜・撃・砲ッ！！」

轟音を響かせながら放たれたガンランス最大攻撃により、ナーガの胸から頭にかけて一気に強い爆撃がはしりぬける。これをまともを受けてしまったのだ。これでも無傷というならばそれはどんな化物だ、という話になってしまふ。

古龍でもなければ無傷というわけにもいかないだろうその攻撃を受け、ナーガの体は反り返り、その勢いのまま後ろへと吹き飛ばされてしまった。

茉莉もまた竜撃砲の反動で軽く後ろに飛ばされるが、何とか衝撃を堪えて体勢を立て直す。瑠璃も一度着地して軽く火竜剣【火燐】を振った後、仰向けに倒れ伏すナーガを観察するように睨み付けた。

「……………っ」

びっくり、と体を小さく振るさせたナーガは竜撃砲を受けた頭を押さえながらゆっくりと起き上っていく。麻痺毒からも解放されたく、その動きは竜撃砲を受けたダメージによって怠慢になっていた。

それでも奴は生きている。ならば戦いは続行だ。

重いダメージを受けているナーガに容赦するはずもなく、すかさず瑠璃がナーガに向かって火竜剣【火燐】を構えて斬りかかっている。

「グ、……シヤアアアアルアツ!!」

だがナーガは怒りの籠った咆哮を上げながら尻尾を振るって瑠璃へと牽制する。その隙をついて起き上り、竜撃砲によって負傷した顔を押しさえながら小さく体を震わせ始める。

「シャルア!!」

漆黒の瞳が血走り始め、目の周囲の血管も赤く浮かび上がり始める。恐らく怒り状態へと移行したと思われる。だがその上半身は確実に竜撃砲による影響がゼロではなかった。

顔の鱗は所々吹き飛ばされ、焼け焦げ、若干血を滲ませている。

また火竜剣【火燐】の一撃を受け止めた右腕は一筋の傷を作りだし、傷口を同時に焼かれたことで血は流れていないがぱっくりと開いた傷が一撃の鋭さを物語っている。

ぐぐつと力を籠めれば鱗の下の肉が膨張し、強引に傷を塞ぎにかかった。手の先の爪が鋭く伸び、血走る瞳は瑠璃と茉莉を交互に眺めて狙いを定めている。忙しなく舌が出し入れされ、震えている。瑠璃を牽制していた尻尾を引き戻したナーガはついに瑠璃へと本格的に攻撃するために前に出る。

「シャアッ！」

「くっ、スピードが増してるわね……！」

一気に距離を詰めてきたナーガはその勢いを乗せた突きを放ってくる。それは瑠璃の頬を掠め、しかしそれだけで彼女の白い肌に薄く血を滲ませた。初撃は突きが来る、とわかっていたはずだが、その速さが想像以上だった。

躲せたのはたぶん突きに備えていたからに他ならない。そうであれば首を裂かれて致命傷になっていたはずだろう。

だがナーガの攻撃は終わらない。左右交互に爪を突き出して瑠璃のその白い肌を貫き、赤く染め上げようとしている。俊敏に動くことを念頭に置かれているナルガシリーズは若干守りが薄いため、もしあの爪が当たりでもすればまず間違いなく貫かれるだろう。

（速い、そして鋭い……！ でも今はこれを凌ぐ……凌がなくちゃならない！）

左右の突きから、今度は頭から叩き潰す攻撃や瑠璃の腹を穿つ攻撃も交えてきた。それを回避し、火竜剣【火燐】で受け止めていくのだが、金属の立てるその音が次第に大きくなっていく。

（く、おも……っ！）

重い一撃だ。両腕が攻撃のその重さに耐えきれず震え始めてきた。ちらりと横に視線を向けてみると、茉莉が地面に何かを設置しているところだった。ポーチから取り出した一つの物体、それは落とし穴だ。地面に設置させて起動させればギミックが作動してそれを中心として円形に地面を柔らかくさせる成分を浸透させ、内蔵されているネットが広がるという仕組みになっている。

あとはその上に一定の重量があるものが乗れば一気に地面に落とし、ネットがそれを絡め取って一定時間その場に留めてしまう。

強力なモンスターを相手にするならば、必需品と言われているほどハンターにとって大事な道具の一つだ。それを設置し終わると、指を立てて火を起こし、軽く宙へと舞い上がらせて小さく弾けさせる。

その合図を受けた瑠璃はナーガの攻撃を捌き、回避しながら茉莉の下へと下がっていく。すると当然瑠璃に意識が向けられていたナーガは彼女の後を追いながらも攻撃を続けていく。

奴は完全に頭に血が上っている。このまま落とし穴がある場所まで引き付けられれば、再び一気に仕掛けるチャンスが生まれるだろう。

「シャルア！」

だがここでナーガは突き、振り下ろしという両腕の攻撃に尻尾を使った攻撃も混ぜてきた。今まで火竜剣【火燐】でナーガの攻撃を防御してきた瑠璃ではあったが、やはりナーガのそのパワーの影響からは逃げられなかった。

(……………つ、腕が……………！？)

火竜剣【火燐】を振るい、ナーガの攻撃を受け止めるために使われた両腕の力が少しずつ低下しつつあったのだ。守る力が弱まったのを見逃さず、振るわれた尻尾が瑠璃の体を吹き飛ばし、落とし穴が設置された場所を飛び越えてしまった。

ナーガはそれを追い、更に前に出てくるが落とし穴を飛び越えるようなことはせず、地面を蛇行して進行してきた。

「シャアア

シャアアツ！？」

瑠璃に追撃を仕掛けようとしていたというのに、突如自分の体が地面に沈んだことにナーガは驚きの声を漏らした。続けて自分に絡みつき、地面に留めてしまふネットの存在に気づき、それを何とか引きはがそうとするも力だけで抜け出せるほど落とし穴のネットは甘くはなかった。

更に穴から出ている上半身を狙って茉莉がポーチから取り出した新たな投げナイフを構えて投擲していく。二本はナーガの体に突き刺さり、もう三本は指の間に挟んで気刃として攻撃しかけていく。それ自体のダメージとしてはナーガにとって蚊に刺された程度のもののために、ナーガはそれでももがき続けるが、やがてふつりと切れた糸のように力を抜き、脱力して地に突っ伏する。

「成功です。仕掛けていきましょう」

「オーケー、……いつつ……」

「大丈夫です？」

「平気よ、これくらい」

体を押さえながらも瑠璃は立ち、回復薬を口にして広げたロープの中に手を入れる。その奥から大タル爆弾を取り出したまでは良かったが、筋力が低下しているこの腕で持っていく事が出来るのだろうか、と舌打ちする。

同じようにロープから大タル爆弾を取り出し、落とし穴で眠っているナーガの傍へと持っていた茉莉がそんな瑠璃の様子に気づき、また「本当に大丈夫ですか？」と問いかける。

「……大丈夫よ、ふんっ！」

少し不安があったがそれを吹き飛ばすかのように意を決して瑠璃は大タル爆弾を持ち上げてナーガの傍に置く。元より普通の人以上の力を持つ二人だ。大タル爆弾ぐらいどうという事はない。

もう一つの大タル爆弾を出し、少し離して置く瑠璃の近くで今度は大タル爆弾Gを取り出して茉莉はそれをナーガの左腕の傍に置いた。こうしている間も目が覚める様子のないナーガ。

やはり睡眠毒の効果はてきめんらしい。

これで準備は整った。

急いでその場を離れ、その途中で茉莉が肩越しに振り返って大タル爆弾Gに狙いを定めて指を鳴らす。その刺激が空気中の粒子を伝っていき、大タル爆弾Gに伝わると轟音を響かせて大爆発を起こす。大タル爆弾Gの爆風は設置されている大タル爆弾にも衝撃を伝え、連鎖して爆発を起こしていく。森の中に響く爆音と吹き抜ける衝撃波。それから身を守るために地面に伏せて爆心地を見つめる。

竜撃砲を受けてあれだけのダメージならば、大タル爆弾三つと大タル爆弾Gに囲まれればただでは済まないだろう。いや、願わくばあれで落ちてくれたらいい。

そう願って見つめていた二人だったのだが

「くっ　　ッ!?」

突如空気が底冷えする程の殺気が膨れ上がり、爆風を切り抜けて飛来してくるものが二人へと迫ってくる。それは体を丸めて回転しながら飛んでくるナーガだった。

素早く起き上って横に飛び退く二人だが、ナーガは一度着地して地面に手を付け、力を籠めて自分の体を回転させるとターゲットを茉莉へと定め、今度は尻尾に力を入れて高く跳躍した。

そのまま前転して力を溜めると、茉莉へと強く尻尾を叩き落とす。

「くっ……!!」

もう一度横に跳びながらナーガの様子を窺うと、奴の体はボロボロだった。上半身だけ穴の上にあっただため、その体のほとんどが爆

弾の影響で鱗が吹き飛び、肉も裂けて血を流している。

顔に至っては左目……いや、左半分が焼け爛れている状態だった。何とか残っている右目で二人を視認し、舌を動かして周りの状況を把握しているのだろう。両腕も大きな負傷をしており、激痛がはしっているだろうにそれでもナーガは両腕を振るい続けている。

叩きつけた尻尾を中心として地面が割れ、飛び退いた茉莉の近くまで亀裂が走っていくが、何とか茉莉はその場から離れつつヘルスティング改を構える。

「シュルルルル……！ シャルアアアアアア！」

茉莉へと飛びかかりながら右手を振り下ろすナーガの攻撃を避け、カウンターを仕掛けるようにヘルスティング改を突き出す。今まで刃を浅くしか受け止めなかったナーガの胸は、その刃を通してしまっただけにまで傷ついていた。

続けて溜め砲撃を放つ茉莉ではあったが、ナーガはその苦痛をぎりりと歯噛みしながら耐え、茉莉の足を刈るように尻尾を振るう。溜め砲撃を放った反動で動けない茉莉は息を呑みながら体勢を崩し、続けてバツクナツクルを放つナーガの拳が頬を捉え、地面に沈められてしまった。

「シャアアアアッ！」

とどめとばかりに爪を立てて振り下ろすナーガ。だがこの場にはもう一人いる事を忘れてはならない。

「ナーガああああアッ……！」

高速で飛行しながら火竜剣【火燐】を振りかぶり、茉莉へと振り下ろすその右腕を斬り飛ばしてやった。宙を舞うナーガの右腕を感

じながら振り返り、それに従って火竜剣【火燐】もナーガの体を薙ぐようにして振り抜かれる。

だがナーガもその速度に反応していた。

怒りの籠った目で瑠璃を見据えながら残った左手を伸ばして彼女の体を掴み、ぎりぎりとその体を締め上げてやる。火竜剣【火燐】の刃の先端がナーガの胸に当てられたところでのナーガの反撃。

火竜剣【火燐】を振り抜こうとしても両腕がナーガの手によって締められているために動かす事は不可能。ナーガの怒りがそのまま乗せられた左手の力は確実に瑠璃の体にダメージを与え、ギリギリと骨が軋み出す。

「くっ、この……っ！」

何とか立ち上がりながらヘルステイング改を突き出すのだが、それだけでナーガが止まるはずもない。右手がなくとも左手が使えなくとも、尻尾が残っている。再びそれを振るって茉莉を吹き飛ばすかと思われたが、そうではなく茉莉に巻きつく動きを見せ始めた。

「ちい……、めんどうな……！ 瑠璃、火炎操れますか！？」

「……っ、なんとか……やって……！」

尻尾を避けるために翼を広げて飛び立ち、ヘルステイング改で左腕を切り裂こうとしたのだが、それを察知したナーガが左腕を引きつつ下半身の力だけで下がった。だが尻尾の先端付近はまだ茉莉を狙うようにうねうねと動き、隙あらば彼女を捕えようとしている。

だがその左腕の温度が上がっていくのをナーガは感じ取った。見れば瑠璃を中心として炎が巻き起こり、ナーガの手を焼き始めている。歯を食いしばってナーガの圧力に耐えながらも、彼女は今出来る事をやっていた。

このまま死ぬわけにはいかないという思いが籠ったその炎はナー

ガに苦悶の表情を浮かばせ、炎の熱さに耐えきれなくなったせいでついにその手を離してしまった。

しかしそれほどまでの高温まで引き上げてしまえば、火竜の血を引き継いでいる瑠璃にとつても苦痛となる。それにナルガシリーズは火属性に耐性がない。自分を締め上げたナーガの手と炎に炙られた瑠璃の体は軽いやけどを負っていた。

「はぁ……はぁ……」

脂汗を流しながら起き上ろうとする瑠璃だったが、ナーガの強い握力による締め上げは瑠璃の体に強い負荷を与えてしまったのだ。

動けるようになるまで少々時間がかかってしまう。そんな風に冷静に分析する頭と、こんなところで終わってたまるかという戦意を燃やす頭が存在していた。

しかし実際に立ち上がるうとしても体は震え、両腕も締め上げた影響も付加されて思うように動いてくれない。ぎりぎり悔しさに歯噛みする瑠璃をよそに、

「シャアアアッ！」

ナーガは怒りに吼えながら瑠璃を睨み付けていた。

炎によって瑠璃を解放したとはいえ、まだナーガは戦える。右手を失い、瀕死に近い状態だったとしても奴の意志は闘志に彩られている。

「シャルルルル……！」

唸りを上げながら大きく息を吸いこんだナーガは地べたに這いつくばる瑠璃へと毒液を撃ち出していく。毒ガスではなく毒液を選んだのは毒液の鋭さで一気に瑠璃の命を奪おうという魂胆か。

怒りのあまりナーガは口を開いて茉莉へと喰らいつこうと体を前のめりにさせる。強引に守りを打ち崩そうとした攻撃なのだろうが、

「ツツ！！」

ここだ！ とばかりに茉莉はヘルステイング改を強く突き出した。ナーガの体が沈む勢いと、茉莉の突き出すヘルステイング改の勢いの相乗効果によって刃は深くナーガの胸に沈んでいく。

それでもナーガはガチンツ！ と歯を鳴らしながら茉莉の体に喰らいついた。

「……………っ」

しかし、その噛み付きは茉莉の顔のすぐ傍だった。

ナーガの動きを見切った茉莉の最低限の回避で九死に一生を得る。

「……………幕を閉じましょう！」

充填させていたエネルギーを解放させ、溜め砲撃をナーガの体内で弾けさせることでナーガの動きが完全に硬直する。すぐ傍にあるナーガの口から血が噴き出すのを感じながら、ヘルステイング改のギミックを始動させて竜撃砲のエネルギーを充填させ始めた。

「グ、ググ……………ツ、ガガガ……………！」

震える左腕で茉莉も掴もうとするのだが、体内で膨れ上がったいくエネルギーの大きさに体の震えが止まらない。体の内側から焼き尽くされる感覚にナーガが苦痛の叫びをあげていく。

それを耳元で聞き、一歩下がってヘルステイング改の銃口をナー

ガの顔へと向けた茉莉は、その無表情の顔に汗を流しながら引き金を引く。解放されたエネルギーはナーガの体を焼き尽くし、無抵抗に受け止めたせいで数メートル吹き飛ばされてしまった。

ごろごろと地面を転がり、ようやく止まったナーガだったが、その体は動く気配がない。二度も竜撃砲を顔に受け、ついにその命は無残にも吹き飛ばされてしまった。

奴の死体は見るに耐えないものになってしまっている。

確かに鍛えられた体をしていたし、硬い鱗に覆われていただろうがそのほとんどは爆弾と砲撃によって吹き飛びボロボロ。硬い鱗と筋肉をしていようがその爆風には耐えられるものではなかった。

その鎧を崩されてしまい、あとはただ焼かれるのみ。あれでは使える素材はほとんど残されていない。よくて尻尾ぐらいなものだろう。

「……………」

そして勝利した二人ではあったが、彼女らもまたボロボロだった。茉莉の左腕から盾が滑り落ち、重い息をついた茉莉は力が抜けたように膝をついてヘルステイング改を離してしまう。

辛勝。

その言葉が頭に浮かぶ。

重く鋭い攻撃を受け止め続けた左腕はぱんぱんになってしまい、さつきから冷や汗が止まらない。無表情をしているが彼女の心臓は先ほどから激しく鼓動を刻んでいた。

無理もない。

攻撃を受け止め続けている左腕はよく耐えたものだと言わなければならない。あの最後っ屁の噛みつきもよく躲せたものだと思っていたのだ。カウンターを決めると同時に自分は頭から噛みつかれて死んでいてもおかしくない状態だった。

そうなってしまえば相打ちでこの戦いは幕を閉じていただろう。

(……ギリギリ、か。私達もまだまだですね……)

麻痺投げナイフ、落とし穴、眠り投げナイフに爆弾……。

ハンターが使う搦め手がなければ完全勝利出来ない。もちろんこれを使う事を恥と感じてはいないが、己の実力のみで討伐していくのがハンターにとっての最大の目標だろう。

今回はそれがなければ勝てない強大な敵だった。

体力もギリギリな上はかなり負傷してしまっている。背後で膝をついている瑠璃もまだ荒い息を吐きながら何とか立ち上がろうとしているようだ。彼女もまた締め上げられたダメージが抜けきっていないようだ。

「大丈夫かい!?」

そんな二人に巽が慌てて駆け寄っていく。ナーガが討伐されたことでもう危機は去った。隠れていた彼は背負っている鞆を下ろしながら二人に近づき、手当てをするための道具を探し出す。

「私は後で構いません。まずは瑠璃の方からお願いします……」

「わかったよ! さ、瑠璃ちゃん、これを」

鞆から取り出した飲み薬をそつと寝かせた瑠璃の口元へと持つていき、続けて身を包むナルガシリーズをどうしようかと考えていると、ふらつき、膝をついたまま近寄ってきた茉莉が口の端に回復薬グレートの瓶を咥えつつ「体は私が……。そこにあるポーチから包帯などを……」と呟きつつナルガシリーズに手を伸ばした。

頷きながら地面に置かれているポーチから祭りの指示通りに手当てするための道具を取り出しつつ、巽は二人の様子を窺い見る。茉莉の左腕はダメージの影響で震えており、もたつきながらも確実に

瑠璃の装備を外していつている。

露わになったのは白い肌に浮かぶ脂汗と内出血している痕と火傷の痕。生き残るための反撃だったがそれでも完全な無傷とはいかなかった。しかしそれでも生きていただけ幸いか。

そんな姉を巽から受け取った道具を使いつつ手当てしていく茉莉。飲み干していく回復薬グレートの効果で少しずつ回復しているだろうが、それでも彼女も大きな負傷をしているはずだ。

それをおくびにも出さない彼女の姿。それが常に姉を後ろから支え続けた彼女という在り方なのか。

（辛勝ではあるけれど、この若さでナーガに勝つという点は大きい。……凄いな、この二人）

手当てのサポートをしながら巽はじつと二人を見つめながら心の中でそう思う。ハンターだけでなくギルドナイトも手を焼いた闘蛇ナーガ。自分があの場に現れるまでは奴に圧されていたこの二人が、更に傷つきながらも掴み取った勝利。

一歩間違えれば死んでいたであろう瞬間もありながら、お互いに支え合い、それぞれの役割を果たして達成した討伐という事実。

（これは思わぬ出会いだったよ。なかなか興味深い。将来性のあるハンターというのはいいい情報になりそうだね）

ふつと柔らかく微笑を浮かべる巽はそれからも二人を手当てする手伝いをし、それを終えた三人は何とかベースキャンプに戻る事が出来た。待機しているギルドアイルーに成功報告を伝えると一時間の休憩をはさんで町へと戻るのだった。

こうして魔の森のクエストは成功に終わる。

だが今回のクエストは今までのクエスト以上の負傷を受ける程の難易度。覚悟していたとはいえ、ここまで傷つくとは想定していな

かった。自分達が未熟であり、まだまだ上がある事をその身に改めて知る。

しかし今は一時の休息を。

竜車の中で揺られながら二人はゆっくりと眠りに落ちていくのだ。
った。

決着 闘蛇ナーガ（後書き）

これにてナーガとの戦いは終幕です。

世間ではついに3Gが出たわけですが……私は買えていませんね。そもそも3DSがないのでどうしたものか、という事になっております。

安くなったら……いつか買うかもしれませんね。

それまでは様子見です。

あつちで暴れている奴らの情報は某笑顔動画などで入手してみるところにします。

機会があればあの初号機などが出るかもしれませんね。

巽の取材

日も暮れてくる頃、町へと戻ってくるやと童車の中で眠っていた二人はゆっくりと目をさまし、童車の中から出てきて大地に立つ。移動している間ずっと眠っていたために動けるくらいには回復していた。

アプトルを童小屋へと届けると、酒場へと向かって歩き出した。当然あの森で出会った巽も同行し、共に酒場へと入ると驚いた顔で振り返るハンター達がいた。

どうやら夕食をとりにきていたらしい。

あの驚きようから考えて、どうやらこんなに早く戻ってくるとは思っていなかったようだ。だが逆にこんなに早く帰ってきたということは恐らく失敗したんだろう、と判断したらしい。

確かに二人の出で立ちにはボロボロだ。生きて帰ってきただけでも幸運だったろう、とでも思っているのだろうが、残念ながらそうではない。

二人は受付まで向かうと、そこにいた受付嬢に報告する事にした。

「おかえりなさいませ」

「これ、報告ね」

あの森にいたギルドアイルーが確認した情報を纏めた報告書を受付嬢に提出する。それを確認した受付嬢はやはりというべきか、大層驚いた表情でそれを見つめ、交互に二人を見る。

「事実よ。何とかって感じだけれどね」

「死体はギルドアイルーが回収しているので、後程確認をお願いし

ます」

「は、はい。ではお疲れさまでした……」

報告書を確認して判を押した事でクエスト成功となる。報酬金を受け取り、後で報酬祖座を受け取ればこのクエストは完全に終了だ。その様子を窺っていたハンター達もまた驚きに包まれた。まさか本当に謎の存在、ナーガを倒してしまうとは思わなかったのだ。ただここにはナーガだったという事は伝わっていないが、多くのハンターが行方不明になってしまった原因を潰すというのは信じられないものだった。

辛勝ではあるが勝ちも勝ち。彼女らの見た目がボロボロという事もあり、それは厳しい戦いだったのだろうということは窺える。ハンターの中にはそんな彼女達に尊敬の眼差しを向けているが、それは彼女達の実力を認めたのだろう。

「じゃ、あたし達は宿に戻って休むから、あんたは好きに動いていいわよ」

「うん。改めて、助けってくれてありがとう。明日、また取材してもいいかな？」

「ええ、少しだけなら構いませんよ」

「よかった。じゃあ明日よろしくお願いするよ。じゃ、僕はこれで！ あ、すみません、少し話を聞いてもいいかな？」

ぺこぺこと頭を下げて二人から離れていくと、酒場の客としてやってきたハンターの下へと向かっていき話しかけていく。早速情報屋として取材を始めるらしい。

そんな彼を尻目に二人は酒場を後にすると真っ直ぐに宿に向かっていた。部屋に入るとシャワーを浴び、後はまた泥のように眠り続けるのだった。

次の日の朝、目覚めた二人は私服に着替えると朝食をとるために酒場へと向かった。かなりの就寝時間をとったため昨日の疲れはほぼなくなり、負傷の痕もある程度回復していた。

このところは流石の竜魔族といったところか。だが完全に治っているわけでもないようで、しばらくは無理をしない方がいいだろうと自己分析する。

さて、今日は何を食べようかと考えながら酒場の扉を開け、中に入って席に着くとすぐにウェイトレスがやってきてお冷とお品書きを置いてくれる。

内容を眺めて今日は和食系統にするか、と決めて注文し、数分後にそれが運ばれてくると手を合わせて食事を始めた。

朝食を頂きつつ周りの客達の話や聞き取りではナーガの死体は回収され、またギルドアイルーがざっと様子を確認した限りではほぼ安全である事が通達されたようだ。

謎の存在がナーガであるという事が知らされたハンター達の反応は大部分が「驚き」であり、そして同時に「納得」の色が見えた。ナーガならば大抵のハンターが太刀打ちできない存在だ。死体が見つからないのもナーガならば説明がつく。

しかしどうしてこんな辺境にまで現れたのだろうかという疑問も浮かんでくる。それについてはもうすぐ現れるであろう異に訊いてみる事にしよう。

そう考えていると、当の本人が酒場の扉を開けて中に入ってきた。きよるきよると誰かを探すように辺りを見回し、二人を見つけると「やあ、おはよう」と手を挙げながら近づいてきた。

「ゆっくり休めたのかな？」

「そうですね。また旅をする分には問題ないくらいには」

「それは良かった。……あ、すみません。注文で」

お冷を持ってきたウエイトレスに巽の注文を通すと柔らかな笑顔を浮かべて二人を見つめる。二人の朝食は食べ終えかけているところであり、もう少し待てば話をしてもいい具合だった。

やがて二人が食べ終え、お冷を飲み干すと巽がいいかな？ と視線で問いかける。それに茉莉が頷く事で応えると早速巽は二人に取材を始めていく。

「さて、改めて名乗ろうか。僕は巽、個人の情報屋みたいなものだよ。今回こっちに来たのはここで謎のモンスターによる事件が発生しているという耳にしたからだね。情報屋としては調査せざるを得なかったんだね」

「正体はナーガであると判明しましたね。討伐してしまいましたが、情報は集まったのです？」

「うーん、どれだけの犠牲者が出たのか、いつからその事件が起ったのか……ぐらいしか聞き取り調査ではわからなかったなあ。でも見た感じのナーガの実力とかのあれの情報もなんとなくもわかったし、今回はこれで満足する事にするよ」

「え？ あんたそんなのわかるの？」

「まあ、事件の調査だけでなく飛竜や牙獣などのモンスターの調査もしているからね。ある程度は観察眼も鍛えられてきたものだよ」

かけてもいない眼鏡をくいつと上げるようなしぐさを見せながら得意げに笑う巽ではあるが、ジト目になった瑠璃が「あんた、そんなあいつらと戦えるの？」と訊いてみると、「いやあ……あっはっは……」と今度は乾いた笑いを浮かべる。

そんな彼に相変わらず表情を変えず、茉莉は気になっていた事を問いかける事にする。

「蛇竜種がどうのこうのというのがあったかと思いますが、それについて教えていただいても？」

「ああ、それについてだね。これについてはここ数年かけてゆっくりと確認され始めた事実だよ。この東方で場所を問わずに蛇竜種の動きが以前よりも活発になってきているんだね。乾燥地帯ではヒュドラ族、森ではグレイハブをはじめとする蛇族。噂では火山でも見た事のない蛇竜種らしき影を見たという話もあるくらいだね。それくらい蛇竜種が多く確認されているんだよ」

「原因はわかっているのですかね？」

「わからない。ギルドでも原因を究明している途中だね」

首を振りながらそう言えば、「そうですね……」と頷きつつ茉莉は考え込むように顎に指を添える。彼女なりに原因を考えてみようとしているようだが、当然ながら東方の事情をあまりよく知らず、蛇竜種についてはまだまだギルドで研究中なため情報もあまりない。それで蛇竜種が活発になってきている状況を説明できるわけがなかった。

だが異はまたふつと笑うと手帳を開き、そつと身を乗り出して二人に静かに話しかけ始めた。

「僕なりに考えてみた事んだけどね、これは蛇竜種の上に立つ存在が動き出そうとしているんじゃないかって思っているんだ」

「……！？」

そのトンデモ発言に二人は息を呑むしか出来ない。一体この人は何を言っているのか？

だが異の瞳は本気だった。彼なりの推測ではあるようだが、彼は本気でこの話をしてしているらしい。

「蛇竜種の上に立つ存在って……何なのよ？」

瑠璃も抑えた声で巽に問いかける。

「蛇竜種の中で最も力を付け、古龍種まで上り詰め、華国にとって縁深い存在」

開いたページをそつと二人に見せる。そこには三つの頭を持つ巨大なヒュドラが描かれた紙が貼られていた。

「冥蛇龍めいだりゅう、デイス・ハドラー。かの存在がまた現れようとして
いるんじゃないかって僕は推測しているんだ」

「冥蛇龍……」

「デイス・ハドラー……」

蛇竜種の中で最古参にして最高峰とされる伝説種に数えられた古龍種。華国を中心に東方で数百年の時を経て現れ、何度も国を滅ぼしてきた存在だ。現れるたびにハンターや国の総力を挙げて撃退してきたが、討伐には至る事ほんの一、二度と言われている。

多くの場合は人が敗れ、国を滅ぼされるに至ってしまったのが歴史書に記されている。

「……はっ、そりゃないでしょ。蛇竜種が活発になったから冥蛇龍が現れる？ どうしてそうなのよ？ 過去にそういうケースがあったって言うの？」

「いや、ないよ」

「じゃあ根拠がないじゃない」

「そうだね。……でも、六年前にこんなケースがあったじゃないか」

六年前、と聞いて瑠璃の表情が硬直する。茉莉も真顔だったのがそこで固まってしまった。六年前といえばあの大事件しか頭に浮か

ばない。あれに関わった人達と交流があったのだから無理もない。そして巽は二人に見せていた手帳を戻し、ページをめくって話を出す。

「六年前、かの伝説の黒龍ミラボレアスが降臨した。あの頃は確か黒く染まった飛竜……狂化竜と呼ばれた存在がドンドルマを中心として確認されていたんだよね。あれらが各地を跋扈し、猛威を振るっていた事は記憶に新しい。……そしてハンターやギルドナイト達の活躍もあつて着実にその数を減らしていったけど、それが闇を高める要因となり、ミラボレアスを呼び寄せた。調査した結果そのまま考えたんだけど」

「……………」

ほとんど当たっている。当事者ではないため詳しくは知らないが、狂化竜がミラボレアスを呼び寄せる要因の一つとなっていたという事は耳にしていた。

「今回もまたミラボレアスのようなケースでデイス・ハドラーも現れるんじゃないかって推測しているんだ」

「……………狂化竜を蛇竜種に置き換えた、という事ですか」

だが狂化竜は人為的に作られた存在だ。今巷を騒がせているという蛇竜種とは違うだろう。彼らもまた人為的に活発にされているというならば話は別だが、そんな事をして何になるというのか。

……まさか、また誰かが何らかの目的のためにあのような大事件を引き起こそうというのか？

もしデイス・ハドラーを本当に呼び寄せようというならば、今度は国滅ぼしのための召喚？ いやな予感が頭によぎってしまう。本当にそうだとするならば……色々とめんどろな事になってしまう。

ただでさえ今の世情はかの血統に対して否定的になっているとい

うのに、その上で再び伝説種の襲来だなんてどうしろというのだ。あの人達に助力を求めたとして、果たして周りの人々はその助力を受けるのだろうか？

振り払い、石を投げつける光景しか頭に浮かばない。

例え彼らがミラボレアスを討伐する事が出来たハンター達の一員だったとしても。

そんな想像をしていた茉莉は一度目を閉じて緊張を少しずつ解き、ポーカーフェイスをその顔に貼りつけなおして話を続けていく。

「だとしても、蛇竜種が活発だからといって冥蛇龍へと結びつけるのはいささか情報が少ないかと」

「……そうだね。僕も早計かな、とは思っているけど……それでも最悪を想定してしまうんだよね。起こってからでは遅い、それは六年前もそうだったと僕は思っているから」

あの大事件での被害者は数千人は下らないと言われている。それだけの狂化竜による被害者を生み出し、辺境の村や町の数は減少していった。ミラボレアスによる直接的な被害はないのが唯一の救いといわれているのが幸いだ。

旧シュレイド城で決着がつかなければ、あるいは止められなければ、恐らくシュレイド地方で大きな被害が確認されていた事だろう。そう言われている程大きな事件だったのだ。

だからこそ情報を求める。そしてそれが役立つものであるならば有効利用する。

「……さて、蛇竜種についてはこれくらいでいいかな。次は君達の事について訊いても？ あ、最初に言っておくけど取材した事は記事にしたり積極的に広めたりするような事には使わないから安心していいよ」

「私達ですか。何をお訊きに？」

「改めて、になるかもしれないけれど、まずは名前を」

そういえばすっかり名乗った事はなかったか、と茉莉は思い出した。随分遅い自己紹介になってしまったが、改めて名乗っておくことにしよう。

「あたしは瑠璃・フレアウイング」

「その妹、茉莉・フレアウイングです」

「へえ、フレアウイング、か……褐色の翼をしていたし、有翼種の魔族という事でいいのかい？」

「ええ、その認識で間違いないですよ」

実際には竜人族の血も混ざった竜魔族なのだが、これは口にするものではない。有翼種で竜魔族なんて情報屋に知られたらめんどろなことになるそうだ。異の事を信用していない、というわけではないが、もしもの事もある。

用心するに越したことはないのだ。

「見た目がよく似ているけど双子という事でいいのかな？」

「はい、そうですね」

「双子のハンターか……いいね。昨日のクエストは上位ランクだったし、ナーガを討伐するだけの實力もあるから上位ハンターだよ。ね。ハンターになつてどれくらいなのかな？」

「ハンターになる訓練や鍛錬が長かったので……二人で活動し始めたのは五年ほど前でしょうか。ロククラックを中心として各地を回っております」

「ふむふむ、あの戦いで察するに瑠璃ちゃんが前に出て茉莉ちゃんがそれを支える、というスタイルだね。性格的にも何となくそれはわかるよ」

あの戦い方から前衛と遊撃支援は見てとれる。ずっと隠れて観察していたため二人の実力も大まかに把握した事だろう。それにナーガを倒した実績もある。巽は二人は上位ハンターの中でも結構上のランクのハンターだろうと推測する。

「HRはどれほどのものなのかな？ やっぱりもうすぐG級に達するくらいのものかい？」

「……いえ、まだまだですよ。40にも達していませんからね」

「うん？ 君たちくらいの実力ならもうそれを超えてもいいのに、何か理由でも？」

「残念ですが、それにお答えする事は出来ません。申し訳ないですが……」

「ああ、うん、いいよ。話したくない事があるのなら無理に訊き出そうとは思わないからね。じゃあ別の事を……出身地は………ああ、魔族だからこれも無理かな」

「そうね。これも黙秘させてもらうわ」

こうして取材は続いていき、基本は茉莉が応答していくが時折瑠璃も混ざって答えていく。だが魔族としての特徴を生かし、出身地などの魔族にとってあまり口に出れない事を隠す事になる。

ある程度取材が進むともう話す事はなくなってきた。隠すべき事、本名などは最後まで話さずに取材が終わる事になる。

「ご協力ありがとう」

「本当に記事にしたりしないのよね？」

「もちろんさあ。僕はただ優秀なハンター、将来的に花開きそうなハンターの事を知り、それを陰で記録するだけだよ。誰かが知らなくても、確かにそんなハンターがいたんだって事を記録する、その一環として取材しただけさ」

それじゃあ情報屋というより記録屋、とでもいうのだろうか。巽の考える事はよくわからないが、この人のいい笑顔を見ていけるとどうも疑う心を薄れさせていくかのような感覚を覚える。

ぱたん、と手帳を閉じて懐に入れると、「君達はこれからどこに行くんだい？」と訊いてきた。それくらいは答えてもいいだろうと瑠璃は「ユクモ村よ」と答える。

「ユクモ村かあ。この間もそっちに行くって言っていたハンターさんがいたなあ」

「へえ、やつぱりあの村って活性化しているのね」

「みたいだね。温泉のある村として着実に名を広めているよ。そうなる人が多くなるから物流とか情報とか、色んなものが交わる場所でもあるね。僕もつい最近までそこにいたんだよ」

「……む？ となると少し訊いてもよろしいです？」

「うん？ 何か知りたいことでもあるのかな？」

首を傾げる巽に、「え？ ここで訊くの？」と視線で問いかける瑠璃。そんな二人の視線を受けて茉莉は少し考えたが、静かに口を開いてあの事について訊いてみる事にした。

「氷河空夜、という人を探しているのですが、心当たりはありませんか？」

「ひかわ……くつや……、うーん、聞いた事ない名前だね。知り合いかい？」

「ええ」

「もしかしてその氷河空夜って人を探しにユクモ村に向かっているという事なのかな？」

「そうですね。あそこならば彼もいるのではないかと思ってまして」

「なるほど。ごめんね、力になれなくて……もしよかったらその氷河空夜って人の情報も集めておこうかい？」

「いえ、お気遣いなく。もう少し私達で探してみようかと思っ
ます」

ぺこり、と頭を下げてそれを丁重にお断りすると、「そう、僕が
得るばかりで心苦しかったんだけどね……」と苦笑する。どうやら
異なりに二人の力になるうと思っただようだ。本当に残念そうな表情
を浮かべる。

それにこの氷河空夜という名前をした人物なんて存在しない。い
や、もしかするといえるかもしれないが、普通はいない。

正しくはこれは偽名だ。二人が探している人物が過去に名乗って
いた偽名である。もし彼らが普通の町に出てきているならば、本名
ではなく偽名で活動するはずなのだから。

そして彼が使う偽名といえばこれしか思いつかなかつたため、こ
の名前を情報の一つとして使い、彼らを探しているのだ。

また積極的に情報屋を使って探さないのも無用ないざごさを産ま
ないためだ。事情があつて彼らは身を隠している。情報屋を使って
探し出し、それによって余計な人達まで集まってきたては困る。

「それにしても途中であつたハンターさんといい君達といい、最近
は人探しのためにユクモ村に行く人がいるんだねえ」

「……？ どういうこと？」

「いやね、この間のハンターさんも弟を探すためといってユクモ村
に向かつてたんだよ」

「弟を探すハンター？ もしかして、その人つて黒髪で、浅葱色の
和服着てて、小太刀を二本帯に差してて、気の強そうな女だった？」
「よく知ってるねえ、知り合いかい？」

知り合いも何もこの間一緒にクエストをした間柄だ。どうやら先
にユクモ村についていそうな感じだ。もしかすると本当にまた会っ
てしまう事になるかもしれない。

ふと、茉莉が何かに気づいて首を傾げ、「それにしてもよく彼女がハンターだとわかりましたね？」と問いかけた。あの私服の出で立ちはハンターというより剣術を嗜む女性と思ってしまうだろうか
らだ。

だが巽はああ、と頷いて答える。

「ちょっとジャギイの群れに絡まれちゃってね……その際に会ったんだよ。なんでも暇つぶしとしてその群れの討伐クエストを近くの村で緊急で引き受けてきたらしいんだよね。それもハンター装備を身に包まずに私服のまま。いやあ……おもしろいハンターさんもいたもんだねえ、あっはっは」
「……………なるほど」

あの戦いを好む性格だ、何となく想像できる。嬉々とした表情で小太刀を振り回し、群れるジャギイをかたっぱしから斬り捨てていったのではないだろうか。

それにしても巽も巽だ。以前もモンスターに絡まれていたとは、そしてまた誰かに助けてもらった事で生き延びているとは……本当に悪運というものが強いのだろう。その意味では彼もなかなか興味深い。

そんな事を考えていると、巽はあ、と何かに気づいたような表情を浮かべて鞆を探り、一つの手帳を開いた。ぱらぱらとページをめくり、じつとそこを見つめる。

「……………うん、一つ君達に言うておくことがあるよ」

「なに？ またなにかいい情報とか胡散臭い情報とか？」

「胡散臭いって……ひどいなあ。……実はね、最近南西の方角からゆっくりと悪い空が移動しているらしいんだ」

「悪い、空……？」

どういう事だろうか、と二人の表情が引き締まり、じつと巽を見つめる。

「ちょっとした知り合いがその空の事情に詳しくてね、教えてもらったんだけどあれは嵐の前触れじゃないかって話なんだって」

「嵐……?」

「うん。それがユクモ村方面に移動しているから、道中気をつけてね」

嵐が近づいてくる、となると急いでユクモ村に向かった方がいいかもしれない。野宿しているときに嵐にでも遭遇すれば目も当てられない。

となれば善は急げだ。

巽の取材が終わったのならばもうここにいる事もないだろう。巽もそんな二人の様子に気づいたらしく、小さく頷いてみせた。

「では私達はこれで失礼しますね」

「うん、今日は朝からありがとうね」

手を振る巽に一礼すると会計を済ませて二人は酒場を後にする。そのすぐ後に「お待たせしました」と巽が注文した朝食が運ばれてきたため、巽はようやく朝食を食べ始める。

頭に思い浮かぶのは先ほどの二人の事。取材して得たものはあったが、得られなかったものも多い。それは魔族という事もあるため仕方がない事だろうが、それでも巽は今回の取材はいいものだったと判断していた。

(フレアウイング……か。そういえば、六年前の資料にもその名前があったような気がするなあ。……うん、これは一度戻って調べてみたほうがいいかな。先日の事といい、今回の旅は実りあるものだ

ったといえるね)

これからの予定を軽く決めるとさくさくと朝食を食べ終えて巽もまた酒場を後にする。懐から手帳を開き、軽く視線を巡らせて頷くと不意に南西の方角を見上げた。

その先には黒雲へと成長している雲があるのだろう。それがユクモ村の方へと進んでいる。あの二人は大丈夫だろうか、と少し心配になるが、あの二人ならば何があっても乗り越えていけるだろう。

(風が、吹いてきた……)

冷たく少し強い風が頬を撫でる。それに身を任せながら巽は神妙な表情を浮かべてじっと空を見つめるだけ。

優しいな雰囲気はなりを潜め、ただただ空を見つめ続ける。

やがて彼は小さく首を振って歩き出した。二人が向かうユクモ村とは反対の方角へと。

(彼女達の道中に幸多からんことを)

風に吹かれながら巽は静かに町を出て森の中へと入っていく。その口元は二人によく見せていた優しいな微笑を浮かべているのだった。

それから数日後、二人はアプトルが引く竜車に揺られ、中から静かに外の様子を見上げていた。空は厚い雲に覆われ、強い風が何度も吹き抜けている。

巽の言っていた嵐がやってきたのだ。屋根に強い雨が何度も叩き

つけられ、風によってがたがたと音を立てている。

「……まったく、本当に嵐が来るなんてね……」

「まあ、自然に文句を言ってもしょうがないでしょう。今はただ無事にユクモ村につけることを願うのみですよ、ふっ」

竜車から御者席へと伸びる屋根の下で茉莉が手綱を操り、竜車を引く二頭のアプトルを操って雨でぬかるんでいる地面を何とか転ばぬように走らせ続ける。雨が降る前に確認した地図によればもうすぐユクモ村につけることが分かった。

このまま行けば何とか今日中にユクモ村につけるはず。こんな嵐の中で野宿するのはごめんだった。だからこそ急いで、しかし安全にユクモ村へと向かいたい。

そして瑠璃は竜車の中からじつと黒雲に包まれる空を見上げる。夜のように暗く、遠くに広がる森もざわめきが収まらない。時折雷が鳴って空が光っているようだが、それでも空の向こうは見えない事はない。

「……………?」

ふと、一瞬光った空の向こうで動く影が見えたような気がした。

それは泳ぐようにあの黒雲の中を飛行していたように見えたのだが

……気のせいだったのだろうか？

そんな事を瑠璃が感じていると、

「ッ!？」

急激に周りの空気が一変したように張り詰め始めた。バチバチと音を立てて空気が弾け、見ればあちこちの雷光虫から電気が弾け飛んでいた。だがそれらは一点に向かって集結していき、それはまる

で流れ星が流れていくかのような光景を作り上げる。

だがこんな嵐の中で雷光虫がこれほどまでの光景を作り上げるとは思えない。

それにこの空気を作り上げている主が雷光虫の向かっている先にいるのだ。茉莉は緊迫した表情でその先を見つめる。

「ギヤアツ、ギヤアツ!？」

アプトルもまた何かに警戒するような声を上げて失速し始める。

そんな中、奴はゆっくりと闇の中から姿を現した。ずしん、ずしんと鈍い音を立てて木々をすり抜け、周りから集まってくる雷光虫を纏いながら竜車の進行上へと我が物顔で立ちほだかつてくる。

「くうっ……!？」

慌ててアプトル達の手綱を操って進路を変更し、その背後からすり抜けるように調節する。だが雷光虫達が放つ電気が弾けだし、アプトル達の足を絡め取るかのように動いていく。

「な、なに!？」

「切り……抜けて……!」

これまで以上に竜車が揺れ出したため瑠璃も慌てて竜車の壁に手をつきながら状況を把握しようとする。その視界に大きな何かがちはだかっているのを見て息を呑むが、それはすぐに横へと流れていく。転びそうになりながらもアプトルは何とかあれの背後を通り過ぎたのだ。

どうやらあれは茉莉達に興味を示していなかったようで、竜車に手を出す事はなかったようだ。奴の視線はただあの空一点のみに向けられていたように思える。

奴もまた突然の嵐に文句でも言いたかったのだろうか。それはわからないが、奴が自分達に手を出さなかっただけでも幸運だと思っ
しかない。

何せ見間違いでなければあれは以前ユクモ村を騒がせたという存在
なのだから。

メインの防具が修理できていないし、激しく動く事が出来ない体
調でもある。今の自分達で果たして討伐できるのかどうか怪しい。
そんな中であれと事を構える事になればマズイ事になっていただ
ろう。

だから幸運……いや、もしかすると巽の悪運が二人に影響を与え
たのかもしれない。何にせよ切り抜けたならばよかった。

アプトル達も少しずつ落ち着きを取り戻し、嵐の中を走り続ける。

それから一時間後、嵐はまた遠くの空へと去っていく。そうして
空が落ち着いてくる中、二人の視界に山間の谷の中に存在する小さ
な村が見えてきた。門の前に竜車を止め、少しボロボロになってし
まったそれを預けると二人はじつと門の向こう、階段の上に広がっ
ていくその村を見上げた。

「ようやく、って感じね」

「ええ、何とか着く事が出来ました。……やれやれ、ですね」

ちょっとしたアクシデントがあったがこうして自分達は目的地へ
と辿り着いた。

温泉村、ユクモ。

ここに二人が探している人達がいるのだろうか。

あるいは二人の情報を得る事が出来るのだろうか。

それはわからないが、何か得られるものがあるといい。
そう願って二人はユクモ村の門を潜り抜けていった。

異の取材（後書き）

異ともこれでお別れです。

そしてやってまいりましたユクモ村。

MHP3の舞台となったこの村で果たしてどのように展開していくのか……。

去る嵐とユクモ村

ユクモ村から北東に数日かけた所に存在する険しい山が並ぶその場所の一角に、霊峰と呼ばれし場所がある。ここは周りの山の中でも特に険しい山道があり、更に深い霧に包まれた場所もあつたり、道なき道の先に深い崖が存在していたりと人を拒む自然が存在する場所だ。

その霊峰の山頂に一頭の白い存在が舞い降りる。

現在その山頂の周囲には厚い雲が広がり、激しい風と雨を吹き荒らしていた。まるでそれはこの白い存在の訪れを知らしめているかのよう。

実際それは正しくもあり逆でもあつた。この激しい大嵐はこの存在が作り出しているため厚い雲はここを中心として渦を巻いている。

「……………」

ゆつくりと山頂に着地したその姿は他の竜、龍達とは違っていた。顔は東方の竜に近く、骨格もまた胴長の龍を思わせるものだ。羽衣のように白く生えるヒレが印象的であり、それが風になびく様は美しく感じる。

そう、そこには羽衣を纏った天女が舞い降りたかのようだ。

ざらり、と目が光ると天上を覆っていた厚い雲が霧散し穏やかな天気がそこに蘇る。霊峰の山頂から見下ろす光景はまさに絶景といえるものだった。

それを眺める白き龍。

『……………誰ぞおるのか？』

しばらくそうしていた龍は不意にそんな事を呟いた。ここには龍

以外誰もいないはず。しかも龍が言葉を放つという異様な出来事はあったが、その言葉に誰かは応えた。

「……おやおや、気づかれたか。ま、いいけどね。わたしだ」

ぶつぶつとした声だったがそれはかの龍に届いたらしい。肩越しに振り返る龍に近づくのは一人の女性の姿。どこからともなく突然そこに現れたかのように姿を見せた彼女は

『ほう、香澄かえ。久方ぶりであるな』

「……そうだね。何年ぶりになるのやらね、天空」

闇色に染まり、月の出る夜空を描いた和服を着込み、深い紫色の髪を肩にかけた女性。

伝説の情報屋にして“世界”に届いたオオナズチ、香澄。

六年前の大事件の際でも陰で行動し、情報収集や情報提供を行っていた彼女がこの地にやって来たのだ。その理由の一つとしては目の前にいるこの龍にある。

「……どうやら君がめでたいことになったと聞いたんでね、こうして祝いに来たんだよ。……ということで、ウエゼントネルを退け、空の七禍龍入りおめでとう天空」

『ふむ、ここはありがとうと言っておくべきかの』

そこで目を閉じた龍は淡い光の渦に包まれる。更に風がうねり全身を包み込むと龍は光の粒子となって霧散した。だが粒子は一度宙に散らばると今度は一点に向かって収束し、人の姿を取る。

そうして現れたのは白い小袖に黒い袴を履き、水色の羽衣をなびかせる女性だった。瑠璃色の瞳を香澄へと向け、優雅に微笑を浮かべながら穏やかになった風に身を任せていた。

「それにしても耳が早いのが。その辺りは流石といったところかえ？ 香澄よ」

「……ウエゼントネルが落ち、アマツマガツチが昇格。その影響によるあの女の改変（ひと）を確認したからね。……ははっ、このわたしが見逃さないはず、ないでしょう？」

「ふむ、そうなの」

アマツマガツチ。

それが彼女の龍としての名だ。嵐龍と呼ばれた古龍種であり、同時に伝説種でもある。嵐の中に住まうとされ、嵐と共に姿を現す存在であり、その規模は同じような能力を持つクシャルダオラを超える。

まさに空の天災でありこのアマツマガツチによって引き起こされた大嵐によつて壊滅した村の残骸が存在する程この爪痕の深さは大きい。

もちろん古龍種の記録としてアマツマガツチの名は存在するが、あくまでもそれは古龍種、伝説種としての欄であり、七禍龍を纏めた書物にはなかった。

「ほんと、あの女の改変は恐ろしいねえ……。こうして形に残り、人々の記憶にも齟齬がないように改変とは……。末恐ろしいよ」

懐から取り出した書物、題名は「七つの禍の龍」。現在出ている書物で七禍龍について纏めた書物であり、判明している情報を書き記されている。ミラボレアスについて六年前の事や闇についての情報が書き記されたが、それ以外については六年前のものそのままだったのだが、先日これに変化が訪れたのだ。

何と空の七禍龍の部分がウエゼントネルからアマツマガツチに変更されたのだ。

もちろんギルドの者がこれを書き換えて新たに発行したのではない。彼女が手にしているこれは六年前に出たもののまま。

これが “世界” の改変だ。

「妾たちにはなく、世界の全てにまで影響を与える改変の力。あれが白皇様が神であることの証であり、妾たちの上に立つ龍神である事を妾たちに思い知らせるというものよ」

こうして形に残る程の改変は実際に九尾が過去に行った事がある。それは自分が過去に飛んで自分から歴史を改変しに行ったという点だ。これによつてルナ・フォックスが実際に行ったこと以上の功績を残し、更に事件の黒幕だった神倉羅刹にも影響を与えた。

だがこれは彼女が自分から改変を促したものだ。世界の中に入り込んで行つたのだ。

今回ウエゼントネルからアマツマガツチへと変えたのは世界の外から改変させた。それだけでなく世界に住まう人々の記憶にも影響を与え、改変した事を気づかせていない。九尾でもここまでの事は出来ない事なのだ。もちろん九尾以外の者らでも不可能。

だからこそ白皇はこの世界の神。他の“世界”の者達でさえ認めざるを得ない神としての力だ。

「さて、香澄よ。妾の事を祝いに来たならば、その餞別として妾に情報提供してもらおうかの？」

不意に天空が袖を口元に当てながらその瑠璃色の瞳を細めて香澄を見据える。

「……………なにを求めるのかな？」

「決まっておろう。現在雲隠れしておるあの者らの居場所を告げよ。よもや、知らぬとは言わせぬぞ？」

「……だれの事かな？」

とぼけるように視線を逸らすと、天空の瞳が爛々と輝く赤へと変色していった。更に殺気に近い覇気が天空から渦を巻くように放たれ、香澄の全身を刺し貫いていく。普通の人ならば気を失っているか最悪精神が死んでいてもおかしくない状態なのだが、香澄は相変わらず気の抜けるような表情で天空を見つめている。

そんな彼女をじつと睨むように更に殺気を深めながら天空は怒気の籠る低い声で話を続けた。

「戯れ言をぬかすなよ？ 妾が誰の事を問うたのかわからぬはずがないし、そなたともあるう者があやつらがどこにいるかも知らぬはずがない。故に疾く、話すがよい。危険視されているシュヴァルツを娶りし白銀一家がどこにいるのかを」

「……さて、どこにいるんだらうね？」

「まだとぼける気かえ？」

「残念だけどね、今日は天空の七禍龍入りを祝いに来ただけだからね。情報屋としては開業していないのだよ」

やれやれと肩を竦めながら首を振る香澄に悪びれる様子など微塵もない。

彼女は気分屋であり、その気があれば誰にでも求められた情報をそれなりに話していくが、気が乗らなければ誰であるうとも情報を話す事はない。今日は後者らしくどこかいつも以上に気が抜けているように思える。

「……というわけだから、リクエストを聞いておいて悪いけど、情報は話せないね」

「……ふん、相変わらずよな香澄よ。そなた、それでも白皇様によつて生み出されし龍種かえ？ 何故白皇様の意志に従わぬ？ 妾に

は理解できぬな」

「……ははっ、何でもかんでもあの女に従ってばかりいるってのも面白くないだろう？　とうかさ、何度も言うようだけどわたしとしてはシュヴァルツの事、どうでもいいんだよ。あれもまたヒトの進化の一つ、殺しに特化した一族があつたっていいだろう？」

「限度というものがあるう。人殺しの要素を強く持つ殺人鬼と、竜殺しの要素を強く持つ竜狩人を合わせた因子を保有するなどあつてはならぬのだ。ここに……神殺しの要素まで含めば……いや、想像したくもないわ」

「……ははっ、神殺し、か。クツクク……、それまで発現したら非常に面白くなりそうだよな。わたしとしてはそれは歓迎だなあ……」

ふぁ……と欠伸をしながらも冷たく笑う彼女の目にどこか楽しげな雰囲気が宿りだす。それに対して天空はほとんど不機嫌そうな雰囲気を放ち出した。まあ、当然と言えば当然だろう。

彼女は香澄と違い白皇に忠実な龍なのだから。むしろ香澄みたいな龍の方が珍しい。そしてこれも当然ながら白皇に従わない龍や竜は排他的であり、他の竜やモンスターに狙われる事があるのだが、香澄はこれを全て退けている。

この七禍龍が一に昇格した天空を前にしても余裕なのはやはり自分の実力に相当自身があるのだろう。

「まったく、そうカリカリするなよ。本当に天空はあの女に忠実だよね」

「龍種ならば白皇様に忠実でなくてどうする？　そなたが異常なのだ。この世界に住まう龍をはじめとする人ならざる者ならば白皇様の側用人を目指すものであろう？」

「……リーゼロッテやヘルの事かい？　……ああ、そういえば天空は側用人を目指していたか」

「そう。七禍龍はただの通過点でしかないのよ。ヒトが恐れる七禍龍が最終地点ではない。それをも超えた存在、龍神である白皇様の御側を許された側用人こそが最終地点。かつて四つあったその座、今は二つの空席となったその一つに妾が座すのだ。妾は白皇様に忠実なる龍としてそれを目指す！……故に香澄よ。話すがよい！そなたの気分など関係ないわ！白皇様のために白銀一家の居場所を吐くのだ！」

再び山頂を中心として強い風が吹き荒れ、空は厚い雲に覆われ始めた。空気の渦が発生し、山頂から逃れられぬように封鎖していく。そうして強風という名の檻が完成すると強く体を叩きつける雨や暗くなつていく空を照らす雷が轟き始めた。

天空の赤い瞳は更に輝きを増し、その美しい白髪がゆつくりと毒々しい黒に近い色に変化し始める。それに伴って嵐のエネルギーが天空の周囲に集まり始め、六つの球体となつて渦を巻く。

それは香澄の周囲でも発生し、彼女を逃さないようにしていた。彼女が何かすれば撃ち出されてダメージを与える、という雰囲気だ。それでも香澄は調子を崩さない。だが気だるげな鈍色の瞳がうつすらと変化しはじめ、じつと天空を見つめていた。

「……………なあ、天空？」

ゆつくりとどこか優しく天空の名を呼ぶ。しかし天空はそれに応えず香澄を睨み続けて右手をゆつくりと動かして嵐の球体を操り始める。そんな彼女を見つめて香澄は言葉を続けていった。

「……………そうやってさ、あの女のためにわたしから情報を引き出すとしてさ、逃がさないようにするのはいいけど」

呟くような声で語り続けた彼女の姿が一瞬の内に消えてしまう。

その一瞬後に嵐の力が更に高まり、周囲の球体が無差別に動き出す。激しい風、轟く稲妻、滝のような雨。

自然の猛威が山頂の姿を変化させるほどの力が振るわれる中、

「お前、わたしを止められると思ってるの？」

そんな言葉と共に天空の近くで水が跳ねる音がした。「そこかっ！？」とそちらへと球体を撃ち出したのだが、それが命中したような感覚はなかった。逆に毒々しい色をした霧が発生し、天空へと伸びてくる。

これがオオナズチが放つ毒霧であると察知した天空はその場から離脱したが、その周囲にあった嵐のエネルギーが凝縮された球体は天空の意志に反した動きをし、一か所へと終結し始めた。

「……これは駄賃として頂いていこうか。……嵐の……いや、エネルギーを抽出して、水の大宝玉。嵐の大宝玉は……ま、これも一応頂いていくよ」

姿を見せず声だけが山頂に静かに広がっていく。激しい大嵐が発生しているにも関わらず、どこか不気味に香澄の声が天空の耳に届いてくる。気配や香澄の力、声の出所を探してみても、どういうわけか感知できないのだ。

駄賃として持っていくと言ったあの大宝玉もいつの間にか消え去り、手掛かりが全くなくなってしまふ。

「ま、その礼として、というのもどうかと思うけど、一つだけ教えておいてあげようか」

山頂を囲む嵐の一部が縦に引き裂かれ、空気の流れが一瞬変化する。そこから逃げるのか、と天空が視線を向けたが香澄の声は出所

が不明なままどこからともなく聞こえてくる。

「白銀一家はこの東方にいるのは間違いないよ。というかお前に縁のあったユクモ村にも来たことがある。……ま、当然変装して、だけどね……ははっ」

「なに？ ではやはり白銀一家はあの周囲に……！」

「……さて、どうだろうね？ わたしは真実は言っけれど、それを全て言うかは気分次第。……知っているだろう？ ということで、情報公開はこれで終わり。どうするかは好きにすればいいさ」

その言葉を最後に天空が意識を向けている方とは反対の方角を封鎖していた嵐の壁が縦に引き裂かれた。どうやらあちらは囷だったらしく、本命は今引き裂かれた方だったらしい。

いととも簡単にこの熱い自然の壁を突破していく香澄もまたやはり“世界”に属する龍種なのだ。そしてこつても簡単にこの天空から逃げられたという事は

「……本当にただの傍観者ではないな、香澄は。どうして白皇様はあのような者を野放しにしているのか……。理解に苦しむのう」

七禍龍に昇格したばかりとはいえ、天空もまた他の古龍種を超える実力を持つ。実際この大嵐の力はとんでもないが普通に立っていられない程の力を秘めている上に、冷たい雨が全身を叩きつけてくるのだ。

そんな敵に容赦なく天空の攻撃が放たれる。敵は何も出来ずその嵐に呑み込まれて死んでいくのだ。

だが……香澄は動じなかった。

それはやはりオオナズチだからだろうか。どれほどの強風であろうとも奴にとつては無意味なものであり、極寒の地であろうともある程度の暖を取るだけで行動できる力を持っている。

それはG級のオオナズチ装備一式を整えれば発動するスキル、霞皮の守りにも表れていた。これは対クシャルダオラにおいて有効な守りである事は一部の高ランクハンターに知られているが、このアマツマガツチが引き起こす嵐にも適応されるか。

だとしてもそう易々と逃がすつもりはなかったのだが、現実はこのざまだ。香澄がまともに戦った様子を見た事もないため彼女の確かな実力の把握も不可能だが、まず間違いなく七禍龍に遅れを取らないだろう。

そんな彼女がどうして情報屋となったり傍観者となったりしているのか。

本当に理解に苦しむ。

しかし今は……香澄の事は置いておこう。彼女が最後に遺して行った情報の一端。

白銀一家はユクモ村に来たことがある。

世間の目だけでなく自分達のような存在の目からも隠れられたのは、彼らが繋がっている神倉一族の生き残りである神倉月の影響があるからだろうと推測できる。でなければ彼らがこの六年もの間逃げ隠れ続けられたはずがない。

「……妾の駒を送るか。久方ぶりの祭りを始めようぞ、ユクモの者らよ。この祭りに乗じて現れるがよい、白銀の者ども……！」

ユクモ村がある方角を睨みながら天空の姿は再び光の粒子となる。それはやがて龍の姿を形作るがその色合いは白いものではなくどす黒い色合いのままだった。一度ヒレに覆われている翼のようなものを羽ばたかせると、まるで空を泳ぐようにしながら天上へと昇っていく。

その動きに沿って空気が渦を巻き、厚い雲に大きな穴が穿たれる。その穴へと龍の姿は消えていき、渦を巻くようにして山頂を包み込んでいた大嵐は龍の姿が消えると同時に鎮静化していった。

最後に厚い雲は突如霧散し、あの龍の姿もまた最初からいなかったかのように大空のどこにも見当たらなくなってしまう。残されたのは大嵐の爪痕とゆっくりと空にかかっている虹だけだった。

ユクモ村にやってきた瑠璃と茉莉は階段を上っていきながら辺りを見回した。一つの階段を登ればまず正面に商店街が広がり、左手には農場に続く道がある。商店街には村人だけでなく温泉を利用しに来た客やハンターの姿も見かけられた。

それだけでなくアイルーの姿も店員や客として見かけられた。よく見ればオトモアイルーが使う武器の専門店もあるようで、そこを利用しているアイルーが数匹いるという感じだった。

それを横目に見ながら商店街を抜けて更に階段が上がっていく。その先には広場があり、周囲を見渡せば足湯温泉が点々とあったり、宿屋が多く見かけられたりする。どうやらここは温泉街になっているらしい。

宿を確保するならばここが一番か。

また案内図を見る限りでは更に階段を上っていくと集会浴場があるようで、そこがギルド支部になっているようだ。だがまずは拠点となる宿を確保しておこう。

ユクモ村のガイドブックや実際の宿の様子をチェックしてまわり、一つの宿を決める。

ハンターが利用する和式の二人部屋を確認した二人は畳の香りを

感じつつ窓の外に広がるユクモ村の景色を眺める。村を歩く人々の顔は穏やかなもので、それぞれ温泉や出店を楽しんでいる様子だ。

その顔ぶれの中に見覚えのある人が見えた。

浅葱色の着物に黒髪をした女性が通りを歩いているのだ。よく見れば帯に小太刀を挿しているし、彼女に間違いないだろう。

「……………」

不意に彼女が二人の視線に気づいたようで、二人のいる部屋まで視線を向けてきた。そして窓から見下ろしている二人の顔を確認すると、ほう、と少し驚いたような表情を見せて右手を軽く挙げてきた。

彼女、草薙桐音と合流すると三人は集会浴場にある食堂へと向かった。それぞれ軽めの食事を注文して久しぶりの再会を喜ぶ事にする。昼のいい時間から酒を呑み始める桐音ではあるが、対面に座っている二人は気にした様子もなくジューズを飲んでいく。

「久しぶりだねえ、お二人さん。元気にしてたかい？」

「それなりね。あんたはどうよ？」

「あたいは……退屈だったねえ。途中でドスジャギイの群れに絡んできたけど、全然楽しめなかったね。どっかにあたいをわくわくさせるものがないものかね」

はあ、と溜息つく桐音は本当に刺激に飢えているようだ。ぐいっと酒を呑み干し、どんどん注いで呑んでいく。ある意味ヤケ酒に見えるのだが、彼女はある程度酒に強いようでまだ酔ってはいないようだ。

「戦いを求めているんです？」

「それもあるねえ。対竜でもいいし、対人でもいいのさ。どこかに強い奴がいるってんなら喧嘩したいくらいだよ。……あんたらは対人の心得、あんのかい？」

「残念だけどあたし達はあくまでハンターとして強くなってきただけだから。村には対人でも問題なくこなしちゃう人はいたけど、あの人の教えを全て受けたわけじゃないから、期待しないで」

「へえ？ 対人の心得持つてる奴がいたのかい。でも、そんな奴の教えを受けたってんなら……期待できそうだと思うけど？ どうだい、後で……やらないか？」

じつと二人を見据えながら少しだけ頬を赤らめつつ誘ってくる。目もゆっくりと爛々と輝き始めているし、これは酔いが回りつつその気になり始めたのか？

これは少しめんどろな事になってきただろうか。そう思い始めたが、何かを考えているかのような目で静かに天井を見上げた茉莉がうん、と頷いた。

「いいでしょう。お相手いたしましょう」

「お？ まさかあんたが相手してくれるとは思わなかったよ」

「茉莉、本気なの？」

「対人の動きも取り入れる事で行けるでしょうからね。……あなたの実力を改めて実感するいい機会でもありますし、やってみましょう」

茉莉の頭によぎったのは先日戦ったナーガの事だ。今まで戦ったモンスターの中でも一番の強敵だと実感したあのナーガの戦い、優れた武人を相手にしているような感覚に陥った事を思い出す。

あれはまさに対人戦をしているかのようにもあった。それはやはり上半身が人型であり、人に近い攻撃を繰り出してきたからだろ

う。そうでなくともあの回避の連続など今までにない事だったため、勝手が違っていた。

対竜に慣れているがそれはハンターとしては当然の事だ。ハンターが相手にするのはモンスターであり、対竜の戦い方で慣れるのは仕方のない事だ。

ここで対人の動きを取り入れる事で上を目指す事が出来るのか否か。

前例はある。

ポツケ村にしばらく滞在した事がある彼女の事だ。その血統の影響でハンターとして優秀なだけでなく対人戦でも凄まじい實力を出せる黒と白の少女。

またルシフェルの正当な覚醒をしている彼もまた対人戦でも素晴らしい實力を持っている。白い少女と互角に渡り合えるだけの格闘戦をこなせ、瑠璃と茉莉に体術を叩き込んだ過去もある。

彼ならば桐音を満足させるだけの戦いをしてくれるだろうが、残念ながら彼はここにはいない。ならば自分達が相手をし、桐音の対人の實力を見、その身に味わってみる事にしよう。

「いいねえ、積もる話も気になるけど、今はそっちの方が気になり始めたよ。早速行こうじゃねえか」

「ノリノリですね。まあ、いいでしょう」

「はあ……しょうがないわね」

会計を済ませると三人揃って村の裏口から山の中へと入っていく。この先にちよつとした広場があるらしく、先頭を桐音が歩いて案内していった。

そうして数分。木々に囲まれた広場へとやってくると茉莉と桐音は数メートル離れて相對する。

じつと茉莉を見つめる桐音の頬はまだ紅潮したままでほろ酔い気分だというのが窺えるのだが大丈夫なのだろうか。酔っているから

満足する戦いが出来ませんでした、ではこつちとしては少々不満なのだが。

「ちよつと、大丈夫なの？」

赤くなっている頬を示すように自分の左頬をつついてみせると、それに気づいた桐音がああ、と頷いてふところから何かを取り出した。黒い巾着袋らしく、口を緩めて中から丸薬らしきものを取り出して口に放り込む。

ガリツ、と噛みしめて続けて取り出した水筒から水を飲んで胃に流し込むと、ゆっくりと桐音の雰囲気が変わっていく。軽く首や両腕を交互に回してばん、と両頬を叩くと酔いが醒めたかのようにいつも通りの桐音の顔がそこにあつた。

「さ、喧嘩しようか？」

「喧嘩……模擬戦と言いましょよ」

桐音は袖の中から丸められたローブを取り出すとそれを広げ、中から木刀を二本取り出した。続けて帯に差した二本の小太刀をローブにしまい、木刀を構えてみせる。

それに倣って茉莉もローブを広げて中からハンターが使う馬上槍ランスではなく薙刀に近い形状をした木製の槍を取り出す。石突きのような部分も再現したその槍を構えて双剣を握りしめながら隙を窺っている桐音をじつと見据える。

「そんじゃ　始めようぜ！」

その言葉と共に桐音が地を蹴って茉莉へと一気に距離を詰める。薙刀を構えながらその接近に対して迎え撃つように薙刀を高速で突き出し、だがそれを双剣で受け流しつつ更に前へ。

「……っ！」

しかしその前進を止めるように中段、下段と織り交ぜた高速連続突きで是が非でも桐音の前進を食い止める。木と木が打ち合わされる音が森の中で響き、二人の息遣いまで聞こえてきそうな程に熱くなる模擬戦が繰り広げられた。

結果は桐音の僅差の勝利。

勝利したといっても本当に僅差であり、懐まで潜り込んだ桐音の剣が茉莉に決定打を与えられるところまで当てられたというだけであり、茉莉も茉莉で薙刀の刃の部分を桐音に当てようとしたが、武器のリーチの長さの問題で桐音の方が速く決めてしまったというだけに留まったのだ。

それに至るまでの攻防は激しいものであり、双剣が有利になる近距離へと詰めようとする桐音に、中距離を保とうとする茉莉の技量がそこに表れていたと言ってもいい。

しかしこのやりとりで桐音が熱くなったようで、「……暖まってきたねえ……！」と呟いたかと思うとそれまで以上の加速をつけて茉莉へと迫っていったのだ。

薙刀の刃と棍で防ぎ続けるのも長くはもたず、結果はこうなった。やはり対人においては少し後れをとりそうだという事になってしまった。桐音の足運び、振るわれる高速の双剣の動き。その速さに目が完全に追いつく事はなく、気を抜けば見失ってしまうような程だった。

自分を鍛えてくれた彼曰く、こうして人と模擬戦をする事で攻撃の速さに目を慣らし、防御をしつかりと固め、回避する技術を磨くというのは悪くはない。時々二人で武器を打ち合わせるってのもやっつておいて損はない、との事だ。

それを思い出してやってみたが、確かにこれはいい鍛錬になると改めて実感する。

この桐音はやはり強い。

茉莉は一息ついてどこか満足そうな表情を見せる桐音を見つめる。前のクエストの際に彼女は言っていた。

彼女はマイナーではあるが何らかの流派の剣術を会得していると。そして自分達はナーガとの戦いで力不足を感じている。二人だけで旅しているため、何らかのきっかけがなければ今以上に伸びるにはまた時間をかけて経験を積んでいくしかない。

だがきっかけさえあれば、短時間で何かが変わるはずだ。

もし桐音との出会いがそのきっかけというならば、それを生かさない訳にはいかない。茉莉は意を決して桐音に話しかける。

「桐音さん、少しお話が」

「ん、なんだい？」

「桐音さんは剣術を習得しているんですね？」

「んーまあそうだねえ。それがどうかしたかい？」

「もしよろしければですが、このユクモ村に滞在している間も組みませんか？」

「え、ちょ、茉莉！？ 何言ってるの！？」

茉莉の言葉に当然ながら瑠璃は驚きを隠せず、桐音は桐音でひゅー、と口笛を鳴らしながらも少しだけ驚いた表情を見せている。その間に瑠璃が茉莉の手を引いて桐音から離れていき、「ちょっと、どういうつもり？」と小声で話しかける。

茉莉もまた小声でその問いに答えていく。

「私達に足りないもの、それは母さんや撫子姉さん、クロムさんのような私達と対等、あるいは上の実力を持つ存在です。私達はあの人達の教えで基礎を固め、クロムさんによる鍛錬でハンターとして

の動きを学びましたよね？」

「ええ、そうね。それがなんだってどういうの？」

「あれから五年です。私達だけで旅をしてそれだけの時間が経ちました。確かに私達はあの頃に比べて成長したでしょう。ですが、私達はあのナーガに遅れを取りました。急な遭遇という点もあつたでしょうが、一歩間違えればあそこで死んでいたでしょう。……それは私達がまだ弱いからです」

「……っ」

茉莉の冷静な言葉に瑠璃は息を呑む。負けず嫌いな瑠璃はその言葉に否定しなかったのだが、それを言葉として発する前に喉につまってしまった。

瑠璃もわかつているのだ。

第二戦で有利に運びはしたが、初戦のあれは間違いなく自分達は異が現れなければ負けていたのだと。

「桐音さんはクロムさんのような人でしょう。ならば彼女と組み、時折彼女と模擬戦をする事で経験を詰めるでしょう。あるいは彼女と共に戦う事でも得られるものはあるはずですよ。ユクモ村に滞在している間だけでもまた縁を結んでみませんか？」

「…………… あんたは、あれがあたし達にとって益をもたらす人だつて睨んだの？」

「変わつてはいると思いますが、でもああいう人はクロムさんで慣れてますからね。それにあの人が習得している流派というのも気になりますしね」

頭によぎるのはチャナガブルにとどめを刺したあの一撃だ。ただの人間には不可能だろうというチャナガブルを水中から陸上へと吹き飛ばした一撃。奴の体を穿つだけの威力を見せつけた様は赤いあの人を思い出させる。

だからこそ、茉莉は桐音は二人にとっていい刺激になるのではないかと睨んだ。

「瑠璃、どうです？ あなたも一度あの人とやり合ってみるといいですよ。なかなかあれは刺激的でしたからね」

「……あなた、まさかそつちに目覚め始めてるわけ？」

「いえいえ、そんな事はありませんよ？」

ただ桐音という存在が自分達を成長させるきっかけになると見ているだけで、桐音やクロムのような戦闘狂に目覚めようとしているわけではない、と真顔で否定する。

だが瑠璃は「本当かしら？ あんたって時々わけわかんない方に傾くから……」とぶつぶつ呟きながら、そつと肩越しに振り返ってみる。そこにはきよとんとした顔で腕を組みながら二人をじつと見つめている桐音がいる。

そんな桐音を見つめ返した瑠璃は、はあ、と息をついて「わかったわよ……」と頷いた。

それに頷いた茉莉はもう一度桐音に近づくと、桐音は「話は纏まったのかい？」と小さく首を傾げながら問う。

「ええ。改めて申し出ましょう。桐音さん、ユクモ村にいる間、また組みませんか？」

「んー、あたいとしてはそれは喜ばしい事だけどね、どういう意図があるんだい？」

「それはですね……」

茉莉は桐音へと説明を始める。

今以上の実力へと伸ばすためのきっかけとして桐音とパーティを組むことで変化があるのではないかと。また桐音の対人戦の実力の高さも窺える上、桐音との鍛錬を繰り返せば自然と自分達も強くな

るかもしれないと推測した。

うんうん、と相槌を打ちながら話を聞いていた桐音は「なるほどねえ……」と呟くと、

「ま、時々さつきみたいなき事をするってんならあたいの退屈も紛れるし悪くはなさそうだね。……もしかして、あたいの剣術も見て覚えようっていうんじゃないだろうね？」

「ん？ 教えてくれるんです？」

「いや、それは無理だね。……ああ、あたいが教えられないとかそういうんじゃない。見てくれは真似できても、その根本まで覚えられないきや意味がないのさ」

「どついう事よ？」

その言葉の意味を理解できず瑠璃が会話に入ってくる。

ほりほりと頭を掻きながら視線を逸らす桐音は何と云っているのか、とどこか困ったような表情を見せたが、やがて一息ついて話した。

「あたいが使ってる剣術つてのはね、あたいら草薙の者しか使えない限定的な流派なのさ。以前マイナーって言っただろう？ あれはそういう事さ。草薙の血を引くものだけが受け継がれ、それ以外のものには決して使えない技を集め、高めていった剣術。それがあたいが使う剣術さ。だからあたいの技を盗もうと考えていても無意味だぜ？」

「ということは草薙流とかそういう流派なわけ？」

「……ま、そうだね。正式名称は少し違うけど、まあこれは別に気にする事じゃないさ」

多少影がかかった表情で呟いたが、それを振り切るようにと笑ってぐっと親指を立ててみせる。

「あんたらの誘い、乗るぜ。一緒に狩りをして、時々喧嘩する。いいじゃねえか、そういうチーム。あたいの退屈を紛らわすような日々を過ごそうぜ？」

「だから喧嘩ではなく模擬戦だと言ってるでしょうに」

「くっはっは、ま、こまげえことは気にすんな。……ああ、でもあたいはあたいで別の目的が一つあるんだ。これ、前にも言ったよな？」

「弟を探しているんだっけ？」

「ああ、あのクソ野郎を探し出す、それがあたいが旅し、ユクモに来た理由さ。あんたなら誰かを探してるんだろ？ どうだい？ 組むついでにお互いの探し人の情報も探ってみるってのは」

桐音の提案は至極もつともなものだろう。人手は多い方がいい、お互いの探し人も合わせて探してみる事で手間を省こう。ギブアンドテイクという意味合いも含めて提案してきたのだろう。

だが桐音が弟を探しているという事に反し、瑠璃と茉莉が探しているのは世間から身を隠すようにして暮らしている人達だ。果たしてこれを話していいものかどうか、少し躊躇ってしまふ。

しかしここにきて躊躇っては信用問題にも関わる。それに彼女は異のような情報屋ではなく一般人……いや、ただの……少し変わったハンターだ。

この人ならば話を限定して打ち明けても問題はなさそうか？

茉莉は桐音を見つめながら数秒の間ここまで考え、また意を決して頷いた。

「……ええ、そうですね。私達が探しているのは氷河空夜さんをはじめとする人達です」

そして茉莉は情報の一部を話した。

東方人であり、数年前から東方のどこかに行ってしまった男性であるという事を。また同じように女性二人も伴っているのではないかという可能性の話、その女性の一人も氷河という名前か、美星という名前という可能性があるという事も話していく。

美星というのはこれまたポケ村で暮らしている間に彼女が名乗っていた名字だ。偽名として使っているならばこちらも可能性があるだろうと推測しているが、そんな裏話までは桐音に話さない。

そうして事情を説明すると桐音は二人が探している人達も合わせて探してみようと了承してくれた。

こうして三人は再び一時的なチームとして結束する。

これより、ユクモ村での彼女達の物語が始まろうとしていた。

火山から来た者（前書き）

明けましておめでとうございます。

新年最初の投稿となります。

その一発目からまた新たなキャラが登場いたします。

また、近いうちに次なるクエストが出る事でしょう。

その前のワンクッション……には少し長くなってしまいました
が、この量はいつもの事ですね。

では今年もよろしく願いいたします。

火山から来た者

標高の高い山が並ぶとある山脈の一角でそれらが集結していた。飛竜の代表格と言われるリオレウス、リオレイア達だ。原種、亜種、希少種問わず一か所に集結する光景は珍しいものだろう。

その中心にはあの白い龍、アマツマガツチが鎮座している。この場所の周囲にはアマツマガツチを中心として不可視の結界が張られており、万が一この場所が見える空で気球が飛行していようと見られる事はない。

といつてももし発見されでもすれば、問答無用で撃ち落とすまでなのだが。

『……以上だ。そなたらの役割は理解したな？』

アマツマガツチ、天空の言葉にリオレウスらはそれぞれ頷いて承諾する。どうやらここに集った者らは彼女の抱える部下らしく、白銀一家を探すように命令を下したようだ。

空から、地上から、それぞれの得意分野でツーマンセルで派遣する。これによってユクモ村周辺数十キロにわたって一気に調査する事になったのだ。

『ではそれぞれ散るがよい。当然目標を見つけ次第、殺せ。容赦は必要ない』

その言葉に一礼し、次々と山頂を飛び立ってリオレウス達は自分の縄張りへと帰っていく。そんな彼らを見送り、天空もまたゆっくりと空へと舞い上がっていった。

この日が、各地でいつも以上にリオレウス、リオレイア系統が見かけられる事が多くなる一件の始まりである。

ククモ村に来てから一週間が経過した。瑠璃達はチームとして活動し、いくつかのクエストをこなしながら時折自分達の探し人の情報を求めていく。そうして過ごした日々はあつという間に過ぎていった。

もちろん時間が取れば桐音と体術の鍛錬を行い、着実に体術関連を伸ばしていく。瑠璃も何度か桐音と木刀で打ち合ったが、それにより茉莉の言っていた事が何となくわかってしまった。

クロムと何度も打ちあっていたが彼の場合怪力だったために大抵の場合は彼が手加減してくれていた。二人も二人で種族の関係で他のハンターに比べれば怪力ではあったがクロム程ではない。

そんな彼に鍛えられてきたため体術を鍛える鍛錬としては問題なかった。

桐音との鍛錬はクロムと違い桐音も手加減なしにぶつかってきたということもあり、これまでにない刺激を得られたのだ。桐音が実力者という事もあるし、彼女自身が戦いを楽しむ傾向があるため二人の実力に合わせて戦いを進めてくれるためいい経験を積む事が出来た。

また双剣だけでなく様々な武器を使ってくるため飽きさせないという点もあった。やはり彼女を鍛錬の相手に頼んだのは正解だった

かもしれない。

そして桐音は瑠璃と茉莉の鍛錬に付き合うだけでは飽き足らなかつたようだ。

「おおおおおおおッッ！！」

「ぬおおおおおおおッッ！！」

ユクモ村の広場の一つを利用して行われているそれは、まさに男の喧嘩といっても差し支えなかった。だが一方は鍛えられた筋肉が眩しい男性ハンターであるに対し、一方はあの桐音である。

二人は武器を持たず、私服で殴り合っているのだ。

それだけ聞けばまさに男同士でやり合っていると思われるだろうが、それをこなしているのは若い女性だというのは驚きだろう。しかしこの戦いを見物している人々はもう慣れたようにあの戦いを見守っていた。

それにしても……筋肉ムキムキな男に引けを取らない女性というのも最近では珍しくもないとはいえ、実際に目の前にすれば言葉にならない。殴られようと蹴られようと嬉々として反撃し、立ち向かっていく桐音という人物が普通じゃないという事もあって、最初の内は観客もどん引きしている者もいたくらいだ。

「オラオラオラアア！！」

「せいせいせいいいい！！」

超近距離での拳の連打に近距離での蹴りの連打と続けざまに放ちあい、ただひたすらにお互い攻撃を繰り返し合うというインファイト。防御など知らないとはかりの攻めの姿勢を崩さず、しかしお互いが繰り返す攻撃がぶつかり合う事で防御となっている。

まさしく攻撃は最大の防御という事だ。

技術よりも力、力と力のぶつかり合いは数分にわたり、

「……っ!?」

同時に繰り出された拳が交差するクロスカウンターによって両者ともにダウンしてしまった。戦いの決着に何人かの観客が湧き、手当てに向かう者が二人を起こして軽い応急処置を施していく。

手当てを受けながら男はにっと桐音に笑いかけ始めた。

「ホントに桐音嬢ちゃんはつええよな。ワシ相手に引かずに真っ向から挑んでくるんだからよ」

「そうしてこそその喧嘩だろう？ 存分にやり合えばスカツとするもんさ」

「かっかっか！ いい根性してらあ！ どうしてこれほどのべっぴんさんがこの根性を得てしまったのか、世の中わからんもんだなあ！ 惜しい、実に惜しい」

「はっはっは！ 言ってくれるねえ、もう一発しばいていいかい？」

お互い手当てされ、笑いあいながら先ほどの健闘をたたえ合つ。彼女らが戦った後はいつもこんな感じだった。だからこそ遺憾なく何度も拳を交えられる。

そんな様子を眺めながら茉莉は隣にいる瑠璃にそつと話しかける。

「拳の速さ、見えてました？」

「……最後のあれ、十二発打ちあつたの？」

「私には十三発に見えましたが」

「残念だね、お二人さん。正解は十五さ」

どうやら聞こえていたらしく桐音が手を振りながら訂正した。結構傷ついていたらしいが手当てを終えたらすぐに立ち上がって肩や首を回しつつ近づいてくる。やはりこういう傷には慣れているらし

い。

そして瑠璃と茉莉の二人はただ桐音の戦いを見ているだけではない。桐音や彼女の対戦相手の動きをじっと見つめ、目で追いきれるのかを訓練している。特にインファイトに入った後のラッシュの速さが鍵だ。

それが見えるか否か。

見えたとしてどれくらいの精度があるのか。

これを改めて鍛えているのだ。

全てが見えなければ完全に防御する事は出来ない。感覚で防御、回避する事もあるだろうが、やはりしっかり見えていなければ確実ではない。

「後であたいらで打ち合おうか。じっくりとあたいの拳の速さを改めて堪能させてやるよ」

「まあいいけど、あんた、まだやる気なの？」

「ん？　なんか問題あるかい？」

「……………いや、もういいわ」

きよとんとした表情をしている。本気も本気、やらないという選択肢はないようだ。これ以上突っ込む気にもならなくなったため、やれやれとため息をつきながら首を振る瑠璃。

だが今すぐに再開するというわけではない。これから温泉に一度浸かって休むことにする。広場から集会浴場へと移動して料金を支払うと、ユクモ村名物の温泉の一つを堪能した。

集会浴場はその名の通り浴場という場所ではあるがその一方でギルド支部が存在している場所でもある。建物の一角にはハンターが集まる酒場があり、壁には依頼書が張られるボードが掛けられている。

風呂を終えた三人はこの酒場へとやってくると一つの机の席に腰掛け、風呂上がりの一杯を頼むことにした。

少しして頼んだ酒を呑んでいきながら、茉莉は周りの様子を確認していた。最近の噂を振り返ってみると、リオ系統の飛竜が各地で活発に動き出しているとの事だった。繁殖期というわけでもないのにつがいで行動し、縄張りを広げるかのように動きつつその縄張りを徘徊しているらしい。

今のところユクモ村周辺で特に気概は報告されていないようだが、ここから離れた場所の縄張りの端に含まれている村に近づいたつがい討伐対象になったとの話があった。まだ討伐されてはいないようだが、村人たちは留まるのは危険という事で避難しているらしい。そのつがい以外のリオ系統についてのクエストはまだ出ていないようだが、もしかするといずれ貼られることになるだろう。季節外の繁殖期なのか、あるいはまた何か別の要因があるのか。

それはわからないが、リオ系統の依頼書が貼られたならば自分達もそれをこなす事になるかもしれない。

「レウス、レイアのつがいか。一頭ずつだったら楽だろうけどつがいとなると結構難易度が上がるんだよな。ま、問題ないんだけど」「でもこつちにまでは依頼書が回ってきていないみたいね。向こうで処理されているのかしらね」

つがいの正確な数字はまだ完全に把握できていないが、結構な数になるのではないかと噂されている。その全てを処理していくとなると結構なハンターを動員する事になるだろう。

もちろん危険なのかそうでないかの判断によってクエストが出るか出ないかの違いはあるうが。

リオ系統以外の事についてはこの情報があった。

ユクモ村付近でシンオウガが目撃されたという話である。

「ジンオウガって東方周辺で確認されている新たな竜種だったわよね？ 確か……牙竜種って分類になってて、雷狼竜って呼ばれてるんだっただか」

「そうですね。そして、私達がここに来る途中で遭遇したのも恐らくそのジンオウガでしょう」

数年前に確認された新種の竜種にして今までのものとはまた別の特徴を保有するため、新たに牙竜種という枠に登録された存在。

それが雷狼竜ジンオウガ。

発達した四肢を駆使しその巨体とは裏腹に俊敏に動き、敵を粉碎していく無双の狩人と呼ばれている竜種である。雷光虫とは共存関係にあり、彼らを背中に集めて発電機能を高め、その雷の力が最大限に高まればただでさえ高い実力を持つジンオウガは更なる飛躍を果たし、もはや手が付けられない状態になってしまおうか。

その実力からハンターにとっても討伐するのは容易ではない相手であり、またモンスターらにとっても勝てる相手ではないという存在になっているが故の無双の狩人という異名が与えられたのだ。

最近では凍土で亜種らしきものが確認され始めているらしいが詳しい事はまだまだ調査中だ。その外見、能力や生態が少しずつ明らかになっていき、通称が獄狼竜と付けられた段階との事らしい。

昔はユクモ村周辺に現れて村を緊迫状態へと貶めたようだが、滞在していたハンターの手によって討伐された事でそれが解決する事になったようだ。それからまたジンオウガのような強力なモンスターが現れた時に備えて実力のあるハンターが訪れるように温泉村として発展していったようだ。

故に昔に比べればこの酒場の活気は高まっている。そして上位ハンター以上の実力を持つ者も集まり始めている。ならばこそ、今回もまたジンオウガが脅威と判断された場合、奴を狩れる者がいるかもしれない。

何にせよ近いうちにいつも以上のハンターが動員されるだろう。

リオ系統のつがい、ジンオウガという将来的な脅威もあるが、それでも地方では他の飛竜らによるクエストは貼られている。経験を積むために何人かのハンターがクエストを受理して酒場を後にするのを眺めながら、風呂上がりの一杯を堪能しつつ三人は情報収集を進めていった。

「そんじゃあ、始めようか」

「本当に気が早いわね……もう少し休むという事を知らないのかしら？」

「もったいねえ。それじゃあ時間がもったいねえよ。あたいはそれよりも体を動かしたいのさ！」

身構えながら前に出した右手をコキコキと鳴らしながら不敵に笑う桐音にまた嘆息しながらも瑠璃もまた構えた。こういうところもクロムに似ているものだから困ったものだ。慣れてしまった自分も自分だが、桐音の拳の速さに慣れる事で今以上に目を鍛えるのだ。ぶつぶつと愚痴りたいのを我慢して「先攻は貰うわよ！」と飛び出していく。

「そんじゃ、見切ってみせな！ おらおらおらああああ！！」

迎え撃つような拳の連打。それを捌く瑠璃の手もまた高速で動くが、それ以上の速さで繰り出される連打は少しずつ瑠璃を押し返していく。

苦い表情を浮かべながら瑠璃は目を閉じそうになるのを堪えてしっかりとその拳を見つめるのだが、怒涛の勢いで放たれる拳を全て見る事は出来ないでいた。

(速い……！ 手加減しているクロムさんに迫る勢い……いや、もしかしたらそれを超えるかもしれない。こいつ、本当に人間……！?)

「ふんっ！」

一瞬の隙を見逃さずに両腕を払った桐音は一度距離を取らせるために掌打で瑠璃の体を吹き飛ばす。突然の掌打ではあったが瑠璃は受け身を取って着地する。そんな彼女を見つめながら軽く両手を振って「さて、どれだけ見えた？」と問う。

「……秒間九発ぐらい？」

「ふーん……実際にや十一発だったけどな。二発の誤差か……ま、繰り返していけば慣れるさ。そら、次行こうか」

くいくいつと手を動かして続きを促すと、一息ついて呼吸と木を落ち着かせた瑠璃は再び桐音へと向かっていく。そんな二人を眺めながら茉莉もまた桐音の手の動きをじっと見据えていた。

こうして第三者の視点で見る時と、実際に打ち合う時の視点では体感的な速度に若干の差がある。その違いもまた感じとり、見切つていかなければならない。

目と反応速度と防御の鍛錬としてはかなり強引なものだろうが、これを磨き上げれば生き残れる確率が上がっていくため必要なものだ。

そうして鍛錬と休憩を繰り返していくわけなのだが、不意にこちらに近づいてくる気配を感じ取って桐音は手を止めて振り返った。瑠璃と茉莉もうつすらと気配を感じとり、同じ方を見つめる。

視線の先には森があり、はた目には誰もいないように思えるのだが、確かに誰かがいるのだ。

「誰かいるの？」

瑠璃が呼びかけてみるが反応がない。

まさか、噂に語られる辻斬りが潜んでいるのだろうか？ 三人は静かに臨戦態勢に入りながら油断なく木々の向こうを見据える。

無言の時間がどれほど過ぎただろう？ 緊迫した空気のせいで数秒だったのか数分だったのかわからない。

がさり、と草が揺れたと思うと黒い影が木の陰からゆらりと姿を見せた。

それは

「ッ!?」

骸の顔をした誰かだった。

「ぎゃあああああああッッッ!?」

悲鳴を上げながら瑠璃が手をかざしてその骸に向かって火炎を放つ。彼女としては咄嗟の反応だったろうが骸に向かって火炎とは、完全に火葬する形になってしまっただろうが、残念ながらそうはならない。

骸は自分に向かって襲い掛かってくる火炎に驚いた様子で、

「う、うわああああああああっ!? な、なんスかつ!? ちょ、やめええええええええええ!?」

少し高い声をしているようだが少年らしい声だった。火炎から逃れるようにまた気の陰へと逃げ込んだ骸ではあったが、火炎はその木すら焼こうと伸びていく。すかさず桐音と茉莉が飛び出してこれ以上の被害を出さないように努めなければならない。

「瑠璃、落ち着いて。どうやらあれは生きている人らしいですよ」

瑠璃を羽交い絞めにして火炎を出すのを止めながら彼女を落ち着かせていく。それでも手の先から火炎が噴き出しつづけたが、「……え？ 生きてる？」と茉莉の言葉に反応してじつと骸がいた方へと視線を向ける。

そちらは絶賛山火事の初期段階だったが、桐音が「水気、解放。拡散」と呟きながら握りしめた右手に青い気が集まっていく。以前のオレンジ色の気とは違っていているようだが、水中の出来事だったために二人はその違いに気づけなかった。

そうしている間にも彼女の右手に集まった気の周囲の空気に湿気が高まり始め、燃え広がるうとしていているその炎に向かって薙ぎ払った。すると水の刃がその手の軌跡に従って放たれ、その火災の消火にかかった。

何度か腕を振るって水の刃を放ち、刃が消える際に降りかかる大量の水によって消化が完了し、少しだけ焼けてしまった森の中からずぶぬれになってしまった先ほどの骸が姿を現す。

「はあ……死ぬかと思ったツス。最近こんなのはっかりでやってらんねえツス……」

よくよく見れば足もちゃんとあるので幽霊という類ではないらしい。それに死んでいる割には生気もちゃんとあるので蘇りを果たした骸というわけでもない。

またその服装……知っている者は知っているだろう、ハンター装備なのだ。

もこもこの紫色のスポンジや毛皮を使用したルドロスUメールとフォールドに身を包み、腕はシルバーソルアーム、足はナルガUGリーヴを着用していた。

となればその被っている骸もまたハンター装備となる。見てくれ

は周りの人々をどん引き、あるいは恐怖に陥れるだろうがこれはちゃんとギルドに認められた装備なのだ。

スカルSフェイス。

なぞの頭骨などの素材を使って作り上げられた骸の顔を模した頭装備。装着した者の顔を隠し、完全に骸の顔を外部にさらすという趣味の悪い装備だが、胴装備のスキルを複製するという特殊なスキルを持っているため、それなりに愛用者がいるという話だ。……信じたくはないのだが。

となるとこの人物はハンターという事になる。

ずぶぬれになってしまった自分の格好を気にしながらため息をついている彼に悪い事をした、と感じてしまうが、かといって突然木の陰からあんな顔を出されたら誰だって驚くだろうと愚痴りたくもなる。

その割には茉莉も桐音も驚いていなかったようだが、不意に腕を組みながらじっと彼を見つめていた桐音が小首を傾げ、

「……………お前、まさか十兵衛か？」

「……………？ お？ おおお、もしかして桐音の姉御ツスか？」

尋ねれば彼もまたじっと桐音を見つめてそんな事を言った。骸の下ではたぶん驚いた顔をしているのだろうが、なにぶんそのせいでまったく判別がつかない。

だが桐音とは知り合いだったらしく、再会を喜ぶように桐音に握手を求めていった。彼女もにっこり笑いながらそれに応え、がっしりと握手しながらばんばんと彼の肩を叩いて再会を喜んでいる。

「相変わらずチビっこいなあ、お前は。全然成長してねえじゃねえか」

「うっさいツスね。余計なお世話ツス。そう言う姉御も変わらないよ、うっさいツス」

桐音の身長は168くらいあるようだが、対する彼は155程だろつか。瑠璃、茉莉と同じくらいの身長をしていた。名前からして男だと判断できるがそれにしても確かに桐音の言うように小さいように思える。

「それで？　ここにいてるってことは火山の用事は終わったんか？」

「一時的な休憩って感じで下りてきたツス」

「火山の用事？」

「ああ、こいつ火山に籠ってピッケル振るまくってるんだよ。そういうの、炭鉱夫っていうんだっか？　主にいいスキルが籠められてるお守り狙って火山に籠ってたんだけよ」

茉莉の問いかけに親指で十兵衛を示しながら桐音が説明した。

死地の一つとされる火山は鉱石の宝庫であり、同時に古き時代の名残である塊やお守りが眠る場所でもある。ハンターの中には鉱石やお守りを求めて火山に赴き、ただひたすらにピッケルを振るう毎日を過ごす者がいる。

そんな彼らを人はいつからか炭鉱夫と呼び始めた。

どうやら十兵衛もそれに含まれるらしい。

「しかし……本当に火山を下りるタイミングを間違えたツスね……。本当にツイてないツス」

「なんかあつたんかい？」

「聞いてくださいツスよ姉御！　火山を下りて早タリオ夫婦に絡まれるわ、辻斬りに絡まれるわさんざんだったんよ！　なんすか、これは！？　おいらがなにしたらって言うんすか！？」

「……ちよつと待ちなさい？　辻斬りに絡まれたって？」

「そうツスよ！　なんだって言うんすか！？　訳わかんないツスよあの野郎……」

ぐつと拳を握りしめて体を震わせながら遭遇したという辻斬りに愚痴っているようだ。が、本当に辻斬りに遭遇したのだろうか。もし噂の辻斬りに遭遇して生き延びたというならばこの十兵衛は相当運がいいのか、案外実力者なのか。

桐音も十兵衛の話に興味を示したようで肩に手を回してぐつと顔を寄せ、「おい、辻斬りってどんな奴だったんだよ？」と真剣な表情で問いかける。

「それがツスね、本当に訳わかんねえ奴だったんツスよ。……あれはある晴れた昼下がリツス。火山を下りて少ししたところでリオ夫婦が飛んできたんスよ。おいらもハンターツスがこれは炭鉱夫用に調整した装備つすからね、これは不利だと逃げる事にしたんスよ」

「あ、やっぱりそれ、炭鉱夫用の装備なんですか」

「そうツス。ランナー、採集+2、高速収集、神の気まぐれと戦闘向きじゃないツスよ。それに武器もメインじゃないんで戦って勝てる相手じゃないツス」

そういう彼の腰元には一振りの剣が提げられている。シンプルな片刃の剣ではあるが、中心には炎のような色合いをした線が浮かび上がっている。

そんな剣からは凄まじい龍殺しの力が秘められている。

封龍剣【怨滅一門】。

さびた塊から掘り出された古代の龍殺しの武器を研磨し、高めていった一品だ。恐らく炭鉱夫として過ごす中で掘り出し、強化していったのだろう。

相性としては龍属性はリオ夫婦に対して効果的だろうが、一人で夫婦相手に戦うにすれば武器の相性だけでは足りない。ハンターとしての実力がなければリオ夫婦を相手にして戦いきれるものではない。

「それですからね、おいらは何とか逃げ切ろうと必死だったんすよ。……そんな時、あの野郎が現れたんす」

火山から離れた岩山地帯に差し掛かり、それでも空から追ってくるリオレウスとリオレイア。必死になって逃げ続ける十兵衛は時折背後を振り返りながらも、ただただ走るしか出来ない。

凹凸の激しい地面に高低差のある岩山や坂という悪路ではあったが、それは空から追うあの二頭にとっても十兵衛を攻撃する事は難しかった。

十兵衛はただ逃げるだけではなくあちこちにある岩の陰に回ったりすることで身を隠していたのだ。二頭が火球を放つても十兵衛は岩を盾にする事で身を守るのだ。それは空からの急襲においても同様で、陰に回ったり崖を飛び下りたりして何とか回避する事で難を逃れていた。

そんな時だ。

突如空を裂くようにして一つの剣閃が通過していった。

それはリオレイアの翼を裂き、緑の影が転落していく。それを見たりオレウスが咆哮し、剣閃が飛来してきた方へと意識を向けた。十兵衛もまた逃げながら背後を振り返り、一体何が起こったのだろうと疑問に思いながらも状況を把握しようとして確認してみた。

そこには確かに誰かがいた。

細長い棒……恐らく槍なのだろう。それを回転させて後ろ手に持ちつつじつと空にいるリオレウスを見上げているその何者かの出で立ちは一見するとただの一般人のようだった。

竜の紋らしきものを描いたローブとオールバックにしている黒髪をなびかせ、紅色のシャツに黒いズボンというよくある服装をしている。この東方である格好という事は西の方の誰かなのだろうか。

といつてもこの東方でもああいう服装をする人は増えてきているので定かではないが。

まあ、それはどうでもいい。今は恐らくあの人物が飛行していたリオレイアを落としたのだらうという事だ。

そしてハンター装備をしておらず、あの槍でリオ夫婦と戦おうというのか？

いくらなんでも無茶だらう、とごくりと息を呑み、ハンターである自分が助けられて見ているだけというのも気が引ける十兵衛は反転して駆けつけようとした。

「……悲しいねえ……。こんな所で出会っちゃってさあ。本当に悲しいわあ……。おめえらがここでオレの手で死ぬのが悲しいよ」

「……？ 何をぶつぶつと言ってるんすか？」

独り言のような小さな声で何かを語りだした何者かめがけてリオレウスはひときわ大きい火球を撃ち出す。一人をすっぱりと呑み込むかのようなその火球が迫ってきているというのに何者かは避けようともしない。

「ちよ、なにやってんすか！？ 危ないッス！」

思わず叫ぶ十兵衛。自分を助けに来た割にいきなり目の前で死ぬというのか？ と驚くも、かといって自分に来る事なんてない。なにせ距離が離れすぎているし十兵衛は魔法を行使する事なんて出来ない。

あのまま呑み込まれるのかと思ったのだが……

「 迅気、纏まと」

ぼつり、と呟いたかと思うと一瞬の内に襲い掛かってきた火球が

霧散した。いや、正しくは切り裂かれたというべきか。あまりにも速く槍を振るつたために見えなかったのだ。

それだけではない。

いつの間にか何者かの姿があそこにいなくなっている。

リオレウスもまた己の敵を見失い、戸惑っている。その隙をまさに言葉通り突くようにして、いつの間にかリオレウスの隣に飛び上がっている何者かが、

「 槍術が一、山衝」

槍の矛先に黒い気が収束し、空中で構えたそれを一気に突き出せば、リオレウスの頭をその槍が貫いてしまった。いくら強固な甲殻で頭を守ろうとも、それを貫いてしまっただけの威力で槍を突き出し、それが貫通してしまったならば高い生命力を持つ存在であろうとも存命できない。

しかもつがいでの危険性など、最初にリオレイアを落としているせいで発揮しない。

力を失って墜落していくリオレウスの背に着地し、体勢を立て直したりオレイアが悲痛な叫びをあげるのを見下ろす誰かはにやりと笑みを浮かべていた。

「悲しいなあ……旦那を失う悲しみは人と同じかい？ でも、安心するといいさ。すぐにあとを追わせてあげよう」

相変わらずぶつぶつと独り言に近い小声ではあったが、その碧眼に明確な殺気を宿らせてリオレウスの背中を蹴ってリオレイアへと急降下していく。だがそれを迎え撃つように火球を放つのだが、そんな単調な攻撃では奴には通用しなかった。

高速で槍を振るう事でその全てを斬り払い、どういつ手法を使ったのか空中で何かを蹴ってリオレイアの頭上を取った。

「さあ、お別れの時間だよ。槍術が二、黒雨」

その位置を利用しての素早い槍捌き。行使しているのは連続的な高速突きなのだが、逆さまの体勢で落下しつつの技。それも纏わせた気を気槍として撃ち出しながらやっているのだ。あまりにも常識外れな攻撃に十兵衛は啞然としながら見守る事しか出来なかった。頭を何度も貫かれる痛みにリオレイアが呻き声を漏らし続け、しかし奴は容赦の欠片もなく何度も頭を突き続けた。

間もなくリオレイアへと接触しようというところでまた空中を蹴り、回転しながら地面に着地し、ぐるんと槍を回転させて後ろ手に持つ。その背後で力なくリオレイアが倒れ伏し、あまりにも速いのがいの討伐をこなしてしまった。

その事実には呆然とする。

黒髪をなびかせ、口元だけで笑うあれは恐らく少年なのだろう。顔付きが少し中性的であり、声も少し高いせいで遠目には少し判別がつかなかったが、恐らく少年だ。

彼は驚いて固まっている十兵衛をよそに死体となったそのつがい近づき、その尻尾を体から切り離れた。更にナイフを取り出すと尻尾を解体し始める。

その行動にはっとした十兵衛は思わず彼に向かって声を掛けた。

「ちよ、ちよちよちよつと、その人……！」

「……………」

呼びかけに反応せず、黙々とリオレイアの尻尾を解体していった彼はやれやれと小さく首を振った。尻尾に手を伸ばし何かを掴み取ってじつと見つめている。

それは紅い玉のようだった。だがその玉には高い力が秘められており、尻尾から切り離されてもなおうっすらと光っているように思

える。

「んー……精度が低いなあ……。これでは届かないねえ……。悲しいなあ」

「ちょ、おい……聞いているツスか!? 勝手な狩猟のみならず、勝手な死体解体なんてギルドが許さないツス!」

「レウスの方はどうか……。ああ、こっちもクズか。やれやれ、足りない、足りないなあ……」

完全にガン無視だった。リオレウスの尻尾も解体し、同じように紅い玉を取り出して観察し、落胆している様子だ。

彼が求めていたのは火竜と雌火竜の紅玉らしい。だが秘められた力が求めていたものに届かなかったようだ。それにしても紅玉のためだけにこのつがいを殺したというのか?

そんな事が……許され

「ま、いいや。紅玉がだめなら、こっちもいいかねえ?」

不意に彼の視線が十兵衛に向けられる。その目に宿る感情は読み取れなかったが、明らかに戦闘態勢に入っている。それに気づき、十兵衛はすぐさま彼に背を向けて走り出した。

あのまま話しかけ続けていたら間違いなく殺される!

そんな感情を抱かせるくらい不穏な空気を放っていたのだ。

そして彼は、口元だけで笑って見せながら十兵衛を追い始める。

「おや? どうしたんだあい? そんなに必死な顔で走り出して……待ってくれよお、ちよつと君の血を頂くだけだよ?」

「そんなこと言っつて、おいらを殺して血を抜くつもりツスね!? そんなのごめんツス!」

ポーチに手を入れて閃光玉を取り出すとそれを後ろに放り投げた。更に続けてけむり玉も取り出し、地面に叩きつけて煙幕も発生させる。だが彼は気にした様子もなく、

「 迅気、纏」

一言そう呟いて辺りを包み込んだ閃光をもともせず突き抜け、続けて辺りを包み込んでいる煙幕を手に行っている槍を回転させる事で吹き飛ばしていく。

「ははは、追いかけてこはそれなりに好きだけど、もう少し待ってくれないかなあ……？ 逃げられ続けるってのも悲しいからさあ」

煙幕すらものの数秒で無力化され、まだまだ十兵衛を追い続ける。だが殺されるわけにもいかない十兵衛は続けて道具を使い続ける。今度はたまたま取り出したこやし玉を投げつけていく。こればかりは勘弁願いたいのか奴は気刃を放ってこやし玉を切り裂き、しかしそれによって独特のあのくさい臭いが辺りに広がり始めた。

「……あのさあ、こればかりはさあ……やめろよな？ 角気、収束。一点突破」

構えた槍の矛先に黄土色の気が収束し始めた。それに伴って尋常ではない殺気が放たれる。それは数十メートルも離れている十兵衛にまで届き、一瞬硬直しそうになったのだが、恐怖心を振り払って彼は走り続けた。

その際懐から畳みであるロープを取り出し、それを軽く広げて中に手を入れた。そうしている間も追っては槍に気を籠めつつ、それは最大にまで高まると彼は槍を構えたまま地を蹴って空中に飛び出した。

「 槍術奥義が一、地碎ちくだき！」

振り抜いた槍を勢いよく投擲される。空を切って真っ直ぐに十兵衛へと流星の如く襲い掛かっていくその槍は黄土色のオーラに包まれていた。オーラの粒子が尾を引きながら一瞬の内に煌めく流星と化したそれに貫かれれば即死、当たらなくともあれだけのオーラなのだ。

地面に突き刺さった瞬間に大地が割れるだろう。その衝撃波、舞い上がる瓦礫に当たっただけでもマズイ事になるだろう。

「いやいやいやいや!? ええい、ままよ……! こうなったらもうどうにでもなれッス!!」

ロープから取り出したのは打ち上げタル爆弾Gだ。それも底に札を貼りつけているものであり、「ターゲットロック!」と叫んで導火線に火をつけ、次々と背後に放り投げていく。

すると札の周囲が淡く光り、目標に設定された槍に向かって飛行していく。先ほど強走薬グレートを飲んで走り続けている事もあり、これで助かるというならば存分に打ち上げていく。

流星にぶつかった打ち上げタル爆弾Gは当然ながら槍に貫かれて次々と爆発していく。これによって少しずつ槍の軌道が変わっていき、それだけでなく槍自体も僅かに傷つきはじめた。

オーラに守られていたようだが打ち上げタル爆弾Gの爆発の影響からは逃れられなかったらしい。だが流星が止まる事はなく、結局十兵衛の背後に着弾してしまった。

瞬間、轟音と共に槍を中心として大地に亀裂が走り、衝撃波によって大地が盛り上がり始めた。

「う、うわあああああああッツ!?!」

最初に襲い掛かってきたのは衝撃波。これに吹き飛ばされて数メートル空中に留まり続けた。続けて衝撃波によって十兵衛と同じように吹き飛ばされてきた石や岩が十兵衛に襲い掛かってくる。

最後に地面を何度も転がり続け、それだけでなく崖に放り出されて一気に転落していく事になった。彼の悲鳴が尾を引いて小さくなっていき、完全に見えなくなったところでこんな目に合わせた張本人が槍を手にしてやってくる。

「……………あーあ、残念」

とんとん、と少しぼろぼろになってしまった槍で肩を叩きながらそう呟き、溜息をつきながらその場を去っていく。

そして崖に転落していった十兵衛は、何とかその日の夜に意識を取り戻し、ふらふらになりながらも火山近くにあった町へと辿り着く事が出来たのだった。

涙ぐみながら語り終えた十兵衛は一息つきながら水筒からお茶を飲み始めた。スカルスフェイクをつけながら。

話し続けている間も、こうして飲んでいても彼はこれを取ることなく進めていく。どういう作りになっているのか彼が口を開くのに合わせてスカルスフェイクも動いているようで、飲食する分にも問題は無いようだ。

それにしても……………

「よく生きていたわね、あんた……………」

「そうツスよ！ 自分でも驚きツス！ でも、おいらはあんなところで死ぬのはごめんだったツスからね、おいらとしては神様に感謝

したいくらいツス！ それにしてもまったく……あいつはなんだつたんすかねえ？ あれがここまで来る途中に噂で聞いていた辻斬りだとおいらは思ってるツスけど……だとするとホントについてないツス」

やれやれと息をつく彼がどこか疲れた様子だ。当然だろう、炭鉱夫を終えて一旦休もうとしたところでリオレウス、リオレイアに見されてからの逃亡だけでなく、まさか訳も分からない人に殺されかけるとは思いもしなかつたろう。

彼はついていないと言っているが、逆についていたからこそ生き延びられたのかもしれない。

それにしても結局彼は何だったのだろうか。

ハンター装備をしていないだけで、本当は違法ハンターだったのかも知れない。

ああいうハンターはギルドナイトによって取り締まられるはずだが、やはり彼はそのギルドナイトらを振り返り討ちにしていったのだろうか。

そんな風に考え始めたところで、桐音が神妙な顔で十兵衛の肩に手を置いた。

「？ どうしたツスか、姉御？」

「……そいつ、本当に黒髪で、緑の目をしていたのか？」

「そうツスね。そんな感じだったツス」

「迅気を使っている、しかも槍術、山衝があつたと？」

「ん、そんな事を呟いてたツス」

その瞬間、桐音の表情は憤怒の鬼のようなものへと切り替わっていき、どこことなく殺気に近いものを静かに放ち始めたではないか。明らかにその何者かに対して思うところがあるようだ。

しかもただの知り合いではなく殺気を放ちたくもなる程の負の感

情があるらしい。

そういえば彼女の探している人物は……、と茉莉は気づき、静かに彼女に問いかけてみた。

「まさか桐音さん、あなたの探している……」

「……ああ。十兵衛、お前の遭遇した奴こそあたいの探しているクソ野郎　もとい、あたいの愚弟だよ」

ざわり、と冷たい風が彼女らの間を吹き抜けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3041y/>

モンスターハンター ~集いし者達と白き龍神~

2012年1月2日00時45分発行